

本を見よ。

かうわかまる 幸若丸 二〇六三—二一四〇、

應永一〇—文明一二、五、二、七十八歳

桃井直詮の幼名で、後に幸若舞を始めてからもこの童名を名のつた。父は直知、祖父は播磨守直常、父の歿後、越前の丹生郡西田中の所縁を頼つて行き、後、叡山に上つて、此も遠縁に當る光林房詮信の許で學問をしたが、天性の美音に加ふるに音律構成の才もあつて伽陀や講式の諷詠にも巧であつた。或日源平の屋島合戦の草子に節つけて讀ふと、小僧たちが傾聴して「これは懺悔を散じ英烈の志を起さしめる」とはめはやしたのがもとで、遂にこの道に没頭し一派を立てたと云ふ。後小松天皇・細川勝元・足利義視など高貴上流の御愛顧を受け子孫代々この道を襲いだ。

かえう 歌謠

韻文の一種、或節を附けて聲にあけて歌はる、律語をいふ。上代記紀萬葉の歌や風土記あぐるところの歌垣の歌などは事實節があつて朗誦せられたであらうが今は傳はらない。王朝の始め神樂歌・催馬樂が行はれて始めて歌謠らしい歌謠を見る。風俗歌・朗吟・今様とだん／＼色々の種類が出、鎌倉期五節間部曲・延年舞

曲の歌詞から宴曲に至つて詞形が次第に長くなり、平曲といふ特殊楽器に合せて語るものも出来、室町期に入つて猿樂（これは前からあつた）諸曲小唄、徳川期に入つて琴歌・三味歌・淨瑠璃・歌淨瑠璃・長唄・端唄明治大正期に入つて唱歌とその時々の流行節と次第に量質の進展を見、最近童謡・俚謡・民謡も勃興してゐる。之を研究することは國文學の上からも國民音樂の上からも必要であり有興味である（小中村清矩氏歌舞音楽略史・藤澤紫浪氏はやり唄變遷史・高野辰之氏日本歌謠史・阪井衡平氏歌謠史講話・榊原芳野氏聲曲類纂）

かがく 歌學

かるん「歌論」に同じ、その項を見よ。

かがくかた 歌學方（歌學所）

徳川幕府で、和歌に關することを司る職員をいふ。

かがくせうせつ 科學小説

自然科學の題目を中心にし、冒險小説の手法で文章化した作品で、小説といふには餘りに藝術的價値が乏しいものである。

例、川島忠之助譯新説八十日間世界一周・井上勲六萬英里海底旅行・九十七時二十分間世界旅行・福田直彦萬里絶城北極旅行・紅團主人鐵世界。

かがみのおほきみ 鏡女王

？—天武天皇第十二年

？—一三四四

鏡王の長女でその妹は額田王、大和國平群郡額田郷に入となり、長じて才媛の譽を得、萬葉集二、四、八の各卷の歌を咏み、藤原鎌足の嫡夫人となつた。

かがみやまこきやうのにしきゑ 加賀見

山舊錦繪

容揚黛（實は下谷町の醫松山某）天明二年（二四四二）が江戸堺町薩摩外記座の爲めに書下したもので、お家騒動物の一種、加賀騒動物中の傑作として今も度々上演せられる（尤、今のはその後鶴屋南北の手を入れたものである）入間家の悪家老蟹江一角は扇岩藤及びその弟浮島主殿を一味に引き入れて主家を横領しようとして企てる。それには中老尾上と谷崎主水が目の上の癩である。折柄息女大姫許婚の義高の菩提を弔ふ爲め落飾して七條の袈裟を賜はる。その義高が紀念「朝日の彌陀」の尊像は尾上がお守りするやうとの仰せに岩藤は「大事の役目、腕に覚えがなくては出来ぬ……と申しても尾上殿は町人の出、太刀討の一手もありません……と侮辱する。尾上の召仕お初はあまりの雑言にたまりかねて岩藤を相手に試合を申し出で、見事そ

の場でやつつける……と問なく朝日の尊像は行く方不明となつたその上、尾上が預りの蘭奢待とすりかへられてあつた（岩藤が劍澤彈正などを語らうての仕打）そこへ岩藤がきて散々尾上を罵り、草履で頭を打擲する。しほ／＼と部屋に下つた尾上、無念やるかたなく遺書を認めてお初を使にやり、その留守に生害を遂げた。烏啼きが怪しいさて氣づかひ／＼歸つて来たお初は、この體を見て大いに驚き且つ憤り怒みの草履を手にして早速岩藤がへや前の奥庭へ廻ると、岩藤は姫君調伏の菊人形の企み最中なので陰謀忽ち露見に及び、お初は岩藤を呼び出して件の草履を彼女の頭に乘せ、首尾よく仇を討ちおほせ朝日の尊像をも取戻した。この事上聞に達して烈婦お初は二代目尾上と名のつて中老に取り立てられた。

加賀騒動物はこれより前天明元年「加賀見山郭寫本」といふのがあり、これより後左の數種を見る。寛政九年三月、お國名物花菅笠・文化十一年三月、隅田川花御所染・文政二年五月、梅柳若葉加賀染・天保八年三月、骨よせ岩藤・慶應三年二月、傾城加賀見山、明治二年二月、蝶三升扇加賀骨・明治十二年十月、鏡山錦楓葉・明治十四年二月、北雪美談時代鑑・同十一月、

後日の加賀騒動（有朋堂文庫淨瑠璃名作集・帝文九、九六一—一〇五〇）

かきものとしゅう 柿本衆

鎌倉初期連歌の勃興に際し、在來和歌の心ばへを以てよんだ連歌即ち純正連歌とも謂ふべき作歌者を柿本衆といひ、俳諧の俗味を加へて連歌する人を栗本衆といふのに對する名稱となつてゐた（或は柿本衆を有心體の連歌師、栗本衆を無心體の連歌師と解してもよろしからう）そして當時は柿本衆の方が優勢で、栗本衆のよんだ歌までも「連歌歌」（連歌のこつでよんだ歌の意）と嘲つたさいふが、室町期に入つて連歌が俳諧に接近するやうになつてはその勢力は一變して栗本衆が優勢となり、柿本衆のよんだ連歌までも「歌連歌」（歌のこつでよんだ連歌）と嘲り返した。

かきやうへうしき 歌經標式（濱成式）

和歌四式の一つで、歌學書の古いものである。四病（岸楓・風蠅・浪舟・落花）八階（詠物・贈物・述懐・恨人・惜別・謝遇・題歌・和歌）等を論じ、目を立つることは精細だが純文學の立ち場から觀ては何等價值がないものである。順徳院の八雲御抄にこの書の名が見えてゐて通常は光仁天皇寶龜三年（一四三二）大納言藤原濱

成（一三八三—一四五〇、養老七—延暦九）が作つたさいふが疑はしい。よしそれが本當だとしても、現存のそれとは別のもので現存のものは後人の偽作（恐らくは王朝中期以後歌學勃興の頃）であらう。尙「和歌四式」を見よ。

がくおう 樂翁

さだのぶ（松平定信）を見よ。

がくかい 依田學海 二四九三—二五六九、天

保四—明治四二、七十七歳

明治の漢學者として新文學運動參加者として有名、下總佐倉の藩士、父を貞剛と云ひ、氏は其二男。名は百川、字は朝宗、藤森天山翁について漢詩漢文を學び、維新の際には入京奔走して尊王説を唱へ、公卿の間に斡旋する處があつた。自然官途につてが出來て衆議院幹事地方官會議書記官・文部省少書記官・修史局編輯官等に歴任し、十八年辭職以後は専ら著作を事とした。譯海・吉野拾遺名歌譽・英武蒙求・改良脚本小御門・十津川等の外尙數種あり。並木宗輔の著に評を入れた新評戲曲十種（甲の方）も面白いし、帝國文庫の馬琴の八大傳評も精緻である。

十九年八月、末松子爵の發起で演劇改良會が成立した

時も逸早く入會して築地の大橋樓で改良脚本を發表した。それが前掲の吉野拾遺名歌の譽と云ふので河尻資岑氏との合作に成つたものだ。尙氏の漢文は現行教科書にも採られ漢詩中にも佳什が多い。

看花 逢雨

片雨晴時暖驟催 千枝萬朵望中開
梅兒塚是在何處 都被紅雲遮斷來

がくから 學校

菟道稚郎子が王仁を師として漢籍を習はれたのは、文書に見える限りに於ては我邦個人教授の始めであらう。爾來この種の様式は歸化學者對貴族、留學生歸朝者對上流の間に屢々繰返されたであらう。ついで天智天皇の御代始めて學校を設けられ、大寶令成るに及び支那科擧の制度に倣つて地方に國學、中央に大學を設け、國學俊秀の子弟選ばれて大學に入り、大學卒業の諸士、式部省の試験に應じて官吏就職の道を開くことになつた。王朝に入つてからはそれ等官學の外に多くの貴族の私學が設けられたのみならず、弘法大師の如き早くも民衆の教育に着眼して綜藝種智院を建てたものすらある。近古源平の爭亂以來、文教地に墮らぬ綱類廢、世を擧げて又學問のことを謂ふものがなく、

教育史上、文化史上、文學史上の方面から觀ても文字通りの暗黒時代に入つたが、一道の光明は金澤文庫や、足利學校や大内義隆の講學に認められた。近世、元和・偃武と共に徳川家康左劍右筆の方針を立て馬上に得たる天下は文教によつて治めざるべからざるを悟り、林羅山を聘して昌平覺を建て地方の藩主又争うて立派な藩學を設けた。水戸・會津・名古屋・岡山・福岡などは殊に出色であつた。その他個人で門戸を張つて教ふるもの即ち私塾の如きは到る處にあつた。平民の教化としては心學道話あり、大抵の寒村僻處にも寺子屋があつて國畫し、名字畫し、農業往來・商賈往來、實語教の類を教科書として讀み書き算盤を授けた。明治に入り泰西の風に則り、四年學制を頒布して「邑に不學の戸なく家に不學の民無からしめん」ことを期せられたが、爾來大中小の各學校を設けて從來の個人教授や分團的教授を廢して學級組織とし、各種新教科を設け、教員養成機關を設け多額の教育費を豫算に計上し更に貴族教育・女子教育・職業教育・専門教育の機關としての學校も設けられ、延いて大正・昭和の今日の盛況を見るに至つた。

かくくわんし 客觀詩

ちよじし「叙事詩」に同じ、その項を見よ。

かくくわんあん 學館院

仁明天皇の嘉祥三年（一五一〇）檀林皇后（橋嘉智子と申す）が御弟右大臣氏公と謀り、その實家の橋氏の子弟教養の機關として設けられた私學で、後橋氏が衰へ藤原氏が代つて管掌するやうになつた（古類文學部二、一三〇八—一三〇九）

かくしだい 隠し題

もののな「物名」を見よ。

かぐづち 迦具土

服部躬治の歌集、三十年から三十四年にかけての歌詠二千首許の中から二百九十九首を厳選し、

迦具土のその血たはしれ人の世の湯津磐村は若むしにけり

の巻頭歌によつて名づけたもの。

貴人は誰よりうけし勢いひぞわれに詩あり神の授けし手すさびにかりたる紙の鶴すらも飛ばむとすなり

春の初風
雪ふみて紙屑拾ふ幼子の家をし問へば家は無しといふ

（三六判一〇二頁、明治卅四年七月一日 東京堂）

かくふ（がふ） 樂府

もと支那の漢代の詩篇中、聲にあげて朗々節奏すべきものを他の詩と區別して樂府と云ひ、その題名の下には大抵「歌・行・引・吟・謠・曲・怨・篇」の字を附して居たが、我王朝に入つて朗詠が流行しかけてからもこの例を襲用した。時好の趣く所、勢ひ文選の詩のみを指し、文選中でも白居易、元稹の徒の詩のみを指し、はては白氏文集の盛行につれて樂府とし云へば白樂天の詩を指すやうになつた。

かくものすすめ 學問のすすめ 十七篇

福澤諭吉の名著で、その内容と、博く讀まれことは左記目録と序文とでわかる。

第一編 第二編 端書一人は同等なること。

第三編 國は同等なること——一身獨立して一國獨立すること。

第四編 學者の職分を論ず。

附録 第五編 明治七年一月一日の詞

合本學問之勸序

本編は余が讀書の餘暇隨時に記す所にして明治五年二月第一編を初として同九年十一月第十七編を以て終り發兌の全數今日に至るまで全七十萬冊にして其

中初編は二十萬冊に下らず之に加ふるに版權の法嚴ならずして偽版の流行盛なりしことなれば其數も亦十數萬なる可し假に初篇の眞偽版本を合して二十二萬冊とすれば之を日本の人口三千五百萬に比例して國民百六十名の中一名は必ず此書を讀たる者なり古來稀有の發兌にして亦以て文學の急進の大勢を見るに足る可し書中所記の論説は隨時急須の爲めにする所もあり又遠く見る所もあり忽々筆を下したるものなれば每篇意味の甚だ近淺なるあらん又迂濶なるが如きもあらん今これを合して一本と爲し一時合本を通讀するときは或は前後の論脈相通ざるに似たるものあるを覺ふ可しと雖も少しく心を潜めて其文を外にし其意を玩味せば論の主義に於ては決して違ふなきを發明す可きのみ發兌後既に九年を總たり、先進の學者苟も前の散本を見たるものは、固より此合本を讀む可きに非ず合本は、唯今後の進歩の輩の爲めにするものなれば聊か本編の履歴及び其體裁の事を記すこと斯の如し。

明治十三年七月三十日（明治名著集二—一九

但五編迄福澤全集三、一一一—一五三）

かぐらうた 神樂歌

平安朝時代初期からあるもので、朝廷の儀式や諸社の祭に行ふ舞樂に用ひられた歌詠をいふ（かぐらうた。かみあそびうた何れが正しいかについても諸説がある）神前舞樂の風は太古天の岩戸の時からあつて風俗としては古いものだが、形式の整つたのは奈良朝末期から王朝初期のこと、推せられる。歌の數は皆で八十九種で其目は神樂譜によると左の通りで、庭燎あまのひ阿知女あちめ作法・採物・賢木・或説・幣・杖・或説・篠・弓・鉦・杓・片折・諸舉・葛・韓神・或説・大前張おほさき・宮人・木綿志天・難波湯・前張・階香取・井余野・脇母古・小前張・薦枕・閑野・磯等・篠波・槓・總角・大宮・湊田・葦・或説・千歳・早歌・明星・喜々利々・得錢子・木綿作・雜歌・葦目・或説・弓立・朝倉・或説・其駒・或説・竈殿歌・酒殿歌。

右の目の中、神樂歌用語とも謂ふべきは阿知女作法、庭燎の次に人長（伶人の長）が綱女命つづめのみことの神態をうつして舞ふわざ。

本、本座即ち神座に向つて左の席。末、末座即ち神座に向つて右の席、或説、臨時のプログラム即ち時によりて歌ふことあるもの、片折、本末何れか一方が調子をおろして歌ふこと。

諸擧、本末兩方とも調子をあげてうたふ。などで歌詞の中には古今集大歌所歌や有名な古歌と同じものに離しをつけたものもあるが、またこの種特有のものもある。歌にもられた想は

敬神 いかばかりよきわざしてか天てるやひるめの神をしばしとどめん、ばしとどめん(晝目歌、本)

みてぐらにならましものをすべ神の御手に取られてなづきはましを(採物、幣、末)

戀 さ、わけ袖こそやれめとれ川のいしは踏むともいざ川原より(採物、篋、末)

風俗 より鳥もとられず鳥もとられずや(脇母古本)しるがれのめぬきのたちをさげはきてならの都をれるはたが子ぞれるはたが子ぞ(採物、劍、本)

諷刺 さかどのはけさはな掃きそとれりめのもひきすそひきけさははきてきけさ庭掃き(酒殿歌、末)

みなと田にくゞひ八つなりやところちなやところちなや八つなからところちなや(湊田本)きりくくのれたさうれたさやみそのふにまぬ

りきて木のねをほりはんでおさまき角をれぬをさまき角をれぬ(菘本)

叙景 みやまにはあられふるらしと山なるまさきのかづら色づきにけり色づきにけり(庭燎)

なにはがたしほみらくればあまこころもあまこころも(本)あま衣たみつ、しまにたづ鳴き渡るたづ鳴き渡る(末)

神樂譜は數次の撰定によつて大成せられたといふ。第一次、奈良朝末か平安朝初め。第二次、清和天皇貞觀元年。第三次、醍醐天皇延喜十六年藤原忠房。第四次、圓融花山兩朝の頃一條左大臣雅信。第五次、一條天皇。第六次、鳥羽天皇。第七次、後奈良天皇。

神樂の儀式に關しては公事根源に簡明に記してある。(尙明治)入りては宮中三度、伊勢二度の御神樂を定例御儀とせられた。宮中賢所御神樂、一月三十日(孝明天皇祭の夜)二月十一日、十二月臨時の御神樂・伊勢外宮、十月十五日・内宮、十月十六日)

かくりやう 林鶴梁 二四六六―二五三八、文化三―明治二、七十三歳 武藏の人、名は長孺、通稱伊太郎、江戸に出て古文を

長野豊山に、經義を松崎惟堂に受け、文名大に著れ幕府に用ひられて嘉永六年に遠州中泉の代官に任じ、ついで羽州幸生の銅山監督に轉じ到る處政績をあげたが黒船來航、條約締結を見るに至り、彼は持論として鎖國を唱へ、藤森弘庵などとその議論を上下した。このころ幕府の忌諱に觸れ潔く官途を辭して、麻布に屏居し専ら子弟を教へてその晩年を送つた。その著に「鶴梁文鈔」がある。

かげき 歌劇

西洋音楽によつて演ずる劇。即ちオペラのこと(但し我國の歌劇は西洋の所謂オペレッター小歌劇といふ程度のもの)その音楽が聲樂の場合に叙事詩や叙情詩や劇詩を唱ふ。我邦では明治三十年だいに入つてワグネル物の紹介があり、ついで調和樂として北村季晴の作曲が行はれたが歌詞としては坪内逍遙・杉谷代水などの作がある。明治の末期から各種の少女歌劇が起り映畫趣味と相俟つて喜歌劇も行はれたがまだ「發達の餘地がある。

かげき 香川景樹 二四三〇―二五〇三、明和

七―天保一四、七十六歳 近世歌人として一番有名な人である。口州鳥取の産、

舊姓林、十八歳京に出て香川黄中(景柄)を師とし、師に見込まれて養子となつたが、その清新な歌風は舊慣墨守の養父(宣阿の裔で桂園又は梅月堂と號してゐた)のそれと合ふべくもあらずやがて離縁して名字のみ依然として香川と名のつてゐた。

一、歌學說 に於ては芹庵の「たゞこと歌」に一步を進めて「調べの説」を立て「歌は調ぶるものにして」とわるものにあらず」と叫んだ。そしてその所謂調べの内容には「歌の内容と形式の調和を得ること」

「詞のつゞけがらの整つてゐること」の二項を含ませた。この趣旨からも、又彼が趣味の上からも、及び眞淵の萬葉を奨励したのに向ふに張る上からも、彼は古今集を推稱して古來第一の歌集とし貫之を以て第一の歌聖とした「新學異見」桂園奥書」はその歌論を述べた書である。

二、歌集 彼の歌は形式優麗着想都雅にして清新、用語自由にして一見當代新派の先聲らしい趣がある。その家集を桂園一枝・桂園一枝拾遺と云ひ今續歌全書第四、五に收められてゐる。

ゆげごゝ限なきまでおもしろし小松が原の臘月夜は

明石湯松の木かげに道はあれど磯づたひして若
め拾はむ

又畫賛歌にも秀味が多い「松に春月のかかれる」畫に
老にけり松もほるかに思ひいづる昔の春やおぼ
ろなるらむ

又長歌も數篇あつてその才の非凡なるを示してゐる
三、その他の著古 今集正義・土佐日記創見・萬葉集措
解等の訓詁、中空日記・同補遺等の日記・桂園隨筆・
またぬ青葉などの隨筆皆名高い。

四、門人 彼が一派を桂園派と云ひ終身全力的に後進
を指導して歌道に捧げた彼の生涯は實に貴いもので
ある。門人一千餘人に達し四天王(熊谷直好・木下幸
文・渡忠秋・穂井田忠友)二才媛(柳原安子、秋園古
香)よりひいて明治の宮中御歌所にまで入つて榮え
た。(彌富濱雄氏桂園遺稿・國學者傳記集成一〇七
五—一〇三)

かけことば 懸詞

しうく「秀句」に同じその項を見よ。

かげしやうくわう 勘解相公

ありくに「藤原有國」を見よ。

かげろふ 陽炎

皇の天延二年まで廿一年間の情史とも謂ふべく、その
中天徳三—應和元の三年間缺文がある。題意は上巻「物
はかなきを思へばあるかなきかの心地するかげろふの
日記云々」のことばでわかる。

原文には、元録十年本・寶曆三年本・文政元年本・國
文大觀第七卷・日文五・校國一二・新釋日本文學叢書
第四卷・全譯王朝文學叢書第十一卷・校交大三・有朋
堂文庫第一輯平安朝日記集など色々あり、註釋の善本
はまだないが上述諸本の頭註によるか國文註釋叢書第
九・天明五年版の蜻蛉日記苧環(元十八冊)によるが
よい。尙この項は「右大將道綱母」の處參照。

がげん 雅言

又雅語ともいふ、中古文の語彙を總稱していふ。

例 雅言

俗言

ましら

さる

侍り

です

こえぬべらなり

こえられさうだ

あないでしらす

あ、どうすればいいだらう

(石川雅望、雅言集覽)

かざしせう 挿頭抄

三卷

富士谷成章安永二年(二四三三)の著、言語全體を四

川田順の著、明治廿年代の歌約三百五十首を集め、著
者が青春の象徴として陽炎と題したもので、我が春の
日に・相模歌・寂寥・雜・旅の日記より・紅涙集の六
項に別けてある。

一人一人のちにかへておもふ事君は見るらし花
草のごと (我が春の日に)

二人して道失ひし城山の夏の日おもふつゆくさ
の花 (相模歌)

何事のものぞみもなくて生くる身にあまりたへな
る愁のこえ (寂寥)

嵐何ぞまことをこめてふく笛の微かなれども何
まかがはむ (雜誌七人創刊の時(雜))

山もとに一すぢ下りしうす霧の野に廣がりて日
は暮れにけり (旅の日記より)

ああ我の生ける所以をいつはらぬこの罪により
救はるべきか (紅涙集)

尙卷末著者自らの歌道のこしかた附記して居る(四
六版一二七頁、大正十年一月三日、竹柏會出版部)

かげろふにつき 蜻蛉日記

三卷? 八卷?
右大將道綱の母の作。村上天皇の天曆八年後の東三條
攝政當時の右兵衛佐兼家に見初められてから、醍醐天

分して挿頭・裝・脚結・名とし挿頭の中には今日の詞
詞・感歎詞・接續詞及び一部の代名詞を含め、その意
義・用法・沿革等について精叙したもの。

かさつけ 笠附

かむりつけ「冠附」に同じ、その項を見よ。

かさねづま 重づま

廣津柳浪明治廿一年作の小説。梗概は

「向島白鬘神社の後殿陀提を東へ入ること遠からず善
左衛門新田と呼ぶ地に、西と北とは扇骨木の生垣に圍
まれ、東と南とは打開いて麥畑へ向つた百姓家(七一
九) 戸主は「内橋甚兵衛」と云つて「年輩二十八九で、
一見した處いかにも質樸らしい。酔はぬ時も睡さうな
眼をいさゝ細くして、厚く反つた唇の口大きく、丸顔
の頬の肉豊に、薄く疎な眉毛の尻下つて廣き額の髪薄
くして、而も櫛の齒も見えず亂れ、色は銅色の醉に光
り(七二一)と云ふ人體で、お人よしの働き手で、内娘
の「お妻」の希望で養子に迎へられたのである。

お妻は今年二十六歳である。田舎には珍らしい程、色
が白く、細面の眼に劍があつて、鼻も高く、口も締り
小柄の意氣肌で甚兵衛に比べては、人から惜しがらる
る程の容色である(七三三)以前紡績の女工時代にそこ

の職工の「精三郎」と關係があつたところから終生彼女の運命を咒はれるやうになつた。

「精三郎は年輩三十四五に見受けられ、色の淺黒い苦味走つた別て眼が鋭い唐棧柳條の布子の寸法は七五三らしいのに黒の三尺を締め、白ツボイ萬筋のがす双子の絆天を着、八幡黒の鼻緒をすげたのめりの胸下駄を突掛て居る、(七四七)お妻は甚兵衛の實意を頼もしく嬉しく思はぬでは無いが又精三郎のいなせな氣前にも惚れて此をも思ひ切ることが出来ず、甚兵衛を迎へて以後も始終苦しい嬌曳を續けて居たのを、耳鋭い近所の女房に嗅ぎつけられてやがて夫の耳に入り、ヤサモサ騒いだが「以後きつと過なきやう」で治まりがついたが、治まらないのはお妻の未練で本文はその第二回の嬌曳の夜から始まつて居る。結構がギイ〜言ふ、此が男の忍びの合圖である。スルトお妻が俄にそわつき出す、甚兵衛に酒を強めてそつと裏口へ行つて男に逢ふ。甚兵衛はそれを感じてお妻のあとをつける。「おのれッ」さ飛び出さうとするお妻は「ありや此先の後藤さんの別荘の黒犬だつたよ 七四三」としらを切る。

其翌日夕方甚兵衛が野良から歸りがけに村一番の兎耳お妙と云ふに逢ふ。「今しがた精三郎がお妻の處に來

て居た」と言ふ。怒り心頭に騰つた甚兵衛は「うぬ逃すものか二人ともふん縛つて此紙で打殺してくれう」と意氣込む後から件の精三郎の聲がして「殺せるものなら殺して見ろ」さあべこべを言ふ。忌々しくて堪らぬが蟲を殺して歸つて見ると家は眞暗でお妻は居ない精三郎が後からついて來て「話があるから明りをつけろ」と云ふ。盗人たげん〜しいにも程がある。ちよッお妻ッお妻ッ」と詞するどに言放つても何も返事が無い。暗がりの入口で二人が言ひ罵つて今にも格闘が始まらうとする時バツとあかりがついて「つひ晝寝をして居た」とさぼける。

精三郎は嵩にかゝつて「お妻はおれの方が早くかゝり合ひになつたのだからこちらへよこせ」と途方も無い談判を始める。甚兵衛は幾度か出ようとする手を引込め〜してゐる。お妻はどうなることかハラ〜する。随分醜い精當の極精三郎とお妻とは手に手をとつて逃げてしまつた「渡が起きて居ればそれでよしさもなきや綾瀬を廻りやあ可いや」と言つて渡しまで行つて見ると渡守は寝てゐて「川には一隻の主なき船がある」「オツとおれが漕いでやらあ早う乗んれえ」と精三郎が飛込んだかと思ふさ突として出る黒い影がグイさ

其船を川中へ押しやつて「サアお妻歸ろ」と云ふ。此は甚兵衛であつた。お妻は「此後どうなることか」と心配してゐた矢先のことゝて寧ろ「助かつた」と云ふ氣分で連れられて歸つて來た。

その翌日は叔母のお仙がやつて來てお妻を前に据えてしみ〜異見した。「二人を一緒にした媒人は此叔母だからお前がこんな不しだらなことをするとはしは甚さんに對しても濟まぬし佛に對しても言譯が無い。此後どうする考か」と聞いた上でこちらにも思案がある」と云ふ折から裏へ例のお妙が來て「一寸お妻さん」と言ふ。ホンの一寸かと思つてお仙はちつと待つて居るとお妙は小聲で「可いことがあるお前を悦ばすことがあるから家へお出で」と引張る。行つて見ると又もや精三郎「ゆふべは人を一杯かけやがつた」と先づ大喝一聲段段話が痴話っぽくなつて何のこまはないお妙の家は待合よろしくと言つた様。そこへ主人の團助が歸つて來て「おのれ人でなしの精三郎め、貴様のやうな人間は村全體の敵だ覺悟せい」とつめかける。きかぬ氣の精三郎「何だい村の敵が聞いて呆れらあ、どうなとしろ」と此も立ちあがる「お、どんなにちたばたしても駄目だぞ村中ちやんこ綱を張つてこゝへ來るのを待ち受けてる

んだ。今に見る村の青年がちり〜詰りよせるから」と言ふ、其中お妻の従弟の金太もやつて來て「おのれにつくい精の餓鬼めつ」と言ふ、かなはじと見てとつた精三郎は憎まれ口を二言三言云ひ放つたまゝ、逸足さして逃げてしまつた。又お妻が一緒に行つては可けな

いと言ふのでお仙が出て來て引提らへてゐる。

やがて甚兵衛も歸りお仙と金太とお妻と四人車座になつての談合。お仙の舌鋒は殊に鋭くお妻に向ふ。甚兵衛は「おれだつてお妻の仕打は憎くて〜今にも精の野郎と二人共眞二つにぶち斬つてやらうさていつでもコレ此通り」と磨ぎ澄ましたる草刈鎌を出す。一座ギョツとする「だけでもイヤ〜さうでは無い。そんなことをして二人も殺しおれも死ぬ。死ぬるはよいが肝腎の内橋家は立つて行けぬ。それでは養家に申譯がない。いくら憎くても怨めしくても、われ一人辛抱すれば四方八方回くおさまる。其中にはお妻も性根が直らうと思つてつらい辛抱をしてゐるのだからこの道理をかみわけてナアお妻、此から叔母様や金太さんに心配かけるでねえで」と諄々と説く。お妻も心から悔いて「もう〜今度さ云ふ今度は心を入れかへますからどうぞ御勘辨なすつて下さい」と詫びる、金太も「甚さ

んが其氣で居て下さるしお妻さんが改心するんならそれ越したことは無い」と言ふ。めでたく妥協の話がついて翌日からはお妻は本當に心氣一轉して甚兵衛にもまめやかに仕へるやうになつたにも拘らず、又々々或日使の者がふきを言傳てると仕事が手につかず、もとの工を連のお蝶さんが國へ歸ると云つて來たから一寸挨拶に行くところらへて竊に淺草東之町なる精三郎に逢ひに行つた。蓋お妻の本心は「甚兵衛は正直で稼いで極めて親切であるから夫として此上も無いと思つて居る。が、それと共に、精三郎は男振も小意氣ではあるし、初戀の男ではあるし、どうも忘れる事が出來ないので氣が荒くて動もすれば亂暴な舉動のあるのは行末何様事になるのであらうか」今度さへ度胸を冷すくらゐだから、ああ寧ろ縁を切つて了ひたいと思つた事がないでもなかつたが、どうも諦め切れぬ。諦め様と思ふ傍から又戀しさも添ひ、呼出さるまゝに媿曳をして居たのである……お妻は甚兵衛を嫌て居るのでは無く、甚兵衛と添つて居る方が精三郎と添うよりも朝夕も安樂であれば行末の楽しいのも知れいつて居る。であるから甚兵衛に別れる事に否である。けれども精三郎を絶念める事も否やである。今の儘で風波

も起らず時々精三郎に會ふ事が出来れば此上ないと思つてゐる（八〇〇—八〇一）
 精三郎はお妻の不徹底を攻める。このまゝこちらに居て吉原の新造にでも入り込んで夫婦暮らしをしようと言ふ。けれども此はお妻の本意でないから可い様に言うて其日は歸つた。
 二度目に首尾して逢つた時には精三郎は「是非とも甚兵衛を殺しておれと一緒になれ」と強要して一服の毒薬をお妻に渡した。事情は愈々切迫した。お妻の煩悶は益々募るばかり……と其解決は次の如く記されてゐる。
 ……「前畧……三日目の新聞紙に淺草東町の劇薬情死の記事が見えた。男の名は精三郎女の名はお妻とあるので其と知つたのであるが新聞紙には近所の噂を種として種々想像の記事を掲げたが何れも彼が死せし事情を知り得たものはなかつた。お妻が甚兵衛を首尾よく毒殺したと精三郎へ報せに來て其祝にとて對酌した酒の中へ毒を加へ男へ飲ませ、自分も飲み同じ枕に死んだ事を知り得た一の新報紙もなかつた（柳浪叢書前編七一—八九三）」

かさねあつ 重井筒

「心中重井筒」を見よ。

かさのいらつめ 笠女郎？

萬葉歌人、筑前觀音寺の別當沙彌滿誓の女で、彼女また和歌をよくし萬葉集の三、四、八の各巻や、玉葉・新千載・新拾遺にその味が採られてある。大作家持が筑紫下りの時見初められてその愛妾となつた。次の二首は家持の上京を惜別した戀歌である。

水鳥の鴨の羽色の春の山おぼつかなくもおもほゆるかな
 空蟬の人目をしげみ岩橋のま近き君にこひわたるかも

かしふ 家集

一個人の和歌を集めたものをいふ。これには自分の集めたものと、生前本人の門人や知人の集めたものと、死後、門人や知人や若くは無關係ではあるがその歌風を慕うた人々などの集めたものとある。王朝歌人の業平集・通昭集以下の多くの家集は後人の集めたものである。完全な家集はその人一代の歌集であるべきである。

かじやう 小林歌城 二四三八—二五二二、安永七、文久二、二、八、八十五歳

近世江戸派の歌人、名は元雄、幕府旗下の士で、織錦

齊門下中、最も語格整正の歌を吟んだ。その家集を歌城歌集と云ふ。その味は武士的題材に富んでゐること習作試作と思しきものもあることなどが目立つ。

防海の爲にとて東海のはとりに巨砲臺多く
 つくり設けらると聞て
 仇守るいくさのきみの臺つく浦賀の浪浪も立ちあへじ
 大煩
 くらがれの楯も甲も打くたく此つばものは國の守りぞ

かじよ 歌序

歌集の序、又は和歌の集ひの序（この場合は「歌の詞書の延長」とも謂ふべき性質のもの）をいふ。國文の歌序として有名なのは貫之の二序（古今和歌集序・大堰河行幸和歌序）である。

かじんのきぐら 佳人之奇遇 十六册

柴東海散士の作で、明治前半期の政治小説中最も博く

喧傳せられたものである。愛蘭の一佳人幽蘭女史を中心に、各國亡命の志士が血と涙とを以て相提携し激勵するといふ筋で、所々に萬國地誌や世界歴史的な註を入れられるところ漢詩を口吟させ、あの頃の一般に見られる石版畫と寫眞版とを折衷したやうな挿畫が挿まれ、贅頭には作者の知人の漢文評を入れ一見堂々たる叢書のやうに見える。文は漢文直譯體で稍生硬の嫌はあるが、華麗で而かも對話のところまでも小手をきかせて言ひ廻してある。巻頭の一節を左にあげる。

東海散士一日費府の獨立閣に登り仰て自由の破鐘

（歐米の民大事ある毎に鐘を撞て之を報ず、始め米國の獨立するに當て吉凶必ず閣上の鐘を鐘く鐘遂に裂く後人呼て自由の破鐘と云ふ）を觀俯て獨立の遺文を讀み當時米人の義旗を擧て英王の虐政を除き卒に能く獨立自主の民たるの高風を追懐し俯仰感慨に堪へず慨然として窓に倚て眺臨す會二姫あり階を繞て登り來る翠羅面を覆ひ暗影疎香白羽の春冠を戴き輕敷の短羅を衣文華の長裾を曳き風雅高表實に人を驚かす。一小亭を指し相語て曰く那の處は即ち是れ一千七百七十四年十三洲の名士始めて相會し、國家前途の國是を計畫せし處なりと。

〔贅頭文〕

起手奇絶。古人以外更出「一機軸」者。開手雄渾壯大。忽一轉。寫「出房柔美姬。更籍「美姬口頭。說「出許多古事。筆筆變化極妙。借「翠羅覆面四字。爲「後段彼知「我我不「知「彼伏案。用意周匝。運筆緻密。

近頃この「佳人之奇遇」實は高橋太華の作に係るといふ説があるが、まだ確説とは認められてない（明治卅年十月十九日、東京市神田區西小川町二丁目五番地博文堂原田庄左衛門）

かせうき 可笑記 五卷

如鴿子が寛永十三年（二二九六）正月の作、之を版に附したのは同十九年、それから十八年経た萬治二年に再版を出した。題意は白樂天が「達人は我を笑ふべし」の辭にとり「博識君子が見ては片腹痛き小著」の意であらう。焚惑星の出たる事を聞傳へて此書を作りし事、忠節の士は主君の悪事を沙汰すまじき事、物ごと後悔すべき事、心は萬づの縁にひかる、事など二百七十三項をあげた教訓文學で、體裁は徒然草をまねてあるが、文品は遙かに下つてゐるにも拘らず此書などが假名草紙流行の衝をなしたもので、可笑記述追も出、淺井了

意の可笑記評判十卷も出、井原西鶴の新可笑記も出た（國刊四期徳川文藝類聚第二册）

かせん 歌仙

俳諧の術語で懷紙二枚を綴り一枚の表に六句、裏に十二句、第二枚目の表に十二句、裏（即ち表紙）に六句、都合三十六句を連れる形式をいふ。三十六歌仙から思ひついた名である。俳諧としては一番多く用ひられた形式で、これより長いものは纏まりにくく、之より短いものは連句の興が薄いやうに思はれる。

例、冬の日・春の日・曠野員外・猿蓑・炭俵等

がぞくせつちゆう 雅俗拆衷

文體の一種で雅文の高雅と俗語の達意とをうまくなひまぜた文章を云ひ、明治二十年前後硯友社同人の試みた文體で、尾崎紅葉の作品はその代表的なものである。幸田露伴・樋口一葉の作品も紅葉と文致はちがふが大

かだうしはん 歌道師範

近古から近世にかけて、和歌師範家の秘傳として傳來せるもので「古今傳授」「伊勢物語傳授」「源氏三個の大事」「徒然草の大事」などがある。各その項を見よ（古類、文學部一、七八四―八〇六、尙國學者傳記集成六

九には「和歌相傳系圖」があつて二條家・六條家の系譜はこれに盡くあがつて居る。）

かたうた 片歌

五七七三句からなる詩形で五句の短歌や六句の施頭歌に比べると句数が半分程にあたるから片歌といふ。奈良朝以前に於て作られたが音律が我邦人の耳に雅順でない爲めかその後殆ど廢つてゐたのを、徳川期に入つて建部綾足が一時之が復活を唱へたが、どうも行はれないで今日に及んだ、上代にあつてもこの詞形は多くは問答歌に用ひられたやうである。

例、又歌ひたまはく。

「はしけやし 吾家の方よ 雲居たち來も」

此は片歌なり（古事記倭建命）（古類文學部一、五四六―五四八）

かたかな 片假名

漢字の偏。旁冠等をとつて作つた我が國固有の文字で阿（ア）伊（イ）宇（ウ）江（エ）於（オ）のやうに一々その原漢字のあるもの。通常、古備眞備が作つたといふが確證がない。現行片假名以外古代にはまだ色々な假名の用例がある（延喜式や釋日本紀などに）のを見ると寧ろ上代社會一般に漢字を省略した用例が次第に慣ひと

なり終に奈良朝末から王朝始めに至つて略々今日の様に確定したものではなからうか。とにかくこの片假名が出来てからは發表上非常に便利となりその方面から國文學の發達を助くること少くなかつた(古類、文學部一、二〇―二八)

かたぎもの 氣質物

年齢・職業・性・地方の上から觀て或る特種階級の個性(一人々々の個性とよりは其の集團の個性)を描いた小説で八文字舎本殊に江島其磧の作に係るものに作品が多い。明治に入つてもこれを襲うた藝庭篁村の作品などは有名である。

例「其磧の世間息子短氣・世間親父短氣・篁村の當世商人氣質(帝文三〇、四〇、氣質全集)

かたりべ 語部

上代文字なき頃言ひつき語りつぐべき傳説や、重要事項を牢記して子々孫々に及ぼした朝廷奉仕の一部族。(いはゞ官撰歴史辭典、を人にかへたやうなものであつたらう)

かたきり 片折

神樂歌の歌ひ方の用語で本座・末座の何れか片方が調子を低めて歌ふこと。かぐら「神樂」を見よ。

かぢこ 梶子

寛永の頃京都祇園南林茶店に一人の娘があつた、十四歳の暮に「歳暮の戀」と題して

こひくで又一年も暮れにけり涙の氷あすやとけなむ

と詠んで界限の評判となり、雲の上人までも出入してこのことを語るやうになつた。娘、名は梶子、その後益々多くの名歌を詠んだので江戸の知人某強ひてその詠草をもぎとり江戸に持ち歸つた。それが即ち「梶の葉」である。その養女百合子又母と共に女流歌人として好評を博した(「梶の葉」は今續々群類歌文部に入つてゐる)

かつさん 倉田葛三 二四二―二四七八、寶曆二―文政元、六、二二、五十七歳

信州更級郡戸倉村の人で、代々松代藩に仕へた家に生れて俳諧を嗜み、初め虎杖庵、後白雄について學び、兄弟子長翠から三世春秋庵の號を譲られたが間なく去つて大磯の鳴立澤に行き、鳴立庵八世となり家號を秋暮亭とつけた。その著に築紫土産あり、家集は門人雉啄が撰んで葛三句集といふ。

かつしかふう 葛飾風

集めたものである。尙又正岡子規の日本派俳句は彼の經營に係る日本新聞によつて生長したものである。

かつらぎのおほきみ 葛城王?

もろえ「橘諸兄」に同じその項を見よ。

(但しこの頃葛城王といふに三人あつて一人は伊豫風土記に出てゐるもの、一人は天武紀に「八年秋七月巳卯朔乙未四位葛城王卒」とあるもの、今一人はこの諸兄である。かの「あさか山かげさへ見ゆる山の井の」の采女の歌つた相手の葛城王は恐らくは諸兄以外のどちらかであらう)

かつらもの 鬻物

謡曲中能に演ずるに三番目に上場さるゝもので三番目物又は戀愛物とも云ふ。熊野住吉詣松風のやうに戀愛を取材した謡曲をいふ。

(尙「謡曲」を見よ)

かていせうせつ 家庭小説

家族道徳や家庭的な情愛を骨子とした小説で、従前の小説が戯作めいて居つたり青年子女墮落の誘因となつたりするに飽き足らずとした世の風潮に歡迎せられ現實描寫の一發現として生まれたもので、三十二年芦花が國民新聞に連載した不如歸を始め、菊池圃芳の己

芭蕉と共に季吟門下の双壁たる山口素堂、居を葛飾(深川)に移して其日庵一世と稱してその一派を葛飾風といふ。天和の新調を唱へて元祿の蕉風に先驅し俳壇黎明の曉鐘となつた功は多かつたが、素堂の本領は儒にあつて俳にあらず、お負けに芭蕉に好意を持ちその俳風流布を希望して自らは行脚もせず、弟子も歡迎せずであつたから蕉門のやうな盛大を致すところへはゆかなかつたが、それでも俳系は七世に及びその高弟には山口黒露・長谷川馬光あり、馬光の門に溝口素丸あり、素丸の後輩に加藤野逸・關根白芹・飯田無物などがあつて師名を墮さなかつた。後年小林一茶が江戸へ出た時も逸早くその門を叩いたのは素丸の家であつた。

かつなん 陸羯南 明治四〇、九、二、五十歳

家は元津輕藩の儒家、名は實、經史は家學として早くより之に通じ、東京に出て司法省法學生となり、成業の後一時内閣官報局長官となり、やがて野に下つて東京電報社(後の日本新聞)を經營し、侃諤の辯を押つて反歐化主義を鼓吹した。又東洋の時局に鑑み副島種臣・福本日南等と共に東邦協會の設立を斡旋し、更に歐洲を漫遊視察歸來大に爲すあらんとして偶々病に罹り鎌倉で永眠した。梶井盛氏の羯南文集はその遺稿を

が罪・若き妻・乳兄弟、中村春雨の無花果、田口洵江の人の罪・女夫波・伯爵夫人、柳川春葉の人えらみ・泊客・忘れ水・母の心・浮沈、草村北星の濱子・澄子等は名作と稱せられた。

かとうきよまさ 加藤清正

資料、繪本太閤記二編ノ一ノ三・太閤眞顯記三篇二六ノ二・征韓偉略一ノ一四四・百家説林昆陽漫録一一・世事百談四ノ六・肥後文獻叢第二卷清正記・續撰清正記・好古類纂第二編三・武藤虎太氏加藤清正の安南交通・同九宮崎幸齋氏加藤清正家訓・加藤清正壁書・國刊第一期・續々群第四・清正高麗陣覺書一冊・史一五ノ二一一・清正記同二一二・朝鮮國王稱加藤清正文・廣文庫第五冊一四六一一五三・甫喜山景雄編我自刊我書中清正朝鮮記野村書店、加藤清正一代記・榮泉社、清正實記・江見水蔭、加藤清正、博文館・綠園生、加藤清正・隆文館・碧瑠璃園、加藤清正、大鏡閣・塚原澁柿 澁柿叢書第九加藤清正、左久良書房

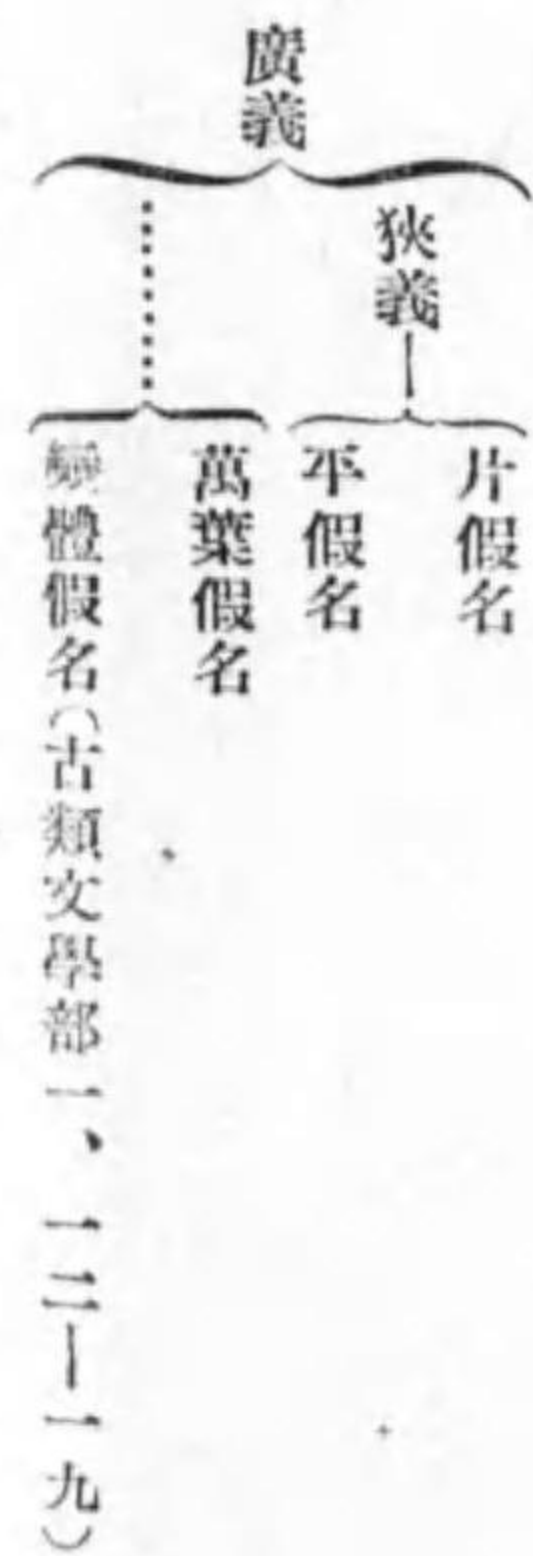
かどべのおほきみ 門部王？ — 一四〇五

？ — 天平一七
和銅三年正月、從五位下を始めに伊勢國守・伊賀・志摩

二國の按察使、治部卿・右京大夫、從四位下太原ノ眞人氏を賜はり、從四位上大藏卿在任中に薨去（或説には舒明天皇六代の後とある）といふ外、傳記不明。歌は萬葉の三、四、六に出てゐる。

かな 假名 (假字)

上代の文章は凡べて漢字で書きあらはしてゐたが、奈良朝の末から王朝の初めにかけて片假名、平假名が發明されて以來、次第に廣通して遂には我國字となつた。そこでこの假名に對して漢字のことを眞名（又まんな）と云ひ、假名製作以前國文を寫すに用ひた漢字を萬葉假名と總稱する（精しく云へばこの中には記紀假書・祝詞書・宣命書・固有の萬葉假名が含まつてゐる）又字形を優美にするためや風雅を好む趣味の上からその後變體假名も用ひられた。即ち左表の通りである。



かなさうし 假名草紙 (假名草子)

徳川初期寛文年間京都に出た小説をいふ。多くは假名書で挿畫を入れ童幼の啓蒙に資するやうのものであつた。鈴木正三・淺井了意・山岡元隣などが代表作家である。「水谷不倒氏假名さうし」は最近續群書類從完成會から發刊された。

かなしきぐわんぐ 悲しき玩具

石川啄木の第二歌集で、一握の砂以後四十五年彼の終焉までの所詠を親友土岐哀果の斡旋で四十五年六月に出版したが、それに先だつこと二ヶ月(四月十三日)に彼は物故した。

本を買ひたし、本を買ひたしと、
あてつけのつもりではなけれど、
妻に言ひてみる。
どうなりと勝手になれさいふごとき、
わがこのごろを、
ひとり恐るる。
新しき明日の來るを信ずさいふ、
自分の言葉に

嘘はなけれど——。
すつぽりさ蒲團をかぶり、

足からぢめ
舌を出してみぬ誰にともしに。

等百九十四首あり「一握の砂」にも増して切實味を覺えるものばかりで、全集にはこれの補遺として三十六年十一月から明星・スバル・創作などに寄せたもの三百餘首を集めてある。(啄木全集第二卷五六五—六一五)

かなせせつ 假名世説 二卷

太田南畝の著、漢儒劉向が「世説」に倣つて國文(和漢混淆文體の隨筆)で書いたので「假名世説」と云ふ。慶長・元和以來有名な人物の逸事百四十九條を集めて之を評論したもの、その目は、德行一一・言語二九・文學一七・方正四・雅量一三・識量一・賞與五・品藻五・捷悟三・夙惠二・豪爽九・讒險一・企美一・傷逝二・棲逸一・賢媛二・巧藝一三・任誕五・簡傲三・排調一・輕詆三・假譎一・汰侈二・忿狷二・尤悔一・糺漏一・惑溺一(但しこれは門人の文寶堂散木が大分補つたものだといふ(百説三))

かなづかひ 假名遣

紛れ易い假名について用法を一定したもので之に字音假名遣と國語假名遣とがあつて、前者は位と以壞と江

四と翁と王と翁などを厳別し、後者即ち國語假名遣は地震と權と買ひさ様の區別を明らかにする法で、明阿定家等を経て徳川期契沖に至て略確定し之を歴史的假名遣と云ふ。明治以後これも繁褥だといふので標音的假名遣即ち發音通りに叔父の「な」も親の「お」も等しく「お」とし、芭蕉は「ばせな」としないで「ばしよう」と様にする法案が唱へられ、最近國語調査會の案（大正十四年末）が段々行はれた。

かなてほんちうしんぐら 假名手本忠臣藏

寛延元年（二四〇八）八月十四日竹田出雲・三好松洛・並木千柳が竹本座の爲めに合作して書下したもので、古來義士物の權威となり、歌舞伎の獨參湯としてこれさへ出せば當りを取ることに相場が極つてゐる。蓋しこの作、出雲が自分の持の分以外にも心血をそ、いで有機的統一につとめ、老近松が「兼好法師物見車」「恭盤太平記」を始め多くの既成類作を同化して渾然たる集成的藝術としたからであらう（帝文三八忠臣藏淨瑠璃集・同二五中忠臣藏岡目評判尙この作については拙著國文學概説五一三―五四〇に一通り卑見を述べておいた。赤穂義士に關する諸記録は國刊二期赤穂義人纂

書二冊に百四十五種百五十四卷同補遺一冊に十九種三十四卷あがつて居る）

かなざはぶんこ 金澤文庫

北條義時の孫金澤實時の創建（一九三〇年代文永建治年間）で徳川家康が富士見亭に移す（二二六二年慶長七年頃）まで古本珍藏の文庫として存在して居つた。實時の子顯時が建てた（北條九代記新編鎌倉志金澤文庫古址碑等）とも孫貞顯が建てた（東見記和漢年契）ともいふが實時説（好書故事和漢三才圖繪典藉秦鏡柳庵隨筆）が一番確かさうだ。その位置は武藏國久良岐郡金澤村宇寺前の稱名寺の山門をくゞつて左方俗に文庫ヶ谷といふ丘がそのあとで、今山門前に金澤文庫と稱するものは再興せられたもので元の場處ではないさうだ。

實時は北條氏代々好學の餘風を受けて夙に學教に心を潜め、建長四年宗尊親王について東下した清原教隆の儒學に精通し而かも自分と同じ引付衆を勤めることになつたのを奇貨とし、懇ろに師友の交りを結んだが文永七年不幸にも邸宅が焼けて、折角蒐集の珍籍を烏有に歸せしめたので非常に之を遺憾とし家宅を離れて文庫を建てる必要を感じ、當時六浦の庄と稱した今の

金澤が自分の領地であつたので、文永六年稱名寺を建て、建治元年病氣退職以後はここに居て専ら學事にいそしみ風月に思ひを遣つて居たが翌二年こゝで亡くなつた。文庫創設はこの晩年のこと、察せられる。それから六十餘年間は子の顯時や孫の貞顯によつて保護擴張せられ、少くとも北條一族の學問所とはなつたであらうが元弘から南北朝、足利末期から戰國と兵燹幾たびかこの野を襲うては復當年の盛況を見る能はず、稀觀の書籍は密閉嚴藏して唯散逸をのみ防ぐに止まつてゐたが、兵戰亂離の世は遂にこゝへも襲來してあたら貴重なる書籍を方々に散らせてしまつた。それを徳川家康が惜しんで慶長七年六月江戸城内富士見の亭にその蔵本を移し、ついで寛永十六年紅葉山文庫に移したが明治に入つて又内閣文庫に移され以て今日に及んだ。群書治要四十七卷・續文粹十三卷・類從三代格・律二卷・同十七卷（内集解十卷）・左傳三十卷・法曹類林・百鍊抄・太平御覽百十四冊（宋本）・文選（宋本）等は斯道の徒の垂涎措く能はざる珍書で、大抵は克銘な寫本で殊に群書治要の如きは本家の支那ですら散佚して、宋の崇文總目、明の文淵閣書目、清の四庫書目等にも完本がないのに、我にはこの文庫のお蔭で元和年間にその

完本を板行したなどは、漢籍逆輸入の珍談も成り立ちさうで實に學界の一慶事と謂ふべきであつた。寫本は大抵卷子で細長い「金澤文庫」と四字の藏印が捺してあつて標紙は紺紙紫平打紐、木軸、用紙は斐紙の厚様で頗る古色を存し字體亦遒勁古雅單にさうした考古品としても價值あるものである（教育大辭書中藤岡繼平氏の解説による）（尙續史一三杉田精一氏の金澤文庫考）

かなむら 笠金村？

萬葉歌人として名高いが、傳記はわからない。歌は萬葉集三、四、六、八の各卷及び玉葉・風雅の諸集にも見えてゐる。一體に強い表現の歌ひ振である。

卷三 鹽津山にて作める歌二首

大夫の弓上ふりおこし射つる矢を後見む人は語りつぐがれ

鹽津山打越え行けばあが乗れる馬ぞつまづく家戀ふらしも

かねあきらしんわう 兼明親王（御子左大臣、中務卿、前中書王、小倉親王）

五七四―一六四七、延喜一四―永延元、九、二六、七十四歳
醍醐天皇の皇子で、村上天皇の皇弟に當らせられ初め

源姓を賜はり従二位左大臣の時親王宣下あつて一品に叙し中務卿に任ず。文雅の才に秀でられ御歌は後拾遺に、漢詩文は本朝文粹・朝野群載(二、三、一三)拾芥抄下の本などに出てゐる。その著に「人麿赤人傳」があつたといふが散佚して今傳はらない。金玉積傳集・古今六帖・入木道抄もその著者として擬せられてゐる。

かねすけ 藤原兼輔 一五三七—一五九三、元慶元—承平三、五十七歳

醍醐・朱雀の御代に於ける歌人且つ物語作者で、地位は従三位中納言、家が賀茂川堤にあつたので、世に之を堤中納言と云ふ。歌は古今集に四首、後撰集に二十餘首採られてゐる外、新古今・新勅撰・玉葉・續千載・風雅・新千載・新拾遺・新後拾遺・新續古今・續後撰三十六人選の各集にも散見し家集に兼輔集(又繼中納言兼輔卿集がある(群類二三五、九、一六七—一七五、續國四二—四二九)又彼の作と謂はれて居る「堤中納言物語」は我邦短篇小説の嚆矢として興多いものである。

(國華三四七號、三七九歌仙切「兼輔」)

かねひら 兼平

シテ兼平(前は船頭)ワキ僧

等に散見してゐる。彼又和漢文共に巧みで子日行幸奉和歌序を始め本朝文粹の中に出てゐる。

かねら 一條兼良 二〇六二—二一四一、應永九—文明一三、八十歳

關白成恩寺經嗣の第二子で一に後成恩寺關白とも云ふ。室町時代有数の學者で儀式典故に通じ、古典に精しく佛典をも研究し、歌文をも好くしたが就中神道佛敎に精通してゐた。その著 一、有職故實に關するもの、公事根原・桃華藥葉・除外雜例・代始和抄・一條家裝束抄、二、歌道に關するもの歌林良材集、新玉集・南都百首(群類一七六、七、九五—九五五)三、物語に關するもの、伊勢物語愚見抄、鴉鷺いくさ物語・花鳥餘情(國註三) 四、隨筆紀行、東齋隨筆・ふち河の記(群類三三六、一一、一一五六—一一六七)等あり、その地位が高かつたので一世の文藝趣味は彼を中心として高められ、歌や連歌も彼によつて獎勵せられた。

かはごえせんく 川越千句

宗祇を始め公敬・義藤・道眞その他諸家の連歌千句をいふ。文明年間の初會以下數次の會を以て次第に出来たもので、今あるものは寛文八年(二二二八)三月十六

詠曲の篇名で「信州木曾の僧諸國一見の旅に出て近江路に入り柴舟のたづきに琵琶湖を渡り、粟津の寺の片ほさり露を片しく草枕假寐の夢に前の船頭有りし世の今井四郎兼平と現じ、壽永三年一月廿二日この處にて最後の合戦を演じて見せる」といふ筋で能では二番目物即ち修羅能となつてゐる。材料は平家物語卷九・源平盛衰記卷三十五の「義仲最後」から採つてゐる。

かねまさ 源兼昌?

後鳥羽の朝の人、美濃守俊輔の子、皇后宮少進に至る。歌は金葉(二)・詞華(二)・千載・新勅撰・新千載・堀河次郎百首・元永元年内大臣家歌合・大治三年住吉歌合等に散見して居る。

かねもり 平兼盛? 一六五 ?—正暦元

村上天皇の朝に仕へた拾遺集歌人、父篤行、曾祖父是忠親王(光孝天皇の御子)彼の地位は従五位上、駿河守で歌は家集平兼盛集一卷(群類二五〇、九、六五三—六六一、續國、四五三—四六〇)の外、拾遺集に三十餘首、後拾遺集に十數首を始め

詞花・續後撰・續古今・玉葉・續千載・續後拾遺・風雅・新千載・新拾遺・新後拾遺・新續古今・三十六人選

日隣江軒周南子の筆寫にかゝり、續羣四七五、一七ノ上四三二—四五八に收めらる。

かはしまのみこ 川島皇子 一三一七—一三

五二、齊明三—持統五、三十五歳
天智天皇の皇子、御母は忽海ノ造小龍が女色夫古娘、淨大參に叙し封五百戸を賜ふ。漢詩は懷風藻に一首あり、歌は萬葉の一や新古今に出てゐる。

かはなかじまのたたり 川中島の戦

資料、川中島五戰記・川中島五度合戦・川中島合戦評判・上杉輝虎法進狀二八・甲陽軍鑑二ノ二五、四ノ一五、一〇ノ下一・甲陽軍大全一〇ノ下二九、一九ノ上一〇・史籍集覽春日山日記六ノ上四・本朝通鑑六八ノ四〇、六九ノ三九・退私録一ノ一一・武者物語之抄四ノ四・見聞軍抄二ノ二五・甲越春秋一ノ二六・史籍集覽松隣夜話上二三・史籍集覽會津陣物語四ノ二六・續史籍集覽伊國物語下ノ五六・東國太平記一六ノ上一三、一六ノ下九・後太平記三五ノ七・續史籍集覽義殘後覺二ノ二一・江源武鑑九ノ五一・常山紀談、拾遺三ノ八・日本百將傳抄五ノ三〇・本朝通紀、後編二四ノ八・武邊咄聞書一ノ一七翁草二七ノ四六・續々群書

類從濟泊齋文集三五六・甘雨亭叢書濟泊史論下一五・故實叢書安齋隨筆一三ノ四二九 乘燭談拾英六九・事實文編一ノ二一・武徳編年集成五ノ一七・野史一一三ノ二五・信濃奇勝錄五ノ一七・善光寺道名所圖會四ノ二〇

信玄と謙信との太刀討に關しては

史籍集覽川中島五度合戦次第一九(余の見たるは史籍集覽第十四の百七十三にあり)

信玄謙信太刀討の年月に關しては

武邊咄開書一ノ二〇、二ノ二七・常山紀談二ノ二五・野史一一三ノ二七

川中島合戦の異説に關しては

常山紀談二ノ二五・廣文庫第五册三三二―三五〇・黨志堂川中島軍記・扶桑堂繪本甲越軍記・伯知氏武田上杉川中島合戦今古堂・博文館甲越軍談・同帝文一九速水春曉齋甲越軍記・澁山人川中島博文館・宮田秋堂氏薩摩琵琶歌・川中島朝野書店・同同 精華堂。

かはやしる 河社 五卷

契沖の著、竹取・空穂・三十六人集・神樂・催馬樂・二十一代集その他種々國文上のことについて意見を書

いた隨筆で、始めの題材を探つて河社といふ。原本は圓珠庵本(反古の裏に書いた袋綴の)徳川侯爵家本(圓順氏)の外賀茂別雷社にも今井似閑の寫本が一冊あるといふ。版行は寛政九年版だけで、明治になつて百家説林に入り、最近契沖全集に入つて居る(契沖全集八一―一三二)

かはらさだいじん 河原左大臣 一四八二

一五五五、弘仁一三―寛平七、七十四歳

嵯峨天皇の第十二皇子にして、御母は藤原真人の女金子、源姓を賜はつて臣下の班に降らる。所謂嵯峨源氏の祖先「源融」のことである。陽成帝御病氣で基經等が陣の座で皇太子の御候補を定める時「ちかき皇胤をたづねば融等も侍るは」と云つて基經に退けられたことが大鏡卷二にあるし、宇多上皇が京極御息所と河原の院にお出でになつた時に融の靈が祟つたことが江談抄に出てゐるが、存命中の彼は風流韻事に心を遣り、その邸六條の河添の院には融の景を模し、難波の海から月々二十斛の湖水を淀の川舟で運ばせて「融焼く煙」の氣分までも味はつたと云ふ(死後に貫之がその邸のあたりを通過して

君なくて煙たえにし融の浦さびしくも見えわたるかな

と咏んだのはこれが爲めである。彼晩年には太政大臣に任ぜられたが文學史上では河原左大臣で通つてゐるその歌は古今後撰等に出てゐる。

みちのくのしのぶもぢずり誰故に亂れむと思ふ我ならなくに

五節のあしたにかむさしの玉の落ちたりけるを見てたがならむととぶらひてよめる

主やたれとへど白玉いはなくにさらばなべてやあはれと思はむ(松浦伯爵家千代の書)

かひ 徹 七十九回

徳田秋聲が四十五年八月東京朝日に連載した小説で、自然主義、客観描寫の最高潮を示す傑作として氏の代表作として有名な作である。「笹村」といふ一文士(恐らくは作者自身)が「お銀」といふ平凡な女と結婚して險惡な時勢に喘ぎつ、も少し宛文壇的地歩を占め、子女を設けては世の父母らしい微光をも認めるといふ筋のもの、作中「徹」といふ語が三度用ひてあるが寧ろこの作全體の情調が「徹」の一語でよく言ひあらはされてある。

二人が一緒になるところが始まりになつてゐるが、その結合の描寫とても極めて平凡で、何のロマンスもない。お銀は下宿屋の婆さんの出戻りの娘で、閑にまかせて母を手傳つて八百物を買出しに行つたり小鰯を煮たりした「こりや旨い」と笹村が悦んだのが始まり。六の終りと七の始めて肉の關係の結ばつたことをほのめかし、もう氣がおけなくなつてからの對話には

お銀は笹村の蒲團の汚いことを言出して笑つた。

「初めての蒲團を敷いたとき、喫驚しましたよ、食物や外のことはそんなでもないのに、一體どうしたんでせうと思つて……敷いてから何だか悪いやうな氣がして、又押入へ仕舞込んだり何かして」とあり。

次に「九」のところでは愈々正式に結婚しようとして、一々その費用を見積つてノートに書きつけ十には結婚に於いての笹村の感想を、

女が自分を愛してゐるとも思はなかつたし、自分も女に愛情があるとは思ひ得なかつた……笹村の頭には結婚するつもりで近頃先方の寫眞だけ見たことのある女や、以前大阪で知つてゐた女などの事が時々思ひ出されてゐたが、不意に何處からか舞ひ込んで

来た凭うした種類の女と爛れ合つたやうな心持で暮してゐることを然程悔うべき事とも思はなかつた。笹村は荒んだお銀の心持を優しい愛情で慰めるやうな男ではなかつた。お銀を妻とするに就いても女を好い方へ導かうとか、自分の生涯を慮ふとか云ふやうな心持は大して持たなかつた。

又その頃のお銀を寫して、
……然う云ふお銀は笹村の客が歸つたあとで麥酒なごの残りをコップに注いで時々飲んでゐた。酒が顔へ出て来ると締のない膝を少し崩しかけて、狼らなやうな充血した目をして人を見た。

鬮齒の見える口元も弛んで、浮いた調子の駄洒落などを言つて獨で笑ひこけてゐた。お銀の體には酒を飲むと氣の浮いて来る父親の血が流れてゐるらしかつた。

とあり、次いで妊娠のところでは、

「私妊娠ですよ」と笑ひながら言つてゐたが、暫くすると、また其を打消して、

「冷え性ですから、私には如何したつて子供の出来る氣遣はないんです、安心して在しやい……」

「そんなに氣にしなくとも愈々妊娠となれば私が巧

く私と産んぢまひますよ。知つた人もありますから、その二階でも借りて……」

二十六、二十七に出産の様子が描かれて、難産といふ程でもないが可なり陣痛の長びいた次第が克銘な叙述の筆で書きこなせて居る。

産婦は長くも寝てゐられなかつた。足や腰に少し力がつくと起出して何かして見たくなつた。大きな厄難から首尾よく脱れた喜悅もあつたり、産れた男子「正一」と名づけたが人並すぐれて醜いと云うほどでもなかつたので何がなし一人前の女になつたやうな心持もしてゐた(廿八の始め)

廿九には國の貧しい母に長らく送金を得しない笹村の暗い心持もあり、三十三の始めには近頃M先生の下請けをした翻譯の仕事が大分手馴れてはかどり出したこととあり、三十三には宮詣り、三十四にはお銀の「自分に子をもつてみると世間の子供が目について来るから不思議ですれ」の述懐、三十五にはお銀の父の上京、無口な大人しいとても「酒と女で身代をブイにした人」とは思はれないけれども凡てに興味を失つた笹村はお銀の生立、前生涯、家柄やその周囲の人達といつたやうな聞けば聞かれる話をすら一顧の價値なしとシンネ

リムッチリを構へてゐる。三十七にはM先生病死の狀が寫してあり、三十八には笹村が田舎へ送る長い原稿を仲介者の宅へ持参し、天分に恵まれない自分の周圍を寂しく顧みた心持——、押詰まつてから意外な所から収入があつて一時明るい氣分になること、四十三には「櫻の葉が黄ばんで散る時分に」お銀はまたく「妊娠の兆候が見えたこと、四十五には笹村が稍世間に認められかけたこと。

笹村は其頃から少しづつ金の融通が利くやうになつてゐた。新しい本屋から原稿を貰ひに来る向も一二軒あつたし、仕舞つておいた新聞の古もいつとはなしに出て行つた。それだけ暮しも初めほど手詰でなくなつた。笹村は下町の方から歸つて来るときつと買ひつけの甌具屋へ寄つて正一のために變つた甌具を見つけた。

四十七には笹村が久し振に歸省(多分は作者の故郷金澤)の一段で、

……大きな舊城下の荒れた屋敷町の一つに育つて来た笹村は、長いあひだ自分の生立つて来た土地の匂を思ひ出す隙もない程、目が始終前の方へ擡つて居たが、其頃時々幼い折の惨めな自分の姿や、陰惨な

周囲の空氣を振顧るやうな事があつた。姉に手を引かれて始めて歩いてみた珍しい賑やかな町や、近所の女の友達と一緒に蟋蟀を取つてゐるいた寂しい石垣下の廣い空地の叢の香、母親の使で草履の音を忍ばせて恐るゝ通りぬけて行つた。男の友達の頑張つてる木蔭の多いじめじめした細い横町、懶けもの女達と一緒に厭な學校の課業のあひだを寝轉んでゐた公園の蕭かな森陰の芝生——日にく育つて行く正一を見るにつけて、笹村は此十年來の奮闘に疲れた頭にしみくその懐しい空氣を嗅ぎしめて見たいやうな氣がした。荒れてゐる父親の墓の前で今一度敬虔なその頃のやさしい心持を味つてみたいと考へた。

五十三には女兒分娩。六十には夫婦喧嘩。笹村の心境は、

如何することも出来ないほど血の荒立つて行く自分を別にまた静かに見詰めてゐる「自分」が頭の底にあつたがそれは唯見詰めて恐れ戦いてゐるばかりであつた……

「この子天折するかも知れませんが、私何だかそんな氣がする。さうかも知れん」笹村は呟いた。

「一體あの時お前と云ふものが己のところへ飛込んで来なければこんな事にはならなかつたんだ。」

「……厭なもんですれ」

「けど、今からでも遅くない、お互に凭うしてゐちや苦しくて爲様がない」

併し、その後子供が急病で心臓を痛め、今夜が病氣の絶頂といふところ、六十九では

病兒を控へてゐる二人の心は一緒に旅をして狭い船へでも乗つた時のやうに和ぎあつてゐた。小さい生命を取留めようとしてゐる優しい努力、それを外にしては幾んど何の背景もなしに二人は毎日顔を向合つてゐた。

そしてその病氣が全治してから家族づれで或温泉へ湯治に行つた。(七十九)といふので終りとなつてゐる(菊判半載、秋聲傑作集第一一―二六六、大正九年十一月廿三日新潮社)

がふ 樂府

がくふ「樂府」を見よ。

かふう 永井荷風 明治二二、二二―

東京の人、父禾原は文部省書記官や、横濱郵船會社社長などの經歷があるが、詩人森春海の高足としてその

方で有名な人である。彼は廿歳の時外國語學校支那語科に入つたが半途で退學し、尺八を習つたり講談師の弟子入をしたりして皆相當に習熟したが、廣津柳浪の門に入り「地獄の花」や「夢の女」を作つてから彼の志も

定まり彼の名も認められるやうになつた。この二作はソライズムの日本化として小杉天外の作品と共に文學史的に重要視されて居る。後、正金銀行員となり米佛に出張し歸國後「あめりか物語」「ふらんす物語」を出した。之を讀んでの感じは芳烈な異國情調と甘酸いやうな唯美主義との程よき融合であつた。之を轉機としてその筆は次第に隨筆的となり、日和下駄・紅茶の後などは實に天下一品の趣があつた。雜誌三田文學は一時彼によつて耽美派的に基調づけられた。冷笑・牡丹の客・すみだ川・新橋夜話さては雜誌「花月」に連載の「久しぶり」同改造にのせた「花火」など又佳作として名高い。要するに彼は明治の自然主義小説作家・大正の隨筆作家として獨自の地歩を占めた人である(荷風全集七冊、春陽堂)

かぶきじふはちばん 歌舞伎十八番

代々の市河團十郎が演じた當り藝で、他家の演ずるを免さぬもの十八種をいふ。勸進帳・矢の根・助六・鳴

神・暫・不動・景清・解脫・象引・鎌鼬・毛抜・不破

關羽・七つ面・外良賣・押辰・蛇柳・うはなり。

荷風明治の九代目團十郎は更に「新歌舞伎十八番」といふ目を定めたが、この方は別に演出権の制限はない。

(高澤初風、現代演劇總覽八八―九二)

がふくわんもの 合巻物

徳川末期、小説の一種で、赤本の題材が敵討物となるにつれて、従前の小冊子には載せきれなくなつて次第に長篇となり、冊数を数多くしては讀みにくいので數卷分を一冊にし合巻又は合巻物といふやうになつた。

寛政七年楚滿人の「義女英」が敵討物の始めて、爾來段々敵討の題材が増して文化三年(その頃は青本と云つた)板行の青本の如きは悉く敵討物であつた。文化三年(二四六六)式亭三馬が「雷太郎強惡物語」を出すのに十冊分を前後二冊に合版にした、これが合巻物の始めだといはれる。冊が大きくなるにつれて装幀も挿畫も念入にせられ、種々なる點に於て赤本青本時代より進んだものになつて果ては「讀本」とあまり大差なきに至つた。柳亭種彦の「修紫田舎源氏」はこの方面の代表作である(尙くさざうし「草雙子」を見よ)(國刊一期新群七合巻下題集一)

科に入つたが半途で退學し、尺八を習つたり講談師の弟子入をしたりして皆相當に習熟したが、廣津柳浪の門に入り「地獄の花」や「夢の女」を作つてから彼の志も

定まり彼の名も認められるやうになつた。この二作はソライズムの日本化として小杉天外の作品と共に文學史的に重要視されて居る。後、正金銀行員となり米佛に出張し歸國後「あめりか物語」「ふらんす物語」を出した。之を讀んでの感じは芳烈な異國情調と甘酸いやうな唯美主義との程よき融合であつた。之を轉機としてその筆は次第に隨筆的となり、日和下駄・紅茶の後などは實に天下一品の趣があつた。雜誌三田文學は一時彼によつて耽美派的に基調づけられた。冷笑・牡丹の客・すみだ川・新橋夜話さては雜誌「花月」に連載の「久しぶり」同改造にのせた「花火」など又佳作として名高い。要するに彼は明治の自然主義小説作家・大正の隨筆作家として獨自の地歩を占めた人である(荷風全集七冊、春陽堂)

かぶきじふはちばん 歌舞伎十八番

代々の市河團十郎が演じた當り藝で、他家の演ずるを免さぬもの十八種をいふ。勸進帳・矢の根・助六・鳴

かふし 三井甲之 明治一六、一〇―

甲斐の人、名は甲之助、東京帝大國文科出身で、これまでの業績としては、詩集「消なば消ぬがに」と短歌と文藝評論とであるが、その後郷里に籠居して研究思索をつゞけ、殊に文化史的國文學史の考察に努めつゝある。

かぶとぐんき 兜軍記

「壇浦兜軍記」を見よ。

がぶん 雅文 (中古文)

中古の雅言を以て綴つた文をいふ。

かへしうた 反歌

はんか「反歌」を見よ。

かへのなかぬり 加倍仲塗 二四二九―二四

九二、明和六一天保三、六十四歳

通稱を清水忠右衛門といひ、四方赤良の門に入り狂歌作者として有名である。

がほう 林鵝峰 二二七八―二三四〇、元和四

一延寶八、六十三歳

羅山の第三子、名は春勝、字は之道、春齋又は鵝峯と號した。博覽強記にして經史子集悉く之を修め最も程朱の學を唱道し門徒頗る多かつた。鵝峯文集始め百餘

種の著作がある。

かほちやのもとなり 加保茶元成 ？

二四八八、？ — 文政二

吉原の妓樓大文字屋文樓の養子で狂歌をよくし、宗因の俳風を慕ひ、又風雅な好尚があつて毎年三月十八日には千束の別荘に詞客を招いて影供の催しをした。その時祭る人磨像も頓阿の作といふ凝つたものであつた妻も亦狂歌を嗜み「秋風女房」と號して盛んに詠んだものだといふ。

かまくらさんだいき 鎌倉三代記

紀海音享保三年(二三七八)豊竹座上場の作、鎌倉將軍源氏の三代中、頼家の時外戚比企の一族、悪僧豪海をとりこみ、頼家を殺害して將軍家を横奪しようとし已に危機の迫る間際、英雄朝比奈が床下から見れて悪黨退散目出たく落着といふ主筋に伊豫若狭の局兄弟が父玄蕃を豪海に殺され親の仇を討たう爲め朝比奈に一味すること、若狭の悲しい戀などがなひまぜてある。

(續帝、一二、紀海音傑作集五九一—六三三)
今日普通に所謂「鎌倉三代記」は之とは別で安永十年(二四四一)三月豊竹座上演のもので作者は近松半二だといふ。それは「近江源氏先陣館」の續篇のやうなも

の、その項参照)人物などもそれ／＼同じやうに擬してある。北條時政の娘時姫は阪本の城士三浦之助義村と許嫁である。城主頼家時政と戦端を開くや、父時政は時姫に、三浦之助の母を殺し義村と縁を切つて歸れと云つてその居絹川村へやるがどうしても、義村と別れる氣になれず親切に老母が病氣を介抱する。とそこへ義村が母の病氣を氣づかつて歸つて来る。母は不機嫌、時姫一人が心も空に悦ぶ。やがて義村「今日が最後の門出、御身が眞にこの義村の妻にならうとならば父時政を討たれよ」と云ふ。時姫はつひに之を承知して實家に歸る。時政の家來安達藤三郎實は佐々木高綱で姫のけなげな心を見ぬいて共々に時政を討ち取る謀をめぐらす。けれども姫に見れば流石恩愛の父として手を下しかれる。その中夫義村討死のしらせが届く。姫絶望の餘り自ら藤三郎を手引して自分が父の身代りに殺される。戀と孝と二つのチレンマに挟まつた時姫が悲戀は永く觀衆の同情を得た。殊に義村出陣の一段は「さわり」にもとられて人口に膾炙してゐる。

かまくらのうだいじん 鎌倉右大臣

されとも「源實朝」を見よ。

かみあそび 神遊

かぐら「神樂」を見よ。

かみれいせいけ 上冷泉家

和歌師範家中、冷泉爲相の孫爲尹の長男爲之の子孫を云ふ。



かむりつけ 冠附

五七五の川柳に於て始め五字を題に出してあとの七七を附けること、徳川時代川柳全盛と前後して行はれた。代表作ではないが寛政二年大阪で板行の園田萩風選の「冠附若とくさ」から例をあげる。

冠 學びけり

附 うぐひす蛙はづかしい

看板讀せ子を自慢

禪の後住の疎懶輩

名所委う知る中風

草履取まで慈悲深い

かめすけ 奈河龜助 ?

大和奈良に生れて少壯無頼、一時家を去つて河内の親戚に寄食し、奈良と河内の頭字を採つて奈河を名乗る。遊里劇場に入り浸つて、とうとう道樂が職業の戯曲作者となり、伊賀越乗掛合羽で喝采を博したが、その他に艶鏡伊勢物語・天下茶屋茶・加賀見山廓寫本などを作つた。

かもおうかしふ 賀茂翁家集 五卷

眞淵の門人村田春海が文化三年(二四六六)七月に出版したもので、秩序がよく整つてゐる。卷一、四季・戀哀傷、卷二、雜・羈旅・物名・賀・擬神樂催馬樂・長歌、卷三より卷五まで文集。眞淵の歌文は、この外「安賀當居の歌集」「縣居文歌」「賀茂翁集」「賀茂翁歌」「賀茂眞淵翁全集」あり(各項参照)

かもおうしふ 賀茂翁集 五册

嘉永四年(二五一一)眞淵の歌文を輯めたもの。眞淵の歌文につきては、この外に「安賀當居の歌集」「縣居歌文」「賀茂翁家集」「賀茂翁歌」「賀茂眞淵翁全集」等がある(各項参照)

かもおうのうた 賀茂翁歌 五卷

元文六年から寛保四年頃までの眞淵の歌を集めたもの

「輪池叢書」に容れたもので、歌は
としたてば野べのあそびのゆかしきなげふこん
友に先やちきらん
以下凡て二百二十五首ある。

尙眞淵の歌文につきては、この外に「安賀當居の歌集」
「縣居歌文」「賀茂翁家集」「賀茂眞淵翁全集」等がある。

(各項参照)
かものまぶちおうせんしふ 賀茂眞淵翁
全集 二冊

明治三一―三三、續歌第一、二編として採られたもので
眞淵の歌學上の意見と咏歌と、門下の村田春海・田安
宗武・加藤宇萬伎、先輩の東滿呂、知友の契沖のもの
までなもこめて通覽に便してある。

卷上 (自撰) 晩花集・(自撰) 漫吟集・春葉集・賀茂
翁家集・歌意考・にひまなび・十二番歌合・國歌八論・
國歌八論評・國歌八論斥非・國歌八論餘言・國歌八論
拾遺。

卷下 さき草・うけらが花・眞幸千蔭歌問答・答小
野勝義書・琴後集・稻掛の主へまゐらす書・村田の
御許へまゐらす返事・稻掛の君の御返事に更に答へ
參らす書・掛取魚彦歌集・靜屋歌集・山のさち・筑

正、御伽草子第五、校日大一九)

がらくたぶんど 我樂多文庫

明治十九年頃硯友社の機關雜誌として發刊されたもの
(最近文藝市場に復刻。尙「硯友社」を見よ)

からすさきかつせんものがたり (あろも
のがたり) 鴉鷺合戦物語

一條兼良の作、室町期擬合戦物語中すぐれた一つで、
殊に宗教味を帯びてゐること。和歌・音楽・甲冑・武
具の細かな説明のあることが特色だが、一帯に雜
駁で繁瑣哲學的でこの種作品の通弊を脱しない。唯擬
人のなかしみが隨所に出てゐるから相當に面白く讀ま
れる(續羣類九八五・我自刊我書一・日本文學全書一
九・校註國文學大系一九・續帝三二)

からものがたり 唐物語 寫本二卷

戴安道・琵琶行・賈氏・司馬相如・陳氏・舜・反魂香
西王母・楊貴妃・朱買臣・程嬰・杵臼等二十六項凡て支
那に於ける趣味の傳説を國文に綴つたもので、日本の
事を書いた大和物語に對して唐物語とつけたものらし
い。

この書は久しく埋れて諸人の目にふれなかつたのを文
化中、清水濱臣の校訂本が出、續群類第五百三卷一八

波子家集・縣居門人録・賀茂翁家集正誤。
今、眞淵の歌を見るには一番恰好の書であるが、尙類
本には「安賀當居の歌集」「縣居歌文」「賀茂翁家集」「賀
茂翁集」「賀茂翁歌」等がある(各項参照)

かやのゐんうたあはせ 高陽院歌合
(高陽院七番歌合)

堀河天皇の寛治八年(一七五四)八月十九日前太政大
臣藤原師實の高陽院で催された歌合で判者は源經信、
歌人は周防内侍・伯母・大江匡房・源俊賴・藤原通俊、
等であつた(群類一八、二、八、五九―六三)

からいとさうし 唐絲草紙

お伽草子、信濃の國の木曾義仲にゆかりある唐糸とい
ふ女、國に八歳になる一女「萬壽姫」を残して鎌倉の
頼朝に奉公してゐる中、主君義仲は頼朝の爲めに滅ぼ
されたので女ながらも亡主の仇を報ひようとて七首を
袖にして頼朝に近づき不幸にして事あらはれて石牢に
幽閉せられたのを國許の萬壽姫十二歳迄々母を尋ねて
鎌倉表に來、折柄催さる、鶴岡祠前の舞姫をつとめて
頼朝の感賞にあずかりその賞として母唐糸は赦され其
上信濃に所領をさへ賜はつた。是皆姫の孝心と鶴岡八
幡宮の御利益とによるといふ筋(今泉定介、島山健校

の上、九六一―一三八に取り容れられた。作者年代共に
不明だが漢文を和譯し、漢詩を和歌譯してこれほどの
雅評なものに消化し切つた點は作者の可なりの學殖と
才氣を想はせる。文の調子・歌の風格から察すれば大
和物語以後蒙求和歌(鎌倉初期源光行作)以前、つま
りこの二卷を兩端とするその中間の某年に成つたもの
である。日文六にもある。

かろん 歌論

和歌の本質・法則・作法又は或歌人の歌風、若くは或
種類の和歌についての批評論議をいふ。
古くは和歌四式なるものがあつたといふが現存するも
のは後人の偽作だといふ(和歌四式を見よ)古今和歌
集序に於ける紀貫之の二聖六歌仙の評は恐らく歌論の
濫觴と見てよろしからう。王朝中期以後歌合が盛んに
なるに連れてその辯難攻撃を根據づける何物かの必要
を感じてこゝに歌論は長足の進歩をした。八雲御抄に
引かれた五家髓・俊賴無名抄・仲實綺語抄・清輔奥儀
抄・公任新撰髓・能因歌枕・袖中抄謂ふところの四
家髓・俊賴無名抄・仲實綺語抄・清輔奥儀抄・範兼
童蒙抄を始め、八雲御抄にあげられたものに忠岑の十
體、道濟の十體・清輔の初學抄・一字抄などがあり、

その他其後の悦目抄・清輔の袋草子・奥儀抄・法橋顯昭の諸本・袖中抄・和歌色葉集・古今集序註・拾遺抄註・散木集註・顯昭陳狀等(長明の瑩玉集・無名抄・俊成の和歌肝要・桐火插・古來風體抄・慈鎮の色葉和雜抄等)出、更に鎌倉期に入り和歌師範家が確立し二條・京極・冷泉の三派が各自家味風之美を主張する爲めに述作の少い割に歌論を關したことはすつと多かつたであらう。定家の詠歌大概は二條家の虎の巻となり、爲家の詠歌一體には制の詞、主ある詞などの繁瑣な規定をあげ、京極派の爲兼が普通の詞を用ひて自由に味めと云つたのに對して、二條派の千種有房は野守鏡を書いて駁撃した。又二條・京極兩家反目の有様は延慶兩卿陳狀に委しい。三五記・雨中吟などはこれ等歌論の便宜上名を定家に借つたこれ等子孫の述作らしいと謂はれるにも拘らず三五記云ふ所の次の十體(廿三日)の如きは屢々歌人に繰返された。

第一、幽玄體・行雲體・廻雲體第二、長高體・山體・遠白體・澄海體・第三、有心體・物哀體・不明體・至極體・理世體・撫民體・第四、麗體・存直體・花麗體・松體・竹體・第五、事可然體・秀逸體・拔群體・寫古體・第六、面白體・一興體・景曲體・第七、濃體、

第八、見様體、第九、有一節體、第十、控鬼體・強力體、

室町期は一に傳統に囚はれ、二條家の旗下に定家の一言一句を金科玉條視し遂に東常縁から古今傳授といふことをすらすら唱へ出した。この風戰國末期徳川初期までも續いて細川玄旨開齋始め、名だゝる堂上派歌人誰一人歌論の見るべきものがなかつた。この折柄元祿十一年五月を以て書き上げた戸田茂睡の梨本集五卷は實に劃期的の名著で從來傳統の制の詞以下の煩瑣な束縛から解放せられた自由清新の歌を主張した。惜しいかなこの主張は當時にあつてさほどの反響なしに終つたけれども、後來小澤蘆庵の振分髪・塵ひち・蘆かび・惑問等に於ける「たゞこと歌」の主張に命脈をひき、ついで香川景樹の新學異見その他に唱へた「調の説」及び桂園派の歌風を起し桂園派流れて明治の宮廷に入つたことを想へば遠白い歌道の水上に小さいながらに白光を放つてゐるものはこの梨本集だとの感に堪へない。又當期古典派の荷田春滿には國歌八論の著があり、從來多くの歌人によつて論議せられ之が批評に關する書も出た(國歌八論斥非など)賀茂眞淵はその萬葉振主張を「新學」に書いた。景樹の「新學異見」

は實に之に對する批評である。本居宣長も石上秋淑言に歌論を發表し江戸派の村田春海には「歌がたり」の著がある。明治に入つては新派の先蹤たる落合直文があるが議論よりは實行を先にする人で、歌論は寧ろその門下の人々によつて唱へられた。正岡子規が非常な熱意を以て「歌人に與ふるの書」を草したことも著しい。根岸派以下各種同好の結社が出来るやうになつては、歌論を單行本で出すものは作家自身自註の歌集や他人の味の評釋や初心の手ほどきにして執筆するやうな時だけであつた短歌雜誌の紹介、文藝雜誌の論説といふ風の形式に代つてしまつた。

かんかんじん 閑々人

ちくれい「角田竹冷」を見よ。

かんぎんしふ 閑吟集

室町時代中流以下の流行小歌や民謡の代表的なもの三百首ばかり集めたもので、この期歌謡研究上の好資料である。著者は未詳だが、序文によつて察すれば尺八を嗜む一僧侶で——富士を遠望し得る地點にある某寺に住んで居つた(この中に「清見寺へ暮れて歸れば寒潮月を吹いて袈裟にそゞぐ」とあるので高野辰之氏は「或は清見寺の僧か」と云つて居られる)年代は永

正十五年(二一七八)である(高野辰之氏日本歌謡史六二三—六二四)續群五六二、一九ノ下二六三—二八七)

かんし 漢詩

漢文學の輸入と共に漢詩も將來せられ、上代既に詩賦の體しあり天平勝寶三年(一四一一)には懷風藻の撰も出た。大友皇子即ち弘文天皇は我邦最初の漢詩人と謂はれてゐるが、大津皇子や葛野王にも秀吟があつた。懷風藻詩人は皆で六十四人、詩は凡て百二十篇其中多いのは五言で五言絶句五言律が大部分を占めて居つた。奈良朝から王朝初期にかけては唐との往復が頻繁で、その唐朝は漢詩の極盛期に際して居たので、我邦又この風を受け紀傳明經明法算などある科擧の學問よりまずと盛んに漢詩漢文を重んぜら出した。嵯峨天皇の弘仁・天長年間はその最高頂とも觀るべく詩星續田女流までも作詩に腐心し和歌まで詩の影響の著しいものがあつた。即ち漢詩人の主なるもの嵯峨天皇・僧空海を始めとし、小野篁・仲雄王・賀陽豊年・良峰安世・清原夏野・菅原清公・滋野貞主・有智子内親王などがあつた。これ等々々の作を集めて弘仁五年には小野岑守の凌雲集、同九年には藤原冬嗣等の文華秀麗集、天長四年

には滋野貞直の經國集などが出、や、後れては菅原是善・島田忠臣・橋原相・都良香・大藏善行・紀長谷雄・三統理平・菅原道眞・藤原佐世なども一代の詩宗で中には個人の家集のある人もある（菅公の詩などは大鏡にも出て居る）これ等王朝諸家の詩は（嵯峨天皇より一條天皇に至るまで）藤原明衡の本朝文粹に類集されて居るし、藤原公任撰の和漢朗詠集にも採られて居る。鎌倉室町の兩期は漢詩にとつては暗黒時代ではあつたが、京・鎌倉の五山の僧には周興・義堂・絶海・良佐等の名人もあつた。殊に義堂の作詩は盛唐體の疊を摩するものと稱せられた。徳川時代文藝復興と共に漢學は逸早く勃興したが、幕府も漢學者も力點を經義において漢詩の如きは學餘の閑文字とされて居た。藤原惺高・林羅山・荻生徂徠・伊藤仁齋・木下順庵・新井白石・室直清などの詩が稍出色で、だん／＼詩作が多くなるに連れて從來のやうな唐詩の模倣一轉張りてなく日本的な詩をも見、有益な詩集や作詩參考書類も出るやうになつた。祇園南海・雨森芳洲・秋山玉山・梁田蛻巖など何れも詩人として特色を認められ、服部南廓の唐詩選國字解、徂徠の皇朝正聲（大友皇子以下十五家の作三十五首をあつめたもの）南海の詩學蓬原・南海

詩訣（文字の雅俗を辨じて作詩の要としたもの）南海咏物集等何れも好編著である。又徂徠の詩集、白石の白石詩稿・白石餘稿・停雲集なども有名なり。直清・蛻巖・南廓の詩は其文集集中にある。これ等諸家の詩は明詩の影響を多分に受けてゐたものだが、天明年間山本北山が宋詩を獎勵して表中朗が性靈の説を唱へてから詩風が一變して、形式よりも内容を詞藻の華麗よりも真情の發露を貴ぶやうになつた。大窪詩佛・菊池五山・栢如亭・釋六如、市川寛齋・葛因是、皆川洪園等はその中有名なもので降つて文化文政の頃に至つては中國に菅茶山・賴杏坪、その子山陽、九州に龜井昭陽・廣瀬澹窓美濃に梁川星巖等があつて、段々日本化した作詩を見るやうになつた。五山の五山堂詩話・洪園の洪園詩話寛齋の談唐詩選・澹窓の澹窓詩話・星巖の星巖詩集何れも有益の文字に富んで居る。更に降つて幕末勤王諸家が流離關々の間に慷慨惻怛の懷を吐露したものはその生の閱歷と相俟つて貴いものがある。即ち藤田東湖・藤井三溪・黒澤忠三郎・橋本香坡・僧月照・佐野竹之助・雲井龍雄等の詩は言々句々血涙の進る趣がある。明治大正期に入つても作詩の例は随分多いが、次第に洋文學の新詩と地歩を換へて衰へた氣味がある。それ

に押韻平仄の約束は之を音讀する支那にこそ必要だが訓讀する日本人が同じく之を嚴守するのは無意味であるといふ論も段々優勢になりつゝある。

かんだかんじん 神田閑人

ちくれい「角田竹冷」を見よ。

かんだんしよこくものがたり 邯鄲諸國

物語 三十卷

柳亭種彦、三十三四歳頃に作つた合巻物（人によつては讀本に入れた向もある）西鶴諸國ばなし・其磧諸國物語などにまれて作つたものだが「種彦諸國物語」と我名を冠することの餘り價上なのを憚つて根も葉もなき夢物語の意で邯鄲とつけた（虚が初編二編は「種彦諸國物語」とあるのは書肆永壽堂のさがしらであつたといふ）近江・出羽・大和・播磨の戀愛譚・奇異譚を圓熟した筆致で平淡に綴つて居る。種彦の歿後その弟子笠亭仙果その遺稿伊勢の巻を自ら補作した遠江・攝津の巻とを増補して附録として板行した（帝文二三）

がんちく 含蓄

「餘情法」を見よ。

かんでんし 閑田子

かうけい「作菑隠」を見よ。

かんぶん 漢文

應神天皇の朝、百済の王子阿直岐來朝、論語と千字文を獻じ皇子菟道稚郎子が阿直岐に師事して之を學べれ阿直岐の推薦によつて王仁が來朝し爾來續々彼の國から學者と書物とを送り推古天皇の朝小野妹子遣唐以來は我邦からも留學生學問僧として隋唐に渡るやうになつた。南内詩安・高向玄理・僧旻・安部仲磨の如きはその有名なもので殊に仲磨の如きは唐代の文物に心酔するの餘り終生彼の朝に奉仕した。王朝初期空海・最澄が渡唐したことは有名な話で菅原道眞が上奏して遣唐の事が廢止されるまでは絶えず彼土との交渉があつた今頃はしいが王朝中期以前我邦に輸入された主なる書目をあげると、

- (一) 經書、周易・尙書・毛詩・周禮・儀禮・春秋（穀梁傳左子傳）論語・孟子・孝經、(二) 史書、史記・漢書・後漢書・晉書・宋書・陳書・周書・隋書・大唐創業起居注、(三) 雜史書、國語・戰國策・汲冢周書・東觀漢紀・呂氏春秋、(四) 傳系書・晏氏春秋・說苑・孔子家語・蒙求、(五) 諸子、荀子・鹽鐵論・法言・大玄經・鶡子・歇冠子・論衡・顏氏家訓、(六) 道家、陰符經・老子・文子・列子・莊子・抱朴子内外篇・墨子、(七)

法家、管子・商子・韓非子、(八)兵家、六韜・孫子、(九)詩集、イ、別集。千字文・岑嘉州・阮嗣宗・陶淵明・瘦子山・徐孝穆・王子安・盈川・盧昇之・駱賓・陳拾遺・張燕公・李太白・王右丞。ロ、總集。楚辭・玉臺新詠・文選、(一〇)地理括地誌・佛國記、(一一)辭書、玉篇・千祿辭書・釋迦方志・大唐西域記・說文解字、(一二)韻書、廣韻(一三)修辭、文心彫龍、(一四)雜書、藝文類聚・北堂書抄・荆楚歲時記・今古注・風俗通義・山海經・博物志・世說新語。

聖德太子の十七箇條憲法は今日謂ふところの憲法とは違つて寧ろ訓令か内訓様のものだが、甚だ流麗に綴られてある。日本書紀や萬葉集中の詞書や懷風藻中の作者の傳記文を見ると多少彼の四六駢麗體に因はれたところもあるが、こゝまで漢作文が出来るやうになつたことを多とすべきであらう。

その他上代の漢文で現存するものは伊豫道後温泉の碑文、大和法隆寺にある觀音釋迦諸佛像背銘の文、諸經文の注疏の類である。

王朝初期は漢詩と共に漢文の極盛期とも謂ふべきで此より前大寶令に發源した國學大學の制度も略々完備し漢文教育の機關が整ひ貴族の私學が勃興して益々この

勢を助け、四科の制もあり經子史集の目もあるが殊に、集を重んじ殊に詩文集を悦び文選と白氏文集とはひとり初期のみならず王朝を通じて公卿縉紳必讀の書となり、女流文學者までも之を愛讀した、又遊仙窟の悦ばれたのも王朝初期のことであつた。大體漢詩極盛期の嵯峨天皇の朝が漢文に於ても又極盛期で當時有名な詩人は大抵又文章家でもあつた(漢詩を見よ)王朝期に出された三代格式六國史も漢文で書かれ、齋部廣成の古語拾遺、安部眞直・出雲廣貞の大同類聚、萬多親王の新撰姓氏錄、清原夏野の令義解、諸家の日記の大部分も漢文で書かれた。その他この期の佳篇に都良香の富士記、小野岑守の江樓春望王制、鳥田忠臣の天臺夜鐘などがある(尙嵯峨天皇より一條天皇に至るまでの詩文總集に藤原明衡の本朝文粹がある)。

鎌倉期に入つては漢文の教養あるもの次第にその數を減じ承久の亂に後鳥羽院の宣旨を奉讀し得るものは關東方に藤田三郎唯一人のみとある。漢文の格もひごく崩れて漢ともつかず和ともつかぬ鶴的漢文となつた。其代表的なものは鎌倉幕府の日記東鑑や法令文貞永式目などである。室町期に入つても同様で和奥の漢文のみが多かつたが、五山僧侶の中には垢ぬけのした文章

家もあつて義堂や絶海など殊に能文の聞えがあつた。徳川期文藝復興と共に漢文の著作は俄に増したが多くは自家學說の主張に急にして文辭などは顧みないものが、さもなくば徒に四六駢麗の糟粕をなめて何等創意のなきものであつた。中に就き仁齋・徂徠の論難、齋藤拙堂の叙景、頼山陽の史筆等が一番多く反響があつた。明治大正に入つて洋學の輸入につれ漢文はその思想が文化的に時勢後れでありその修得が困難であるとして之に手を染めるものが段々減じ、今日眞の漢文作家として古人に恥ぢない人は寥寥の感があるとのことだ(それでゐて漢文の用は決して廢つては居ない。表だつた詔勅上奏建議宣言の類は矢張漢文の素養なしには作れないやうな漢文直譯體なり。名家の墓碑銘や銅像石像の背銘は矢張漢文で書かれつゝある)。

かんぶんがくのえいきやう 漢文學の影響

こゝに謂ふ漢文とは必ずしも漢文で書いた純文學的 작품을指していふのでなく、廣く漢文で書いた典籍の總稱として考察を進める。

漢文學は國文學の母胎であり乳母であり朋友ですらあつた。漢文學なしには國文學は已往の徑路を以ては發

生し得なかつたであらう。日より口に言ひつたへ語りつたへた我々の先祖が始めて文字を得たそれは漢字であつた。始めて文章を得たそれは漢文であつた。始めて書籍を得たそれも漢籍であつた。漢字のお蔭で記載の術を知つたのみならず、天武天皇の御代には境部臣連をして新字を制定せしめられた。即ち倭字といふものでこの和製の漢字を純漢字の子とすれば孫には片假名があり曾孫には平假名があり玄孫には變態假名がある。即ち我國字は漢字から發生したものだ。否な此等假名發生以前の古事記・宣命・祝詞の表現は一に漢字の音訓を借りてにはまでも表し萬葉假名に至つてこの種の利用は極度に發達し、更に局面を轉回して漢字を日本化したものが假名であるとするのが至當である。

奈良朝の語彙を見ると大分漢語が入つて居るがこの傾向は王朝になつて益々甚しく、鎌倉・室町の軍記物になると頗にその量が増すと共に句法修辭も段々漢文口調となり、謠曲から脉をひいた徳川期の戯曲や、同期の和漢混濁文や京傳馬琴一派の讀本も漢文の格調を多分に含んでゐる。純雅文の名家村田春海の文でさへも唐宋八家の文を消化してその措辭に則つたものだといふ更に想の方面から觀ると我が祖先の思惟の形式や趣味

論は一に漢文學によつて眼を開けられたものらしく懐風藻詩人の口吻は何れも支那的であり、支那で「年寒ウシテ松柏アラハレ」と云ふと古今集で「つひにもみぢぬ松も見えけり」といふ、彼に時鳥をあはれといへば我も時鳥を初夏一等の景物とし梅でも月でも蟲でも鳥でも雪でも一體にその観方味はひ方が支那式である（漢文が和歌に影響した著しい例は矢張り王朝弘仁頃で高津皇女の御述懐といふ）。

木にもあらず草にもあらず竹のよのはしに我身はなりぬべらなる

直き木に曲れる枝もあるものを毛を吹き疵をいふがわりなき

などは戴凱之の竹譜の語や漢書中山王傳を歌語にせられたものだ。王朝物語の祖といはれる竹取物語中かぐや姫昇天の如きも漢武内傳に暗示を得たとも謂はれてゐるし、源氏物語桐壺の巻の「三千の寵愛を一身に集め」とか「朝政は怠らせ給ふ」とか「花鳥の色にも音にも」などあるのは皆白樂天が長恨歌からの想ひつきだ、外面的にもせよ王朝人の人生觀を根柢づけた佛教的思想も實は漢譯佛典普及の結果である。室町期の謡曲は支那の傳奇雜劇に模倣せられ徳川初期の假名字草子

中には彼の紅樓夢や剪燈夜話の翻案が多く、水滸傳の翻案に至つては更に數多く全期を通じての傑作八大傳もその一つである。元祿の俳聖芭蕉が頭陀の袋には杜甫の詩集が死ぬるまでいつも入れられてあつたといふが、芭蕉の句風を立てる一礎石には確かにこの杜甫が在つたことは否まれなからう。

勸善懲惡を基調にした當期の戯曲脚本が、三綱五常を根本道徳としたのも儒教の影響であらう。

かう列舉して見れば漢文學の我國文に裨益したことは決して尠くはないが之と同時にその餘弊をも併せて受け容れて居ると思ふ。已に日本書紀の天地開闢章が淮南子の説にかぶれた文であるが、上代の宣命を見てもあまりに唐情に囚はれさせられた仰せと拜察するやうな語句（例へば國君は天の命を受けて人民に君臨するとか、國家將に興らんとする必らず積善ありとか）があり懐風藻の詩人傳や六國史の人物記事を見るときも「狀貌魁梧・器宇峻遠・幼年好學・博覽而能屬文及壯愛武・多力而能擊劍・性頗放蕩不拘法度（大津皇子）」とか。

藤原吉野は性至孝、定省温情造次も違ふことなし。その父嘗て鮮肉ありと聞き人を遣はしてこれを索め

とに、他人吉野の在らざるを以て吝んで與へざりしか吉野歸りて之を聞き大に悔恨涕泣して他人を責讓しけるがこれより終身肉を食はざりきといふ（續日本後紀）

と様な大袈裟な形容がしてあつて個性のある人間としての大津の皇子藤原吉野なるものが非常に變質變容されたかの趣がある。十訓抄の第六には小野宮右大臣が賢者の評判をとらうとして苦心百方すれども成功せず、或時、新築工成つて移徙の酒宴終つて後突然火事がつて人々があわて惑ふ中を「賢者の名をとるなら今だ」とばかり怒々と借ばかりを取つて「車寄せよ」と云つて出て行つた。後に人がそのわけを聞いたら「わづかなる走火の思はざるにもえあがる、なま事にあらず、天の授くるわざはひなり。人の力にてこれをききはこれより大なる身の大事も出で來べし何によりてかあながちに家一つを惜むにたらん」と云つたのでそれから「賢者」の名を得たとある。まるで黄表紙「江戸生浮氣権燒」を古典で行つた格である。徳川初期荷田東磨は當時の學者が餘りに漢文學をのみ喋々するのを憤慨して、

ふみわけよやまとはあらぬから鳥の跡を見る

のみ文の道かは

と諷した。而かも徂徠一派の支那崇拜は随分極端なもので、名まで支那風に三字名にして物茂卿といつた。山崎闇齋も腐儒の輩を罵り「孔孟兩子將として我邦を攻め寄せたならばどうする」といふ問を弟子に發したといふ。

之を要するに、漢文學は國文學のよりにて發生する母胎でもあつたし、發生以後もその生長發達を少なからず援助した乳母でもあつたし春花秋月時折の景觀を共に觀賞する友達でもあつた。友達には良友もあれば悪友もある如く、漢文學の影響にも望ましいものと否らざるものとがある。而し之を差引いても漢文學が過去の國文學に貢獻した功績は決して尠少ではない。

かんよこと 神壽詞

神話の中、吉瑞を含む詞の義で（よこと「壽詞」といふに同じ（出雲國造神壽詞及び壽詞參照）

かんわれんく 漢和連句

漢詩の句（四字又は五字より成る句）を以て始まり和字の句を以て舉句とし、中間は必ずしも漢詩句・和字句と交錯せずともよろしいが、大體兩方を交へ、漢詩も平仄をふみ和字句も韻をふんで歌仙や百韻を連れる

連句の一體をいふ。

例 空華日用工夫略集

松ハタテ、メキハ紅葉ノ錦カナ

二條攝政

秋雨瀝如絲

空華

ケサミツル、花ハムカシニチリナシテ

府君

春遊跡易陣

國師

秋ノ田ノ、ミツホノ國モ、オサマリテ

二條攝政

晁旋非紫宸

大清

秋草子に頭中將が

蘭省花時錦帳下 廬山雨夜草庵中

と書いて起したのに對して清女が

草のいほりを誰かたづねむ

とつけたのはこの連句の先蹤とも見られるが、この種の體の盛んになつたのは五山の僧侶が文雅の翹者となつて時の歌人と一座するやうになつてからのことと思はれる(群類三〇六、漢和法式一〇、一一二二)

かんみんのおとど 閑院大臣

ふゆづく「藤原冬嗣」を見よ。

キの部

き季

俳句中、四季各月に配置して定まつた行事や景物をいふ。例へば雑煮・數の子・萬歳の類は正月の俳句に入れ、魂祭・駒牽・星祭は七月の俳句に入れる。東風はいつ吹いても東風に違ひないが俳句では春の句に限られてある。中には教訓や單なる叙景の句で無季のものもあるが、一帯に舊派の俳句では「季のないものは句にならぬ」とまで云つたものだ。これはつまり一定の聯想多い俳句によつて短詩形の含蓄を豊かにする(「萬歳」の一語でその周囲の正月氣分を髣髴せしむると様に)爲めに必要な約束ではあるが、あまり之に拘泥する必要はなからう(季を記したものを「季寄」といひ、單行本でいくらかも出てゐるが舊いものでは馬琴の俳諧歳時記が廣く用ひられ、新本では新撰俳諧辭典の卷末附録が便利である(又「季」についての卓見は小著「俳句の作り方と味ひ方九六—一〇三に述べておいた)新派や新傾向句では「季」の制限はない。

きい 祐子内親王家紀伊 ?

王朝末期の女流歌人、紀伊守平經方の女、出でて後朱雀院王女祐子内親王に仕へた。歌は後拾遺以下代々の勅撰集及び堀河院勅書合に採られ、家集を祐子内親王家

紀伊集一卷といふ(群類二七八、一〇、三三六—三三九・續國 七三三—七三六)

きいちばふげんさんりやくのまき 鬼一

法眼三略卷

戯曲、時代物中、義經物の一つ。享保十六年(二三九一)九月竹本座演出。文耕堂と長谷川千四との合作。一説には竹田出雲作ともいふ。鬼一法眼が平家を裏切つて家僕虎藏實は源義經に三略を傳へ、お負けにその戀人皆鶴姫を嫁立し自らは自害する。鬼次郎・鬼三太・鬼若(辨慶)義經を援けて旗上げに取りかゝる」といふ筋で、序と二段目は辨慶の生立と吉岡鬼次郎夫婦諸國巡歴の事、三段菊畑、四段目楡垣茶屋、五段目五條橋牛若干人切となつて居る(帝文二七、二六五—三四一)

きいん 綿屋希因 ?

享保の俳人、元祿芭蕉歿後の俗吳調と天明蕪村の復興との過渡期を代表する句振で、彼の師は中川乙由、彼の門には蝶夢・涼俗・蘭更・二柳等の名俳が出た。

盗人の後で棒ふる柳かな

こち向けと蔓を動す瓢かな

桐の實のふかれ〜て初時雨

きうおう 柴田鳩翁

明三—天保一〇、五、三、五十七歳

京都の人、名は亨、字は陽方、通稱は謙藏。鳩翁は盲になつて剃髮してからの號で、遍く諸國を歴めぐつて道話を説いたが、譬喩適切、引例卑近よく俚耳に入つて市井感化の偉勳蓋し道話中の第一人者であらう。その道話は今日鳩翁道話(三卷)と題する單行本の外教育文庫のやうな叢書にも取り容れられてある。

きうきん 薄田泣菫

明治一〇、五、一九—

岡山縣淺口郡連島町の人、名は淳介、獨學を以て詞藻の才を得、三十年から四十年頃まで詩壇に立つて象徴詩・古諷詩で鳴らした。幕笛集・ゆく春・二十五弦・落葉・白羊宮・子守唄等一作出る毎に可なり反響があつた。その作風蕪村に似て詩味の渾然は稍缺け、技巧の精煉は一步の長がある。後大阪毎日新聞社に入り茶話欄を擔當して奇警な修辭とユーモラスな多方面な話材に紙上の一特色を發揮した。

きうけい 平賀鳩溪

げんない「平賀源内」を見よ。

きうさう 室鳩巢

元—享保一九、七十七歳

儒家にして和漢混淆文を能くした人で、江戸で生れて加賀侯に仕へ、その命によつて京都に出て、木下順庵の門に入り藩に歸つて子弟を教授して居たが、その後新井白石の推舉によつて江戸將軍家に仕へ駿河臺に邸を賜はつたので、時の人彼を駿臺先生と崇めた。將軍吉宗彼を侍講とし、信任目に厚く、政治上の得失に至るまでも諮つて意見を徴した。その著駿臺雜話は學術道徳に關する隨筆で、五常五倫名義、六論衍義大意等亦名高い。其他赤穂義人録・鳩巢小説(續史一七、一八)鳩巢先生文集・同補遺等凡て廿餘種ある。

ぎょうにくとばれいしよ 牛肉と馬鈴薯

國木田獨歩が三十四年十一月、雜誌小天地に寄せた小説で、氏が早期代表作の一つで一見ロマンチズムの根調の上に構想せられてあるが、よく見るとそれは寧ろ自然主義の洗禮を受けた後のロマンチズム、若くはヒューマニズムであると思ふ。

「芝區櫻田本郷町のお堀邊に『明治俱樂部』といふ莊屋とまでは行かぬが可なりの洋館がある。或年の冬の一夜、藤村の『春』の始めに見るやうな若人の會合が催された。竹中・上村・綿貫・井山・松木・近藤、それに後ればせに來た岡本誠夫と七人。心やすい同士の會

とて遠慮なく飲みもし喰ひもし語りもした。可なりに酔ひがまはるに連れて『理想と現實』とを『馬鈴薯と牛肉』で象徴させて『兩者は大距離がある』の『理想の實現は困難だ』の『若し實現が不可能だとすればどちらにつくか』の『イヤ僕は現實の牛肉黨だ』『デモ牛肉にポテトはつきものだよ』とお互が隔意なき衆議判をやつたが、最後は岡本が中心となつて自己の體驗と感想を語る。

「僕はこれぞといふ理想を奉ずることも出來ずそれならつて俗に和して肉慾を満たして以て我生足れりとする可い出来ないので。爲ないのではないので實をいふと何方でも可いから決めてしまつたらと思ふけれど、何といふ因果か今以て唯つた一つ不思議な願を持つて居るから其ために何方とも得決めないで居ます。

「何だい、その願つていふのは?」「まさか狼の丸焼で一杯飲みたいといふ洒落でもなからう?」「まづ其様なことですよ」と岡本は自分と「お榮」との戀愛事件(作者が佐々木氏令嬢と戀に落ちたいきさつを採つたもの)を語ると近藤が横から、
岡本君の話の途中だが、僕の戀を話さうか?。一分間と言へる。僕と或少女と乙な中になつた。二人は無我

無中で面白い月日を送つた。三月目に女が欠伸一つした。二人は分れた。これだけサ。要するに誰の戀でもこれが大切だよ、女といふ動物は三月たつと十人が十人、飽きて了う。夫婦なら仕方がないから結合して居る。然し其は女が欠伸を嚙殺して其日を送つて居るに過ぎない……。

女といふ奴が到底馬鈴薯主義を實行し得るもんじやアない。先天的のピフテキ黨だ……凡そ欠伸に數種ある。其中最悲むべく憎くむ可きの欠伸が二種ある。一は生命に倦みたる欠伸、一は戀愛に倦みたる欠伸、生命に倦みたる欠伸は男子の特色、戀愛に倦みたる欠伸は女子の天性。一は最も悲しむべく、一は最憎むべきものである。

などいふ、次に岡本は一座の切望によつて「目下の願ひといふのを告白する「僕目今の最大の願といふのは政治にあらず哲學にあらず科學宗教にあらず

「喫驚したいといふのが僕の願なんです」「チーンのことた、落語の落か……」「否、眞面目に喫驚したい」といふのです。
夢魔を振り落したいことです……不思議なる宇宙を驚きたいといふ願です……。

……此使ひ古るした葡萄のやうな眼球を剝り出したいのが僕の願です……。

タルムスの大會で王侯の威武に屈しなかつたルーテルの膽は喰いたく思はない。彼が十九歳の時學友アレキシスの雷死を眼前に視て死そのもの、秘義に驚いた其心こそ僕の欲する處であります……僕の悲痛は戀の相手の亡なつたが爲の悲痛である。死てふ冷酷なる事實を直視することは出来なかつた。即ち戀程人心を支配するものはない。其戀よりも更に幾倍の力を人心の上に加ふるものがあることが知られます……。

僕の願ひは如何にかして……此古び果てた習慣の壓力から脱れて驚異の念を以て此宇宙に俯仰介立したいのです。その結果がピフテキ主義とならうが馬鈴薯主義とならうが、將た厭世の徒となつて此生命を咀はふが決して頓着しない……我何處より來り、我何處にか往く……僕の願は如何にかして此問を心から發したいのであります。

……僕は人間を二種に區別したい、曰く驚く人、曰く平氣な人……(獨歩集五二一〇二・獨歩全集一三九)

きょうりづかい

訓蒙窮理圖解 三卷

福澤諭吉、慶應三年十二月の著。開國日淺き我國民をして西洋文明の知識を得しむるには通俗的な物理書を出すがいと思つて、英のチャンブル、クワツケンボス米のスウキフト、コルネル、ミツチエル等の原書を參酌し、從來我邦の類書が「柔軟なることポートルに似たり」(ポートルはバター)といつたところをポートルではわかるまいとて「柔きこと味噌の如し」と様に平易化し、多くの挿畫を入れて分り易く面白く説明した(今日の理科教授の參考としてもよきさうである)思ふに福澤氏は丁度新開地の八百屋か萬屋店のやうなもので、我が明治の啓蒙期に當つて時勢の要求を見て地理・歴史・旅行案内・物理書・簿記法一切を紹介されたのであらう。その中でも、この一書の如きはこの期に於ける貴重なる文献として特筆して遺さるべき一つであらう。この書が一般化するにつれて小説家假名垣魯文は「胡瓜圖解」の戯作を出してこれ亦大に博くよまれた(福澤全集第二卷二五九—三一二)

きから 紀行

旅日記のこと。國文の紀行は紀貫之の土佐日記が初めてといふ。傳光行作の海道記・傳親行作の東關紀行・阿佛尼の十六夜日記・芭蕉の奥の細道など殊に名高いが

群書類從紀行の部にはまだ色々の紀行が收まつて居る(有朋堂文庫第二輯日記紀行集・續帝二〇・紀行文集) **きかく 寶井其角(榎本其角)** 二三二—二三六七、寛文元—寶永四、二、三〇、四十七歳 蕉門十哲の中でも嵐雪と相並んで桃と櫻のやうに秘藏がられた高弟で、江戸堀江町の産、父東順は醫師、一時母方の「榎本」姓を冒して居たこともある。 一、學殖敦養。芭蕉が江戸へ下ると逸早く弟子入りをしたが、彼はまだ外に儒を寛齋に、醫を草刈某に、詩を大嶺和尙に、畫を英一蝶に學び書は初め佐玄龍に従ひ中ごろ米元章を學び、後、日蓮を模して縱横跌宕の趣また是れ一種の達筆と謂はれてゐる。 二、俳風。彼が豪放の性格と、天性の才氣と、洒落豁達の市井趣味(江戸趣味)と相合して彼の句には市井の人事句多く、江戸ッ兒の細みと輕みを示した名句も尠くない。又奇想天外的名句に富み、生彩潑刺たる佳什に長けてゐるがその弊としては奇巧・卑俗・淺薄・露骨に失するものがある。殊に後年「洒落風」を唱へて師翁の正風を邪道に開展した責めは免れない。 三、著書。五元集(自筆本)・續五元集・類柑子(俳文集)・新二百韻・蕉尾吟等。

四、門弟。彼の俳團を江戸座と云ひ、その門流には老鼠肝・湖十・松木淡々・秋色・桑岡貞佐・鶴海一漁・早野巴人・常盤潭北等が輩出した。 五、句例。

夕涼よくぞ男にうまれける
からびたる三井の仁王や冬木立
初雪に此の小便は何やつぞ
千鳥たつ加茂川越て鉢叩
やりくれて又や狭筵年のくれ
小屋涼し花火の筒のわる、音
雨蛙芭蕉に乗て戦ぎけり(其角句集、吉川弘文館)

ききよく 戯曲

廣義では、舞臺で演出する臺帳の文詞の總稱で、國文學でいふと一、謠曲、二、狂言、三、淨瑠璃、四、脚本は皆之に屬するが、通常我邦で戯曲といへば謠曲などに對立的にあげられる徳川時代の淨瑠璃・脚本を謂ふ。尙最狭義には淨瑠璃のみを云ふこともある。淨瑠璃は「操り」と云ふ個人劇の臺詞で、後には歌舞伎劇に流用せられたものも多い。脚本は始めから歌舞伎劇の臺詞として作られたもので、中には淨瑠璃を改作したものである(逍遙選集第十卷中の諸論文・飯塚友一)

郎氏歌舞伎細見) **きぎん 北村季吟** 二二八四—二三六五、寛永元、一二、一一—寶永二、六、一五、八十二歳

近世初期文藝復興して古典研究の聲盛なるの時、西に契沖・長流あり、東に北村季吟ありてよく之が啓蒙運動の先驅者たるの使命を全うした。殊に季吟のこの方面の功績は長流・契沖二人を合せても及ばないものがある。彼は山城粟田口に生れ、通稱久助、號は拾穂軒(又、湖月齋・七松子・盧庵)家號を湖月亭と云ふ。もと近江の北濱の醫家だつたが彼は京に出て玉津島の社司をつとめた。その頃和學を松永貞徳に學び、後専ら獨學して和漢神儒佛の學に精通し、寶永年間(二年十二月廿一日)子湖春と共に幕府に仕へ、逐次昇進して俸祿五百俵を賜はり法印に叙せられた。彼が國文學上唯一の功は古典の註釋を集大成して後學の便を圖つた點にあるが、尙又古風の俳諧をもよくし、芭蕉・素堂・元隣等の名俳を弟子から出し、文にも歌にも巧であつた。註釋書には源氏物語湖月抄・八代集抄・徒然草文段抄・土佐日記抄・大和物語抄・伊勢物語拾穂抄・枕草紙春曙抄・枕草紙文段抄・萬葉集拾穂抄・百人一首拾穂抄・和漢朗詠集註等があり、俳諧の書には兩吟集・犬千句

俳諧合・山の井・續山の井・新續犬筑波集・室吹百韻等があり、家集には季吟子家集（續歌學全書八）がある。

腹筋をよりにてや笑ふ糸櫻

まざ／＼と在ますが如し魂まつり

山風にちりくる花と見るまでに裾野の蝶のむれ

て飛びかふ

水くらき芦屋のさとのたそがれを光に見せて飛

ぶ螢かな

ぎくわう 稻津祇空 二三三三—二三九三 寛文

三—享保一八、四、二三、七十一歳

大阪の人、別號を石霜庵・竹尊者・阿桑門・空閑人・玉筒山人などいふ。江戸に出て蕉門に入り青流と號し又其角に親炙して大に得る所あり、五十二歳宗祇の墓前で髪を剃り、以來「祇空」とよび、東奥行脚の途に出、後、再び江戸に來て「法師風」なる一體を立てた。夏目成美・小林一茶などはその門から出た名俳である。その他淺草藏前の札差が多くその門に入つた。後去つて洛北紫野に住んで敬雨と云ひ、更に大阪を経て江戸に行く途中、箱根の湯本で亡くなつた。同地早雲寺に葬つた。その著に百番句合・みかへり松・鳥筑波

簪の花などがある。

きくてい 田口掬汀 明治八、一—

秋田縣角館町の人、名は鏡次郎、三十三年上京して「新聲」の編輯に従事したり、新聞記者になつたりしたが後思ふ處あり東京外國語學校や佛語專修科に入學し、後小説に筆をそめ明治廿五六年の頃家庭小説・教育小説の勃興した時「伯爵夫人」を書いて喝采を得、つゞいて若干の小説を作つたが後「中央美術」の主筆に轉じジャーナリストとして活動した。ふたおもて・女夫波の外單行本としての小説に魔詩人・情の人・心の波・黒風・追恨などがある。

ぎくわう 義公

みつくに「徳川光圀」を見よ。

きけ 紀家

はせか「紀長谷雄」を見よ。

ぎけいき 義經記 八卷

作者未詳。年代は室町時代、源義經の一生を取材し、鞍馬の山の寺籠りから高館の一炬、城頭の灰燼と化するまで事實そのものが已に劇的な主人公の面目を寫して（殊に頼朝と不和になつてから以後が委しい）略々成功に近いもので後の義經物は皆之を一つの典據にし

てゐる。王朝期多數の物語は個人の戀愛生活を寫し、

鎌倉期軍記物語は各族の戦闘生活を集團的に寫したがこの二傾向を融和して個人の戦闘生活を寫しながらも一面王朝式戀愛生活の情趣をもたゞよはせた新傾向の作品の一つには曾我物語があるが他の一つとしてこの義經記は特に注目に値する。辨慶は軍記物語の主人公らしく、靜は王朝式の戀と武家の氣概と藝術家の矜持とを併せ得た我日本に於ける久遠の女性（いつの世の誰人もが女性の典型とする）で、この二人が義經に結帯してゐるだけでも此記の内容に數層の生彩を帯びしめるものがあるのに、佐藤庄司が二子の誠忠、龜井・片岡・伊勢・駿河・藤原秀衡・忠衡夫妻・鬼一法眼・頼朝と彼の周圍の人物にも持異なものが多い。

唯作者の義經觀は、今日史家が觀る義經とは大分趣が變つてゐて必ずしも正しいものとは思へない（宇治勢多・一の谷・屋島・壇浦の奮闘振はあまり紹介しないで、却つて臣下のさそくに無事關所ぬけをした勸進帳の場面や、も少し前の堀河夜討などをこま／＼と書き立てたやうなこと）

行文も一帯冗漫の嫌があるけれども、描寫に眞實味が籠つてゐて流石にかいなでの作者でないことを想は

せる。校註國文學大系十三卷に入る。その他。著者未詳の義經記大全（義經記評判）十一卷馬場信意義經記評註十二卷などもあつて、多くは義經記の内容に對して考察批判を加へてゐる（史一六の二七八に「義經記奥州本」といふのがあつて東北の方言訛言を以て衣川合戦の一段を口語譯して居る）

きげき 喜劇

英のコメディに當る戯曲中悲劇と相對するもので、讀者や觀衆に悅樂の情を生ぜしむるものを謂ふ。例へば沙翁の「から騒ぎ」モリエールの「良人學校」のやうなもの。我邦には本當によい喜劇はまだ多く産まれなない、戯曲を廣義に解すれば室町期の狂言は一種の喜劇である。一九の「道中膝栗毛」を脚本化したものも喜劇であるし、曾我迺舍五郎十郎の演じたのも喜劇であるがくすぐり澤山で寧ろ「笑劇」と謂つた方がよい。又喜劇のことを「滑稽劇」といふ人もあるが、大體はよろしいが嚴密に云ふと滑稽は嚴肅の對で悦喜は悲哀の對であるから矢張喜劇といふがよろしからう。上手な戯曲作者は主想を悲劇においても處々喜劇的分子を挿んでゐる。例へば老近松の「夕霧河波の鳴門」の左

近屋敷で、夕霧伊左衛門が生みの子に遇ふところのやうな(悲哀と悦樂の分子が略々對立的に構想された場合にはその大團圓が悲しいものを「喜悲劇」悦しいものを「悲喜劇」と云つて區別したらよからうと思ふ)

きこせう 綺語抄 寫本 三卷

王朝末期の歌人藤原仲實の著。和歌に用ひられる綺語を、神・佛・人倫・官位・言詞・動物・植物等數十の部門に分けて説明を加へたもので五家髓の一つにかぞへられて居る(續群四六七、一七の上、六一―一二七・歌學文庫第二編に入る)

きこたい 擬古體

中古文に似せた文體。きこぶんが「擬古文學」を見よ。

きこは 擬古派

明治卅年前後に盛行した新體詩の一派で雅語を重んじ優美の着想を旨とした。鹽井雨江・武島羽衣・大町桂月・杉島山等は主なる擬古派詩人であつた。その體は一たいが女性的で、時には表現の不明なものもあつたところから、反擬古派の人々は之を「朦朧派」などといつたし、その派の人の多くは東大出身であつたから「赤門派」ともいつた(花紅葉)

きこぶんがく 擬古文學

きじぶん 記事文

静止せる事物について記述した文若くは事象の靜的描寫文を云ふ。例へば「我が手文庫」と題してその中の筆や墨や紙や文鎮や栗や知人名簿やその外ありとあるものをさながら寫した「寫生文」や「京都」と題して四方の山々や名所舊蹟や鴨・桂の流れを記した「叙景文」は皆この記事文の中に入る。「記事」は英のデスクライプシヨン・Descriptionに相當する。

きじんほふ 擬人法

「詩人は萬物に生命を附與する」といふ。この言葉そのまゝの修辭で「花笑ひ、鳥歌ふ」など人でないものの動作事象を人のやうに表現する法で、之によつて「花咲き鳥啼く」といふより以上にその情趣を活々と寫すことが出来る。

きせい 兒山紀成

一、四、二七

？―二五〇〇、？―天保一

伊勢の人、早川直記の四男、養はれて兒山可至の後を嗣ぐ。伴蒿蹊・有賀長收について國學を修めたが近世桂園派の歌人として香川景樹の高弟として有名な一人で、その著には影前百首・蝦夷日記一卷・松の落葉三卷・眞間紅葉見の記一卷等がある。

字義は古文に擬した作品の凡てに通ずる名のやうだが事實は中古文を本體としてその文體にまれて作つた文章作品を擬古文學といふ。つまり「中古以後に作られた中古文」又は「雅文」といふに當る。鎌倉・室町期の徒然草・増かゞみのやうなものから、徳川期の眞淵・宣長・縣門諸家・秋成などの文は皆これ、又この期の小説中雅文小説といふのも擬古文學である。明治に入つても樋口一葉の文や早期の國文學者の文章には大分擬古文がある。

きさだまる 紀定丸 二四二六―二五〇一、明

和三天保一二、七十六歳

江戸の人、通稱吉見儀助、蜀山人に學んで狂歌を能くした。

きしうもんあんたんと 宜秋門院丹後？

宜秋門院任子(後鳥羽天皇の中后、攝政藤原兼實女)に仕へた女房で、父藏人源頼行は源三位頼政の弟だから、二條院讃岐の從妹に當る。和歌を能くし千載(三首)新古今(九首)等にその詠が採られて居る。殊に次の秀詠によつて「こと浦の丹後」と稱せられた。

忘れじな難波の秋の夜半の空こと浦にすむ月は
見るとも

故郷を今は近しと誰か云ふまだ陸奥の白石の里
(桂園遺芳第一卷に井上通泰氏の早川再輔紀孝遺書にはその官歴も出て居る)

きせき 江島其磧 二三二七―二三九六、寛文

七―元文元、六、七十歳

俗稱市郎右衛門(先祖代々この名)京の京極通誓願寺門前の大佛餅屋に生れて、家の豊かなまゝ、に足を遊里の巷に入れ、身代を棒に振つてその代り作家たる素養を得、その頃盛行した西鶴の浮世草紙に習つて通俗小説を作り、書肆八文字舎自笑と連名で發刊して八文字舎本と稱し大に世に行はるゝやうになつてから、椽の下力持に不平を起し、別に江島屋と云ふ名で發行して睨み合つて居たが、双方その不利に氣付いて再び和合、自笑や其笑や瑞笑と連名や合作で出したが、本當を云ふと其磧の文才が一等すぐれてゐた。著書四十種中有名なのは傾城禁短氣・傾城曲三味線(帝文二八)・傾城色三味線(同三一)で、獨立中に出したものは正徳五年、丹波太郎物語三冊・野傾旅葛籠五冊・世間息子氣質五冊・同六年、當世名代男五冊・世間娘形氣五冊・享保二年、國姓爺明朝太平記六冊・同三年、役者不斷容氣・三ヶ津永代評判等だが、盲千人の讀者のこととして、こ

これは八文字合本より劣つてゐるとあまり歓迎しなかつた。彼の題材には役者物と傾城物と氣質物と時代物とがあるが、最も特色の出でゐるのは氣質物にある。

きせん 喜撰 ?

生歿未詳、傳記も亦不明。王朝初期の歌人で、六歌仙の一人といふことと、その歌に

我が庵はみやこのたつみしかぞすむよなうち山
と人はいふなり

の一首を詠んだことと、その歌學に「喜撰歌式」があることの外は何も所傳がない。その歌式も偽作だらうと云ふ。基泉或は親詮ともあて、又これは別人だとも云ひ、桓武天皇の御裔だとも云ひ、又あらずとも云ひ所論區々である。紀貫之が古今集序に「宇治山の僧きせんはことばかすかにしてはじめおはりたしかならずいはゞ秋の月をみるに曙の雲にあへるが如し。よめる歌多くきこえればかれこれをかよはしよくしらす」と評したのを見ると、あの延喜五年頃已にその詠が傳つてゐなかつたものと見える。外に二首玉葉や法橋顯昭の古今集序註に出でゐるのは皆他人の歌の混入である(今宇治の平等院の川向ひに喜撰ヶ嶽と云ふのがあつてその山上に平地が少し許ある、こゝがこの法師庵室

のあとだと云ふ。何にしてもこの一首だけで六歌仙の一人にかすまへられることは失當であるから、或は存命當時は量質共に優れた歌人であつたのが何かの事情の爲めに湮滅して傳はらないのではなからうか)

きせんかしき 喜撰歌式

「喜撰式」を見よ。

きせんしき 喜撰式(和歌作式、喜撰歌式)

歌學の中、一番古いものといひ傳へられ和歌の諸病類別等を記す。千載集の序や八雲御抄などに引かれて居る所から推して、或は本物の喜撰式もあつたのでないかと臆測さるゝが、今では偽作といふことになつてゐる。

きだら 鷲津教堂 二四八五—二五四二、文政

八一明治一五、五十八歳

尾張國丹羽邑の人、名は宣光、字は重光、通稱を九藏といふ。二十歳の時伊勢の猪飼敬所の許に行きて學び、ついで江戸昌平學に學び後に尾張藩に仕へ、明治二年大學少丞・同十五年司法權大書記官に進み同年逝く。その著に毅堂遺稿・親燈餘影などがある。

きだら 義堂 一九八五—二〇四八、正中二、正

一六、一嘉慶二、四、三、六十四歳

名は周信、號は義堂、又、空華とも云ふ。室町初期、京都五山中南禪寺の僧で、梵・漢の學に通じ、又畫をも能くした。その著に空華集二十卷あり、五山文學の華としててはやされて居る(上村觀光氏五山文學小史八三一—八五)

きたのさいしやう 北野宰相

すけまさ「菅原輔正」を見よ。

きちさう 中村吉藏(春雨) 明治一〇、五、

一五一

石見の人、三十二年早大哲學科並に英文科に入り、廣津柳浪の家に寄寓してその息和郎氏の家庭教師をしてゐた。三十三年大毎の懸賞に當選した「無花果」は家庭小説として有名なものだが、その後劇文學に志向して三十九年洋行の途に上り米・英・露の劇壇を視察して四十二年に歸朝、以來今日に至るまで藝地に劇道に精進して居る。新社會劇としての「牧師の家」は餘りにイブセン張の感じがするが、新史劇としての「井伊大老の死」は衆口一致その力作を認めて居る。その述作の主なるものに次の各種がある。新社會劇五篇・淀屋辰五郎・大鹽平八郎・錢屋五兵衛・中村吉藏現代劇選集・サロメ・人形の家・ブランド・希臘悲劇六曲・イ

ブセン評傳・劇場と劇評

きつじう 唐衣橋州 二四〇三—二四六二、寛

保三一享和二、六十歳

通稱小島源之助、田安侯の家臣で、四方赤良などと相並んで有名な狂歌作者で、漢詩・和歌をもよくした。その著「狂歌醉竹集」二卷、國刊一期新群一〇に入る。辨慶が早業めきて行年の尻馬にのる春は來にけり

かり行くやさく花の山人の山花見る人を花の栗

に

ゆく春を暫時とよめてれむらせよはたごやもな

き海棠の花

かゝる露玉とあざむく君子あれば又質に置く連

歌師もあり

ふみこんで跡がつかぬぞおもしろき炬燵ながら

の雪のあけぼの

きてんだう 紀傳道

平安朝大學四科(明經、明法、算)の一つで、専ら歴史を修め當時殊に重んぜられた。後、菅原・大江兩氏が代々博士に任ぜられた(古類文學部二、八三八—八三九)

きとう 高井几董 ? 一四四九、? 一寛

政元、四十餘歳

京都生れで、大阪に住し、旅に伊丹で客死した。號は春夜樓、その父几圭は宗阿の弟子で蕪村とも親しかつた關係から蕪村に弟子入して俳才他に擡きんで、遂に選ばれて夜半亭(蕪村の家號)を襲いだ。師去つて六年その身もあとを追うて亡くなつた。蕪村の句には及びもつかぬが同じ天明俳人の白雄・曉臺・閑更などに比べると確かに一段上であつた。その俳風は、一、觀察の細微・二、高雅な着想(決して卑俗に墮するやうなことはなかつた)・三、奇警な着想・四、句にたるみなきこと・五、推敲を重んじ苦吟少作の方であつたと。などで、その句集には自著の井華集や高濱虚子氏の几董句集などがある。

門口に風呂たく春の泊りかな

還俗のあたま痒しや暮の春

春用や簀の下なる懸衣

長日を羽織着ながら寝たりけり

蠅打ていさ、か汚す團扇かな

冬木立月骨髄に入る夜かな

鳥羽殿へ御歌使や夜半の雪

きどうさんしのはは 儀同三司母(高内

侍) ? 一六五六、? 長徳二

名は貴子、高階成忠の女で宮中に奏仕して掌侍に任ぜられてゐた時、道隆その才色をめでて北の方に迎へ伊周・隆家・中宮定子等を産んだ。伊周が准大臣となつた時、准三司(太政大臣・左右大臣に准する意)と稱した。たのでその母即ち貴子を「儀同三司の母」と稱した。拾遺・後拾遺・新古今等にその歌が出、枕草子の所々にその生活が出てゐる。

きなごん 紀納言

はせを「紀長谷雄」を見よ。

きのしたとうきちらう 木下藤吉郎

秀吉のことを書いたものは澤山あつて廣文庫第十六冊(八九一―九三九)に一通り出て居るが尙左記各種が「草履取の咄」に關係がある。

續史籍 紀伊國物語上ノ三一・史籍 集覽祖父物語七

明治以後のものでは

史、一三ノ一二一太閤素生記、同一三〇豊太閤大阪城中壁書

野村書店、繪本太閤記(一冊本のと二冊本のと二種)

上田屋 繪本太閤記

今古堂 繪本太閤記

東崖堂 渡井氏 新繪本太閤記

碧瑠璃園 豊臣秀吉

金松堂 新秀吉一代記

博文館 太華作 少年文學第十七篇豊臣秀吉

きのないし 紀内侍 ?

貫之の女、庭に立派な紅梅があるのを時のみかど(村上)の仰せとて掘つて持つて行かうとした時、「これむすびてよ」とて結へた歌

勲なればいとまかしこし鶯の宿はととはゞいか

がこたへむ

これより「紅梅の内侍」と呼ばれたと云ふ(大鏡・古今和歌六帖)

きぶんげき 氣分劇

「象徴劇」に同じ。その項をよ。

きべうし 黄表紙

くさざうし「草雙紙」の項参照。

きみじ 明誠堂喜三二 三三九五―二四七三、

享保二〇―文化一〇、五、二〇、七十九歳

近世の戯作者、且つ狂歌作者で、狂歌名を手柄所持、狂詩名を尊張齡と云ひ、その他時宜に應じて淺黄裏成

きむみち 正親町公通 二二二二―二二九三、

承應二―享保一八、八十一歳

従一位大納言といふ公卿の身を以て狂歌狂文に興味を持ち、その方で名高い人。その狂歌文集を「雅筵醉狂集」といふ。

きもん 義門 二四五四―二五〇三、寛政六―天

保一四、五十歳

若狭國小濱なる一向宗妙玄寺の僧で、近世國語學者として有益の著を遺した人である。始め和歌を好んだが

(當時淺黄の裏地をつけるのは田舎武士の野暮ないでたちとせられた)龜山人・道蛇樓・鹿阿記・虎耳嶋・月成・天壽等を名のつた。本名は平澤常富、通稱は平格、羽州秋田侯の家臣で、江戸下谷三味線堀の藩邸に居た。その傑作は黄表紙の文武二道萬石通で、鼻峯高慢男・長生見度記・珍獻立會我等亦相當の出来と云はれてゐる。其地三十餘種あり、又狂歌の方には手柄所持家集二巻がある。辭世二首

つゆの身の瀬となりぬれば飛鳥川あすより淵と

かはるべきかは

死にたうて死ぬにはあらねどおとしには御不足

なしと人やいふらん

なしたと人やいふらん

なしたと人やいふらん

なしたと人やいふらん

なしたと人やいふらん

なしたと人やいふらん

なしたと人やいふらん

なしたと人やいふらん

なしたと人やいふらん

なしたと人やいふらん

なしたと人やいふらん

なしたと人やいふらん

なしたと人やいふらん

なしたと人やいふらん

なしたと人やいふらん

なしたと人やいふらん

なしたと人やいふらん

なしたと人やいふらん

なしたと人やいふらん

なしたと人やいふらん

なしたと人やいふらん

なしたと人やいふらん

なしたと人やいふらん

なしたと人やいふらん

なしたと人やいふらん

後、本居大平の門に入つて活語の法を研究し、それから段々國語學に興味を覺えてその方に深入した。その著には次の十數書がある。山口栞・奈萬之奈なまなしな（撥韻假字考）・活語指南・活語雜話・於乎輕重義・和語說略圖・玉の緒線分・てにをば友鏡さしでの磯・友鏡底の影・磯の洲崎。

きやうあん 堀杏庵 二二四五—二三〇二 天

正一三—寛永一九 五十八歳

近江の人、名は正意、字は敬夫、藤原惺窩の門人中羅山と並び稱せられる大家で、一時廣島侯の儒醫として仕へたが、後、徳川幕府の命によつて江戸へ來て弘文館編輯の要務に執筆した。杏庵文集・新定武家系圖傳纂等の著がある。

きやうらんしふ 狂雲集 一卷

いつきう「一休」を見よ。

きやうか 狂歌

短歌と同じ五、七、五、七、七の音律を以て滑稽の情を歌つたもの。

例 三度たくめしきへこはしやはらかし思ふまゝに

はならぬ世の中

萬葉の戯歌ざれうた、催馬樂の諷刺歌（近衛の御門にこじおと

いつ、髪の毛のなければさ様の古今集以後の俳諧歌錄倉時代の職人歌合・落首、室町時代の狂言の着想と發展の脈を曳いて徳川期に入り、前半は上方鯛屋貞柳半井ト養等によりて勃興し、後半、安永・天明に入り、太平樂を謳ふ江戸市民の氣分や、秀句を好む江戸氣質と合體して、こゝに狂歌の全盛期を醸し、唐衣橋州・四方赤良（太田南畝）大屋裏佳・鹿都女眞顔・宿屋飯盛（石川雅望）等が出て面白をかしい名作を澤山よんだ。

狂歌の唯一の技巧は秀句で「はる氷ありうつ波もあり」「せきはもとよりつよき谷風」「山吹のはな紙ばかり金入に」と様に一首の中、秀句のないものは殆ど無い。併し全くの無教養ではよめない。これ等歌人は皆一通り短歌の素養のあることを狂名書名の上にも洒落の上にも表してゐる（智慧内侍、今古夷曲集「山吹のはな紙ばかり紙入にみのひとつだになきぞ悲しき」など）

（國刊一期・新群七・野崎左文江戸狂歌書目一・古類文學部一、八一—九四二）

きやうく 狂句

「川柳」を見よ。

きやうくわゑん 杏花園

なんぼ「太田南畝」を見よ。

きやうくわ 泉鏡花 明治六—

金澤の人、父は金屬彫刻の名匠、母は加賀養生流の宗家の娘、彼はこの間に産まれて藝術的天分豊かに、加ふるに上京後尾崎紅葉に親炙して益々その獨特の才を發揮した。義血俠血・豫備兵・夜行巡査、これ等はその出世作ではあるがまだ彼の獨自境のものではない。辰己巷談・湯島詣・照葉狂言・風流線・高野望・白鷺草・迷宮・龍峯集となるさ眞に彼ならではさ思はれる轟惑的な筆致で神祕・幻怪・妖艶幽雅の世界を展開して居る。世は自然主義となり人道主義となり新技巧主義となり階段文藝提唱と變化々々する間に、彼は獨超然として今に創作趣味の旺盛なものである。蓋し彼の作品の愛讀者は可なりに多く殆ど鏡花宗といつた宗教に近いものがある（大正十四年五月一日、新小説臨時増、天才泉鏡花・鏡花選集五冊、春陽堂・鏡花全集十五冊、春陽堂）

きやうげん 狂言

普通の芝居を所作事に對して「狂言」を云ひ、狂言の臺詞によつて舞臺で演演することをも「狂言」と云ふから、同じ「狂言」といふ語にいろ／＼あるが、こゝでは専ら狂言に演ぜらるゝ臺詞としての狂言のことを

いふ。これは我邦喜劇の古典的なもので、以前行はれた猿樂を眞面目な幽玄な史劇的な方面に展ばして滑稽としたのに對して、滑稽な輕快な社會劇的（世話物）な方面に展ばしたものがこの狂言である。全篇對話と獨白とからなり、凡て當時の口語をそのまゝ、まるだしにして滑稽の想を盛つてある。現存する狂言は約三百篇皮肉な諷刺（萩大名）・矛盾のなかしみ（胸突）・無邪氣な牽強附會（醉薑）・誇大のなかしみ（膏藥煉）・日常の小失敗（鱸庖丁・狐塚・瓜盗人）・とり／＼の趣向があり、人物も神鬼閻魔（神鳴・鬼の槌・首引）・片輪（三人片輪・聲座頭・井欄）・僧侶（水汲・新發意・仁王・地藏堂）・山伏（柿山伏蟹山伏）・婢・夫婦（雞舞・算勘舞・金岡）・盗人（子盗人・連歌盗人・瓜盗人）・大名（鬼争・萩大名・墨ねり・靱猿・鼻取相撲・栗焼）等各種階級に互つて居る。

狂言は謠曲と相俟つて室町文學の中心を爲すもので、殊に我邦には珍しい滑稽文學の先蹤でもあり、言文一致の前驅でもあり、多くは短篇もので、舞臺に演じて冗漫の嫌なく「やるまいぞん」と争鬪で終るものを多くして、引幕なき演技の結末を能よりも自然にした點などは特筆すべき點であらう。

狂言はその質演上、和泉・大藏・鶯の三流に分れ、和泉流が一番廣く行はれ、現存狂言の大部分はこの流の臺本だが、文詞は大藏流の方がすぐれて居る(袖名著文庫七・芳賀矢一氏校訂狂言廿番・幸田露伴氏校訂、狂言全集三冊・國民文庫刊行會本狂言全集・校國系第三卷)

きやうげん 狂言

舊歌舞伎を總稱して「狂言」といふが、その時には所作事を抜きにしたものを指す(通常田舎芝居の口上云ひが「さして明晩相つとめます狂言の藝題」などいふそれもこの意味からだ)

きやうごは 京極派

藤原定家の孫爲教を始めとしてその子孫一味の歌派を云ふ。爲教の兄爲氏が定家の歌論をそのまゝに保守して二條派の祖となつたのに對して、爲兼は進歩的積極的に構想の新奇格調の放膽を悦び、和歌の革新を叫んだ。これがこの派の標語のやうになつた。二條派は定家の嫡系のこと、て相傳稀親の書も多く門業も廣まつたので、前後を通じて優勢であつたが、和歌の史的開展から見るなら生長點は寧ろこの派にあつた。

きやうざん 山東京山 二四二七—二五一八、

明和四—安政五、九、二四、九十二歳

と狂歌の才とを併せ有する人でなくては出来ない滑稽文學であつて、徳川中期以來狂歌と共に流行し寢惚先生(太田南畝)・朋脉(畠中觀齋)など殊に名高い。

ぎやうそん 行尊 一七一七—一七九五、天喜

五—長承四、七十九歳

一本、一七一五—一七八五、天喜三—保延元、八十歳)

關白藤原基平の子、十二歳の時大和の園城寺で出家し後身をやつして諸國を遍歴し、吉野の山に入つては、もとにもあはれと思へ山櫻」と詠じ、三井圓満院にも錫をとめてたが鳥羽天皇の時、大僧正天臺の座主に任ぜられた。咏歌に長じてその歌は金葉集以下代々の勅撰集に採られ、別に「行尊大僧正集」がある。

きやうぢよもの 狂女物

諸曲中 狂女を主人公にしたものを云ふ。例「隅田川」(尙「謠曲」を見よ)

きやうてん 山東京傳 (山東庵京傳)

二四二一—二四七六、寶曆一一、八、一五—文化一三、九、七、五十六歳

實名岩瀬百樹、字鐵梅、通稱相四郎(後、利一郎)別號鐵筆堂・醉々軒・方半居士・轡山・涼仙、かの有名な京傳の弟である。篤實謹厚の人に似ず不幸にして四度も身上に異動があつた。始め外叔母鶴飼氏に養はれ、次いで佐野東州の入婿となり、どちらも故ありて離縁し、獨立して一家を立て文化十三年兄の死後山東庵を嗣いだ。幼時より讀書の趣味あり、漢學の素養もあり繪も巧みなり、性格學風は寧ろ歴史家・考證家たるに適してゐたかの觀がある。その著歴世女裝考は廿五年ばかりも費して博引廣證今に故實家の好資となつてゐる。けれども當時の時勢と兄の影響とを彼を驅つて戯作者たらしめ、生涯作るところの草双紙二百種に近く兄の輕妙洒落なるには及ばずと雖も卑陋淫猥を避けて専ら婦女童幼の教訓を旨として何れも相當に愛讀せられた。殊に有名なのは、文政二年、隅田春藝者容氣、二編・天保七年—十一年、昔模樣娘評判記、六編・天保十年—十三年、大晦日曙草紙、八編・弘化元年—嘉永六年、教訓乳母草紙、十編(續帝文一七京山全集)

きやうし 狂詩

「狂體の漢詩」の意で、滑稽諧謔を旨とし生硬な漢字に卑俗な訓をつけ而かも韻律を合せたもの。漢學の才

近世小説の大家、西に井原西鶴あり、東に京傳・馬琴ありとも謂ふべく、この三人を以て代表作家とするには誰しも異論はなからう。

京傳本姓は灰田、後岩瀬と改む。名は田歳、字は伯慶まだ色々の稱へはあるが芝愛宕山の東に住んだので山東庵、京橋銀座二丁目に住んだので京屋傳藏と云ふ通稱が出来、それをつめて、京傳と云つて「山東庵京傳」が一番よく通つてゐる。商家に生れて若い時から遊蕩に身を持ち崩し、天明十八大通の隨一たる文魚に愛せられて、始終吉原に入り浸つて居つた。蓋し彼は肉の歡樂よりは寧ろ遊里情調の耽溺家であつたので彼が後來の作品はこの間に胚胎したものである。彼の性格は機智に富み、滑稽に巧みで構想の才があつて、經濟にくわしく、商才にも長けてゐたが又、狹量で疑ぐり深くて、その爲め後輩の馬琴とも不和になつた。始め主として畫を以て渡世とし、北尾政演の畫名は錦繪ではもてはやされたものだ。天明二年頃から當時の黃表紙作者の擧にならひ「御存知商賣物」を手始めに天明五年江戸生艶氣棒燒・同六年江戸春一夜千兩・天明七年三筋緯客のき上田・寛政元年碑文谷利生四竹節・寛政二年玉磨青砥錢(歌麿畫)・同心學早染草(殊に傑作)・同京傳

浮世醉醒・寛政三年世上洒落見繪圖・寛正三年人間一生胸算用・同四年梁山一奇談等を書き、その奇想と諧謔は挿畫の巧匠と相俟つて、遂に第一流の班に入るやうになつた。

之と相前後して天明六年頃からは洒落本に筆を染めたが作者と題材と最もよろしきを得て、この方では更に黄表紙以上に早く名を爲した(思ふに洒落本こそは彼の畠と謂つてよろしからう)天明六年客衆肝膽鏡・同七年通言總籙・寛政二年傾城買四十八手・同三年仕懸文庫・同青樓畫の世界錦の裏・同娼妓絹籠、など何れも歓迎せられたが折柄幕府の洒落本取締のお布令が厳しく彼は手鎖五十日の刑に處せられた。

之によつて一時洒落本も書かず書かず織かに教訓物の黄表紙を出して文名頓に聞えずなつたが、三十八歳の頃から主として讀本に力を入れた。彼の讀本には二十九歳の時の孔子一代記もあるが、本當の意味に於ての讀本は三十八歳(寛政十年)の忠臣水滸傳からだといはれてゐる。

翌三十九歳には同次篇を出し、享和三年安積沼・文化元年優曇華物語・同二年櫻姫全傳曙草紙・同昔物語稻妻表紙・同善知鳥安方忠義傳・文化三年梅花氷裂・文化

五年本朝醉菩提(稻妻表紙の後編で傑作)同浮牡丹全傳などで、この方でも名を成したがその頃已に馬琴が斯壇の覇者となつて居たので、洒落本程にはもてはやされず、文政十年に書いた雙蝶記の如きは竹田出雲の雙蝶廓日記から雛案したもので、大變な意氣込で書いたものだが世間ではさほど受けなかつた。彼は今や得意の洒落本は幕府の禁あり、第二次の讀本には強敵馬琴あり、と云ふ創作の難關に行き詰まり、やうやく隨筆に興味を覺えて、文化元年近世奇跡考・同十年骨董集を書いた(或は當時隨筆は學者の看板だから、彼は戯作者に箔をつける爲めにこんなものを書いた)と云ふ説もある)雙蝶記以後讀本に筆を絶ち、四年にして文化十三年九月七日弟京山の宅へ行つて一杯よばれての歸る

さ發病してその夜身まかつた。その他彼の逸話としては商機に富んだこと、煙草入・煙管・妙藥讀書丸・珍菓落雁おこしなどで儲けたこと、珠算は拙いが暗算に達者であつたこと、近所の利介の商品に天鉄羅と名をつけて大流行させたこと、前後妻玉の井百合とも遊女の出なるに似ず貞淑であつたことなどが傳へられてゐる。彼一代の述作二百五十種以上もあつて、生涯を通じて道樂もすれば金もためれば本も書

けば書も書き、空想と現實とのうまく契合した一生を送つた(帝文一五京傳傑作集・續帝文三四黄表紙百種)

ぎやうねんほふし 行念法師

歌人である。新勅撰集に

梅が香のたが里わかす匂ふ夜はぬし定らぬ春風ぞ吹く

きやうぶん 狂文

狂歌を散文に引き延ばしたやうなもので、狂歌・狂詩・川柳などの發達と相前後して徳川中期以後に發生した風來山人の放屁論・根無草・風流志道軒傳・六々部集等は同じ狂文といつても諷刺の手痛いものであるが、四方赤良の四方のあか・四方の留糟・手柄岡持の我が面白、宿屋飯盛のあづまなまり・芍藥亭長根の文集などは純粹の狂文と謂つてよろしからう。

きやうらくしゆき 享樂主義 (耽美主義)

明治の末に從來の自然主義の反動として起つた感情解放の文藝。永井荷風の歡樂・監獄署の裏・祝盃・牡丹の宴・新歸朝者日記・隅田川、谷崎潤一郎の刺青・少年・秘密・颯風・惡魔・捨てられるまで・徳太郎・神童・お艶殺し・お才と己之介等はその代表作である。尙かの情話文學もこの系統に屬する。

きやくしよく 脚色

或る素材を一篇の戯曲なり小説なりに組み立てる手法過程を總稱して脚色といふ。例へば赤穂義士・復讐の事實は一種の素材で之を脚色して「假名手本忠臣蔵」が出来上がる。つまり脚色とは「素材を藝術化する爲めの構想」を謂ふのだが、それが文學に限られ殊に文學の中の戯曲小説に限られ殊に戯曲に多く用ひられるのである

きやくほん 脚本

廣義にいへば劇の臺詞を脚本といふのだから、謡曲は能の脚本、淨瑠璃は操人形芝居の脚本だが、普通我國で脚本と謂ふのは歌舞伎劇の臺詞並に明治以後に於ける新興劇の臺詞をいふ。近松の「傾城佛の原」などが早いもので、寛政の頃に至つて歌舞伎の盛行と共に多くの傑作が出、鶴屋南北・津打治兵衛等の名家が出、幕末から明治にかけては河竹黙阿彌が出て多くの佳作を書いた(大南北全集・默阿彌全集・續帝一六、三九・脚本傑作集・文藝叢書第九・演劇脚本集・高野辰之、黒木勘藏二氏校訂元緣歌舞伎傑作集二冊)

きやうまくら 伽羅枕

江戸麹町牛藏門外に九千九百石取りの旗下とて人も知る水野石見守、京都在勤中祇園の東井筒屋の抱へ「小

鶴」と云ふを愛して「おせん」と云ふ一女を産ませた。此阿仙が此の作の女主人公である。母は産後間なく死に去、母の姉分右龍と云ふが今西岡屋重次郎に根曳かれ更切望して借金に貰ひ受けた。けれども阿仙は兎角重次郎夫婦を實の父母と思ひ込んで里心が増長して鴨家には馴染まない。それを馴染ましたいばかりに鳴某は彼女に告ぐるに彼女の眞の素性を以てした。其内に重次郎病死、葬式の紛れに件の書類を見つけて成程父は名だたる旗指折れば六十そこ〜。まだ御存命と思へば明けても暮れても江戸なつかしや……されども此方義理ある母の又もや貧に餘儀なき願ひ、此時おせん十二歳の五月鳥原の「わちがひ」といへる「おきや」に賣られ身代聞けば二十七歳まで十五年を金十五兩、實生の櫻は無代にて贈る者もあれど花の一指に指一本は名木になりての相場此處なるべし

(一〇五)

十三歳の七月十一日、蛇の吉兆に蛇塚を祭り、十四歳の霜月九日に里花太夫と名乗つて梳櫛客は大阪隨一の持○長者鳥水の隠居六十歳餘りの圓頂光るの君に受けられて、湯たんぼの代りとはばかり夜毎のお伽、間もなくかして逢ひたいとの仰せ……幸廿一日は上野お佛参が例だから其時よそながら對面せられよと、お花は聞いてがっかりしたが、件の廿一日には首尾よく姉君に對面した。其翌日には使が來て反物五六匹に目録が添へてある。姉上の御芳志と思へばもとより嬉しいが勝氣のお花「何の人同じ裸で生まれて出てあふにも籠の内と外人に恵みを受けむより人を恵む身にならうよ」と。源七と云ふ女衞の一寸知れるを幸、世話して貰つて龜和泉と云ふ樓に奉公三年の年季で八十兩、聽て「佐太夫」と名乗つて歸り咲の道中美々しく四隣を賑した。「姉は大名の奥方、我は踏出しの一步を過まつた爲に女の大事の貞操を商ふとは云へ、それならそれで随分と世間の男を惹きつけ一世の太夫として鳴らしてやらう」と此意氣地の爲には他人の嫌と云ふ勤めをも辭さない。初夜のお客は疣大盡として此は大阪の袋店の旦那、次に馴染んだは田島徳左衛門將軍直參鎗術の指南役、故あつて水戸家に仕へ、宗兵衛と名のつて將軍をつけられらふ不敵もの（此戀は佐太夫一世の中眞面目なるもの）次は土佐藩の美少年小鈴木半之丞、次は高村玄養とて有徳の茶坊主、又此度は阿部伊勢守家來高坂時雄（此戀は随分芝居じみた魂膽あり）又々次は奥用人の重

ボツキリと隠居の往生。親戚から申出でてお花（其時の名）は離縁の身となつたが、どうせ濡れ序一生を泥で泳いでヤンヤと騒がせてやらうとの野心も手傳つて「お母さんもう一度稼ぎませう」。折柄木屋町の壽美と云ふが妾奉公の口を勤めてつひそれに移された。旦那と云ふは淺野家の前田新右衛門其人よりは土地なつかしく遙々と江戸へ下れば初老に近い本妻の慥慥、之に手を焼いて物の二月とたたぬ霜月十二日表面離縁と云ふことにして實は箕輪に小家を借り律義らしい老女附添で「お花」「アイ旦那」。然るに此新右衛門當時和蘭陀舶來の色硝子俗に紫水晶と云ふを見て一種の發明氣を起し「此ならおれもして見せる」が抑々で凝つて凝つて其揚句にはつひ身代をフイ。六十二歳を一期に其身も遂に彼の世の人（本妻は彼より前に病死）身分に隔たりありとて親子に相違なければとてお花一日いかめしい門を潜つて水野にお目通を申し出た。京は下加茂中澤十兵衛の娘鶴」と名のつて、（十兵衛は小鶴の實父お花の祖父で伊丹歴々の酒屋）老臣取次いで氣の毒げに「大殿には最早十七年前にお逝去、當主は其若君で今一人姫君があつて柳生某守に御輿入其方がいつもそなたのお噂をし女兄弟の少いこと故何と

役たる新堀左内と其養子左源太とが左太夫一人を親子の鞘當て、二十四歳の冬には甲府八日町依屋の若主人幸助と腕は愈々凄く艶名果して一世を轟かした。「再び男は持まじきぞと、二十八歳より今年六十二歳まで、清淨無垢の寡居、今は知方の方に寄食て薪水の勞に奔走り、車に乗らず魚を食はず、絹物着ず、遊散に出ず、かれて谷中長安寺に一基の石塔を建て三十四名の遊客の亡魂を祀りけるに、月々の墓參を老後の勤務にして、其昔は千兩にも唾を吐けざりし身が二錢三錢を浪費せず、之を香花の料に回向を賑しぬ」二五九

(紅葉全集第一卷八五―二五九・後藤宙外氏唾玉集)

きょうそんざつし 共存雑誌

小野梓を中心とする「共存同業」といふ團體の言論發表機關として明六雜誌と相前後して發刊された雑誌で「歐米の制度文物を研究紹介すること」がその主眼とする所であつた。外山正一・菊池大麓・赤松連城・大内青巒・馬場辰猪・鳩山和夫・矢野文雄・島田三郎などいふ諸名士が執筆して、毎月二回の講演會と相まつて一時世に喧傳せられ、明六雜誌につぐ有益な雑誌とせられた。

きよかげ 村松清蔭

明治の歌人、その著に「明治勅題歌集」がある。

きよがん 中村魚眼 ? 寛政頃

俗稱を中村屋某といふ。大阪新地に茶店を開いて渡世し、傍ら淨瑠璃を作つた。他と合作ではあるが、加賀見山廓寫本・八陣守護城・蝶花形名歌鳥臺などは皆名高い。

きよきみ 菅原清公 一四三〇—一五〇二、寶龜六—承和九、七十三歳

古人の子、王朝初期の學者。桓武・平城・嵯峨・淳和・仁明の歴朝に仕へ、大學少允・大學助教などに任ぜられた。その著に新定酒式一卷があるといふが散佚して傳はらない。詩は凌雲・文華秀麗・經國の各集に出て居る。

きよくめい 太田玉茗 明治四、五—

埼玉縣北埼玉郡忍町の人、東京專門學校文學部卒業。本姓三村玄綱、文學界同人として詩を能くし又小説をも作り(少女・幻影・蕙の花束等十餘篇)脚本「彼刹羅」の作もあるが、後、建福寺の住職となつた。

きよくえうしふ 玉葉集 二十卷

花園天皇の正和二年(一九七三)八月藤原爲兼が伏見院の勅を奉じて撰んだもの。院御自身も和歌に長ぜさせ

られたが當時は二條・京極・冷泉三派の争ひはげしくう

つかり誰になりと勅を下すわけにもゆかず、さりとして

一代に一つの集も得出さではと御惱みもあつて

わが世にはあつめぬ和歌の漬千ごりむなしき名

をや跡にのこさむ

など御速懐になつたのを爲兼(京極派)傳へ承りていと

も畏きことに思ひ自ら申し請うて之が撰にあたり、萬

葉より以來の秀味をあつめて玉葉と名づけた(増鏡に

この記事あり)かくて蒐集するもの二千八百三首、廿

一代集中最大の數に達した。

爲兼の方針では父祖三代の手ぶりに拘泥しないで旨と

新しく、骨ある味を拾つたが、反對派では拙歌の集り

だと罵つた。ともかくもこの集の代表的な歌は次のや

うなものである。

榊子内親王家庚申の歌合に若葉を 出羽

雪まぜにむら／＼見えし若草のなべてみどり

なりにける哉 九條右大臣

庭春雨といふことを つく／＼と春日のどけきにはたづみ雨の數見る

くれぞさびしき 前大納言爲兼

春歌の中に

おもひそめき四の時には花の春春の中にも明ぼ

の、そら 院御製

こぼれおつる池のはちすの白露はうき葉の玉とま

たなりにけり

百首御歌の中に蓮を

きよくさう 廣瀬旭莊 二四六七—二五二三、

文化四—文久三、五十七歳

豊後の詩家淡窓の弟で又漢詩人として有名な人。名は

謙、字は吉甫、旭莊又は梅暎と號し、龜井昱の門に入

つた。宜編買家詩編・高青邱詩鈔・旭莊小稿等の著がある。

きよくさん 山名玉山 ?

徳川期戸田茂睡と親交あり茂睡に「つつ」の傳授をした

といふ。又清新な歌を詠んだ。

雨かすみ吹くとしもなき風のゆふべ花しめやか

にかほりみちつゝ

むら雀さわぐ夕の竹垣にひとりしづけき鶯のこ

きよくすゐ (菅沼曲翠、曲水) ? —二三八

〇 ? —享保五、七、二〇

キの部

一一三

我某奸惡にして人民塗炭の苦に陥れるを憤慨し、勅に

謀つて之を殺し、自分も切腹した。その子内記は死を

賜はり、その妻は泉州に走つて落飾「破鏡尼」と云つて

自からその能くする和歌によつて餘生を慰め生きた。

きよし 高濱虚子 七、二、二〇—

伊豫松山の人、松山中學校卒業後、三高や二高に入

つたが、遂に同郷の先輩正岡子規の家に寄食して俳友河

東碧梧桐と共に俳句に精進し、實名「清」をそのまゝ、「虚

子」と號した。三十一年九月極堂が俳誌「ホトトギス」

を東京に移すと共に彼は自らその發行を引受け、店主

と番頭と編輯員と句作家とを一手にやつてのけて、俳

書堂と家號し廣く一般の俳書をも發刊した。明治新派

の句の普及については彼のかうした出版上の功績をも

多とすべきであらう。ついで道灌山上師の子規から忠

告されて眞剣に俳道に盡さうとの決心を固め、子規歿

後碧梧桐と共にその後繼となつたが、碧梧桐はその後

新傾向に走り、本當の意味に於て日本派俳句の正系は

彼にあると謂つて可い。その後ホトトギス寄書家の一

人夏目漱石が小説壇の名聲噴々たるにつれ、彼も年來

の搔痒心がムラ／＼と搔頭して風流儀法・斑鳩物語・大

内旅館等を書き、つゞいて自己の内面生活の自叙傳と

も謂ふべき俳諧師・續俳諧師を出すに至つて小説作家としての名も高くなつた。彼が筆致は寫生文から出發しその着想も精密な描寫が特徴で又俳味・輕快味・洒脱味がこもつてゐる（彼が俳壇から小説壇に飛躍したことは一寸元祿の西鶴に似てゐるが周圍の事情や内心の推移に於ては大なる差違がある）尙、鷄頭・朝鮮はその代表作と見てよろしからうし、脚本「お七」をも書き、能の名人でもあり、謠曲「鐵門」の新作もある。

きよすけ 藤原清輔？——一八三七、？——治承元

王期末期の歌人にして且つ歌學者、二條・六條・高倉の朝に仕へて、地位は正四位皇太后宮大進兼長門守、父顯輔、祖父顯季何れも有名な歌人である。曾て二條帝の勅を奉じて續詞華和歌集を撰び、撰成つて奏覽に納れようとする間に天皇崩御のために沙汰やみとなつた。その著多くは歌學に係り家集文法諸學に係るもの之につぐ。奥儀抄四卷（群書一覽卷五、五家髓腦の一）・袋草子四卷（續類四六〇、一六、下、七六一—八一八）・同遣篇一卷（續類四六一、一六ノ下八一—八六四）・和歌雜談抄二卷（群書一覽卷五二六丁にその抜書がある）・和歌初學抄四卷・和歌一字抄（丹叢一四七、一四八）

歌は俊成・西行と並び稱せられ、千載集に十餘首新古今集に十餘首入りその他新勅撰以後代々の勅撰集に採られてゐる。家集を清輔朝臣集三卷（群類二五六、九、八四二—八五七 續國七六六—七八〇）と云ふ。鹽釜の浦吹く風に霧はれて八十鳥かけて出づる月影
冬枯の森の木の葉の霜の上に落ちたる月の影のさやけさ
霧の間に明石の瀬戸に入りにけり浦の松風音ばかりして
更けにける我世の程ぞ哀なる傾く月は又も出でなむ

除夜
はかなくて今年もけふに成りにけり哀につもる
我よはひかな
などはその秀味である。

撰集には續詞華和歌集廿卷（群類一四八、七、六〇—一一三）・今撰集一卷（群類一五八、七、四二—四三三）
歌合や、歌合判には仁安二年經盛朝臣家歌合判・嘉應二年實國卿家歌合判・安元元年右大臣（兼實）家歌合判・永曆元年清輔朝臣歌合一卷。

尙訓詁には「古今歌註」をも著してゐる。

きよせ 季寄
き「季」を見よ。

きよそん 海保漁村 二四五八—二五三六、寛政一〇—慶應二、八、六十九歳

南總武射郡出身の名儒、名は元備、字は郷老、別名紀之、通稱章之助、別號傳經廬。幼時父から句讀を教はり十餘歳にして江戸に遊學したが、その喧囂を厭ひ再び歸郷専ら聖經に親しみ、十年ばかりして復々江戸に出て柳河劉や太田錦城に學び後、幕府の醫養直舎の儒官となつた。明治の鴻儒島田重禮（今の一高教授島田鈞一氏の嚴父）などはその門から出た。その著には周易古占法・傳經廬文集・經籍源流考・漁村文話等がある。

きよのり 小中村清矩 二四八二—二五五五、文政五—明治二八、七十四歳

紀姓原田氏、陽春廬と號し、三河碧海郡西端村に生れたが、兩親は早く物故して後母の小中村家を嗣いだ。本居内遠・伊能願則について國家を修め、造詣頗る深いものがあつた。

明治二年、大學中助教・四年神祇大史・十五年大學教授ついで學士會院に加員せられ、文學博士の學位を授け

られ、廿三年貴族院議員に勅選せられた。その著には歌舞音樂略史・令義解疏證・公麻備考・類從國史續貂・國史學の乘・日本法制沿革史・陽春廬雜考などがある。

きよはく 田波御白？——大正二

帝大卒業後帝國文學に短歌を寄せて居たが、惜しむらくは習作時代の中に肺を病んで湘南に客死した。
親みぬ疎みぬやがて新しき人にしたしむつゝましげにも
はなやかにいと速に滅びけり平家の果に似たる
我戀

きよはくしふ 學白集
木下長嘯子の歌文集「長嘯子」を見よ。

きよひと 紀清人（淨人とも）？——一四一三、？——天平勝寶五、七

奈良朝の國史家にして歌人、續日本紀から年譜を拾つて見ると、
和銅七年二月勅を受けて國史撰修のことに與かる。靈龜元年正月從五位下・同七月穀百斛を賜ふ。養老元年七月穀百斛を賜ふ。同五月正月東宮に仕ふることとなる。同月絶十五疋、絲十五綯、布三十端、鐵二十口を賜はる。同七年正月從五位上・天平四年十月右京亮・同十三年七

月治部ノ大輔兼文章博士・同十五年五月正五位下・同十六年二月天皇五月難波の宮へ行幸につき平城宮の留守に任ず・同十一月從四位下・同十八年五月武藏守に任ず・勝寶五年七月卒。歌は萬葉集十七卷にある

(天平十八年正月雪見の宴に侍つた時)

天の下すでおほひてふる雪の光を見ればたふとくもあるか

きよふら 相馬御風 明治一六、七、一〇

新潟縣西頸城郡絲魚川町の人、名は昌治。三十九年早大文科を卒業、ついで母校に教鞭をとり、早稻田文學に筆をり、評論家として特に有名で「黎明期の文學」は自然主義を鼓吹した曉鐘の一つと謂つてよからう。又長詩の方では口語詩を唱へ「瘦犬」その他に於てその實例をも示し、抱月去つて後は中村星湖と共に早稻田文學の牛耳を執つてゐたが、家事の都合で大正五年郷里に退き閑餘、良寛和尚紹介につとめ、又隨筆短歌を中央の諸雜誌によせて居る。睡蓮(歌集)・御風詩集・自我生活と文學・凡人淨土・毒藥の壺・第一步・良寛和尚詩歌集・良寛和尚遺墨集等の著並に翻譯數篇がある。

きよまさ 藤原清正 ?—一六一八、?—

天徳二

中納言兼輔の男、朱雀・村上の兩朝に仕へて五位・左近衛少將・紀伊守等に叙任せられた。歌は、後撰以後の諸勅撰並に三十六人撰に出、家集に藤原清正集一卷(群類二四八、九、五九三—五九七・續國四三七—四四〇)がある。

きよやす 三善清行 一五〇五—一五七六、承和一二—延喜一六、七十三歳

字は耀、世に善相公と稱す。光孝・宇多・醍醐の三朝に仕へ、當時の物識として内外の推重を受けた。文章博士・大學頭・參議・宮内卿等に歴任した。又詩文に堪能で詩は扶桑集に出、文は意見十二箇條(本朝文粹二・群四七七)・革命勘文(群四六一)・智證大師傳一卷(續群二一二)・善家集(選)等の作がある。

きよらい 向井去來 二三〇二—二三六四 寛永一九—寶永元、九、一〇、五十三歳

肥前長崎の人、代々儒を以て仕へたが、父の時醫官となつて京に上つた。名は平次郎と云つて家風として儒學に委しく又武術にも秀いで殊に弓術に達して居つた。元祿の初年芭蕉の門に入り俳諧の風雅に遊んで進境著しく、芭蕉も深く許して戯れに彼を西三十三ヶ國の俳諧奉行に擬した。その居は嵯峨にあつて一夜の風に軒

の柿が珍しい程落ちて一貫文の柿代をブイにしたと云ふのでをかしいことに思つて、家號を落柿舎とつけ

「落柿舎記」と題する俳文を作り、終に

柿ぬしや梢はちかき嵐山

と句した。彼は凡兆と二人で芭蕉盛時を代表する「猿蓑」を撰び、越の浪化に代つて「有磯砥波」を撰び、崎の卯七を助けて「渡鳥」を集めた。

性恭謙にして篤實、師翁を敬すること君父も啻ならず。その作句も亦敦厚にして輕浮の失なく、平穩直撲の間に詩味を含め格調自然にして作りものらしい趣味がなかつた。

何事ぞ花見る人の長刀

卯の花の絶間叩かむ闇の門

湖の水まさりけり五月雨

時鳥鳴くや雲雀の十文字

秋風や白木の弓に弦はらん

應々といへど叩くや雪の門

又彼に風雅の清規「落柿舎制札」なるものがある。後世俳諧者流の情調が見えてをかしい。

俳諧奉行

向去來

一、我家の俳諧に遊ぶべし、世の理窟をいふべから

す

一、雜魚寝には心得あるべし、大軒をかくべからず

一、朝夕かたく精進を思ふべし、魚鳥を忌むにはあらす

らす

一、速に灰吹をすつべし、烟草を嫌ふにはあらす

一、隣の居膳を待べし、火の用心にはあらす

右條々 (俳文九・蕉門十哲集)

きよろく 森川許六 二三一六—二三七五、明

曆二—正徳五、八、二六、六十歳

一名百仲、字は羽官(又菊阿彌)、家號を五老井と云ふ。元江州彦根の藩士だつたのが、元祿五年に仕へを辭して蕉門に投じ、俳文も繪も上手で繪の如きは芭蕉にまで教へたと云ふ。師翁歿後「正風の正系我にあり」と云つて、各務支考と云ひ争つたのは苦々しいことだと斯壇で擯斥された。彼亦彫刻をもよくし師翁が遺愛の櫻を材に翁の肖像を刻んで、智月尼に贈つた。晩年癩を病んで來訪の人々には屏風を隔て、應接した。その編著頗る多く彼の斯界に於ける功績は寧ろこの方面に著しいものがある。元祿九年 韵塞・李由と共撰・同十一年 篇突・李由と共撰・同 俳諧問答・同十五年 宇陀法師 俳諧の式法を述べたもの。正徳五年 歴代滑稽傳 俳

人の略傳及其の風體の略をあぐ。寶永三年風俗文選
(同門の俳文集)。

彼が句は菴甘介我の著「許六句集」がある。これは風俗
文選大註解の中から許六の分だけを抜いたものである

清水の上から出たり春の月

涼風や青田の上の雲の影

きりくす鳴や夜寒の芋俵

落雁の聲のかさなる夜寒かな(俳文九・蕉門十哲
集同五許六全集)

きらん 鬼卵?

栗柯亭と號し又の名は大須賀知白、狂歌作者。遠州貝
坂の驛に些やかな煙草店を出し、障子に

世の中の人とたばこのよし悪は煙となりて後に
こそしれ

と書いて居たのを通行のさるお大名の目にとまり召し
出されてひどく褒められ衣物など賜つて大に面目を施
したと云ふ。

文政初年香川景樹東下の際にも彼が名を聞いて態々立
ち寄つたところ老妻が亡くなつて一七日の日に當つ
て居たので歌を二首贈つて慰めたこと云ふ(崎人百人一
首)

きりひとは 桐一葉

坪内逍遙、廿七年一月雑誌「早稲田文學」に寄せた史
劇脚本で

第一段 其一 浪花城奥殿・其二 奥庭茶室

第二段 其一 吉野山櫻狩・其二 奥殿二女密訴

第三段 其一 城内溜の間・其二 黒書院再評議・其三
片桐邸

第四段 其一 豊國神社鳥居前・其二 同寶前

第五段 其一 渡邊内藏邸・其二 饗庭局部屋・其三
奥殿乳母自害・其四 淀殿寢所

第六段 片桐邸奥書院

第七段 長柄訣別

の七幕十五場を以て構成せられ、大阪兩度の陣の間際
片桐且元が樽俎の間に接衝する苦衷を主想としたもの
である。

第一段 其一 浪花城奥殿

奥かたづけの腰元たち五人打寄りこの節の噂、關東方
の難題に上様(淀君)人質と持ちかけその爲め夜もおち
おち寝まれないとか「イヤ又例の大野様とやらの忠勤
のせいではないか」「しつゝ、聲が高い」「ゆふべも丁度
子の刻過ぎに關白さまや、御臺さまの怨靈が出ての騒

其二 奥庭茶室

「善美を盡せし茶室の結構、植込しげる築山のだら
だらをり、かなたにのつべり根ぶかは石大野修理亮
治長、こなたに角だつ苦むす岩、ぎつくしやくつく
石川伊豆守貞政、おりかけし茶室の前足かみしもに
一刀ざし

こ、で大野修理がうまゝ、伊豆守を説いて片桐は確か
に二心があり、兼て家康に心を寄せて偕こそ淀君人質
のことともうまゝと承知したのだと言ひ(こ、のせり
ふ如何にも倭辯の極を發揮して居る)結局殿上に於て
片桐に喧嘩を吹きかけ一刀の下に兩斷するやう伊豆守
に言ひ含める。

第二段 其一 吉野山櫻狩

かりの世を夢まぼろしとみよしのや盛りの春に春添
ふる御遊の場に花ぞろひ、五人の御臺所、假室々々
の風流に悋氣まじりの魂膽を引きわたしたる幔幕は
目もあやしきだんだら染――

と淨瑠璃と幽靈能の謡曲とを折衷した優艶な地の文が
あつて、淀の君が故秀次始め三十七人の夢魔に襲はる
様を寫す。吉野満山櫻花の盛り目もあやなる太閤の
御成から、突然畜生塚の秀次が連累の三十餘人をつれ

ぎ」アノそれは本當でも無氣味なこと、この分では
今に地震か大火事か」といふ矢先、ガツタ〜と揺
れて器物が覆るので一同ギョットするとそれは、同輩
「椋鳥」のいたづらであつた。倭臣内藏介の弟銀之丞、城
内に通つた痴れ者で片桐市正が娘かけるふに戀し母に
告げると「それなら易いこと妻に貰つてやらう」と先
方に掛合ふと且元は一言の下に拒絶したので銀之丞は
オイ〜泣いて居ると、茶道の珍伯がうまくたらして
大まいの金を取つて「機會を見て首尾してやらう」とい
ふので、今も女中の一座へやつて来て皆から笑はれて
居ると、噂をすれば影のかけるふ、大野渡邊石川の茶室
の密談を氣が、りに思ひ、物案じ氣にアタフタと出て
來ると「こんな話はちかに限るサア口説いたり〜」と
銀之丞を残して一同サツサと入る。とあとは暫らく銀
之丞とかけろふの「行かむやらじ」の滑稽劇、その物が
げから見た椋鳥―兼て銀之丞に言ひ寄れることとて躍
り出でて散々銀之丞に怨を言ふ。茶道の野呂利珍伯は
これまで忠臣饗庭の局の忠實な手先であつたのに、大
野一味に買収されて昨日に變る返り忠―それと感づく
饗庭の聰明―局「今がチラとき、し噂といひ」「エ
ー」ハテ申し附けて下さいませい」珍「ハイ」で幕

て「秀頼とらう、淀とらう」と鬼氣もの凄く迫るところ、そしてこの絢爛と凄惨の過渡をつなぐに佐々成政怒みの槍振り、石田小西が逸早く看破する一活劇を以てしたものの。

其二 奥殿二女密訴

悪夢に襲はれた淀君が刃を抜いてヨロ／＼と叫び出でられるのを、饗庭の局が介抱で正氣づけると、椋鳥の取次で大藏と正榮尼がお目通り許されて、且元裏切りの讒訴をし結局あまり事をあらだてて本人に感づかせてはわるいから、何氣なく登城させて糺明の上處分をするに定まる。左の淀君の述懐は淀君自身の立ち場からは尤もと首肯させるやうにうまく出来て居る。

咲き亂れたる姫百合の、あの襖繪を見るにつけ思ひぞいづる過來しかた、處も加賀の白山なる、千蛇が池の名産と、世に珍らしき黒百合の其花競べが本となり北の政所が憎しみうけはかなく亡びし佐々成政いでその頃は自らが盛りの花や春深き、聚樂殿の榮華の夢、我れ一たび笑むときは布衣よりいで、天が下六十餘州を掌握ありし、太閤も何英雄、をのこには石田、小西をみなには正榮、大藏、世に聞えたる諸大名も皆みづからを懼りの、關とさされど豊臣の世

は太平ぞと思ひきや、去ぬる三年の秋の風、頼みに思ひし治部少輔も、小西も共に木枯や、あれまさりゆく木の下蔭、巢立ちかれたる雛鳥を、はこくみなやむ母鳥をば、あはれとは誰がながむらん〇にツくきは關東へへつらふともがら、その輕薄を手なづけて職爪とぎまつくま鷹が、日毎に慕る我意驕慢遺言を反古となし、秀頼が柔和を幸ひ、みづからを女と侮り、大佛殿の建立を停止とは言開きとは何事ぞや世が世なら家の子同然、其のまたものが將軍宣下、冠を履のさかさまこと、げに衰ふれば崇りありと武運も末となつたるか……

第三段 其一 城内溜りの場

溜りの場に控へた青侍の下馬評で只今お黒書院で「且元を御糺明の顛末何とあらう」と語り合ふ。奥の間通ひの珍伯が得意然とその模様を報告する。三十三ヶ條の御不審富妻那の辯で申し開いたが、最後に大野修理殿が「品川表に淀様御控への御屋敷四町四面を見立てて取極めたはあまりに借上至極、これにも申し開きがあるかツとやられてム……と青菜に鹽の濁れようイヤ全くのこと喉の通りでござるわい……」とやがて且元退出、織田信雄入道常眞が途中行き遣つて色々

慰める。つゞいて石川伊豆守が唯一刀の下に斬り捨てようと意氣込んで、品川邸の一條を誓言他へは洩らさぬからこの場で説明してくれよ、ならずば御邊が一命は貰ひ受けると詰めかける。この、且元の應答は大切なところで彼が不透明な態度をとつたについての動機を語の端々にはほめかせる「切腹は敢ていとはぬ。又徳川を向ふに廻して一快戦と出かけるも痛快な位のこと、は百も承知して居る。けれども今はその時節ではない、内には大野、渡邊の讒邪の佞臣あり、外には家康老いたりと雖も尙健在せり、城内諸臣の黒白を鮮明にし、先づ味方の結束を固うし家康他界の時を待つて強硬な態度で當つて、若し應ぜずばその時こそは一合戦、先づそれまではこの白髮首惜しくはないが惜しむが義務——」といふが彼の意衷である（が併し作者にそれだけの用意はありながら筆はそこまで充分には運ばれてない恨みがある）

其二 黒書院再評議

織田常眞、且元の爲めに辯疏、大野が之に反對して兎やかうと言ひ争ひ、その中、伊豆が且元を討ち取つた

とのしらせが来ること」と心待ちに待つて居ると「伊豆と片桐と口やかましい口論の後且元はサツサと引上げた」といふ「あゝしまつた」といふこなし。修理が来て「只今物蔭で聞けば且元は伊豆に向つて、今日のお黒書院での申開きは實に心にもない嘘八百を並べたのだといひます。こりやどうしてもこのまゝには棄ておかれませぬ」と切腹仰付けの指揮を、秀頼に乞ふ。常眞は「證據もないに切腹とは早まり過ぎた御處置、それに若手とは云へ木村長門はお側付、只今病中ながら、特別を以て御召しあつて彼れが意見をも一應聞かれまするやう」といふ。折柄木村は急を聞き、急いで登上「丁度よいところ」とて座を賜ふ。木村は明晰な辯で痛快に大野一味の陰謀を諷刺し「ともかくこの際今一應且元の宅へ上使を向けるか且元を御召しになるかして御不審の條々を糺明するがよろしからう」と申上げる。淀君の不服もあつたが大野や渡邊はこの際木村に責任を負はせて且元と一緒に目の上の瘤二つ一時にとつてしまはうとの心持になつて、とど木村長門を上使として片桐邸に向はせるといふことに落着。

其三 片桐邸

且元は我居間に在り算盤を弾いて方廣寺の大佛の經費

を計へ、萬一の場合の軍費の出處なども考へ「ア、」と溜息すれば奥方「一葉の前」夫の身の上を案じて色々關東の様子を聞き、且元の氣を引いて見るけれども深慮の彼れは少しも打ち明けようと思はない。折柄上使木村長門の案内、兼ねてさる事もやと思ひ設けた且元、早速對面、餘人ならぬ木村のこととて我が意中を包ま

ず語り、
 ……そも品川の地質といつば、土沙卑濕の惡地なれば、こゝに四丁四方といはゞ只地形をならすにてもほゞ一年餘を費やすべく。さて御殿をきづくとなり遠く大阪表より材木竹石を下すときは又一年餘を送るに足るべし、かくて造營事終るも淀殿所勞といひたてなば又しばらく延ばすを得べし、こは姑息の苦計なれど大御所已に七十歳、餘命三四年に過ぐべからず。彼の老公他界あらば世上にも變あるべく或は乘すべき機會あらん。○とは云へ當家の大厄は由つて來たる所深く遠し剩へ病の根は内に存す。おそらくは治しがたかるべし。尙他に最後の一策あれども、これは大御母公在さん間は容易く行はるべき事にあらず、まつた此のたびの策と雖も若し表立つて上聞せば、密計たちまち彼方に洩れ、五旬の苦

心も水の泡と包めば虚構譏誣の種、とにもかくにも當家の末路、故太閤が大業を維持し奉らんこと覺束なしとかれて覺悟は定めたりしが、かく速かに齟齬せんと我れ人共に思はざりし。

と、折から庭上物騒しくスハとて見れば二つの黒い影一葉も驚き驅けて來る、影の一つは石川伊豆で今一つは且元の弟主膳ノ正であつた。伊豆は大野や渡邊に勵まされて今宵忍んで且元を暗打にせんす庭まで寄つて木村との對談を聞き今更我身の淺慮恥かしく、かほどまでの忠臣とは知らず討たんだとは慮外至極、イザ切腹してこの首進上——と己にアハヤの利那、主膳ノ正は兼てよりこの人影を怪しんでソツトあとをつけて來たので直ぐにその手を止めたのであつた。且元長門の慰撫訓戒に伊豆は粉骨御身等と共に豊臣家に盡さうと誓ひその手筈を打ち合はす。

第四段 其一 奥庭豊國神社鳥居前

八月十八日、豊國神社の例祭とて可内始め多くの人足掃除しまうて蔭口輕口終つて大藏と珍伯、長門を目の上の仇と見た。大藏は珍伯に旨を授けて彼を「蜻蛉と不義した」といふ讒構によつて卻けようとたくらん

く。

其二 饗庭局部屋

今日局は留守、蜻蛉はこゝに預けられ、手厚くもてなされて居ると、そこへ正榮尼が來て我子銀之丞のいとしさに頭を下げて頼むからどうぞアレの妻になるとたつた一言應といつてくれよ。サすれば且元のこととは及ばずながら爲めよき様に計らはうと恩と義理とにせめられて已むなく「應」とは云うたものの、却が許した約婚は外ならぬアノ長門様、これとそれとは雪と墨あ

其三 奥殿乳母自害

蜻蛉承諾と聞いてそれ故の病人になつて居た銀之丞大浮かれに、ヒヨんな唄なご謠つて腰元共を笑はせて居る中に椋鳥が來て蜻蛉の自害を傳へる。銀之丞は失望の極發狂し、池に身を投げるとその乳母虎は「十八年の御奉公も、これでは申譯が立たぬ」と云つて續いて自害、一夜が中に三つの不祥、而かも一方では着々且元排斥の手段が進捗しつゝあるといふ。大阪城内險惡の空氣が鮮やかに仕組まれて居る。

其四 淀君の寢所

罪の一時も早く晴れまする様との外に願もない。そこへ珍伯「父上には明日御召出し、處を廊下でバツサリ、出れば、バツサリ出られればお疑ひとて切腹仰せつけイヤ御痛はしいこととござる」と誠しやかに告げ口すると蜻蛉はびつくり驚天「こりやどうしたらよからう」そこでよいことがたつた一つある……あの木村様にお前ツからそつと文して頼ましやらば十が八まで助かる工夫……と紅筆懷紙で急ぎの一通を認めさせる

と銀之丞がツと來て引つたくる。
 それやツてはと蜻蛉がかけよる、すがる。驚く珍伯遠目にくわツと椋鳥が、之も嫉妬の氣は惱亂……バタ〜にて切り。

其二 豊國神社の寶前

淀君御參拜、蜻蛉を召し寄せ覽書の糾問、饗庭の局好意の計らひで蜻蛉を預る。

第五段 其一 渡邊内藏邸

銀之丞は三年前から思ひ詰めた蜻蛉への戀が破れてやけとなり、切腹するといつて召使を困らせて居る。そこへ母正榮尼歸館色々といひきかすと、問なく内藏(正榮尼の子)も歸館、木村長門に逢うて大野父子こそ身中の蟲と悟り、その旨を母に語らうとして奥の室に導

正榮尼の言上に聊か心動いた淀君は大野を呼んで種々
 怨み言あり「左ほど疑れまするからには私はもうこゝを
 下つて覺悟をいたしませう」とて退出しようとするの
 を引き止めてそれからだん／＼御機嫌が直る。この
 臺詞で充分に淀君と大野との色戀を示して居る。……
 とその中又もや淀君が魔に襲はれてうなされる。來合
 はせた珍伯が介抱する。それを祕密を知つたといふの
 でその場で斬り捨てとある。

第六段 片桐邸 奥書院

淀君には血判据ゑて且元に誓書を賜ひ「安心して登城
 せよ」と御下命、且元感涙に咽びその期違へず出仕の
 支度、妻や近臣が百方とめても聞き入れない。己に馬
 上に飛び乗る矢先、大野の軍兵三百餘騎攻め寄せたと
 の注進、一圓合點行かぬことと訝かると、石河伊豆が
 息はづませてトツカハやつて来ていきなり自害「御身
 を思ふばかりに獨り思案で某が大野が邸に討ち込ん
 だばかりにこの始末、曩には御邊を疑ひ今又御身を
 早まらせる此上生きては何の面目」と深く刺腹する。
 その死を惜しむ餘暇すらもなく大野の軍勢が関の聲け
 たましく迫つて來るので、且元は主膳ノ正にお家の
 後事を託して退場の支度にとりかゝる。

第七段 長柄堤訣別

且元はいよ／＼居城茨木へ引退すべく長柄堤の有明を
 悄然として力なく、折々城の天守を望み限りなき悲痛
 の述懐を吐きながら馬も脚なみはかどらずトボ／＼と
 して辿り行く折柄、白倉權六、神崎治右衛門とて大野
 が廻しもの三十餘挺の筒先揃へ今や遅しと待つ後ろズ
 ドーンと一發神崎を仆し、且元が無二の忠臣十河一味
 の隊がさもあらうとて、かたての手配り、シヤツ原覺
 悟せよとて縦横無盡に切まくり、之に斬りたてられ
 て大野がたくらみは見事破られ權六は殘兵つれてホウ
 ホウと逃げて行く……とその後へ木村長門がやつて來
 て且元と感慨深い對話をかはし、時移ればとてやがて
 兩人が西と東とに名殘惜しい袂を別つ。

この作一等の佳處として教科書にも引かれ、實演して
 ももてはやされた(逍遙選集第一卷 桐一葉(本讀み
 體の方)一一一七八、同實演用の方一八一—一九〇
 同第七卷三八三—四四五二我が國の史劇)

きれじ 切字

連歌俳諧の發句及び俳句に於てその句を獨立詞形なら
 しめる爲めに動詞・形容詞・助動詞の終止形又はてに
 は、感歎詞をおくことなひ。

例「去年まで叱つた瓜を手向かな

松島やあ、松島や松島や

梨の花月に書よむ女あり

大體左の十八を以て切字の重なるものとする。

ぞ、かな、らん、もがな、か、よ、や、けり、し、
 つ、せ、へ、け、ず、じ、ぬ、いかに、れ、

きゑん 皆川淇園 二三九四—二四六七、享保

一九—文化四、五、一六、七十四歳

京都の儒者、名は憲、字は伯恭、號は淇園・有斐齋・節齋、
 幼にして穎悟、學を好みて博聞強記、遂に一家の學を
 立て文化二年からは學堂弘道館を建て、門弟を教授し
 た。弟子三千、文を好くし詩を好くし、又畫を應舉に學
 び、山水密畫の如きは出藍の譽があつた。その學風の
 特徴は字義研究を以て經義解釋の要諦とし古聖賢の教
 へを文字通り正確に辿らうと云ふにある。淇園文集・
 虛字解・淇園詩話・習文錄その他二十餘種の著がある。

きゑん 柳澤淇園 二三六六—二四一八、寶永

三—寶曆八、五十三歳

名は里恭、字は公美(又、玉桂)通稱權太夫、大和郡山
 の藩士で、祇園南海に就いて儒學を修め、和漢混淆文
 を好くして、その著雲萍雜誌は今も世に行はれて居る。

その上彼は文武和漢古今雅俗に亘つて趣味と造詣とな
 有し、繪畫・繪畫・三絃・佛典等凡そ人の師たるに足る藝
 を十六通りも備へてゐたと云ふ。性曠達物に拘らず、
 任侠にして食らず家高祿を食めども財常に足らぬ勝ち
 であつた。隨て人の意表に出るやうな奇行も多く近世
 畸人傳などに出てゐる。

きゑんさいれいしんからき 祇園祭禮信

仰記

もと「祇園祭禮信長記」といつたのを武將の名を憚つて
 信仰記と改めた。寶曆七年(二四一七)十二月豊竹座上
 場のため、中村阿契・淺田一鳥・豊竹應律・黒藏主等の
 合作したもの「松永大膳久秀、足利將軍をたふして己
 れは金閣寺に豪奢な生活を構へ、狩野將監の息女雪姫
 (直信の妻)に横戀慕し、姫は夫を助ける爲めに「大
 膳の意に従ふ」といふ。その内雲龍の奇瑞に大膳は父
 の仇と判明、姫は之を討たうとして却て囚へられ花吹
 雪の櫻の幹に縛られ泣いた涙で風を書くと、生きてそ
 の繩を喰ひ切つて姫を助ける。木下藤吉郎があらはれ
 て松永に討つてかゝり、互に後日を期して物別れとな
 る」といふ筋で四段目の切は「金閣寺」として今も行は
 れ、雪姫は時姫八重垣姫と共に三姫と稱して大役とな

つてある。
きんえうしふ 十卷

崇徳天皇の大治二年源俊頼が白河上皇の勅を受け、二回まで御故障が出て、三回目に勅許濟になつた勅撰集で、歌の数は六七九首(一本に六四九首)俊頼が従來の型を破つて何かな新様を實現しようとする苦心したにも拘らず、難者は俳諧めいてゐるといふので「臂突集」など悪口した。けれども歌の家に生れて自身咏歌の才に恵まれたばかりでなく、歌道に一隻眼をそなへた彼が度度推敲をかされた撰集とてかいなでの集とは大分優れた點が多い。

きんえうすがのねしふ 近葉菅根集 五卷

清水濱臣、文化十一年(二四七四)七月の編、近世の長歌につき、長流・湛水・契沖・眞淵以下縣門諸士の作三百四首を四季・戀・雜の六部に分けて類聚してある。

きんえだ 三條西公條 二一四七—二二二三

長享元—永祿六、一二、七十七歳

室町時代の和學者、後柏原・後奈良兩朝に仕へて從五位下・侍從・内大臣・右大臣に歴任、天文十二年辭職、出家して諸國を遍歴した。その著に稱名院集家集・吉野詣記(群類三三八、一一、一二四三—一二五六)・石山月見

きんぎよくしふ 金玉集

きんたう「藤原公任」を見よ。

きんきんせんせいえいぐわのゆめ 金々

先生榮華夢

戀川春町、安永四年(二四三五)作の黄表紙「ある片田舎の金村屋金兵衛なる者志を立て、江戸に出で、一日目黒の不動參りをして、中途さる粟餅屋に立ちより黄梁一炊の夢に一代を見てさめて悟りを開く」といふ筋でつまり「邯鄲の夢」の戯作化であるが、類作中では有名なるものである(帝文三四、一一五)

きんくわいしふ 金槐集

されとも「實朝」の項参照。

きんざね 藤原公實 一七一三—一七六七、天

喜元—嘉承二、五十五歳

實季の子、左中將・春宮大夫を経て從二位權大納言に至る。歌は後拾遺(二)・金葉(二五)以下の諸勅撰及び承暦二年内裏歌合・堀河院艶書合・堀河院初度百首等に出てゐる。

きんしくんしやう 金鴉勳章

資料、日本書紀三(神武紀一四)・舊事記六ノ三〇・類聚國史一六五ノ三五・太平記二七ノ一〇。續々群續歌林

記(同四八一、一七、四一三—四一七)・細流抄(國註三)字槐記抄・稱名院右府句題百首等がある。

きんが 井上金峨 二三九三—二四四四、享保

一八—天明四、五十二歳

名は立元、江戸の儒學者で、始めは古文辭學派に依り中頃その非を悟り、漢唐の古説と宋明の新説を採長補短して別に一家を立てた。所謂折衷學派がそれで、その門からは龜田鵬齋のやうな碩學が出た。著書には經義折衷・東國遊記・金峨文集等がある。

きんが 梅亭金鷲 二四八一—二五五三、文政

四—明治二六、七十三歳

元、江戸の劍客吉田氏の二男で劍道にも達した居たが後瓜生氏の養嗣となり本郷の附木店に住むやうになつてから、ガラリと生活態度を一變させて、松亭金水などと交り戯作者仲間になつて身を投じた。通稱瓜生熊三郎、本名政和、號は吾妻雄兎子・鶯溪隱士・白山人など云うた。妙竹林話七變人(帝文二六、拙著合國文學概説九一一—九一三)は可なり有名だが餘りわざとらしいのが目障りだと謂はれてゐる。明治以後は聞々珍聞を起してその記者となり、又狂歌を作り専ら滑稽文學に終始した。

良材集上ノ二六三。神道叢説玉籤集六ノ二八九。日本書紀通證二ノ一一、八四、八ノ三一。古今妖魅考二ノ一二。飯田武郷日本書紀通釋二、一一八三—一一八五。廣文庫第十四册一〇五—一〇六。

(古事記ではこれを「八咫鳥」として居る。次田潤氏古事記新講二七二—二七五などと對照ありし)

(漣山人、八咫鳥 博文館)

きんじやう 太田錦城 二四三一—二四八五、

明和八—文政八、四、二八、五十五歳

加賀大聖寺の人、名は元貞、字は公幹、その父立覺は陰陽草木の説に委しかつた。彼は幼にして穎悟、神童と稱へられた。五歳にして字を識り、十一歳にして詩を賦し、十三歳にして經史に通じた。長じて皆川洪園・山本北山等に學び皆自己の意に滿たず、後、帷を下して諸生を教授するに及び、博引曲索細微の隅に至るまでも氷解させ、始め宋學を奉じ後一家の見を以て折衷學を唱へ、又老・佛・占相の歸趨までも究めた。後水戸藩に仕へたが更に轉じて加賀侯に仕へた(又老中吉田侯にも仕へたと云ふ)隨筆梧窓漫筆は和漢混淆文の上乗としてめでられ、錦城詩文集・論語作者考・偽學辨等幾多有益の著述を遺した。

きんすゐ 松亭金水 二四五四—二五二二、寛政六—文久二、一一、二二、六十八歳

實名は中村保定、通稱源八、積翠道人と號した。始め手跡指南をし後爲永春水の筆耕をし、段々春水の作意をまれて戯作者となり、高木適實傳六卷以下二十種許の人情本を出したが春水に及ばざること數等である。此種作品の末路を思はせるやうな拙劣さであつた。

きんせいきじんてん 近世畸人傳 五卷

伴蒿蹊の著、近世の鴻儒・碩徳・貞烈・詩人・歌人・俳人等百餘人の傳記を記したもので、寛政二年(二四五〇)の釋慈周の漢文の序と自序と三熊思孝の跋とがあり、明治以後にも諷刺せられた。(思孝は師蒿蹊指導の下に「續近世畸人傳」五卷を書いた。これと併せ見るべきである)

きんだいしうか 近代秀歌 寫本一卷

藤原定家がさる人より歌道を問はれて詞古想新の説を始め一わたり自己の歌論(「定家」の項参照)を述べ、その見本として經信・俊賴・顯輔・清輔・基俊等の味二十六首をあげたもの(群二九二、一〇、七〇四—七〇七)に入る。

きんただ 源公忠 一五四九—一六〇八、寛永

元—天曆二、六十歳

光孝天皇の御孫。國紀の子。醍醐の御代に仕へて右大辨に任じ世に滋野井の辨といふ。歌は後撰(二)・拾遺(四)以下の諸勅撰並に三十六人撰等に採られ又源公忠朝臣集一卷(群二四八、九、五八四—五八六、續國四二九—四三一)がある。

きんたふ 藤原公任 一六二六—一七〇一、康保三—長久二、七十六歳

世に四條大納言と稱し、三條關白太政大臣頼忠(廉義公)の長男で、圓融・花山・二條・三條の四朝に歴任し、姉道子が圓融院の女御となつたが、同じ女御の列に右大臣兼家の女詮子が皇男子懷仁親王(一條天皇)を産まれたので境遇逆轉して昇進停滯勝であつた。圓融院はそれをいとほしんで道子を中宮に上せられた。遂に從弟齊信に從二位を越えられ、病と稱して出仕しなかつたが朝廷ではその才を惜しんで邸について從二位を授け、出仕を促された。更に階を進んで正二位權大納言兼按察使の時、愛女の死に遭うて物のあはれ一入深く、遂に朝を辭して薙髮し、北山の長谷の別荘に入り悠々閑日月を銷した。彼は多藝多才行くとして可ならざるなく四納言の筆頭

で、三船の才とめられ、其著の中、新撰體腦一卷は、始めて歌を系統的に論じたもので、我邦歌學の濫觴で、後世五家體腦の一つにかぞへてゐる。和歌九品論議一卷は佛說淨土の九品に準じて古歌を品階し、深窓秘抄一卷、金玉集一卷は古歌の中、我が會心の味を集めたもので、この卿好尙の向ふ所を知るべく、三十六人選一卷、古今の歌仙の味をえらんだもの(その人について後世とかくの評はあるが)和漢朗詠集二卷、彼我の漢詩と和歌との中朗詠諷詠に諧調なものを集めたもので後世盛んに行はれた。北山抄七卷一條の朝以後の故實を記したもので、當時歌文にかけては儕々多士であつたが、有職故實にかけては獨りこの卿のみが精通して居つた。歌は拾遺集に十五首後拾遺集に十九首採られ、その他左記の諸集に散見してゐる。

詞花・千載・新古今・新勅撰・續後撰・續古今・續拾遺・玉葉・續千載・續後拾遺・風雅・新千載・新拾遺・新後拾遺・新續古今・後六々撰・賀陽院水閣歌合。
家集は前大納言公任卿集一卷(群二三三、九、一八七—二一三、歌學全書三、續國六三九—六六一)

をぐら山あらしの風のさむければもみちの錦きぬ人ぞなき

瀧の音は絶えて久しくなりぬれど名こそ流れて
尙ほ聞えけれ
きんつね 藤原公經 一八三一—一九〇四、承安元—寛元二、七十四歳

土御門・順徳・後堀河の諸朝に仕へ、從一位太政大臣に至り時人輒給大將と稱し、後世、西園寺入道前太政大臣と云ふ(その家を西園寺とも今出川とも謂つた)歌に巧みで新古今(一〇)・新勅撰(三〇)・續後拾遺(一三)等に入つて居る。

きんびらぼん 金平本

狭義に於ては坂田公時の子金平を主人公とした古淨瑠璃本を云ひ、廣義に於ては金平と系統相連り若くは性質の相近い人物を主人公として、武勇を旨と作れる淨瑠璃をいふ。蓋し始めは、一、岡清兵衛の作つた金平が主人公の淨瑠璃のみを云ひ、ついで、二、作者は清兵衛以外でも尙金平取材のものに限つて云ひ、次第に轉じて、三、公時を主人公としたもの、四、公時以下所謂頼光の四天王を取材したもの、五、武勇剛猛の筋を表したものの、六、その性質はひごくちがつてゐるに拘らず其體裁が相酷似せる古淨瑠璃、七、勇武を主想とせる小説(例へば「小夜嵐」の如き)等をも目して金平本と呼ぶ

に至つた。
元和假武日尙淺く、各藩の江戸詰めの武士にはまだ攻城野戦の記憶が新たな頃、ふと涌いたこの畸形な文學が一時異常の歡迎を受けた。文法は一貫せず、これまで文語で推したものが突然口語に變り、その口語も随分訛り多く筋も構想も滅茶々に「俗も其後云々」と運んで行く。

今左に新群書類從第九に收むる金平本の目をおいておく(尙「岡清兵衛」の項を参照)
清原右大将・四天王若さかり・四天王女大力手取軍・京今宮本地・日本兩武將始・源平武將論・敵討のいこん・四天王筑紫貴・末武印問答・きさきあらそひ・天狗羽打・四天王むしや執行・綱金時最後・頼光蜘蛛切・子四天王北國合戦・四天王最後・公平誕生記・澁根悪太郎・公平花だんやぶり・公平末春いくさるん・公平天狗問答・八幡太郎誕生記・渡邊智略討・やはき合戦・勇金平・渡邊三田合戦・菅原親王・公平つるぎのりつくわ・公平武者執行・公平入道山めぐり・いかつち論・殿上問討女袖鑑・よりますさ・頼朝三島詣・こぼん忠信・義經地獄破・あさいなしまわたり(大正十五、大阪毎日新聞社發行、珍書大觀中、金平本全集(江戸版))

三十冊)

きんもんごさんのきり 金門五山桐
安永七年(二四三八)四月初代並木五瓶が大阪小川吉太郎座に書下した脚本で委しくは「石川五右衛門忍術の事」金門五山桐といふ。石川五右衛門が太閤の邸所に忍び入つて千鳥の香爐が音をたてた爲めに知れて捕はれることを、謠曲「唐船」によつて脚色してある。

きんらち 馬場金埒?—二四六七、?—文化四通稱大阪屋甚兵衛、近世江戸の狂歌師で、蜀山人と相並んで滑稽の歌ひ合ひをしてゐた。

たち出て見れども梅の匂はぬは鼻に障子のあればなるらん
花見

思ひつゝ、ぬればや夢にみよし野の花はにしきの夜着であつたか
歳暮

行年の尾がしらかけて鹽引の壹尺はごに成にけるかな
千の玄室ぬし五月雨の目古郷に

かへりたまふあした
雲もはやにぢり上りにあがるなりお茶をたて場

歌の項参照)

土佐國室戸といふ所にて

法性の室戸といへどわがすめば有爲の浪風よせ

ぬ日ぞなき

眞如親王おとづれて侍りける返事に

斯計り達磨を知れる君なれば陀多調多までは到るなり息

留別青龍寺義操阿闍梨二一首

同法同門喜遇深 遊空白霧忽歸岑

一生一別難三再見 非夢思中數々尋

この次一首隔て、「雜言入山興一首」がある。長篇で感味も豊かに盛られてゐる(國華一五六號卷頭八二一四號二七傳空海作地藏菩薩像・龍知菩薩像二二二號一二五波夷羅及迷企羅像四七號卷頭六傳空海筆毘沙門天彫像・一四七號卷頭二傳空海筆三十六臂太元明王畫像・一五一號卷頭一五傳空海筆五大尊畫像・二八一號一三傳空海筆降三世明王像・一三四號卷頭一筆者不詳弘法大師行狀圖・一五二號二九九筆者不詳弘法大師行狀繪卷・三一三號三六一弘法大師將來枕本尊の一部・祖風宣揚會編弘法大師全集十六冊・史一二ノ六五空海僧都傳・六六贈大僧正空海和上傳記・六七高野贈

クの部

にしばし待合
(國刊一期新群一〇・滄洲樓家集一卷・仙臺百首一卷)

くあはせ 句合

歌合に準じ、俳句と俳句とを番はせて優劣を争ふ催しをいふ。

くらかい 空海(弘法大師) 一四三四—一四九五、寶龜五—承和二、六十二歳

王朝初期我邦に眞言宗を弘布した高僧で、幼時より心を佛教に傾け、延暦二十三年に渡唐し慧果和尚について教義を究め、大同元年歸朝し、紀州高野山に金剛峰寺を建てその宗旨を説いた。佛教史上の空海としては特色特筆すべきものもあり、佛教に關する著は深山にあるが、彼は又詩歌文章に堪能で書も秀で、居つた。歌は新勅撰・續千載・風雅などに採られ、詩は經國集に出てゐる。詩法を論ぜる書に文鏡秘府論と云ふがあつて一個の詩眼を立てたあとが見える。又世に傳ふる和讃の伊呂波歌も彼の作だと言ひ傳へられて居る(以呂波

大僧正傳)

くうげしふ 空華集 二十卷

京の五山の詩僧として有名な義堂の詩文集で、元祿九年(二三五六)の出版に係る。空華は著者の堂號であつた(上村觀光氏五山文學全集詩文部第二輯一三二七一八八九)

くうさうてきしやじつしゆぎ 空想的寫實主義

尾崎紅葉、前期の作品を中心として、硯友社一派の淺薄な寫實小説作家のつた態度をいふ。

くさざうし 草雙紙

徳川時代江戸に發生した小説の一體を云ひ赤本・黒本・青本・黄表紙・合巻物と變遷につれて名稱がちがつてゐる。

くさざうしとは何を意味するか。

一、草假名で書いた雙紙の意(言海)

二、雙紙と草子と同音で紛らわしいから區別の便宜

上草子の方を「くさざうし」といふこと、恰も徑山・

金山同音なのを「こみちきん山、かれきん山」と云ふと同じだ……嬉遊笑覽。

三、始め製本が粗悪で、用紙は表紙までも還金紙を

二つ切にし、灰墨の匂ひ悪臭を放つ處から臭草紙といつたものなのだが、後には段々製本がよくなつてから「臭」の字を忌みて「草」とかへたものだ……馬琴いはでもの記、作者部類。

四、「草」といふは正式のものに對する略式の意で草芝居・草相模の草のやうなものだ。又商賣にも草物といふものが多い。くさざうしもとは草草紙であつたらうが、草字が重なつて紛らわしいので通音の字を借りて草雙紙としたのである。武家の職名の小小姓を見小姓としたのも同じだ。萬治二年四月二日振賣物改の町振に一魚賣、一草草紙賣とあるが官府の令によさか私稱を用ひる譯はなからう。即ち草草紙といふのは草紙のうち童蒙婦女の伴侶たるべきものといふ意の正稱である……小宮山緩介温知叢書作者部類の頭書。

最後の解が合理的であらう。この種双紙は合巻物以外何れも五枚を以て一卷とした小冊子である。で、婦人小兒向パンフレットとも謂ふべき體裁と想へば略近い。

第一期赤本、貞享元祿—元文、元文寛保—安政三。

金平本とお伽本(桃太郎・かち／＼山・狐の嫁入等)から種をとつて元文・寛保頃から軍記物・敵討物・一代記・淨

瑠璃約説などを取材する。讀み本とよりは寧ろ繪本で繪を本位にした。繪師の主な人は菱川師宣・鳥居清信・清満・宮川長春・奥村政信・近藤清春・宮川房信・二代清信・清重・清長・北尾重政。本屋の重なもの次の五軒。大傳馬町三丁目山本屋九左衛門・同隣形屋三左衛門・長谷川町横町松會三四郎・通り油町鶴屋喜右衛門・同山形屋郎右衛門。元文・寛保以降出た重なもの、源平藤橘軍配團・平家物語・夷越軍談・漢楚軍談・新田一代記・八幡太郎一代記・義經一代記・靜一代記・入磨一代記・阿部晴明一代記・菊童一代記・信竹角田川・妹春山婦女庭訓。

文章の作者は大部分不明である。一體草雙紙文章作者の名を自署することは、寶暦十年の觀水堂丈阿に始まる「蜀山人・菊壽草(繪草紙評判記)」ともいひ。和祥が始まりだともいひ(臆説年代記)丈阿は唯「何と子供衆合點か」の書き入れ形式を始めただけだともいふ。(臆説年代記)

第二期 青本時代 安永四—文化三、三十二年間、

前期 安永天明、後期 寛政享和。

安永四年喜三二が金々先生榮花夢は劃期的の草雙紙でこれより草紙の趣が一變したといはれる。

抑々安永天明の大江戸は上に田沼の専政あり下に淫蕩俗を爲し、太平の餘樂に酔うて文化漸く爛熱の期に入つた時だが之を享樂に表すものに北里・辰巳の兩廓あり、回向院の大相撲あり、之を詞壇に示すものは狂歌・川柳、而して之を散文に表現したものは洒落本と、青本とであつた。表紙の青くなつたこと、文の作者が名を署することの様な外面的な區別の外、通を基調にして、無邪氣なる滑稽の連發を唯一能事として這般江戸文化を裏書したことは特に注目に値する。戀川春町・明誠堂喜三二・市場通笑・芝全交・南陀伽紫蘭・森羅萬象・岸田杜芳・唐來三和・山東京傳等を主なる作家とし畫家には關清長・北尾重政などが名高い。

寛政以來幕府當局の緊縮方針と略々雁行的に草雙紙の内容は教訓的談理的となつた。寛政二年京傳の心學早染草がこの意味に於て一期を劃してゐる。中頃より却て金々先生以前の化物話となり、又新たに敵討物がはやり出した(天明三年楚滿人の敵討三味線由来は敵討物の始め)

寛政享和以降文化の始め頃までの主なる作家は京傳は勿論二世喜三二・櫻川慈悲成・七珍萬寶・馬琴・三馬・一丸などで、畫家には歌川豊國・葛飾北齋(畫風も一變し

て今様の優艶妖冶となつた)などである。

第三期 合巻物時代、文化三―明治の初め。

然るに敵討物のやうな趣向は僅か数葉の双紙に述べ盡すことの出来ないものとして、この種内容の變化は又外形の變化をし誘致し、文化三年式亭三馬が雷太郎強悪物語を出すのに五册分を一册とし、前後二册にして出したのは通常合巻物の始めとする。大冊となるにつれて圖書彫刻も精巧となり、口繪をも加へ、體裁大に優美となり種彦に至つて製本・挿畫にまで工夫を凝らした。そして種彦は合巻物作家の代表的なものでその代表作品は修紫田舎源氏である。その他山東京山・柳下亭種員以下明治初年までもこの種の作家あり、作品あり、とゞ新聞の續き物に代位せらるゝに至つて止んだ(合巻物は之と略同時に産まれた讀本と實質を同じくするもので低級な讀本と看做してもよさうだ)

以上専ら藤岡博士の近代小説史によつたが、尙精細に研究するには左の諸書がある。

岸田杜芳 赤本年代記一卷(天明三年)・式亭三馬・又燒直稗史臆説年代記二卷(享和二年)・漣水山人稗鉢冠姫 稗史臆説年代記二卷(享和二年)・漣水山人稗史年表五卷・青本年表二册・戯作外題年鑑(燕石十種)合巻外題集・物之本江戸作者部類赤本の部・戯作者選

集(燕石十種)・戯作六家撰・慶長以來小説家著述目録・小説史稿・戯曲小説通志・列傳體小説史・國刊一期新群七久保菴雪草雙紙書目一) **くさまくら 草枕** 夏目漱石、廿九年九月一日作の小説「智に働けば角が立つ情に棹せば流される意地を通せば窮屈だ兎角に人の世は住みにくい(四一一)住みにくい所をどれ程か寛容げて東の間の命を東の間でも住みよくせればならぬ。こゝに詩人といふ天職が出来てこゝに畫家といふ使命が降る。あらゆる藝術の士は人の世を長閑にし人の心を豊にするが故に尊い(四一一―四一二)吾人の性情を瞬刻に陶冶して酔手として酔なる詩境に入らしむるのは自然である。戀はうつくしかる、孝もうつくしかる、忠君愛國も結構だらう。然し自身が其局に當れば利害の旋風に捲き込まれてうつくしき事にも結構な事にも目は眩んで舞ふ。従つてどこに詩があるか自身には解しかれる。これがわかる爲にはわかる丈の餘裕のある第三者の地位に立たねばならぬ(四一七) 苦しんだり怒つたり騒いだり泣いたり人は人の世につきものだ。余も三十年間それを仕通して飽き／＼した。飽き／＼した上に芝居や小説で同じ事を繰り返しては

大變だ(四一八)

探菊東籬下悠然見南山、只それぎりの裏に見苦しい世の中を丸で忘れた光景が出て来る(四一八)

是から逢ふ人間には超然と遠き上から見物する氣で人情の電氣が無暗に双方で起らない様にする(四二一)「斯うした藝術觀、是取も直さず氏の藝術觀)を持つた畫家が此見解から非人情の繪修業に那古井の温泉場に出かけて(四二四―四二九は峠の茶屋と題してよく教科書に引用されてゐる)峠の茶屋のお婆さんから那古井の宿の志保田の出もどりの令嬢のお那美さんと云ふ美人の事を聞く、其嬢が嫁ぐ時は馬に乗つてこゝを通つたとも聞いて、

花の頃を越えてかこし馬に嫁

など吟じミレ一の畫いたオッフエリヤなどを聯想する。お那美さんは丁度長良の乙女とよく似た境遇であつたとも聞いたお那美さんに乗せた馬の手綱を取つた源兵衛爺さんにも逢つた。那古井の宿へ着いて長い廊下の曲折した迷宮のやうな座敷へ通されてお那美さんと長良乙女とを緬ひ交ぜにした雅俗折衷の夢を見た。「世には有りもせぬ失戀を製造して、自ら強ひて煩悶して愉快を貪るものがある。常人は之を評して愚だ

と云ふ、氣違ひだと云ふ。然し自ら不幸の輪廓を描いて好んで其中に起臥するのは自ら烏有の山水を刻畫して壺中の天地に歡喜すると、その藝術的の立脚地を得たる點に於て全く等しいと云はればならぬ。この點に於て世と幾多の藝術家は(日常の人としてはいざ知らず)藝術家として常人よりも愚である。氣違ひである。われ／＼は草鞋旅行をする間朝から晩まで苦しいと不平を鳴らしつづけて居るが、人に向つて會遊を説く時分には不平らしい様子は少しも見せぬ。面白かつた事愉快であつた事は無論昔の不平をさへ得意に喋々してしたり顔である。これは敢て自ら欺くの人を欺るのと云ふ了見ではない。旅行をする間は常人の心持ちで會遊を語るときは既に詩人の態度にあるからこんな矛盾が起る。して見ると四角な世界から常識と名のつく一角を磨滅して三角のうちに住むのを藝術家と呼んでもよからう(四四四)……詩人とは自分の死骸を自分で解剖して其病狀を天下に發表する義務を有して居る。其方便は色色あるが一番手近なのは何でも蚊でも手當り次第十七字にまとめ見るのが一番いい。十七字は詩形として最も輕便であるから顔を洗ふ時にも廁に上つた

時にも電車に乗つた時にも容易に出来る。十七字が容易に出来ると云ふ意味は、安直に詩人になれると云ふ意味であつて、詩人になると云ふのは一種の悟りであるから輕便だと云つて輕蔑する必要はない。輕便であればある程功德になるから却つて尊重すべきものと思ふ。まあ一寸腹が立つと假定する。腹が立つた所を直ぐ十七字にする。十七字にする時は自分の腹立ちが既に他人に變じて居る。腹を立つたり俳句を作つたりさう一人が同時に働けるものではない。一寸涙をこぼす此涙を十七字にする。するや否やうれしくなる涙を十七字に纏めた時には苦しみ涙は自分から遊離しておれば泣く事の出来る男だと云ふ嬉しき丈の自分になる(四四五—四四六)

など思つて心に浮ぶまゝの句を書きつける。

海棠の露をふるふや物狂ひ

花の影女の影の腫かな

正一位女に化けて臘月

海棠の精が出て来る月夜かな(四四七)

月下の海棠に立つて長良乙女の歌、

秋づけば尾花が上に置く露の消ゆべくもわは思

ほゆるかも

を誦して居るのが例のお那美さんである。又夜半頃彼の寢室へツと這入つて何か出して行つた。第三回目には彼が朝湯壺から上つて身體も拭かずに来ようとする時「さアお召しなさい」と云つて丹前を着せてくれた。彼は始めて彼女を面と向つて見た。古來美人の顔を形容するには大抵動か静かの二大範疇の何れかに嵌らないものは無い。

所が此女の表情を見るに余はいづれとも判断に迷つた。口は一文字を結んで静かである。眼は五分のすきさへ見出すべく動いて居る。顔は下膨れの瓜實形で豊かに落ち附きを見せて居るに引き替へて額は狭苦しくもこせ附いて、所謂富士額の俗臭を帯びて居るのみならず、眉は兩方から逼つて中間に數滴の薄荷を點じたる如く、びく／＼焦慮れて居る。鼻ばかりは輕薄に鋭くもない。遅鈍に丸くもない。畫にしたら美しからう。かやうに別れ／＼の道具が皆一癖あつて亂調にどや／＼と余の双眼に飛び込んだのだから迷ふのも無理はない。元來は静であるべき大地の一角に陥缺が起つて全體が思はず動いたが、動くは本來の性に背くと悟つて力めて往昔の姿に戻らう

としたのを平衡を失つた機勢に制せられて心ならずも動き續けた今日は、やけどから無理でも動いて見せると云はぬ許りの有様が——そんな有様が若しあるとすれば丁度此女を形容することが出来る。

それだから輕侮の裏に何となく人に縋りたい氣色が見える。人を馬鹿にした様子の底に慎み深い分別がほのめいてゐる。才に任せ氣を貢へば百人の男子を物の數とも思はぬ勢の下から温和しい情が吾知らず湧いて出る。どうしても表情に一致が無い。悟りと迷ひが一軒の家に喧嘩しながら同居して居る體だ。此女の顔に統一の感じのないのは心に統一の無い證據で、心に統一がないのは此女の世界に統一がないつたのだらう。不幸に壓しつけられながら其不幸に打ち勝たうとしてゐる顔だ。不仕合せな女に違ひない(四五二)

は有名な形容の詞だが悪く云ふと近代的人相書に過ぎない。少女が晩餐を運ぶ焼肴に青いものをあしらつて腕をとれば早蕨の中に紅白に染め抜かれた海老を沈ませてあるのを見て、あゝ好い色だと思ふ。ターナーが或晩餐の席で皿に盛るサラダを見詰めて涼しい色だとほめた心持を味はふ(四五六)

中庭の植込みを隔て、向う二階の欄干に銀杏返しのお那美さんが文明的な楊柳觀音のやうに頰杖をついて下を向いてゐる。あゝ美しいと思ふ瞬間、少女はハタと楔をたて、退つた。彼は英詩を想ひ出す。

Saddler than is the moons lost light,

Lost ere the kindling of dawn,

To travellers journeying on,

The shutting of thy fair face from my sight,

若しも自分が彼女に戀してゐるんだつたら今の思ひは

正に此詩の通りであらう。その上に

Might I look on thee in death,

With bliss I would yield my breath.

と云ふ二句さへ足しただらう(四六〇—四六一)と。

そこへ彼女はお茶に添へて羊羹を持つて來た。余は凡ての菓子のうちで最も羊羹が好きだ。別段食ひたくは無いがあの肌合が滑らかに緻密にしかも半透明に光線を受ける工合はどう見ても一個の美術品だ(四六二)

と思ふ「父は茶を立てるからいつかお招きませう」と彼女が云ふ。茶と聞いて彼は少しく辟易した。世間に茶人程勿體振つた風流人はない……あんな煩

瑣な規則のうちに雅味があるなら、麻布の聯隊のな
かは雅味で鼻がつかへるだらう(四六四)

散髪屋へ行くと裸石巖をつけられて大閉口(四七)に鏡
の論がある。

髭を剃る間は首の所有権は全く親方の手にあるのか
將た幾分かは余の上にも存するの一人て疑ひ出し
た位容赦なく取扱はれる……

彼は髪剃を揮ふに當つて毫も文明の法則を解して居
らん。頬に當る時はがり、と音がした。揉み上げの
所ではぞきりと動脈が鳴つた。顫のあたりに利刃が
ひらめく時分にはごりごり、ごりごりと霜柱を踏みつ
ける様な怪しい聲が出た。しかも本人は日本一の手
腕を有する親方を以て自任して居る(四七二)

頭を搔く時には

垢の溜まつた十木の爪を遠慮なく余が頭蓋骨の上に
並べて斷りもなく前後に猛烈なる運動を開始した。
此の爪が黒髪の根を一本毎に押し分けて不毛の境を
巨人の熊手が疾風の速度で通る如くに往來する(四
七五)

そこへ小僧の了念坊が来る。お那美さんの噂をする。

仙丹に練りあげて、それを蓬萊の靈液に溶いて桃源
の目で蒸發せしめた精氣が知らぬ間に毛穴から染み
込んで心が知覺せぬうちに飽和されて仕舞つたと云
ひたい(四八七)普通の畫は感じはなくても物さへ
あれば出来る。第二の畫は物と感じと兩立すれば出
来る。第三に至つては存するものは只心持ち丈けで
あるから畫にするには是非共此心持に恰好なる對象
を擇ばなければならん。然るに此對象は容易に出て
来ない……(四八九)

生き別れをした吾子を尋ね當てる爲六十餘州を回國
して寝ても覺めても忘れる間がなかつた。ある日十
字街頭に不圖邂逅して稻妻の遮るひまもなきうちに
あつ、此所に居た。と思ふ様にか、なければならな
い。(四九〇)

と思ふと、どうも満足な畫が書けない。ぢや詩にしよ
うと思ひ返すと作詩の歷程は、

葛湯を練るとき最初のうちはさらさらとして箸に手應
へがないものだ。そこを辛抱すると漸く粘着が出て、
攪き滑せる手が少し重くなる。それでも構はず箸を
休ませずに廻すと、今度は廻し切れなくなる。仕舞に
は鍋の中の葛が求めぬに先方から争つて箸に附着し

觀海寺の納所が彼女に戀した時、彼が和尚と一緒に本
堂で讀經してゐる所へ飛び込んで、

「そんなに可愛いなら佛様の前で一所に寝ようつて
出しぬけに……(四七八)

納所の頸つ玉へかじりついて對手を面喰はしたと云
ふ。了念坊はよい茶目だ。

早く行つて和尚さんに叱られて来れえ
いやもう少し遊んで行つて賞められよう

勝手にしろ口の減られえ餓鬼だ
咄この乾屎橛(四八四)

歸來又人生觀や藝術觀について想をめぐらす。

踏むは地と思へばこそ、裂けはせぬかとの氣遣ひも
起る。藏くは天と知る故に稻妻の米嚙に震ふ怖れも
出来る。人と争はれば一分が立たぬと浮世が催促す
るから火宅の苦は免れぬ。東西のある乾坤に住んで
利害の綱を渡らねばならぬ。身には事實の戀は嫌で
ある目に見る富は土である。握る名と奮へる譽とは
小賢しき蜂が甘く醗すと見せて針を棄て去る蜜の如
きものであらう(四八七—四八六)

余が心は只春と共に動いて居ると云ひたい。あらゆ
る春の色、春の風、春の物、春の聲を打つて固めて

てくる詩を作るのは正に是だ(四九三)

と思ふ。そこで、

青春二三月 愁隨芳草長

閑花落空庭 素琴橫虛堂

蠶婦掛不動 篆煙纏竹梁

……

獨坐無隻語 方寸認微光

人間徒多事 此境誰可忘

會得一日靜 正知百年忙

假懷寄何處 緬適白雲鄉

と折からお那美さんが彼のいつかの話をきいて寫生の
材料を提供しようと云ふので向ひ座敷の廊下を盛装し
て澄まし込んで行つては戻りしてゐる(四九四—
四九五)

次には又意外な所で彼女に遇つた一人湯槽につかつて
スキンパインの詩など思ひながら遠音に響く三味線を
如何にも春の宵にふさはしいと思ひつゝ無責任に愉快
に聞いてゐる。そこへ突然あらはれたのが彼女の裸體
美であつた(五〇五—五〇六、氏の美學的形容が面白
い)

觀海寺の和尚と一緒に茶に請ぜられる。茶の論・書の

論、皆氏が一個の趣味眼を披瀝したものと見られる。次は彼と彼女の小説論(五二二—五三〇)

観海寺の裏道を辿ると鏡ヶ池がある。彼は或日こゝに漫歩の歩を曲げて峠で會つた源兵衛から此池の傳説を聞いた。それは日高川の清姫に似たもので又氏の「趣味の遺傳」に似た想のものだ。

昔志保田家(お那美さんの家)の先祖に美しいお嬢さんがあつて一夜の宿に梵論字を見初め、父母に許されずして此池に身を投じた。其時一枚の鏡を持つてゐた。それからこゝを鏡ヶ池と云ふんだと……それから志保田の家には代々氣狂が出る。今のお嬢さんも近頃ちと變だと云ふ噂ですとも云ふ……とそこへ又彼女の姿がチラと見えてチラと消えた。

それから観海寺を訪うて序に海近くを散歩し、れそべつてゐると男女の聲、お那美さんは財布を青年に渡して、やがて「先生」とやつて来て「あれはわたくしの亭主です」(五七八)と云つて驚かす。彼女の舊の主人「久一」は動員令が下つて滿洲へ出征するのである。それを見送ると彼と老人と彼女とは川船で吉田の停車場迄行く。「老人の言葉の尾を長く手繰ると尻が細くなつて末は涙の縁になる(五八二)女は私を繪にして頂戴

と云ふ。「畫には出来ませんがね。只少し足りない所がある(五八四)など云ひつゝ、驛につく。

汽車程廿世紀の文明を代表するものはあるまい……汽車程個性を輕蔑したものはない。文明はあらゆる限りの手段をつくして個性を發達せしめたる後あらゆる限りの方法によつて此個性を踏み附けようとする(五八七)

やがて其汽車が来た、久一さんはそれに乗る。しみじみとした別離の詞がめい／＼の口から出る。彼を山の中から引き出した久一さんと引き出された彼との因果は此で切れる。那美さんは無言で車上の人を見る。久一さんも無言で彼女を見る。鐵車はゴトリ／＼としてやがて久一さんの顔も見えぬ處まで運んで行く。那美さんは茫然として行く汽車を見送る。その茫然の中には不思議にも今迄かつて見た事のない「憐れ」が一面に浮いてゐる。

「それだ—それだ—それが出れば畫になります(五九一)と叫んだ。瞬間彼が胸中の畫面は美事に出来上つた(漱石全集第二卷四一—五九二)

くさりれんが 鎖連歌

連歌の一體で、尻取句を用ひ、前句の句尾の語を後句の

句頭に繰返し、次々句を連れるものをいふ。

くじき 舊事記 (先代舊事本紀) 十卷

序文面では聖德太子が撰ばれたものを、蘇我馬子等が勅を受けて更に修補した事になつてゐるが、通常は後人の偽作だと云ふ。神代より推古の朝までの歴史を書いたもので、記紀や古語拾遺などを取捨して綴つたあとが目立つ。眞の著者と年代が分れば古典研究の一資料ともならうが、今のまゝでは大した價值もない。

くじこんげん 公事根源

一條兼良の著、朝廷に於ける年中行事を平易簡潔に説いたもので一寸見るに便利なので今も行はれてゐる。(日本文學全書二二・關根正直氏公事根源新釋)

くずのわら 葛野王?

天智天皇の御孫、大友皇子の御子で、御母は天武皇女十市内親王、夙に學を好み、博く經史を涉獵せられ詩文に堪能でその作詩二首は懷風藻に載せられてゐる。

くせまひ 曲舞(久世舞)

語義は「正しくなく、一方に偏してゐる舞」の意だといふが、最初曲舞といつたのは、雅樂系統のもので、中右記大治五年十一月四日の行幸の記事や建長七年の伊

豫大三島神社の免田目錄などにあるのがそれである。が今日残存せるものは観阿彌が謠曲作製の資にとつたもので、この方の語義は「白拍子の舞に對してその如く正格ではなく當世風の舞」といふ意だといふ(併し世阿彌の「曲附書」には「惣別音曲といふ名目なるを舞の字を添へて曲舞とは名づけられた」ともあるから語原は未確定と謂ふべきであらう)曲舞の歌謠は謠曲の地の文を延長したやうな形で、對話は一つもなく謠曲に比べては遙に短小である。その篇數は光悅本の曲舞には三十六番、貞享四年の亂曲久世舞要集には七十二番、元祿十二年の當流拾遺蘭曲大成には百番を掲げてゐるがその大部分は謠曲中のサシ以下クセのあたりを抄出したものであつて、本當に原始の曲舞歌謠と見るべきは謠曲中の「東國下り」と「西國下り」だけだといふ。

ともかくこの歌謠の文學史的意義は謠曲の先驅をなしたといふ一點にある(高野辰之氏日本歌謠史五〇五—五一四)

くせものがたり 癩癩談 二卷

上田秋成の著。癩癩の人々數十の短話を集めた擬古文。(温知叢書四)

くさい 句題

漢詩の句から採つた歌の題をいふ。

例、句題五十首

初春待花・山路尋花・山花未遍・朝見花・遠村花・故郷花・田家花・古寺花・花似雪等。(秋篠月清集二の巻)

くつかつむり 沓冠

短歌歌態の一種で、各句の句題を連れ、句尾を連れて一種の意味ある語をなすやうに文字を配置した歌をいふ。つまり、句頭と句尾を折句にした短歌のことである。

兼好が心やすだてに頓阿に無心した歌

よもすしれざめのかりほたまくらもま袖も秋にへだてなきかぜ

の各句頭を連れると「よればたまへ(米賜へ)」各句尾を下の句から逆に連れると「せにもほし(錢も欲し)」となる之に對する頓阿の返し

よるもうしれなくわがせこはてはこすなほざりにだにしはしとひませ

の各句頭をつゞけると「よればなし(米は無し)」各句尾をつゞけると「せにすし(錢少し)」となつて「米はな

わらぎえ

と咏んで一座を驚かせたことが出てゐるし、定家の日記(明月記)には「承元元年、五月十日、宮内卿局昨日逝去、常馴人也、甚悲、近習奏事趣達、心操甚柔和」とあつて本人の心ばへもよし、歌友達として親しかつたことを謂つてその死を惜んでゐる(彼女はあまり歌に熱中してその爲め壽命を縮めたと云ふ。この承元はその年十月からの改正で、五月ならば建永の筈だがどういふ譯だらう?)鴨長明の無名抄にも俊成女と併せ稱へて「昔にも恥ぢぬ上手」と云つてゐる。惜しむらくはその人夭折ゆゑに多くの秀味を遺すことが出来なかつたことである。

新古今(一五)玉葉(一〇)などを見る、とその味は一帶に繊細華麗の趣に富んでゐる。

五十首歌奉りし中に湖上花を

花さそふ比良の山風吹きにけり漕ぎゆく舟のあ

と見ゆるまで

關路花を

あふ坂や木すゑの花を吹くからに嵐ぞかすむ國

のすぎむら

くにすけ 津守國助 一九〇一—一九五九、仁

ク の 部

て居る(古類、文學部一、五五〇—五五六)

くどうぜんないだいじん 九條前内大臣

もといへ「藤原基家」を見よ。

くない 北條宮内?

傳記未詳、知れて居るのは唯元神職をつとめ後やめて浪人となつた人で、それが江戸へ来て薩摩節淨瑠璃を始め、その流が江戸に廣まつたこと、古淨瑠璃中六段物を創めて作つた(以前は五段が普通、後世世話物は三段)ことだけである。

くないきやう 宮内卿 ?—一八六七、?—

建永二、五、九、

村上天皇の後裔右京大夫源師光の女、系圖は

村上天皇—具平親王—師房—左大臣俊房—權大納言

師頼—右京大夫師光—宮内卿

鎌倉初期後鳥羽院の官女で俊成女と並び稱せられた女流歌人で、又その外祖父は巨勢宗義なので巨勢流の繪にも堪能であつた。増鏡卷一おどろの下には後鳥羽上皇が千五百番歌合に、特に彼女の斯道執心に免じて當代一流の歌人と同座を許されたので感喜の極「おもてうちあかめて涙ぐみてゐたが、やがてその席でうすくこき野邊の縁の若草に跡まで見ゆる雪の

治二—正安元、五十八歳

住吉の神官、祖先からの趣味をついで詠歌に秀で、續拾遺(四)・新後撰(一六)・續千載(二〇)・新千載(一四)等にその詠が採られて居る。

くにつぶみよのあと 國文世々酒跡 三卷 伴蒿蹊、安永三年(二四三四)の作、同年刊行、古中、近の時代の文章を論じ、その代表的作例をあげたもので、いはゞ文體本位の國文學史の原始的なものである。附録として書體例、譯文例があげてある。

くにのぶ 源國信 一七二九—一七七一 延久

元—天永二、四十三歳

顯房の子、世に坊城中納言と稱し、王朝末期の歌學者にして且つ歌人、萬葉集に次點を入れることに與り、その味は金葉(四)・千載(五)・新古今(五)その他代々の勅撰集・堀河院太郎百首・堀河院覽書合等に出てゐる。

くにひと 丹比ノ真人 國人?

萬葉歌人、天平八年正月正六位より從五位下に昇叙、同十年七月民部少輔に任じた。歌は集の三、八、二〇の各卷にある。

くにふゆ 津守國冬? 住吉の神主、詠歌に秀で、新後撰(四)・續千載(一〇)。

二四三

新千載(一一)・新後撰(一〇)等に採られて居る。

くにもと 津守國基?—一七六三?—康和五
王朝末期の歌人、父を忠康と云ひ、攝津住吉神社の神
職家で、子孫同職を世襲し、又相ついで歌の名人を出
した。國基の歌は後拾遺に二三首・金葉に三首採られ、
家集に津守國基集(群二五三、九、七三一—七三八・續國
七四二—七八四)がある。

春色浮水

緑なる河べの柳かげさせば水にも春の色ぞみえ
ける

おほやけに申す事侍りしに申し文にそへて奏
者の御もとに

住吉のあまつ社のうれへには心よせなれ雲のう
へ入

住吉の堂の境のいしとりに紀の國にまかりた
りしに和歌の浦の玉つ鳥に神の社おはす尋ね
聞けば衣通姫のこの所を面白がりてかみにな
りておはすなりとかのわたりの人云ひ侍りし
かば詠みて奉りし

年ふれど老もせずして和歌浦に幾代に成ぬ玉つ
島姫

くにを 松岡國男

雑誌「文學界」の同人。

ぐびじんさう 虞美人草

夏目漱石が朝日新聞に入社して始めて作った小説で、
これを起稿する前氏は態々京都に旅行して暫らく葛屋
に滞在して居つた。そしてこの作品は四十年六月廿三
日から同年十月廿九日まで大阪朝日新聞に連載されて
好評を博したものである。此作の最後に甲野さんの日
誌に在るやうな運命の悲劇の嚴肅さを寫さうとした作
で、女主人公「藤尾」が死んだ時引き廻された屏風に描
かれた抱一の虞美人草の繪から思ひついた題である。

新體詩人小野清三(三十歳)は早くから孤兒であつたの
を恩師井上孤堂先生が、好意で大學まで卒業させて貰
つた。孤堂には愛嬢「小夜子」と云ふのがあつた。夫人はこ
の愛嬢を遺して數年前に物故した。小野は成績優等で
卒業の時には、恩賜の時計まで受領した。孤堂は老先
短いことゝて一刻も早く小野と小夜子とを結婚させよ
うと急ぐ。小野は、同期の哲學科出身の甲野欽吾(卅
歳)の異母妹「藤尾」に意がある。藤尾は宗近一と許婚
になつてゐるが、宗近は快活で、無頓着で、實行家で藤
尾の眼には深みが無い者に映る。お貢けに、外交官試験

に落第したと云ふので、藤尾の意は、頓に小野の方に向
ふ。彼女は今年廿四歳、心は容貌と共に氣高いとよりは
少し傲慢な位で、色ならば紫の女、古代ならばクレオ
パトラ、花ならば一瞬の輝きを誇る虞美人草と云つた
譬喩が用ゐられてゐる。甲野の父は外交官であつた。
それが在外中に病死したので尠なからぬ遺産は、長男
の欽吾が相続した。ところが欽吾の母は欽吾とは生さ
ぬ仲である。母(謎の女と云はれてゐる)は欽吾が厭世
的な思案に耽り、その上多くの遺産も、家も、自分は要
らないから、義妹の藤尾にやると言ふのを幸ひ藤尾に
養子をして欽吾を出したいのだが、世間體を整へる爲
に時節の到來を待つてゐる。處が藤尾の父が存命中、宗
近の父との間に、藤尾を一に娶はさうと言ふ暗黙の契
約が成立つた。それは彼が秘藏の金匱の時計に托して
一に向つて「この時計はくれてやるが、これをやると藤
尾がついて行くかも知れないよ。あれが此を一等好い
てゐるんだから」との戲談で、も當人同士一も藤尾
も承知してゐる處である。宗近も亦藤尾は好いてゐた。
外交官の夫人には、あの位の美人で、伶俐で氣高い女で
なくちやと思つてゐた。が藤尾には宗近は少し物足り
なかつたし、藤尾の母には宗近が世嗣である爲に養子

にするわけに行かぬと言ふので、此亦氣疎く思つてゐ
る。折から甲野家へ出入し初めたのが小野で、藤尾も母
も動機は違ふが等しく小野を養子にとの下心で、寧ろ
發動的に接近した。その結果小野はこの母娘に口約束
までした。一方孤堂先生は小夜子と小野と娶はす爲め、
且つは餘生を安樂に暮らす爲めに、京都を引拂つて東
京に來た。流石に年來の大恩ある舊師のことゝて義理
で、もちよいゝ出入しない譯には行かなかつた。そ
の中孤堂は小野に向つて結婚をいつするかと迫つて來
た。輕薄才子とよりは寧ろ情に脆い小野はこれをも無
下に拒絶し得ない。で「どうか二三日考へさせて下さ
い」と其場を濁し、淺井と言ふ極めて俗っぽい、氣の毒
知らずの學友に金を十圓やつて孤堂の方を斷らせた。
その理由は極めて不得要領であつた。「博士になりたい
から……しかと契約した譯でないから……先生の恩は
決して忘れないから今後物質的の補助でもさせて戴き
ますから」と言ふのであつた。小夜子は室を隔て、わ
つと泣き仆れた。孤堂は、怒氣心頭に燃えて「親にもな
つて見よ、娘にもなつて見よ、どの顔でそんなことが言
へる。人の感情を弄するにも程がある。だが、嫁だと言
ふものになつて貰つてくれい」と言はぬ。清三直接に

来て辯明しろ」と怒鳴つた。ホンの朝飯前のたのまれ事にして居た浅井はこの一喝に面喰つたが、聞いて見れば成程と思つた。やがてその足で就職口の周旋を頼むとて宗近の宅へ行つてその事をぞろつと云うた。宗近の方へは、その一寸前に藤尾の母が斷りに来た。「兄が家を出ると言つて聞きませんからあれには養子をしなけりやなりませんので」と云ふのが主な理由であつた。飲吾が出ると言ふことを聞いて、宗近はそれを忠告しようと言ふので甲野の家へ行つたが、飲吾の心持を聞いて見れば、満更止める氣にもなれなかつた。宗近の妹には糸子と言ふのがある。藤尾・小夜子と比べると容貌はや、おちる(が)通常よりは以上)が極めて平凡で、無邪氣で、親思ひ兄思ひで、五本の指を並べたやうな女である。それが内心では甲野を崇拜してゐるが、甲野に結婚の意志がないのを観て、心中深く悲觀し、自身も他へ嫁ぐことを思ひ止まつてゐる。それを宗近は不惑に思ひ、父の許諾を得て、この際妹の爲めにどうか僕の宅へ来てやつてくれまいか。でなきやあいつが可愛さうだから」と云ふ。飲吾もその意を諒して、糸子を妻にする旨を承諾する。その時庭前を漫步してゐるのは小野と藤尾とで、飲吾はそれを指して宗近に「藤尾は駄目だ。

あんな奴小野にくれてやれ」と云ふ。「ウーン、よろしい、僕も頭が出来たからなあ」と云ふ。蓋し宗近は第二回の受験に合格した旨を二三日前に通知されて、近々外國詰になる身の上である。その矢先浅井の斯うしたおしやべりは小野の現實を暴露したもので、宗近の心は義侠に燃えた。小野を改心させて小夜子を救ひ、同時に藤尾母子の性格を矯め直してやらうとかがつた。實際小夜子は可憐な女であつた。舊日本の女性の美點を一人で持合はしてゐるやうに優しく、しほらしく、美しく、弱しい女であつた。それに飲吾と一とは、彼女とは前後四回機會が與ふる偶然の邂逅をしてゐる。始めは叡山の歸りに京の三條の葛屋に泊つて河一つ隔て、小夜子の琴を聴いた。次は嵐山の清遊で花見の群衆に交つた彼女を見た。次は歸京の際はからずも同じ列車に乗合はした。最後に上野の博覽會の夜景を見ての歸りに池の端の茶店で落合つた。その女郎花のやうな優しい女性の失望はまさしく見る様な心地にもなつたらう。よしおれがで父に相談して、孤堂先生の處へ行つて貰つて、父子を慰め、同時に自身小野を訪うてその不徳義を忠告した。小野はその日の午后三時を期して藤尾と新橋に落合つて大森の梅見に行く約束をしてゐたが、ひ

よつこり宗近が来たので「生憎」と思つた。「君、人間は一生に一度や二度は眞面目になる時が無かつちや駄目だぞ」と冒頭して、言々句々爬羅剔抉の熱辯を振ふ。宗近の忠告に元來人のよい小野は段々悔悟して「イヤ有難う、僕が悪かつたです、藤尾さんにも小夜子にも済みません。ぢやあ私は小夜子と結婚をしますから、どうかよろしいやうに」と折れる。宗近も悦んで早速手紙を車夫に持たせて小夜子にそこへ呼び寄せ二人を同道して甲野の宅へおしかけると、飲吾は家出の準備最中で亡父の肖像畫を下さうとして、下から糸子が手傳つてゐる。「あまり早急すぎる……雨が降るから……藤尾が不在だから……」とて色々止めめる……とそこへ三人がやつて来た。……と間もなく藤尾は三時二十分過ぎに柳眉を逆立てながら歸つて来た。違約の罪を責めて散々に小野の背を絞るつもりであつたところが宗近が立つて小夜子を紹介する。「これは小野君の夫人小夜子さんです」ときつぱり云ふ。藤尾の驚愕は譬ふるに物なして「イイエ違ひます……小野様は私の夫です」と云ふ。小野は悄然として「みんな私の責任です、私はどうしても小夜子さんと結婚いたしますから悪しからず……」と云ふ。藤尾は化石したやうな手に件の金時計を出し

て、「ぢやあこの時計は小野さんにはあげません。宗近さんにあげませう」と手渡す。宗近はそれを大理石の處へ打ちつけてこな微塵にして「私はこんなものを得る爲にこんなことはしません」と云ふ。藤尾はブルブルふるへて懸てげつたりと仆れた……。

香煙縷々として抱一が虞美人草の蔭に美のむくる、驕慢の屍が横はつてゐる。お通夜の宗近や甲野の忠告に流石の謎の女の繼母も我を折つて今後は純な心に入ればかへて素直に接して行くことを誓つた。宗近は間もなく倫敦公使館附に任命されて赴任した(漱石全集第三卷一四七七)

くまそせいばつ 熊襲征伐

資料、古事記上ノ七、中ノ三二・古事記傳五ノ一五、二七ノ一一・日本書紀七(景行紀一二)・釋日本紀一〇ノ五・八幡宮本紀一ノ一四・歴代鎮西要略一ノ上ノ九・鳩巢小説中ノ九・日本書紀通證一ノ二ノ五・日本歴史略一ノ二・類聚名物考二ノ一三・古史傳三ノ二八・神功皇后御傳記上ノ五・國史紀事本末四ノ一・飯田武郷日本書紀通釋三ノ一六〇六、一七八八・靖方溯源 上ノ三三・國史綜覽二ノ一九・次田潤古事記新講三七五―三八五・廣文庫第六册九〇三。

くめのぜんし 久米禪師

萬葉集卷二にその味あり、傳記未詳。

ぐもんけんちゆう 愚問賢註 一卷

歌道につき二條良基の問を頼阿法師が答へたものを良基が貞治二年(二〇二三)に輯めたもの今續群四五九一六ノ下、七四八―七六〇に入る。松井幸隆の愚問賢註六窓抄五卷始め外二三之に關する註解批評の書も出て二條家の歌風や頼阿・良基の歌風を知る上の参考になる。

くりからだに 俱梨伽羅谷(栗殼谷)

資料、平家物語七ノ一・參考源平盛衰記二九ノ五、一九・謡曲「木曾」・謡抄「木曾」四・謡曲拾葉抄「木曾」七・義經記七ノ二六・神明鏡下ノ一・本朝通鑑三九ノ四六・甲子夜話、續篇一ノ二三一・近世文藝叢書三河雀四ノ五〇四・地名大辭書。

くりのものとしゆう 栗本衆

鎌倉初期後鳥羽院の頃、連歌が勃興して多くの連歌師が輩出したが、その中典雅優麗の有心派と機智滑稽の無心派との二派を生じて前者を柿本衆といふのに對して後者を栗本衆といひ、藤原宗行・僧泰覺などが、その主なる歌人であつた。始めは栗は柿にけおされて居つたが室町期に入つて、形勢一變柿が栗に壓倒されるや

うになつた。(「柿本衆」をも見よ)

くろとかげ 黒蜴蛭

廣津柳浪、二十八年五月作の小説。

與太郎の父「吉五郎」と云へるは年六十に近けれども骨太く肉脂づきたり。太く高き鼻の先垂れて鳶の嘴の如く、大なる眼は白眼がちてぎよる付き、唇厚くして且つ反りたり。緒く禿げて光たる頭の上には十筋ばかりの白髪を集めて鬚を落し、刷毛先を散したるは鍬銀杏の昔を尙ほ今に忍べるにや。明衣は脱ぎて投出し、年には羞かしかるべき鍾馗の文身なし素裸になりて胡坐をかきたり。前には鮎の刺身を竹の皮のま、膳をも出さで疊に置き、右手には五合徳利、左手には盃に湯呑をさへ面倒なりさや、飯茶碗をとりたり。(一八一―一八二) 其子の「與太郎」は實は貰ひ兒で二つの年の秋「世話するものあるに任せ親知らずの約束して腹も痛めず我子と(一八九)したのだが「養母は今より十年前春三月雪降りし年の其月の上旬より餘寒に中てられ幸なく餘病さへ起りて、半月さは臥しもせて散るを櫻の盛りなる頃(一八九)腕くも世を捨てた。與太郎は若年ながらも小臍がきいてゆくは天晴一人前の大工になりさうなので養父吉五郎は利害の上から打算して義理あ

る中とは云はないで實子同様に扱つてゐた。此與太郎孝心深く父の命とあらば如何様の辛い辛棒もする。其上律義で手がきいて居るものだからひどく世間の信用を得て、遂に棟梁の媒介で女房を迎へた。此時にも吉五郎は「今でからに、おれに好きな酒さへようあてがはぬ者が嫁なご迎へて、餓鬼がふえた位にやたまらぬえ」と拒絶したが媒介の道理ある辭を呑み兼ねて不承不承承知をした。

「斯て棟梁が媒妁に迎へしは何處へ出しても羞かしからぬ容女。色白にて眼に権をもち口尻あがり小股しまりて半天を引掛け吾妻下駄を突掛し姿は與太には惜しきと仲間評判され美まる、迄夫婦間は睦まじかりしに何とかしけん廿三日目に逃歸りて彼方より無理離縁を乞ひぬ。次に迎へしはむつちりした丸顔、眼の下に黒子ありて愛嬌ばたくと落ちなん風情、年も十七咲出し花に比べたりしに、或夜泣明せし次の日、吉五郎が洗湯へ行きし留守の間に見えずなりぬ。六人目迄は三十日とは辛棒せず(一九二)七人目に迎へられたのは名を「お都賀」と云つた「お都賀は俗に厄年と云ふ十九、細面にして下品ならぬ面貌も名から松皮と稱ばる、黒痘痕、眼さへ左には星入りたり、鼻も口も尋常ながら眉毛

は赤土の土手に、枯木の扶疎なるも斯や、髪はいぼじり卷の鬘も鬘も火の點くばかり脂なく亂れぬ。苦痛に神勞れ氣衰へ結びし唇頭打顛ひ(一八八)今は臨月而も産氣づいて陣痛の爲に眼を白黒させて居るのに、舅の吉五郎は酒の小言や着の不足で與太郎が歸ると不平だ。だ。「全體手前なんど餓鬼を生む柄ぢやない。親の養ひも充分にようしないで」と云ふ。お都賀のうめきを聞いても平然として「酉の市の賣残りなら強勢だが蟾蜍の隻目と来ちやア昔なら兩國だが、今ぢやア奥山もんだ。生れた其子が蛇男、親の因果が子に報ふやア評判ぢや」と空徳利もて板の間を打ち敲く(一八七)

幸にも無事安産、其子も丈夫而も男兒「與吉」と名づけ夫婦の鍾愛は似るものも無い位。一方吉五郎の剛腹も亦無類と云ふ始末、其不安な家庭の或日一寸した行違があつた。舅が又しても酒をいびる所から、お都賀は酒屋へ小走りするつもりで自分の財布を取上げるとあつた筈の甘銭が無い。ハテをかしいと云つたのが、抑抑で舅は「人を泥坊呼はりした其分では差はおかぬぞ」と威丈高のぶち打擲、實は與太郎が我子の喰ひ初めの膳椀を買はうとて持つて出たことがわかつて又一騒ぎそれさへあるに夫の留守の間には時々お都賀を挑んで

言ふことを聴けと言ふ「そんな淺ましい」と刎れつける
 とまた大きな聲で怒鳴る。お都賀は茲に至つて此迄六
 度まで與太郎の妻が逃げた譯がわかつた」とは云へ兩
 親には幼時死別れ頼みにすべき兄弟もなければ親籍と
 ても構つて呉れざる生來ならぬ不具に等しく色も香
 も無き此身を縁ものとは云ひながら女房にして呉れた
 る夫の志こそ忝けれ。岳父の何程も辛くば辛かれ美事
 に辛棒爲遂げて鬼を佛に爲しなんこと我心の持ち様一
 つなるべし(一九三)と愈々つらければ益々やさしく
 仕へたが一旦つむじの曲つた吉五郎の性悪は齷るべく
 もない。或時近所の婆さんがゆくり無くも「亭主投る
 にや何の手が好かる、青い蜥蜴に蠅虎まで(二〇六)
 と云ふ古唄を話すとお都賀に潜在した身に對する憎悪
 がムラ／＼と燃えて、つひそれを試めす氣になり末恐
 るしくも青蜥蜴の毒をもつたが吉五郎には別に異狀は
 無かつた「お婆さん何の事もありやア爲れえよ。唄な
 んか虚偽なんだれ」と云ふ。婆はびつくりして「お前
 そんなことをして見たのかい」と言ふ「戯談ちや無い」
 戯談ちや無いと淋しげに笑ふ。話の末に又その婆さん
 が「お前の所の吉さんなんぞ何を食したつて效くめ
 えよ、青蜥蜴で無効きやア黒蜥蜴でも食して遣るさは

は、(二〇七—二〇八)と云つた。此が暗示とな
 つてお都賀はとう／＼黒蜥蜴の毒を吉五郎に盛つた。
 更たけて燈消え異臭紛々たる中へ、ヒョッコリ歸つた
 與太郎があわて、灯をつけるとそこには吉五郎の死骸
 が横たはつて居た。耳からも口からも血を吐いて悶絶
 して死んだ光景が思ひやられる「お前さまを樂にした
 い他に願ふ事は何もないのです」(二〇九)云々とのお
 都賀のききおきもあつた。お都賀は其夜淵川へ身を投
 げて翌朝濱町河岸の處で死屍となつて見出された。み
 じめな葬式が二日續いて與太郎の家から出された。
 「晝間は乳を貰ひにとて、夜間は泣く子をすかさんとて
 或は人の間に立ち或は子守歌うたひ歩く物の哀れは與
 太郎が上にぞ止めたりける(二一〇)(柳浪叢書後篇一
 七九—二一〇)
くろづか 黒塚
 あだちがはら「安達が原」を見よ。
くろぬし 大友黒主?
 王朝初期の歌人、長生して延喜の御代にも存命して居
 た。六歌仙の一人で有名だがその味は餘り多く傳はら
 ない。近江國滋賀郡大友郷に生れ、郡の大領で從八位
 上に叙せられ園城寺の地主をも兼ねてゐた。寛平法皇

(宇多上皇が屢々石山に御幸あり、國人心尙にその費
 を厭ふと聞し召し、他國の奉邑の費を以て御幸になつ
 た。國人聞いて非常に恐懼し、亭を打出濱につくり菊
 花を植ゑて御もてなしをしたが、然るべき接待の人が
 ないので人選の結果この黒主をしてその事に當らしめ
 た。その時彼の奉和歌は
 さゞら浪間もなく岸を洗ふめり清清くば君とま
 れとか

するかな
 玉津島ふかき入江をこぐ舟の楫とりあへぬ戀も
 するかな
 「思ふに彼は京近くの住まひながら足餘り國境を出で
 ず交らひを當世歌人に求むることもなかつたので、推
 し移る中央歌壇の風潮には影響されないので、よく萬葉
 の遺風を保ち得たものであらう(藤岡博士の評)」
 彼は又時に軽い諧謔を弄して
 鏡山いざたちよりて見に行かん年へぬる身は老
 いやしぬると

醍醐天皇踐祚大嘗會の御屏風繪には
 近江のや鏡の山をたてたればかれてぞ見ゆる君
 が千歳は
 又、題しらす
 はる雨のふるはなみだかさくら花散るを惜まぬ
 人しなれば
 これ等は彼が會心の味であつたらう。
 彼の歌には又萬葉振の大味なゆつたりとした序詞めい
 たことばをやとつて叙景と叙情のなひませなうまく味
 出したのである。
 思ひいでて戀しき時は初雁のなきてわたると人
 しるらめや
 白浪のよする磯間をこぐ舟の楫とりあへぬ戀も

など云ふ。要するに彼は毎首どこかに一節ある歌をう
 たひ、景情融合歌をうたひ、輕快なをかしみなうたふ
 所は長所だが、着想に幽玄高雅の詩致なきが缺點であ
 らう。家集はなくてその味は古今(四)・後撰(三)・拾
 遺(二)・續後拾遺・新千載等に散見してゐる。
 諸曲「草紙洗小町」などによつて彼の人格を卑しとする
 は誤れるの甚しきもので、彼には決してあゝした中傷
 的の言動はなかつた。
くろひと 濱邊黒人?
 通稱三河屋半兵衛、天明頃の狂歌作者。
くろひと 高市連黒人?

萬葉歌人、傳未詳、歌は萬葉の一、三、九、一七の各卷並に玉葉・新拾遺に出て居る。

(上田秋成の雨月物語に「鶯鴛行」と題して彼れ等夫妻の睦まじい旅行を面白く美文文化し小説化したものがある)

くろほん 黒本

徳川時代の草双紙中享保から安永にかけて黒表紙のものないう後「黄表紙」に變つた(「草双紙」をも見よ)

くろまさ 高向玄理? — 一三〇九、? — 白雉五始め漢人といひ又黒磨とも云つた。上代に於ける漢學者で外國に行くこと三回、その三回目に終に彼の地で病歿した。

第一回は推古天皇の第十七年小野妹子について留學生として隋に行つた。滞留三十三年と云ふ長い間。

第二回は大化二年新羅に使し上臣大阿治金春秋を連れて還つた。

第三回は白雉五年遣唐押使として渡唐し高宗に謁し東宮監門郭文舉の間に應じて我國の地理歴史などを語つたが滞留數月にして病死した。

地位は大化元年、國博士・小徳冠・同五年、大錦上・勅を奉じて八省百官を議し・白雉五年遣唐押使。

撰者は淡海三船だと云ふ(林恕の説)が確證がないから未詳としておく。

初期の撰集としては、誠によく整ひもし纏りもしてゐる(時に名家の名篇——山上億良が萬葉卷五の「愛河波浪已先滅云々」や阿部仲磨が、日本に使せんとして「衛命將辭國」などの洩れたものもあるが)思ふに、漢魏六朝の詩賦から得た暗示であらう。この點に於て懷風藻は支那文化の消化程度を示す一個の目標ともなつてゐる。それと同時に支那文學の弊——何でも實質的に活寫しないで形式的に型に嵌めてしまふといつた風の……弊をもまねてゐる。譬へば作者の傳記文を見ると

大友皇子

皇太子者 淡海帝之長子也 魁岸奇偉 風範弘深

眼中精耀 顧盼煒燁 唐使劉德 高見而異曰 云々

(大津皇子のも同様であることは「漢文」の項に述べておいた)

但し又本書の作家中萬葉歌人たるもの十八名で三十九篇まで本書に採られてゐるのを見ると萬葉集と漢魏六朝文學との交渉を見る上に於ても本書は有力な一資料である)この書以來王朝初期にかけて漢詩隆盛の一期を生んだが、國民的自覺と共に國文國歌の擡頭につれ

要するに我邦上代に於て支那文化を紹介した先覺の人である。

くろまる 忌部首黒磨?

萬葉歌人、孝謙寶字二年八月外從五位下に叙せられ淳仁、寶字三年十二月七十三名と共に姓連を賜はり、同六年正月内史局ノ助(圖書を司る官)に任じた。歌は萬葉の六、八、十六の各卷にある。

くわいしらうおう 槐市老翁

ためやす「三善爲康」を見よ。

くわいとくしよゐん 懷徳書院

徳川時代の儒家中井菴庵の私塾で始め尼崎に開かれ、後大阪に移り知名の學者をも出し、一般好學の風をも振起し、關西平民大學とも謂ふべき一偉觀を呈して居つた。明治に入つてこの書院の功績を追慕し記念講演や記念出版を催された(懷徳堂記念會發行・懷徳堂遺書十五冊)

くわいふうさう 懷風藻 一卷

孝謙天皇の天平勝寶三年(七五一)十一月に、撰ばれた我國最初の漢詩集で、近江朝から奈良朝まで約百年間の作家六十四人の詩百二十餘篇を大體時代の順を追つて排列してある。

漢詩は一個裝飾文藝の觀があり、この書の正文も方々に流布しないで蓮華王院即ち今の三十三間堂に傳來せる一本が貴重原本となり、鶴飼・山脇二氏の梓行となり(但しこの梓行がいつのことか又果して蓮華王院本によつたかどうかは不明)更に丹波篠山の藩儒松崎祐之が校訂して寶永本を出したのを再刻したものが古典全集本である。

くわいぶん 廻文

一方蓮華王院本を底本とし、奈佐勝早屋代弘賢所藏本作直方所藏本とを對校したものが群本(一一二、六、四四五—四七〇)である。

短歌俳句などで上からよんでも下からよんでも同じ語句となる様に音排列を工夫したものないう。

例「なかきよのおのねふりのみなめさめなみのり

ふれのおとのよきかな
ふとにけたくひすひくうたけにとふ(古類文

學部一、五五六—五六七)

くわうかもんゐんのべつたら 皇嘉門院

別當?

王朝末期の女流歌人、大宮權亮源俊澄の女で、崇徳后皇嘉門院藤原聖子に仕へた、千載・新勅撰などにその咏

が採られてある。

くわうしう 榊原篁洲 二三一六―二三六六、
明曆二―寶永三、五十一歳

和泉の人、名は玄輔、字は希翊、木下順庵について儒學を修めたが、自身は別に一派を首唱せず（この意味に於て折衷學派の先蹤を爲すものと謂ふことが出来る）後紀州藩の儒官となり命を以て明律譯解三十六卷を著した。彼は又多藝多才で星曆・槍術・射御・醫卜・茶香・園藝・猿樂の各方面に該通した。その著に、篁洲文集・篁洲雜記などがある。

くわうそん 饗庭篁村（竹の屋主人） 安政
二一八、―大正一一、六、二〇、六十八歳

東京の人、江戸文學に精通し、殊に劇評家としての一權威であつた。作品として多くの小説がある。一體が八文字舎風の文章を現代に消化し、輕妙洒脫な想を盛つた作意のものばかりで、二十二年五月新著百種の「掘出し物」同十月の「むら竹」二十二年の「當世商人氣質」などは殊に名高い。名家小説文庫中の「篁村叢書」には「紅雀」以下十四篇の作品が収めてある。

くわうもんぎくわう 黄門義公
みつくに「徳川光圀」を見よ。

くわげつざうし 花月雙紙 六卷

松平定信の隨筆で、花月のさだめ以下二十九日百五十六編、文體優麗にして枕草子・徒然草と共に本邦隨筆の珍とせられてゐる。但しその想は稍備致に囚はれて趣味の純粹を妨げた嫌もある。近頃入學試験問題によく採られる關係上多くの註解書が出てゐる（百家説林八・袖珍名著文庫一九・佐野保太郎氏新釋花月雙紙）

くわさう 中村花瘦（雪後）？―三二下？

硯友社同人の小説家で、後に萬朝報記者になつた。檜木笠・五少年・谷間の雪・離れ鴛等約四十篇の作がある。

ぐわじやう 吉野臥城？

新體詩家、仙臺の人、名は甫、その著「明治詩集」は略明治の斯境の秀作を網羅し得て居る。長詩の集に「小百合集」「野茨集」などがある。

くわたい 田山花袋 明治四、二一

上州館林町の人、名は録野、十一歳志を立て、上京、書肆有隣堂の店員、日本法律學校の學生と轉々して、終りに文筆を以て立とうと思ひ、二十七年に處女作「瓜畑」を尾崎紅葉主宰の千紫萬紅から出さうとしたが、紅葉が承知しなかつたので、その頃から文學界一派に接近するやうになり、二十九年太陽誌上に「日光山の奥」な

る一篇を出してから紀行文作家として認められるやうになり、三十二年「ふるさと」を出して小説界にも認められた。その頃の作品はほんの淺薄な星莖的な戀愛を

主想にとつたものばかりだが、その純真な可憐味に一種讀者を惹きつけるものがあつた。その後一時ゆきつまつて數年の苦澁停滯があつたらしいが精力家であり勤勉家であり、よく世の推移を察知して巧に適應のこつを知り、三十五年「重右衛門の最後」を出すに至つて自然主義的な近代味を發揮し、ついで「蒲團」を出し「平面描寫」を唱へるに至つて斯境の第一人者として、自然主義代表作家として、萬人の推重するところとなつた。大正期に入つても盛に創作をつゞけたが創作としての最高潮は何といつても明治四十年前後自然主義の初中終の頃であつた。大正期では寧ろ「近代の小説」のやうな回想記録に佳いものがある（花袋全集十二冊・花袋小説集）

くわつしよ 那波活所 二二五五―二三〇八

文祿四―正保五、正、二、五十四歳
播磨姫路の人、名は帆、京に出て藤原惺窩について朱子學を修め、元和元年徳川家康に侍講し、ついで肥後侯に仕へ、寛永十一年四十一歳からは紀州侯頼宣に仕へ

て祿五百石を食み侃々語々たる直言を以て輔匡するところ尠くなかつた。活所遺稿・人君明暗圖説・通俗四書通音考・活所備忘録・老圃集・帝王曆數圖等の著がある。

くわつれき 活歴

明治初期市川團十郎によつて演ぜられた史劇で、つまり「劇なるものは歴史を活寫すべきである」との見解から言語・風俗の一切を故實に照らし考證的に確實に演出した（これは劇や史劇の本質觀の誤りから起つたものである）

くわんあみ 觀阿彌 二〇一五―二〇六六、文
和一〇―應永一三、五十二歳

伊賀國杉内の人、結崎三郎清次のこと、その先は桓武天皇から出てゐる。足利三代將軍義滿に仕へて童坊の役をつとめ、名を觀阿彌と改め、大に殊寵を得、遂に能樂を改正擴張し自ら謠曲をも作成した。子世阿彌・孫音阿彌・相ついでその樂道を大成し、觀世音の夢の御告げに基づいて、その派を觀世流と呼ぶことにした（一説には觀阿彌・世阿彌の親子の頭字を採つたのだとも謂ふ）子孫連綿として、その職を襲ぎ、徳川幕府時代には能役者中の首席を許され、以て現二十三代清康氏に至る。彼が作に係る謠曲は次の十四曲だといふ。

鉢の木・花篋・鶴・吉野靜・道成寺・卒都婆小町・松風・卷
絹・淡路・草紙洗小町・自然居士・白髭・百萬・求塚。

くわんがくゐん 勸學院

王朝始の私學の一つで、嵯峨天皇の弘仁十二年左大臣
藤原冬嗣が自己の食封を割いて建てた藤原氏の學問所
で、大學の南にあるので又之を南曹といふ。冬嗣の後
良房が復再興し藤原氏の盛んになるにつれて、こゝも
益々榮え遂に官學をも壓倒するやうになつた（當期の
物語に學生のことを書いたものはこの學問所をモデル
にしたものではなからうか）（古類、文學部二、一二九
五―一三〇八）

くわんけ 菅家

みちざね「菅原道眞」を見よ。

くわんけこうさう 菅家後草（菅家後
集） 十二卷

菅原道眞が筑紫へ左遷後の漢詩集で、言々句々血涙の
文字に富んでゐる。

離家 三四月 落涙百千行

萬事皆如夢 時々仰彼蒼

を始め「燈滅」の詩や「去年今夜」の詩や人口に膾炙した
ものも尠くない。（群一三一、六、八三七―八四五・楊

牛全集第三卷三一八―三三五「詩人菅公」

くわんけこうしふ 菅家後集

くわんけこうさう「菅家後草」を見よ。

くわんけしふ 菅家集

みちざね「菅原道眞」を見よ。

くわんげつ 米光關月 明治七、三―大正四、五、
八、四十三歳

下ノ關の人、名は龜次郎、馬關商業を出て東京専門學
校に入り、中途にして退學、後放浪生活に入り、幸田
露伴に弟子入りして、小説や詩作に堪能であつた。そ
の小説には生駒山・雨の月・薄墨の松・鳥の鶏園・相尅等
四十餘篇あり。

松は黒みて更けたれど 花はあかるき宵の口

山門おぼろおぼろ夜の 石だたみ道雪駄ちやらつく

は四行詩として「初潮」に出したものである。

くわんけぶんさう 菅家文草 十二卷

菅原道眞の詩文集で寛文中に一度刊行せられた。

くわんけまんえうしふ 菅家萬葉集

「新撰萬葉集」を見よ。

くわんさい 畠中觀齋？

名は正盈、號は朋脉、寛政文化頃の狂詩作家として聞

えた人。

くわんさんぼん 菅三品 一五五八―一六四

一、昌泰元―天元四、八十四歳

王朝の學者で漢詩人、高規の子で地位は從三位・文章博
士・非參議、その漢詩・漢文は、扶桑集・本朝文粹・天徳
關詩記・和漢朗詠集に出、封事一篇は群四七四・文粹二
に出、歌は拾遺集にある。

山中有三仙室

丹竈 道成 仙室 靜 山中 景色 月 華 低

石床 留洞 嵐 空 拂 玉案 拋 林 鳥 啼

桃李 不言 春 幾 暮 烟霞 無 跡 昔 誰 栖

王喬 一去 雲 長 斷 早晚 笙 聲 歸 故 溪

廉義公後院にすみ侍ける時歌よみ侍け

る人々めしあつめて水上秋月といふ題

をよませ侍けるに

みなそこにやどる月だにうかべるをしづむやな

にのみくづなるらん

くわんし 吉田冠子？

通稱文三郎、寶曆の頃、大阪に居た傀儡師で戯曲作者。
その作、小野道風青柳硯は有名だが、尙左記の十一曲
を作つてゐる。世語言漢楚軍談・子歳立春娘小松・吉野

合戦名香記・薩摩歌妓鑑・姫小松子日の遊・平維茂凱陣
紅葉・崇徳院讃岐傳記・伊達錦五十四郡・愛護雅名歌勝
関・菖蒲前操の弦・小袖組貫練門平。

くわんし 近松貫四？

光格天皇の天明頃の人、通稱は萬屋吉右衛門。江戸葺屋
町で茶店を渡世とする傍ら淨瑠璃を作つた。伽羅先代
萩・戀娘黄八丈は一代の名作である。（但し二種とも他
と合作）その他櫻姫操大全・瀬川染・女郎花縁助太刀・蝕
鉦駄六一代噺等の作がある。

くわんじ 冠辭

まくらことば「枕詞」を見よ。

くわんせいいがくのきん 寛政異學之禁

「異學之禁」を見よ。

くわんねんせうせつ 觀念小説

或種の主想又は落想を目標においてその想を具體化し
現實化した小説をいふ。二十八年泉鏡花が文藝俱樂部
誌上「夜行巡査」を發表した。これは「戀と責任感との
葛藤」舊式にいへば「義理と人情のいきさつ」が主想で
始めて「觀念小説」の名稱を以て呼ばれたものだが、同
年眉山の作「書記官」「うらおもて」なども「社會の缺陷
と美人の薄命」を主想としたものであつた。鏡花のこ

の種作品には尙、外科室・鐘聲夜半録・海城發電・琵琶傳・化銀杏などがある。これは以前の硯友社一派や露伴の皮相的な寫實寫想の單調稚拙から一步を秀いでようとした努力によつて生まれたものだが、本當によい觀念小説を作るには當時の作者は美學や社會學や哲學の素養が不充分であつたのみならず、事實から歸納した主想とよりは成心を以て先驗的に主想を定めそれから逆戻りしてその想に向くやうの構想をめぐらす處から何となく仕入れの借家普請を見るやうな趣がある。

くわんらい 大島完來 二四〇八―二四七七、延享元―文化一四、四、一八、七十歳

本姓富増氏、通稱は吉太郎、號は駢翁・空華・野狐窟などいひ、元、伊勢・津の藩士で、俳諧を好み、始め二世宗瑞に入門して震柳舎と號し、後大島蓼太の門に入りその俳才を認められ、擡でられて養嗣子となり、雪中庵四世と稱す。又書を東江源鱗に學び、能筆の譽があつた。家集を完來句集といひ、此亦世に行はれた。

くわんらん 三宅觀瀾 二三三五―二三七八、延寶三―享保三、四十四歳

京都の人、名は緝明、後、江戸に出て木下順庵の門に入り、水戸侯光圀の召に應じて修史の事に仕へ、晩年暮

府の儒官となる。その著に觀瀾文集と云ふのがある。

くわんそん 護園

荻生徂徠と同じ「そらい」の項を見よ。

ぐんか 軍歌

軍隊の士氣を鼓舞する爲めに歌はせるもので、神武天皇の「おさかの、おほむろやに人さはにきみりなり云々」などから脈は引いて居るだらうが、通常軍歌といへば明治期に入つてから出来たもので、十五年發行新體詩抄載せるところの、テニスの輕騎兵進撃歌「一里半なり一里半」などから「大小二桶公を味する歌」「熊谷直實」などが流行し、日清戰爭頃には「大東軍歌」に佳作を收め、今日では戦友・凱旋・勇敢なる喇叭卒・黃海の戦などが歌はれて居る。

ぐんきもの 軍記物

鎌倉・室町時代、戰爭を題材として綴られた文藝作品を云ひ、又之を戦記物とも云ふ。保元物語・平治物語・平家物語・源平盛衰記・太平記などは、その代表的なものである。文體は華麗流暢な和漢混淆文で尙武・剛勇・忠節・禮義・廉恥・雅懐・任侠等凡そ作者が印象深い事象は見のがさず記して、所々自家の學殖を示したやうな和漢楚の引事なし義理と人情のナレンマに情を犠牲にし

て正義に瘖れる悲壯を讚美して居る。印象本位であるから史實の忠實な記述とは云へないが歴史小説に近い手法で立派に始終顛末を書きこなして居る(尙この軍記物を戰爭のことを書いた文學として廣義に解すると之等以外將門記や承久合戦記や應仁の亂や甲越合戦や徳川期に入つてまでの戰爭記録もあるから、これ等も皆軍記物に入れてよい譯だが上に謂つたやうな特色は見られないと思ふ)

ぐんしよいちらん 群書一覽 六卷

尾崎雅嘉が三十年間に涉獵した書物の中記憶に存するもの三十四門一千二百七十三種を列挙して各編目大意を説いたもので我國解題書の始めと謂つてもよい。脱稿は享和元年(二四六一)版刻はその翌二年六月で後の西村兼文の續群書一覽九卷(昨大正十五年復刊)と併せ見れば有益であらう。

ぐんだん 軍談

徳川時代、昔の戰爭について綴つた通俗戦記小説とも謂ふべきもので、清地以立の通俗武王軍談、速水春曉齋の甲越軍記などが名高い(帝文一八、一九、二〇の三冊に六種收まつて居る)

くんそん 金子薫園 明治九、一一―

東京の人、名は雄太郎、落合萩の舎の門下中興野鐵幹の叙情歌に對し叙景歌を以て有名になつた人で、三十四年の「片われ月」はその第一歌集である。後には叙情にも叙景融合にも何れにもすぐれた味歌をし、一體に温藉にして明麗、情趣と生彩に富んで居つた。小詩國・伶人・わがおもひ・覺めたる歌・山河・草の上などの諸歌集・作歌練習法・作歌辭典・歌に入る道・歌の作り方等の作歌法講話の書物を著し、その門からは多くの歌人を出し又、文章にも秀で「自然と愛」の散文集がある。

ケ の 部

けいら 中村敬宇 二四九二―二五五一、天保三、五―明治二四、六、七、六十歳

幼名銅太郎、長じての名は正直、敬輔と稱し、初め鶴鳴・梧山等の號があつたが後に敬宇と號した。江戸麻布丹波谷に生れ、葛原茂右衛門に四書の素讀、鹽田澗・石川梧堂に書、岩崎多左衛門に經書の素讀、平田馬之進・川崎魯助・井部香山に漢學、桂川甫周に蘭書を次に學んで、この時代としては能ふ限りの教養を積んだ。慶應二年九月に英國に留學を命ぜられ、明治元年

六月に歸朝し、五年同人社を起し、六年雜誌明六社に加入、九年西國立志篇譯述、廿一年六月文學博士の學位を授けられ、廿三年貴族院議員に勅選。

その近くや祭料金一千圓を賜はり、侍従東園子爵を遣して幣帛を賜つた。その著、自由之理又廣く世に行はれたなど、要するに氏は明治文明の恩人でその功績の中殊に顯著なのは西國立志篇を譯して健全なる國民道徳を鼓吹し、同人社を起して穩健な新文明教育を施した二事であらう。

けいろうん 慶雲？

室町時代の歌人、や、細かく謂へば後村上の朝（一九九八—二〇二八）の頃の人で、頓阿・淨辨・兼好と共に和歌の四天王の一にかぞへられ

いは結ぶ山の裾野の夕ひばりあがるを落る聲かとぞ聞く

の一首によつて「裾野の慶雲」とあだなせられた。近來風體抄に彼の歌態を評して

慶雲はたけを好みてものさびて、ちと古體にかゝりて、姿こゝろはたらきて、耳にたつやうに侍りしなり。爲定大納言は、殊の外に慶雲をほめられき

と謂つてをる。その味は、新後拾遺に四首、新續古今

に十三首採られ、その他の諸集にも散見する。家集を慶雲法印集（群二六六、一〇、一一—一二、續國九一二—九二〇）と云ふ。

山霞

さは姫の袖のわかればしられども霞にかゝる峰のよこぐも

若菜

さそはれどおなじ心にうちむれていくさと人の若菜つむらん

落花

はなさそふかたのゝみのゝ春風に雲のみをなる天のかは浪

蚊遣火

淋しとしてしばおりくべし面影を煙にのこす里のかやりび

述懐

わかぬ浦やもくづにまじるうたかたの哀をかけよ玉津島姫

獨述懐

我だにも思ひさだめぬあらしをそむかんまでは人にかたらし

懷舊

さのみかくみしいにしへの戀しきはいつより後の浮世なる覽

秋の歌のうちに

足がらの山立かくす歌の上にひとり晴たるふじの白ゆき

けいおん 沼波瓊音 明治一〇、一〇—昭和

二、七、一九、五十一歳

名古屋の人、三十四年帝大國文科卒業目下第一高等學校教授として在勤、傍ら著述に従事。國文學の造詣も深いが殊に學生時代筑波會員であつたのが機縁となつて、俳文學に精通し蕉風・芭蕉全集は殊に力作である。その他瓊音句集・高原の風・評註俳句選・芭蕉句選講話・芭蕉の臨終等の著がある。

けいかい 僧景戒？

奈良朝孝謙天皇の御代、藥師寺の住職で「日本靈異記」の著者として聞えて居る。

けいこくしふ 經國集 寫本六卷

我邦第四番目に出た漢詩の集、淳和天皇の天長四年（一四八七）良岑安世が勅を受けて主任となり、滋野貞主・藤原清公・安野文繼・南淵弘貞・安部吉人等と相談つて

撰んだもの、此迄の日の外、新たに賦類・雜咏・樂府をあげ、序及び省試の對策をも入れ（この點から觀ると正に一個の勅撰漢詩文集である）作家百十八人中には女流の高野天皇（孝謙）有智子内親王なども入る。賦一七・詩九一七・序五一・對策三八と目錄にはあるけれども、それは廿卷完結の形の時のことで中途散佚した爲めに現存するものは一、二〇、一一、一三、一四、二〇、の六卷だけである。嵯峨淳和の御代漢詩盛行の様をしのぶには必讀の好資料で、群一二五、日本古典全集等に入る。

けいこくびだん 經國美談 前編廿回 後編廿五回

矢野龍溪十六年作の政治小説で、正史の綜合補綴とも謂ふべき分子が多い。古代希臘聯邦の一つ齊武に於ける愛國の志士エマミノンダスが同志のペロピダス等と共に國歩艱難の間に處して武力と熱辯とを以て千辛萬苦の末に、自國を救ひ覇を唱ふるに至つた顛末を記し、當時の新興日本の青年に活を入れた力作である。卷頭に卷末に諸家の小説觀を漢文であげ、每章龍頭と章末に諸名家の評がこれも漢文で載せられ處々に趣味ある挿畫がある（菊判四五頁明治四十年九月廿八日文盛堂）

けいしき 形式

内容に對立する語で、なかみ(内容)を表すかたち(外形)をいふ。内容が立派で形式がよくないのは、饅頭の蒲焼を竹の皮包みにしたやうなもので、形式が立派で内容がよくないのは蒔絵の重箱に犬の糞を詰めたやうなものだ。文學では表現記述される事がらを内容といひ之を表現記述した言語文章を形式といふ。(近頃「形質一如説」が唱へられて内容即形式、形式即内容など謂ひ、内容の一つ一つの展開それ自身がその形式を決定するものだと云ふ。それは、正しい考察だが、文學鑑賞の便宜上内容形式と分けて観ることも必要にして且つ合理である)

けいさいいろく 經濟錄 十卷

享保十四年(二三八九)太宰純の書いたもので、支那歴代の事績を引證して我邦一般の經濟を論じた和漢混淆文體の書。その日は卷一、經濟總論・二、禮樂・三、官職・四、天文地理・五、食貨六、祭祀學政・七、章服儀仗武備・八、法令・九、刑罰・一〇、無爲易道。

けいせいあはのなると 傾城阿波の鳴門

明和五年(二四二八)六月大阪竹本座操りに上場、寛政元年六月江戸中村座歌舞伎切狂言として上演。作者は近松半二を主とし、竹田文吉・八民平七・竹本三郎兵衛・

吉田兵藏の名を連れて居る。筋は近松の「夕霧阿波の鳴門」に阿波徳島のお家騒動をからませたもので若殿玉木衛門之助、吉原の傾城高尾の愛に溺れ、内を外なる振舞を幸に、悪家老小野田郡兵衛は蛇河の團八などと結托して主家の横領を企て、目の上の瘤ともいふべき、忠臣櫻井主膳をばその預つてある國次の名刀を盗まれた(實は郡兵衛一味の所爲)廉を以て整居閉門させる。處が主膳の家來に十郎兵衛といふがあつて、勇力大膽若氣の至りに酒の場で人をあやめ「一つの功を立てるまでは勘當」と言ひ渡されて浪々の身の、後悔やるかたなく、主膳の奥方に縋つて勘氣を許されようとする。その時この國次の名刀のことをきいて、此こそ忠義のよい機と、甘んじて盜賊の群に入り、所々方々にさすらひの、果ては大阪玉造に居を構へた。こゝで入魂になつた藤屋伊左衛門といふのは此も櫻井家恩顧の筋として、互に心を合せて時機の到來を待つた。伊左衛門の許婚は邦屋のお辻といふ娘だが、彼には早くから吉田屋の夕霧といふ深間があつて身請けの代が五百兩その才覚は十郎兵衛の手でしてやつた。處が十郎兵衛の手から出た五百兩も實は藤屋からお辻へ贈つた結納金を盗みとつた金なのであつた。尙その上に伊左衛門

けいせいいろじやみせん 傾城色三味線

五册

其積が元祿十四年(二三六一)作の浮世草子で、彼の浮世草子が始めて、八文字屋で板行された時のものである。枕本で五册、西川風の挿繪があつて、一、島原・二、吉原・三、大阪新町・四、伏見鐘木町・五、播磨室津。各女郎の惣名をよせ綴つてある。

けいせいきんたんき 傾城禁短氣 六册

八文字屋本浮世草子中、最も喝采を博したもので、法論談義に准らへて衆道女色の優劣を辨じてある。寶永八年(二三七一)「作者自笑」として板行、自笑の名これより高く、又、自笑・其積の争端は早くこゝに萌して居た(つまり實際に筆を執つたのは其積なのである)題名は當時流行せる法話談議の「賛歎記」からつけたもので、趣向は寶永五年菊屋板の「風流三國志」三の巻「志の男色講談、志の禁談義」などから着想したものだといふ。この書一たび世に出て好評噴々(著者自らも可なりの自信あり)幾多の續作・摸作を出した。

寛保四年(三十年後) 其積 情の手枕(この書の

後編)

明和二年 作者未詳・禁短氣次編三編(江戸大傳馬町

は武太六といふならず者から五十兩の金を借り、矢の催促に首も廻りかされるといふ始末なので、これ亦今夜の稼ぎで助けようとして、十郎兵衛は網をはりに出かける。その留守に一人の可愛らしい巡禮姿、年は九つ名はおつる、國は阿波の徳島でと段々聞かされてつきり我子と知れてお弓、十郎兵衛妻は飛び立つ思ひ……だが目下の處は方便とは云へ、盜賊の仲間に入れる夫、萬一の場合その筋のお咎があつては罪のない我娘にまで濡衣を着せる仕儀と觀念して離れがたなの訣れをつける……と問なく十郎兵衛が我子と知らずお辻を連れて歸り人間をはかつて口に手拭をあてて路金を奪ひとるとおつるはそのまゝ、落命する。お弓が出て来て斯と知つて氣も狂せんばかりに歎き悲しむ。折柄表に捕手の聲「心得たり、これも行きがけの火葬ぞ」と有り合ふ棟建具をおつるの屍體の上で燃やしておいて、まんまと捕手をおつるの屍體の上で燃やして……とど國次の名刀を打ばらして行方をくらました。……とど國次の名刀を手に入れ郡兵衛一味の悪事を摘發し、主膳は一の國家老、十郎兵衛も歸參かなひ、玉木家を磐石の泰きにおくといふ處で幕「お弓子わかれ」の一幕が殊に親子の情をよく描いてあるといふので、今も切狂言として所々の座で上演されて居る(帝文一四、五七三―六六三)

鶴隣堂五冊もの大形枕本)

文政十二年 禁短氣再板(大阪)(帝文二八、其破自笑傑作集)

けいちゆう 契沖 二三〇〇—二三六一、寛永

一七一—元祿一四、正、二五、六十二歳

近世古典研究の基礎を確立した偉勳者である。字は空心、氏は下川、祖父の元宜は肥後の加藤清正に仕へたが、父の元全は故あつて尼崎侯青山幸利に仕へた。彼はその尼崎生れである。幼より敏慧で、天才の素質は早く五歳の時、母が百人一首を口授して一度で暗誦した頃から見えて居つた(同じ年父が實語教を試みたが此も一度で記憶した)七歳の時大患にかゝり、醫師も匙をなげたが、彼自から北野天満宮の名を百遍自紙に書きつけて間なく夢の告げを受け、出家したいと申出て父母もやむなく聽許、十一歳今里妙法寺の手定密師に就いて戒を授けられ、般若心經を四五遍で暗寫して又々師僧を驚かせ、後高野山に上つて東室院左學頭快賢について苦修練行、十年許にして阿闍梨を戒けられ、市人の請によつて浪華の生玉曼茶羅院を住持したが、室生山・吉野・葛城と諸所で修業を積んだが、後師翁の

遺命により且は老母孝養の爲め再び妙法寺に歸り住んだ。こゝに五年ばかりを過したが附近の池田郷萬町村の土豪、伏屋重賢に慕はれ、邸内の養壽庵に居處を移して、伏屋氏所藏の圖書を自由に見せて貰つた。彼が國學の素地はこの間に得る處渺くなかつた。老母の歿後再び居を浪華高津(東小橋、餌差町)にトした時、重賢の好意で養壽庵をそつくり潰して運んでそのまゝ、建てて貰つた。之が即ち圓珠庵である。彼は死に至るまでこの庵に幽棲し、水戸藩主徳川光圀の委嘱を受けて萬葉代匠記の筆を執つた。博引精確他に及ぶものなき萬葉全部の訓釋が出来た時、光圀は白金千兩、絹三十四疋を贈つてその勞を慰めたが、彼はそれを貧民の救助や公共の寄附に宛て、聊かも私するところがなかつた。そして云ふには「家を建てれば餘りの材木が出来るやうに自分も萬葉の研究によつて餘材を得た」として、古今集を註して「古今集餘材抄」を著し又伊勢物語を註して「勢語臆斷」を書き、紀の歌を解いて「厚顔抄」を作つた。彼が國文學上の貢獻はこれ等註釋訓詁のことが第一で、次は歴史的假名遣を確定したことである。此より前定家假名遣を非難する人は二三あつた(三井寺の僧成俊・花山院長親大納言等)が契沖は元祿六年二月和字正滋

抄を書いて、音の輕重四聲などによつた語勢的假名遣の信賴すべからざる所以を説き、記紀・萬葉を引いて、所謂歴史的假名遣を確立し、反對派を駁する爲め更に同十年に和字通抄を著してその主張を徹底させた(この主張は、後來榊取魚彦の古言梯によつて大成せられた)

次に彼は古典派歌人としての先蹤で、その歌一帯に眞率温藉・叙景歌・釋教歌の佳什に富んで居つた。家集を漫吟集(これに二種あつて生前、自撰のものを契沖延寶集一卷又自撰漫吟集とも謂ひ、一は死後刊行の漫吟集類題二十卷、普通に漫吟集と云ひ、讀歌學全書一にある)と云ひ、別に三十六人歌仙贊・詠富士山百首和歌などがある。又長歌にも秀で、無常賦・六道賦などは萬葉集以後の長歌中屈指の秀味と云はれてゐる。

初瀬のや里のうなみに宿とへば霞める梅の立枝
をぞさす

雨まじり風うち吹きてふる里に散る花さむし春
の夕ぐれ

夕けぶりふもとの里にたなびきて月ぞのぼれる
山風の上に
心ある人に一夜の宿かりてかへるもつらし明日

のふる里

七車空にとゞろくなる神の風に乗りてぞ雨の夕

立つ

あさましく今の世の中花にだに何ともみえぬ人

の心や

きえぬ靈死なぬ命のなき世とは誰かは知らで誰

か知りたる

いかでわれ昔の人に似てしがな今の佛はたふと

くもなし

うき時の心を何になぐさめむ知るも知らぬも佛

ならずば (以上三首釋教)

富士山百首和歌の中

富士のいは山の君にて高御座そらにかけたる雪

のきぬがさ

俳諧歌

老猿の子にたはふるゝをかしさに山の栗もやゑ

みまろぶらむ

その他彼が著には、圓珠庵雜記・年中行事抄・雜々記・和字正滋要略・眞蹟俳諧歌・河社・源注拾遺・三十六人歌仙贊歌・六々調人贊・古事記抄・日本紀竟宴歌頭書・古語拾遺抄・書新撰菅家萬葉集・百人一首改觀抄・和歌拾遺六

帖・類字名所外集・類字名所補翼鈔・二四代鈔・後撰考・勝地吐懐篇・勝地吐懐篇異本・難勅撰。彼の門人中傑出してゐるのは今井似閑・野田忠肅・海北若沖の三人で、各自師の學風に基づき未墾の分野に敏を入れた。又彼の學風に影響した人として看過すべからざる一人は、下河邊長流で、契沖と長流とは人物性格が違ふにも拘らず、非常に親密で生玉時代から妙法寺時代長流の歿するまで、交情蜜よりも甘く綿よりも温かであつた。和泉時代の贈答を和歌叫和集と名づけて刊行されたが、その中、彼が長流に贈つた一首「我を知る人は君のみ君を知る人もあまたはあらじとぞ思ふ」は入口に喩突してゐる。明治に入つてから朝廷その功を賞して正四位を追贈せられた。

(大阪圓珠庵は今も古風を存して居て些やかながら瀟洒閑雅な建物で、裏に「契沖阿闍梨之墓」と題したあのよく歴史に引用される石碑が建つた墓地がある。契沖の手稿や經本の手寫や水戸の安藤爲章から來た手簡など、數十點皆桐の箱入にして保存されて居る。余が參觀當時は藤村報運と云ふ大阪の歌人として聞えた方がこの庵をも兼務して、本坊の持明院で土用干をされてゐる時で藤村師は「先年大火の際

誰も貴重な文献を顧るものがないので私が長い衣の肩や裾や袖や懐に運べるだけ持ち出し／＼してやつと全部助かりました」など語られて居つた。目下それ等をも加へ、佐々木信綱博士等の御手によつて契沖全集刊行中だから之が完結すれば大に學界を裨益することであらう)

けいとう 鶏頭

四十一年一月一日、高濱虚子が左の近作の小説十篇を集めたもの。三八、一二、秋風・三九、四、畑打・三九、一〇、八文字(これは小説といふ程のものでなく寧ろ「小品」の中に入るべきものだ)四〇、一、欠び・四〇、三、樂屋・四〇、五、風流懺悔・四〇、五、斑鳩物語・四〇、七、大内旅宿・四〇、一〇、勝敗。

尙巻頭の夏目漱石の序二十八頁は餘裕派小説を高唱した有名なものである(菊判一七八頁、春陽堂)

けいゑん 桂園

かげき「香川景樹」を見よ。

けいゑんいつし 桂園一枝 二卷

香川景樹、文政十一年(二四八八)編の家集で四季・戀・雜と部立をし、彼並に桂園派の歌風を最もよく代表せる諸味を輯めて居る。桂園漫筆の中には之が講義も載

つて居るし、著者の歿後嘉永二年には後門の手に依つて「桂園一枝拾遺」(一卷校和歌叢書六、二四一―三二二)も出た。この集は當時の歌壇に大きな波紋を起させたもので、以後暫らくはこれに對する辯論が即ち當時の歌學史とも謂ふべき程であつた。殊に秋山光彪の非難と中川自休の辯駁などが著しい(彌富濱雄氏桂園遺稿上巻・校和歌叢書六、一三一―二四〇)

けいゑんおきがき 桂園奥書

「隨所師説」を見よ。

けいゑんは 桂園派

香川景樹のたてた和歌の一派で「調べ」を根調として詞は新舊を問はず雅俗によつて選擇し、自由に清新に歌はんとする事象そのものの内在律を表現せよとの意味を強調する。門葉非常に廣く、遂に流れて明治の宮廷に迄入つて居る(尙「景樹」を見よ。その他は佐々木信綱氏近世和歌史二一四―二四〇、四二六・福井久藏氏大日本歌學史三六四―三七五)

けうから 堯孝 ?―二二一五、?―康正元、六十五歳

頼阿の曾孫で、室町時代の縮流歌人で、後花園天皇の時には飛鳥井雅世を助けて新編古今集を完成させた。歌

は新編古今集に七首入り、家集には堯孝法印集(群二六六、一〇―一一―二四)があり、冷泉爲廣の判を乞うた堯孝法印自歌合(群二二二、八、一一三二―一一三四)日記に堯孝法印日記(群三一五、一一、七六八―七八〇)紀行に伊勢記行(群三三四、一一、一一二―一一二六)がある。

けうくう 堯空

されたか「三條實隆」を見よ。

けうくんし 教訓詩

教育・宗教・道徳・學術を主想にした詩歌句をいふ。國文では、萬葉集・山常百首・明倫歌集・道歌などがこの部類にはいる。

けうくんせうせつ 教訓小説

だうとくせうせつ「徳小説」を見よ。

けうくんぶんがく 教訓文學

兒女啓蒙の爲めの作品若くは一般の處世の教訓となるべき作品をいふ。鎌倉期の十訓抄入室町期の兒物語・お伽草子の或もの・徳川初期の假名草子・同中期以後の心學道話・貝原益軒の十訓・徳川齊昭の明倫歌集などはこの部類に屬する。

けうげつ 曉月 ?―一九八八、?―嘉曆三、

俗名藤原爲守といひ、爲家の子で冷泉爲相の弟に當る。彼亦歌才あり殊に狂歌に巧みて「酒百首」「蟻百首」「虱百首」等の作がある。又有名な

遠くなり近くなるみの濱千鳥鳴音に汐の満干をぞしる

といふのは彼の味である。

げうしよう 曉鐘

土井晩翠の第二詩集で叙情に一段の進境を示し、或は懐古の憑弔に或は近時の世相に若くは四季の風物に、叙事・叙景を渾融させた想の展開である。その書名は王陽明の

四十餘年睡夢中 而今醒眼始朦朧

不知日已過亭午 起向高樓撞曉鐘

といふのから採られたらしく、創作詩二十一篇附録としてユーゴーの譯詩三篇が入れてある。萬里長城の歌「秋興八首」「黒龍江上の悲劇」「霹靂」などは當時一般に愛誦せられ、今も教科書によく引用せられて居る(四六判一九四頁、明治卅四年五月廿日、東京堂、晩翠詩集中二〇三—三九六)

げうしん 堯眞

せんあ「香川宣阿」を見よ。

げうたい 加藤曉臺 二三九二—二四五二、享

保一七一寛政四、五、二〇、六十一歳

俗稱平兵衛、號は暮雨庵(又、龍門・白一居)元、尾張名古屋の藩士で、夙に美濃の蓮尼坊白尼に就いて俳諧を學び、又蕪村の句風に私淑し遂に一家を成し、始終江戸や京都に轉々したが、大部分は名古屋に根據をすゑて「東は江戸を扼し、西は京を控へ、天下の俳人を唯にては通さじ」と力んで居つた。寛政二年には二條殿から花の下宗匠の免許を受けた。その句、遒勁なるもの艶麗なるものとり／＼に佳吟と稱せられ、當代蕪村について優れた名俳であつた(俳文一二、蕪村曉臺全集)

曉や鯨の吼ゆる霜の海

秋の山と／＼に烟たつ

五月雨や峯の山吹降りしづめ

鐘の間の客や桃方榎方

灯ともせば裏梅がちに見ゆるなり

桃つら／＼花盡くる所水長し

春寒し貧女がこぼす袋米

美しくや月の中なる盆の人

げさし 劇詩

「戯曲」に同じその項を見よ。

げさぢやう 劇場

劇を演ずる爲めの場處施設をいふ。舞臺・樂屋・觀覽席の三つに別けると、舞臺は劇を演ずる爲めのもので通常の平舞臺を本舞臺又は本舞臺三間の間といひ、それより一段高くしつらうたものを二重舞臺又は高二重といひ高貴の座席とか、住宅の床の上とかを示すに用ひられる。又所作事を演ずるには全部板敷にすることがある之を置舞臺といふ(火事場を演ずる爲めにトタン敷にするやうなのは大道具の中に入る)舞臺に向つて左の出口を上手右を下手といひ左右合せて臆病口ともいふ。舞臺から觀覽席に向つて縦に貫ける細長い舞臺を花道といひ、左を本花道、右を假花道といふ。道行を演じたり、同時異處の事象を見せたり俳優と觀客との親しみを生ぜしむる上に必要とせられて居る(脚本に「向ふより」とあるのはこの花道から出ることを指す)又一幕中に場面を轉換させる爲めには我に在りては廻舞臺彼にありては暗轉を用ゐる。尙相馬太郎や後藤基次(四斗兵衛)が出る時のやうに「せりあげ舞臺」を用ひることもある。その他樂屋や觀覽席についても特殊の用語がある。明治以後西歐劇場の設備に則り最新の科

學を應用して益々演技の精緻を助長するやうになつた(高澤初風氏現代演劇總覽五八一—七二、後藤慶二氏日本

げさく 戯作

輕文學の著作又は著作物のことを徳川時代に「戯作」といつた。即ち黄表紙・滑稽本・洒落本の類のことである。文學といふものを閑人の閑文字と考へた名稱である。

げつかう 高安月郊 明治二、二、一六一

大阪の人、名は三郎、夙に文學に興味を持ち獨學自修によつて今日の地歩を築いた。その力作は東西文學比較評論で、その明治文學史上特筆されて居るのはイブセンの早い紹介者として、脚本作家としてで「さくら時雨」「關ヶ原」は度々各地で脚光を浴びた。

げつきよ 江森月居 ？—二四八四、文政七、

九、一七、

京の人、竹葉・些居等の別號あり、和歌を村田春門に、俳句を谷口蕪村に學び、殊に俳句に秀でて師翁歿後、化政度關西の斯壇に牛耳を執り江戸の道彦、尾張の士朗と併せて三大家と稱せられた。その著俳諧問答・白馬真義解・道の便・月居句集・月居七部集等何れも世に行はれて居る。

げつせいしふ 月清集(秋篠月清集) 四巻
藤原良經の家集で、當時の優れた家集即ち六家集の一つに数へられた(續國二七―六六・佐々木信綱氏新古今集選釋附録)

げつと 青木月斗 明治一二、二一、二〇―
大阪道修町「天眼水」の薬師に生れ、子規・不空・句佛・碧梧桐等と俳交して關西俳句界の一名星となつた。その作句は日本新聞・ホトトギス・車百合・俳星・カラメチなどの諸雜誌並に新春夏秋冬・明治句集などの單行本に收まつて居る。

けんいらしや 硯友社

明治十八年の春、尾崎紅葉・石橋思案・山田美妙齋・丸岡九華など當時大學豫備門通學中の文學學生によつて組織せられた文學結社で、同好の士相會して文藝時評や各自の作品の發表、批評をしつゝ、茶を飲み煎餅をかじるといつた風の俱樂部に過ぎなかつたが、同年五月から我樂多文庫といふ機關雜誌を筆記綴込半紙二三十枚の冊子にして回覽し、十九年一月第九號からはそれを印刷に附し、二十一年の春からは公然發賣し、後には川上眉山・巖谷小波・江見水蔭なども入社して文壇に翻を唱ふるの概があつたが山田美妙齋が去つて「都の花」

の編輯に従ふやうになつてから廢刊した(……といつても何も美妙がこの社の中堅であつたといふ譯ではない。思ふに才人紅葉が一寸倦んで來た矢先不圖したことから美妙と感情が疎隔したことや、會員各自の生長が目ざましくして最早硯友社といふやうな集團的束縛を好まないまでに個性を發揮し出した爲めであらう) この社の特徴は一、その出發が戯作者的なること・二、早期の文學結社なること・三、藝術至上主義に近い見解の下に筆を執つたこと・四、内容よりも文章に力點を多いたこと(そして雅俗折衷體を創めたこと)五、その手法は淺薄ながら寫實的であつたこと・六、その着想は概念的類型的であつたことなどでその文學史的功績の大なるものは形式方面に創新味を附與し、他日名作家となつた人々の温室となつたといふ二點であらう(早稻田文學特輯號中第二、第三「胎生期研究號」の丸岡九華氏の「硯友社文學運動の追憶」)

げんげんしふ 元々集 八巻

北畠親房の神道に關する述作。我邦開闢説から伊勢大神宮の由來・地祇の出生・神器傳授の事などを記述したものである。

げんげんしふ 玄々集 一巻

能因法師の私撰集で、永延以來寛徳以往の名歌百六十餘首を採つて何某何首と一々名を採つた歌數をことわつてあげてある。題意は序文の中に「紀貫之奉_レ救玄之亦玄」とあるによつたものか。撰者の抱負も右序のつづきに「不知_レ當時之褒貶_レ只憶_レ向後之消没_レ之故也、上自_レ王后_レ下至_レ士女_レ粗擧_レ其門之上科_レ聊致_レ此道之中興_レ而已」とある。それほど大したものでもないが略當時の好尚を代表し撰者の鑑賞眼を披瀝し得た小撰であらう。群一五八、七、四一六―四二三に入る。

げんご 源語

「源氏物語」を見よ。

けんこう 吉田兼好 一九四二―二〇一〇、弘

安五―正平五、六十九歳

南北朝時代の國文家にして且つ歌人、本姓卜部氏、山城の吉田に居たので吉田姓を名のる。藏原鎌足の遠孫兼顯の三男で、早く後宇多院に仕へて左兵衛ノ佐に任ぜられたが、佛教や老莊の思想に感化されて名聞を棄てて隱遁し(一説には彼の遁世は伊賀守橋成忠の女中宮ノ少辨に對する失戀の爲めだとも謂ふ)修學院・横川・吉田・木曾・國見山(伊賀)と幽棲を轉々して最後に雙ヶ丘に落ちついた。博聞多識加ふるに趣味の人で、その學

は神・儒・佛・老莊・有職故實・歌學の各方面にわたり、その説くところは古典的な見地から清新な趣味論となり常識道徳となる(彼の所説中常識に反するものは短命の獎勵・無妻主義・歴世回避の二三のみ)彼の死後、その庵室には古筆の法華經・自筆の老子道德經・源氏物語・須磨明石の巻、外に平日衣食の器具數點を存して居たと云ふのででも略その生活振が推されよう。けれども彼が名を不朽にするものは隨筆徒然草である(その項參照)後世幾多の人々に愛讀せられて古典文の模範となつてゐる。外に家集兼好法師集(群二六九、一〇、八八一―一〇〇續國九〇三―九一二)があり、新千載に三首、新拾遺に三首、新後拾遺に三首採られ、頓阿・淨辨・慶運と共に和歌四天王と稱せられた。

すめばまたうき世なりけりよそながら思ひしま
まのやまざともがな
契りおく花とならびの丘の上にあはれ幾代の春
を過さん

久方の雲井のどかに出づる日の光に匂ふ山櫻
哉
憂き度に之を限りとかこしははかなく頼む心
なりけり

やまざとのすまひもやうく年へぬることな
淋しさもならひにけりな山里にとひくる人のい
とはるゝまで

ほいにもあらでとし月へぬることを
ならひぞと思ひなしてや慰まむ我身ひとつにう
きよなられば

たのもしげなることいひてたちわかるゝ人に
はかなしや命も人の言の葉もたのまれぬ世をた
のむわかれは

若水
つきもせぬ君がやちよをいくかへりわかえてく
まん春の若水

平貞直朝臣家にて歌よみしに旅宿の心を
ふるさとはなれぬ嵐にみちたへてたびねにかゝ
る夢のうき橋

など秀味に富む(けれども四天王の中では兼好の歌は
稍劣り様で所詮彼が代表作はつれなく草二百四十三段
にあると謂つてよろしからう)

けんさん 乾坤蘆
あきか「中村秋香」を見よ。
けんさい 猪苗代兼載 ?—二一七〇、?永

正七、
陸奥猪苗代の人で、室町時代の歌人且つ連歌師として
聞えた人、早く宗祇の門に入つて和歌を學び、當時の
歌界傳統の弊を非難し「歌道に於ては別に祕事口傳な
どあるべき道理がない。各自我心をみがいて自から至
るべきものだ」と叫んだのは時弊にも適中し、後來自
由研究の濫觴として遙に近世の戸田茂睡に脈を曳いて
ゐる。蓋し當時の歌界は彼に嫌厭たるものがあるが上
に彼が自由の活動を束縛するくだらぬ情實がつきまと
つてゐたのであらう。それがあらぬか彼は歌界よりも
寧ろ連歌の方に多くの業績を遺して居る。兼載雜誌(群
二九九、一〇、八八九—九一五)・若草山(同三〇六、一
〇、一一〇六—一一二)連歌比況抄等は連歌の作法
を説き、永正二年兼載獨吟蘆名家祈禱百韻(續群四八
二、一七ノ上、六一—六一四)は彼の連歌集であ
る。

けんさい 村井弦齋 文久三、二二—
三河豊橋の人、名は寛、東京外語露語科卒業後、通俗
小説作家として立つた。その出世作は三十九年二月の
食道樂であるが、作家生活はすつと早くから始まつて
ゐる。主なる作品は、單行本、大福帳(二十四年・都新

けんさん 野中兼山 二二七五—二三二三、元
和元—寛文三、四十九歳

土佐の人、名は止、同國の儒、谷時中について程朱の
學を修め、後藩主に仕へて殖産興業につとめ法令を嚴
にし、藩治に貢献するところ尠くなかつたが、あまり
嚴に失したので遺憾にも貶黜せられた。その著に兼山
選草がある。彼江戸より歸藩するに土産を豫告して、
「蛤」を持つて歸つてやらうと云ひ、船が土佐灣につく
と直ぐ船を傾けて蛤を残らず放つて「わが土産は一時
口味の佳餌にあらず子孫永久の名産となるものなり」
との意をのべたが果せるかなこれより土佐の海には蛤
が産するやうになつたといふ。

けんし 玄旨
いうさい「細川幽齋」を見よ。

けんじくやう 源氏供養(古名紫式部)

前シテ 里女 後シテ 紫式部 ワキ 安居院法印
ツレ 從僧 處は近江石山寺
諸曲、都の僧、安居院法印、石山寺參詣の途次、紫式
部の變身里女から「妾、生前源氏物語を書きながら光源
氏の供養を怠つた爲めに、今に成佛も得せず……願は

聞、櫻の御所、二十七年一月・報知新聞、小弓御所、二十
八年十月・單行本、衣笠城、二十八年十月・報知新聞、小
猫、二十九年二月・報知新聞、日出島、二十九年六月。
けんさつ 高島玄札 二二六八—二三四九、慶
長一三—元祿二、二、一四、八十二歳

伊勢山田の人、通稱を玄道といひ京に出て貞徳に師事
し、江戸に出て醫を業とした。貞門五哲の一人にかぞ
へられ殊に秀句に長じて居つた。

けんさん 片山兼山 二三九〇—二四四二、享
保一五—天明二、三、二九、五十三歳

上野の人、十七歳の時江戸に出て鶴士寧、服部南廓等
について古文辭學を學んだが家が貧しいので秋山玉山
に伴はれて肥後熊本に下り時習館の生員となり、六年
の後再び上京一旦他家を嗣いだ、學派の見解の相違
(養家は徂徠派、彼は折衷派とも謂ふべき思想が萌して
居た)から間なく離別し、自から一家の見識を標榜し
「經義を説くに一學派に偏すべからず、漢儒の古註、
宋儒の新註是々非々に立脚して取捨すべし」との意を
唱へた。時人之を「山子學」と稱したが、この主張こそ
は後來井上金蛾・豊島豊洲・山本北山一派の折衷學に先
驅するものであつた。

くは妾に代つて一遍の回向を頼みます」といふ。そこで法印は石山寺に参つてその願ひ通りにすると紫式部が在りし世の姿であらはれて且よるこび且は共々回向して「夢の浮橋」の卷名をからませて源氏物語一篇は石山觀世音が式部の形に示現して夢の浮世を説かれたとの意で結んである。

げんじつしゆぎ 現實主義

あるがまゝの眞實を表現せよといふ文藝上の一主義で英のリアリズムに相當する。一に之を「寫實主義」ともいふ、その項をも見よ。

けんしほふ 懸詞法

いちごりやうぎ「一語兩義」を見よ。

げんじものがたり 源氏物語 五十四帖

紫式部の著、單に王朝文學の粹たるのみならず、又我邦文學の誇りとせられて居る。前四十一帖は源氏を中心とせる華やかな生活と戀の種種相を寫し、後十三帖は源氏の子薫を主とし匂宮を客とし、淋しい宇治に悲しい實を結んだ戀、大君中君浮舟君のことを寫したるもの。その最後の十帖は専ら背景を宇治にとつたので、通常宇治十帖と云つて前四十四帖と區別をする。

(一) 梗概 今各帖の名目と、極めて主なる事項とを摘記する。

- 一、桐壺 一——一二(これは源氏の年齢)
- 桐壺の帝、更衣を御寵愛・源氏出生・更衣薨後藤壺入門・源氏元服(十二歳)・葵上(十四歳)と結婚。
- 二、帚木 一七、夏
雨夜の品さだめ・空蟬を見初む。
- 三、空蟬 一七
空蟬の連れ子小君を手懐く・軒端の萩。
- 四、夕顔 一七
六條御息所方へ通ふ・五條、夕顔の宿・河原院の一夜。
- 五、若紫 一八
藤壺御懷姫、東宮(冷泉院)御出生、實は源氏の兒・源氏わらはやまひを北山におこなふ・小柴垣のかいまみ・紫上十歳位。
- 六、末摘花 一八、春——一九、春
大輔の命婦の手引して末摘花の許へ通ふ。
- 七、紅葉賀 一八、冬——一九、秋
桐壺御算賀(五十歳)・源氏青海波を舞ふ・源内侍(五十七八歳)との情事。

八、花宴 二〇春

朧月夜(右大臣六の姫君、弘徽殿女御の御妹にして今の東宮即ち源氏の義兄なる朱雀院の后がれと定まれる君)と逢ふ。

九、葵 二二—二三、正月

物見の車争ひ・葵上夕霧を産んで間なく薨去・六條御息所御子齋宮の姫君につきて伊勢に下向・紫上(十四歳)源氏と新枕。

一〇、神 二三、秋—二五、夏

桐壺の帝崩御・齋院更代(弘徽殿御腹三ノ宮下りて式部卿宮の姫君に卜定、源氏之にもいひ寄る、應ぜず)・藤壺御出家薄雲女院と申す。

一一、花散里 二五、夏

源氏の繼母君に當る麗景殿女御の御妹女三ノ宮といふあり。源氏橘の花咲く頃をわざと訪ふ。

一二、須磨 二六—二七

源氏自ら責を引いて明石に移る、方々との悲しき別れ・父帝の夢の御告げ・明石入道の迎への船。

一三、明石 二七、春—二八、秋

明石との契り・都に於ける天變地異・源氏省免・明石との別れ・七月廿日入京。

一四、浮標 二八、十月—二九

源氏任内大臣・東宮十一歳にて御元服・源氏佳吉を訪ふ・六條御息所姫(齋宮)を源氏に託して薨去・源氏姫を入内せしめんとの下心あり。

一五、蓬生 二八—二九、四月

源氏久々に末摘花を訪ふ。

一六、關屋 二九、秋

源氏石山詣の歸途空蟬と遭ふ、夫伊豫守、常陸介の任解けて歸京の途次なり、往年の小君も大人びて今右衛門佐となる・空蟬、夫死して尼となる・前齋宮源氏の後見によりて冷泉院の御妃として御入内、梅壺の女御といひ後に「秋好む中宮」ともいふ。

一七、繪合 三一、春

頭中將の御女(十三歳)弘徽殿女御といひて冷泉院(十二歳)の御妃なり梅壺の女御(廿三歳)とかく年齢のへだ、りによりて御仲親しからず、源氏之を憂ひて院の晝を好ませ給ふを幸ひ、女御二人を左右の主將として繪合を催す、薄雲女院判者し給ふ、左右とも何れ劣らぬ名晝ばかりなりしも最後に梅壺より源氏須磨謫居中に物せられたる繪を出され勝となる。これより冷泉院しげく梅壺女御が

りわたらせらる。

一八、松風 三一

明石女兒分姨、明石の姫君といふ・源氏三條院東の對をしつらひて花散里を迎ふ・明石舊領大井の里にうつる松吹く風の音夜も盡もさびし。

一九、薄雲 三一、冬―三二、秋

薄雲女院崩御・夜居の僧事實を冷泉院に告げ奉る、紫上明石の姫君を乞ひとりて養ふ。

二〇、權 三二、九月

式部卿宮薨去、その喪によりて齋院下りて叔母君女五ノ宮の許にあり源氏之に言ひ寄る。世人誤解して源氏女五ノ宮に通はせ給ふなど噂す、紫上寝食安からず併し權は源氏に辭かす。

二一、乙女 三三夏ノ初メ―三五、十月

夕霧元服十二歳・頭中將の姫君雲井の雁(十四歳)とは相思の仲なれど御入内の豫定ありて許されず惟光女(十三歳)の五節の舞姿もめでたしとて之と契る。

二二、玉鬘 三四、九月―三五の暮

玉鬘四歳にして九州下り、小貳母子の忠節・肥後の大夫の監玉鬘を所望す、にけて上京・長谷觀音に

て右近(玉鬘の母夕顔の侍女、今源氏の方に引きとらる)と邂逅・右近がはからひにより玉鬘を源氏の落し胤と披露して源氏の邸内に引取る。

二三、三六、正月

立ちかへる春景色・源氏平和に情人の誰彼を訪ふ。

二四、胡蝶 三六、三四月

玉鬘益々美し、いひよる貴公子の主なるもの鬚黒の大將、兵部卿宮、源氏自身も。

二五、螢 三六、五

源氏執りもちて兵部卿宮と玉鬘とを會はず、折からの螢を忍びの提灯として。

二六、常夏 三六、六月

萬事につけて源氏に向ふを張れる頭中將、賞を懸けて夕顔との間に産まれし一女(實は玉鬘)を求む本當の一女はあり得べくもあらざ賞與を目あてにあらぬ娘あまた集ふ。その中比較的眞に近きもの近江の君なり、而かも品位風貌は遙に玉鬘に下る。

二七、篝火 三六

源氏玉鬘に對して親らしからぬ挑み。

二八、野分 三六、八月

野分の紛れに夕霧始めて紫上を見る、源氏あらぬ心もや起きむとて爾來紫上と夕霧とを接近せしめず。

二九、行幸 三六、十二月―三七、二月

帝大原野に行幸、近江の君のわかしきことども。

三〇、藤袴 三七

大宮(頭中將の母君)薨去につき夕霧も玉鬘も同じく藤衣消息の贈答あり。

三一、横柱 三七、冬―三八冬

鬚黒の大將玉鬘を迎ふ・横柱の君の悲しき離別。

三二、梅枝 三九、春三月の半ば

花やかなる宮廷生活の描寫・權より源氏に宛て、薫物に梅枝をそへての贈物・香合・管絃・明石の姫君入内のいそぎ。

三三、藤のうら葉 三九、春―十月

夕霧中納言に昇進・雲井の雁を許さる。

三四、若菜上 三九、十二月―四一、三月

朱雀院御不例・女三の宮を源氏に託して崩御・源氏四十の賀・玉鬘若菜の養を祝はる・源氏度々女三の宮を訪ふ、紫の上不安・明石の姫君御懐妊、明石入道遁世。

三五、若菜下 四一、三月―四七、十二月

柏木右衛門女三ノ宮に逢ふ、小侍従のはからひなり・源氏早くも之を感じき内心後悔・紫上御胸のやまひ。

三六、柏木 四八、正月―秋

柏木悶死・女三ノ宮御落飾。

三七、横笛 四九、春―秋

夕霧 落葉の君(女三ノ宮の姉君にして柏木の妻なるに拘らず柏木の氣に入らず却て夕霧に慕はれし人)を訪うて柏木が遺愛の笛を得、夢の告げによりて薫(表面は源氏と女三ノ宮との中の御子なれど實は柏木が女三ノ宮と一夜のわりなき契りに産れし若君)に傳ふ。

三八、鈴蟲 五〇、夏―八月

源氏・入道女三ノ宮の御堂にて鈴蟲をめで蟲の品さだめあり、杯二たびめぐりて夜はほのくゝとあけわたる。

三九、夕霧、五〇、八月―冬

夕霧落葉の君を引きとりて懇ろにいひよる。雲井の雁實家に歸りて斯と告ぐ、頭中將立腹、惟光の女、藤内侍の二人雲井の雁と結托して落葉の宮に

あたる。

四〇、御法 五一、春—秋

紫の上薨去・匂宮（紫上の外孫、明石の姫君の御子）に色々かなしきあらまじしこと、源氏の悲哀

四一、幻 五二、春—年のくれ、蕪五歳

紫の上薨去後の悲哀。

四二、雲がくれ・本文なし、源氏此間に薨去。

四三、匂の宮 一四—二〇、正月（これより蕪大將の

年齢）

高貴の方々の長逝、たきもの流行。

四三、紅梅 二四、春冬

按察大納言（柏木の直ぐ下の弟）北の方の連れ兒を匂宮にすゝむ。

四四、竹河 一四、五、—二三、秋

三位の中將（夕霧の子）竹河左大臣の女を娶る。

四五、橋姫 二〇—二二冬

宇治八ノ宮のこと・蕪の宇治通ひ、尼君留守の一夜の垣間見・老尼辨、蕪未生以前の事實を蕪に語る。

四六、椎本 二三、二—二四夏

長谷のかへるさ・八ノ宮薨去・大君も薨去二十五歳蕪中の君を思へども已に匂宮に許したり。

四七、總角 二四、八—年のくれ

匂宮二條院をしつらふ、中君迎への爲め。

四八、早蕪 二五、春

中君・匂宮に迎へらる・夕霧六ノ君の御裳着匂へ進めんの下心なり。

四九、宿木 二六、二月—四月

中君御懐妊・匂宮浮氣・夕霧六ノ君を愛せずとて匂宮に苦狀・中君蕪大將をしたへども今となりては詮なし、従妹浮舟を薦む。

五〇、東屋 二六、秋

浮舟の生ひ立ち・常陸ノ介の後妻の連れ兒なり、折角の掙がれ左近少將も先妻の娘に横取られて不遇に歎く・二條院にて匂宮浮舟にいひよる三條に閑居ついで蕪大將に宇治へ引きとらる。

五一、浮舟 二七

匂宮、大内記の手引にて蕪の聲色をつかひ、しひて浮舟に逢ふ・蕪四月上旬京迎への豫定、匂三月晦日同上・兩方の情使交々宇治に通ふ。遂に同じ日に落ちあふ。

浮舟煩悶・身を宇治川に投ぐ。

五二、蜻蛉 二七

入水の浮舟、横川の僧都の妹なる尼君に救はる。

五三、二七

あけくれ下げ尼となりて手習（手習の君といふ）こにも尼君の亡き娘の婿がねと契りし中將といふが慕ひよる。

五四、夢の浮橋

蕪・匂・浮舟の四十九日の誓み・こを傳へきく浮舟の心地・遂に事實判明して蕪より浮舟の弟を使として文を送る・浮舟は今更罪の上に罪を重ねじとて文もとらず、弟にもあはず。

(二) 異本。紫式部自筆の原本がないのだから、殘存する諸本をまとめて通常二三の系統にする。源氏學の祖とも謂はれてゐる俊成は和歌必讀の書としてこの物語を推稱し、自身黄表紙を定めた。その妹越部禪尼も之を傳へたがその男定家に至つて別に青表紙本を定めた。所が一方では俊成の門弟河内守光行その子親行及その子孫に傳はつた別系。河海抄によるとこの光行は定本を作るに非常の苦心をして次の八本を對校したといふ一、藤原行成自寫本、俊成所藏、二、二條帥藤原伊房本、三、冷泉中納言藤原朝隆本、四、堀河左大臣源俊房本、五、從一位源麗子本、六、法成寺關白藤原忠通本、

七、五條三位俊成本、八、京極中納言定家本その他光行の自家藏本。

かくして出來た定本を河内本といふ。加之光行は源氏の註釋水滸抄を作り、親行の弟素寂は紫明抄を作り、父子二代ともこの學に忠實で一般の信用もこの河内本の方にあつたらしいが、一方歌界では定家崇拜の風が世と共に深く室町時代中期宗祇の頃からはむしろ青本の方が有力となり（文明以後二三十年間が兩派の對立時代か？）室町の青本全盛のまゝが流れて徳川期となつてからも専ら青本が行はれ、湖月抄も評釋も皆之を本文に執つたので河内本は空しくその流れを汲む家の篋底塵深く埋もれて居た。

今日源氏について版行さるゝもの多數は矢張青表紙系統によつてゐるが、曩に京大文學部で出した平瀨本や一昨大正十四年金子元臣氏の定本源氏物語新解上などは河内本系統なり、古典全集や校註國文學大系などは兩派の何れにもつかぬ第三派の別本である。

源氏學者としての立ち場からはまだ、未見の異本があらうから精々種類多く掘り出して次第に最古のものを選びかける方法が望ましく、修辭文章の立ち場から云ふならそんな流派におかまひなく、之を中古文とし

て上乘なものにするにはどの詞形をとるのが合理的であるかを考へて見たいものだと思ふ)

(三) 註釋。夥しく書かれた源氏物語註解書中、一番完全に近いのは萩原廣道の評釋と北村季吟の湖月抄とで石川雅望の源註餘滴・木居宣長の玉の小櫛も始終座右にするがよい。他は得るにまかせて蒐收し必要に應じて見ればよい。

(四) 源氏研究上の諸問題

一、批評 文章と内容との批評、文學史的價值。二、作の動機、何が動機でこれを作つたか。三、作の時期、式部の奉仕時代か、引退後の寡居時代か? 四、この作を抽象して得べき王朝文化觀。五、この作とモデルの有無。六、この作に對する代々の學者の研究。七、完全な集釋と正しい口語譯。八、新しき年立。九、この作と和歌との交渉。一〇、同 日本趣味との交渉。等これ等は何れも詳細に考究さるべき問題で、已に大家の意見の發表もあるが、まだ未開拓の曠野たる趣がある。

(國華六六號 三四六―三四七 宮川長春筆 紫式部源語圖、一四三號 卷頭五 俵屋宗達筆 源氏關屋圖、一七號 一一二―一一三 藤原隆能筆 源氏

物語の繪、七一號 四四六―四四七 廣行筆 源氏物語圖、一一二號 六八一―六九 爲恭筆 源氏物語花宴圖、三〇六號一二七、一三七、藤原隆能筆 源氏物語繪卷、三〇六號一四三 源氏物語双紙畫、三〇九號 二四五、二五三、源氏物語屏風の一部、一八號 一三〇―一三一、一三二―一三三、藤原隆能筆 源氏繪。

げんじいうさいき、がきぜんしふ 玄旨 幽齋聞書全集

いうさい「幽齋」の項参照。

げんしやうてんわう 元正天皇 一三四〇

一四〇八、天武八―天平二〇、六十九歲

第四十四代に當らせられ、草壁皇子(天武天皇の御子)の御女で、この御代、養老四年には日本書紀が撰ばれたのみならず、天皇御親らは和歌を能くせられ、その御製は、續日本紀の一五・萬葉の六、八、一八、二〇の各巻及び新拾遺等に出て居る。

げんしんろん 見神論

綱島梁川が三十七年の夏以後三度までも神を見たといふ論で、神我融合のインスピレーションを披瀝したもので、法悦とか陶酔とかに相當するものだが、その頃前後

のロマンチズムとも交渉があり、その文章が情緒的感性的で而も華麗であつた爲めに一時青年に渴仰者が多かつた(綱島梁川 病間録三六六―三八八、予が見神の實驗)

げんせい 元政 二二八三―二三二八、元和九

二、二三―寛文八、二、一八、四十六歲

京都の人、俗稱は石井吉兵衛、本姓名は菅原日政と名づけ、別號として日峯・妙子・不可思議・空子・草山・幻千などいふ。十三の年から彦根藩主井伊直孝に仕へて三千石を食んだが夙に出家の志あり、廿五歳遂に致仕して妙顯寺日豐上人の弟子となり戒律を嚴守し、佛典に潜心し又和歌に長じ作詩をも能くし、歸化人・陳元賛や熊澤了介と親交を結んだ。元々唱和集・扶桑隱逸傳・草山和歌集その他紀行や佛敎に關する述作約三十種もある。晩年深草に幽栖し、老母に仕へて至孝、その辭世は超越味とをかしみとを交へたものであつた。深草の元政坊は死なれたり我身ながらもあはれなりけり(國學者傳記集成五六―六二)

けんせう 顯昭 ?

王朝末より鎌倉初期にかけての歌學者且つ歌人である。兄は太皇太后宮大進藤原清輔で、歌人として一世

に時めいてゐた、彼は出家して太秦寺に住み法橋に叙せられた。その著には日本紀歌註・古今和集抄・古今集序註・袖中抄・柿本朝臣人磨勘文等がある。彼は詠歌よりも歌論が得意であつたと思へて、當時藤原俊成が六百番歌合を品評したのに對して更に「陳情論」を書いて批評の批評をした。又兼載雜談には彼と寂蓮とが互にひやかし合つて、顯昭が云ふには「歌は易いもんだ。その證據には寂蓮のやうな物議らずでも苦もなく味むではないか」と云ふと、寂蓮が「歌はむづかしいもんだ、その證據には顯昭のやうな物議でもよう味まぬではないか」と云つた、ことが出てゐる(二條(寂蓮)六條(顯昭)兩家の争ひはかゝる詞の端々にも見られる。尙國刊一期續々群一五には彼の「古今集註」二十卷が入つて居る)

けんたう 松崎慊堂 二四三一―二五〇四、明

和八―弘化元、七十四歲 肥後益城郡本倉村の人、名は密、字は退堂、別號を益城といふ。家は代々農を業としたが、彼は始め僧となり後江戸に出て昌平齋に入り、林述齋に見出されその家塾に住んだ。享和二年掛川藩に仕へ朝鮮修信使の來朝に際し幕府に召されて應接し林氏と相談して新に接使の儀を定めた。肥後侯は自國出身の故を以て彼を掛川

侯に懇望せられたが本人は辭して就かず、石經山房に幽栖して、讀書筆硯に親しみ、天保十三年幕府に召されて將軍に謁し、爾來幕府當路の人々に重んぜられた。該覽博通最も經義に深く、又甚だ説文を好み、字畫を論ずること精確詳密を極めた。四書札記・草津温泉記・對馬紀行等の著がある。

げんどうはうげん 玄同放言 二卷

澁澤馬琴 文政元年(二四七八)の著。記紀以下一百九十種の参考書目をあげ、讀書の餘暇執筆した隨筆で今その前半は百家説林卷二に入る。

げんとくくわう 謙徳公

これたゞ「藤原伊尹」を見よ。

げんない 平賀源内 二三八九—二四三九、享保一四—安永八、二二、一八、五十一歳

讃岐志度浦に生る。父定右衛門は高松侯の足輕を勤めて居たが、彼幼にして大志あり、家督を弟に譲り、長崎に行つて蘭學を修め、寶曆三年江戸に出て三浦瓶山に儒學を、賀茂眞淵に國典を、幕府の醫田村元維と共同して物産學を、又餘暇には獨りで本草學を修め、殖産興業方面で大に寄與しようと努力し、その着眼も方法もよろしかつたのに惜しむらくは上之を見るの明なく、下

亦之を冷々に見過したので彼も自棄氣味となり、狂歌狂文戯曲の作に翰晦しこの方面でも又頭角をあらはしたが、安永八年人を斬つて獄に投ぜられ(その原因については諸説がある)遂に獄中で病死した。彼の傑作は狂文六々部集と戯曲「神靈矢口ノ渡」とであるが、その他の作を見ても奇才縱横遣るに豊かなる詞藻を以てし、白眼世上を睥睨して皮肉痛刺、譏笑の表れたものが多い。尙彼の作として戯曲には、實生源氏金玉櫻・弓勢智勇湊・嫩松葉相生源氏・前太平記古跡鑑・荒御魂新田神徳・長枕褥合戦・源氏大草紙などがあり、文には、かな文選・根なし草(井上頼國氏校訂珍書文庫隨筆大觀二、根南志俱佐一〇)にも「百萬塔」叢書にも入る)風流志道軒傳(五卷、これも傑作)當世さよ風・當世野夫論・虛實山師の辨・そしり草(百萬塔)などがある。

彼が自嘲の狂歌に云ふ
むき過てあんに相違の餅の皮名は千歳のかちん
なる身を
かゝるときなんと千里の小間物屋伯樂もなく小
つかひもなし
(國刊一期燕石十種、第二冊、櫻齋老人 平賀源内實記 五)

けんなん 劍南

かうかうかかく、角田浩々歌客を見よ。

けんぶしきもくどうてう 建武式目條々

建武三年(一九九六)十一月七日足利尊氏が撰ばせた武家法令文で、全文十七ヶ條、文體は貞永式目と同じく和製の漢文とも謂ふべきもの。撰者は眞惠是圓外八人の名が出てゐて、玄惠法印なども與つて居る(群四〇一、一四、三四—三七)

げんぶんいつち 言文一致

明治に入つて新たに發達した口語文(今日では大多數が言文一致だが)をいふ。十七年若林珪藏速記の圓朝の怪牡丹燈籠(でござります體)十九年山田美妙の「風琴調一節」(た體)二十年二葉亭四迷の「浮雲」(た體)二十二年山田美妙の「蝴蝶」(です體)などがその早いもので、坪内逍遙・尾崎紅葉・堺枯川などもこの文體の發達には功が多い(廣義にいへば「言文一致」とは文章語が話語と同じであることをいふのだから、室町時代の狂言や、徳川時代の心學道話や、本居宣長の古今集遠鏡のやうなものもこの意味に於ては言文一致である。

げんべいせいすゐき 源平盛衰記 四十八卷

鎌倉時代に出た戦記文の一つで、平氏(清盛)と源氏(頼

朝)との一盛一衰を骨子として、當時の武士階級の生活を委曲詳密に述べ、遺るに柔軟なる和文、堅剛なる漢文の程よき調和の筆を以てしたものである。之を平家物語と對照すると彼は十二卷、之は四十八卷、彼は趣味の文字に富み、之は事實の精叙を以て優る。彼に無くて之にあるもの、本系的説話に八十七項、附帶的説話に百十八項、就中頼朝に關する事項が多い。平家は首尾統一があるが、盛衰記は同じ歌が重複したり、同じ事項が重出したり、稍不精撰な處がある。巻頭の「祇園精舍の鐘の聲」も盛者必滅の前提として盛者即ち清盛の末路に擱筆すること平家の如くならば意味があるが、巻頭には平家のみの運命を暗示しておいて、巻尾は餘計な頼朝にまで及んでゐるのだから不統一の難を免れない。

この兩書何れが前に出たかについては兩説がある。
一、平家が前で盛衰記は後。菅茶山の「筆のすさび」その他多くの諸家、尾上博士。盛衰記は寧ろ平家の一異本と謂ふべきだとするもの故星野恒博士。
二、盛衰記前、平家後とするもの。
イ 詳記の後に略述の生ずるが普通、近藤芳樹。
ロ 三個の理由により

1 史學的、編年體より本末體は出づべし、然るに盛衰記は編年體にして、平家は本末體なり。

2 文體、盛衰記は事實の蒐集につとめ、平家は趣味の發揮に努む、先づ事實をあつめ然る後に趣味論の餘裕を示せるもの。

3 記事、數項。

併し一、を穩當な説と認める學者の方が多い(帝文五、大町桂月氏校訂、至誠堂發行、源平盛衰記五册(學生文庫 七、一八、三〇、三二、三四) 校國大一五、一六、校國七、八、有朋堂文庫の内)

けんもん 縣門

あがたかし 縣居大人、即ち賀茂眞淵の門人をいふ。皆で三百人以上もあつたといふが、和學の學統を受けた主なる人々は、村田春海・同春道・加藤枝直・同千蔭・建部綾足・田中道磨・小野古道・木居宣長・掛取魚彦・加藤美樹・荒木田久老・塙保己一等で、歌人を以て聞えたのは前記の春海・千蔭・美樹と田安宗武、文章で傑出したのも、春海・千蔭・女流歌人の三才女と云はれたのは進藤茂子・油谷倭文子・鶴殿餘野子である(續歌二、縣居門人録) **けんもんのさんさいぢよ** 縣門の三才女 縣門即ち賀茂眞淵の門人中、婦人で和歌に秀でた三人

をいふ。進藤茂子・油谷倭文子・鶴殿餘野子(各人名の處を見よ)

けんりん 松下見林

二二九七—二三六三、寛永一四—元祿一六、二二、六十七歳

京都の儒醫、和漢の學に精しかつた。姓は橋、名は慶攝、字は諸生、號を西峯山人といひ、古林見堂について醫學を修め、十五歳にして都講となり、二十一歳見宜の歿後師の業を繼いだ。博覽強記・藏書十餘萬。借覽を乞ふ者には誰彼を問はず快く貸し與へた。五十歳餘高松侯に仕へたが、侯も能く優遇しなほ京都に止まつて著作に盡さしめた。異稱日本傳・國朝佳節録・日本記 標註等の著がある。

げんりん 山岡元隣

二二九一—二三三二、寛永八—寛文一二、四十二歳

號は而愼齋、伊勢山田の商家に生れたが、病弱にして家業を廢し、京に上つて北村季吟の門に入り、國文・俳諧を學び、又別に醫を學ぶ。その著には雜著百物語 評判の外註釋書類が多いが、彼をして文學史上に名を成さしめたるは假名草紙「他我身の上」(六卷、國刊二期 近世文藝叢書第三册)と「小扨」とである。儒佛の教理を通俗的に具象化する啓蒙的傾向は徳川幕府の政策

コの部

こいちでうだいじやうだいじん 小一條

太政大臣

ただひら「忠平」を見よ。

こうあん 藤森弘庵

二四五九—二五二二、寛政一—文久二、二〇、六十四歳

幕末江戸の儒者、名は大雅、字は淳風、恭助と稱した。弘庵又は天山と號した。博覽にして強記、博く群籍に涉つたが訓故を屑しとしない。その文章は一種の氣節をこめたものばかりであつた。弘化の始め頃から一家を立て、子弟を教へ、嘉永六年黒船の來航に方り「海防備論」二卷を著し、井伊直弼の忌諱によりて田野に屏居し益々筆を呵してその慷慨淋漓の胸臆を披瀝した。新政談・春雨樓詩抄・如不及齋文抄等の著があり、明治廿四年には朝廷から從四位を贈られた。

こうえう 尾崎紅葉

二五二七—二五六三、慶應三、一二、一六—明治三六、一〇、三〇、三十七歳

名は徳太郎、東京の人、大學豫備門時代から文學に興味を持ち文科大學を中途でよして硯友社を起し、我樂

と相俟つて近世初期「可笑記」の頃から著しかつたが、元隣の作に至つてこの傾向文學の色彩漸く薄らぎて純文學的となつた。つまり彼は如偏子に萌したこの種作品をより完きものにしたものだ。殊に小扨の如き仔細に之を檢すれば従前の教訓文學の面影と後來起る戯作の前觸れとを豫覺することの出来るやうな書き振だ。この二書の反響著しく「當世誰が身の上」「雨夜の友」など云ふ模擬も出た。(併し彼は大部分は俳諧を以て一家を爲して居たものではなからうか、近頃近松の出生地を立證する「寶藏」なる俳書も彼の點である)

げんゑ 女惠法師

一八九九—二〇一〇、文永六—正平五、八十二歳

元弘から南北朝時代にかけての學者で物識で、一世に重きをなした人である。官は權大僧都、早くより一個の識見をそなへ、學を好みて文才あり、漢唐諸儒の舊説を棄て、宋の程朱の説に従ひ、後醍醐天皇に召されて侍講となり、南北朝時代には足利尊氏直義兄弟に信頼せられ、是圓寺と共に建武式目を撰んだ。その著庭訓往來(郡二三〇、六、一一二四—一一五一)は童蒙教訓の乘として後世永く行はれた。

多文庫を發行し、明治二十二年頃から同卅年にかけて我が小説史上紅露時代(紅葉と露伴)なるものを劃する程の大家になつた。二人比丘尼・色懺悔・此ぬし・伽羅枕・三人妻などはこの期の名作である。更に三十年代に入つては長篇多情多恨に多大の進境を示し、金色夜叉に朝野の讀者を騒がせたが、惜しいかな胃病の爲めに夭折した。彼は俳句をもよくし、十千萬堂の俳號は一時斯壇に鳴つて居つた。彼は又蜀山人の筆蹟をまねて一家を爲し、清雅な文字を書いた。其上彼は後進を愛すること厚く春葉・秋葉・風葉始め多くの名家を養成した(紅葉全集)

こうがんせう 厚顔抄 三卷

契沖が徳川光圀から日本書紀の歌の註を委嘱せられて上中二卷にその百廿七首を釋き、更に自身の思ひつきで古事記の歌五十六首を釋いて下巻とし元祿四年(二三五)に献じたものである(契沖全集第五卷一―八三、並に同巻頭凡例)

こういげん 江以言

これとき「大江以言」を見よ。

こうごし 口語詩

詩の用語と音律についての從來の制約を解放して、口

語を以て自由の音律で歌つたものをいふ。四十年以後自然主義の主張が詩壇の形式的方面に影響した一現象で、四十一年岩野泡鳴の「闇の盃盤」相馬御風の「瘦犬」三木露風の「黒い扉」などは口語詩發生當時の佳作である。又これを理論の側から唱へたのは、島村抱月(「詩人」)相馬御風(「早稻田文學」)等の論議が代表的なものである。當時の詩壇は早稻田詩社・詩草社・自由詩壇の各詩人ともに口語詩を採り、以て今日の自由詩の素地となつた。

こうし 講師

- 一、歌合の時、左右各一人宛撰ばれて、取り組みの歌を讀みあげる役をつとめるもの。
- 二、奈良朝から王朝にかけて諸國の國分寺に一人宛任命せられ、その國僧尼の取締をするもの。
- 三、高等教育機關としての學校で本教授以外に於て教授を囑託せられた人。
- 四、講習會や講演會に出講する人。

こうせうしやう 後少將

よしたか「藤原義孝」を見よ。

こうた 小歌

室町期の末から徳川期の始めにかけて、市井の子女に

愛誦せられた俗語を云ふ。一面、催馬樂・今様の系統を引き之に上代の俗語を加味したもので、句法は長短不定、想は主に戀だが全然無戀愛の語もある。

思ひ出すとは忘るゝか思ひ出さずや忘れれば

降り〜雪よ 宵に通ひし道の見ゆるに

深山の鳥の聲までも 心あるかと物さびて 靜

なる靈地かな げに靜なる靈地かな

こうた 小唄

徳川時代、三絃を中心とした俗語を云ふ。虎澤・澤住以下の諸檢校が代々に作曲して益々表想複雑となつたその曲種は、本手組・琉球組・鳥組・不詳組・飛驒組・忍組・浮世組(以上石村、虎澤兩檢校の作)・端手組・七曲柳川檢校作)・裏組 七曲(柳門作)別に秘曲六種 極最上の妙曲二種、長唄(曲も作者も澤山ある)・弄齋節(僧弄齋の作)・林雪・戀慕ながし・ほそり・投節・柳節・櫻節・土手節・籬節・加賀節・滑り・芝垣節・丹前・道念佛・今古節・清攪・歌念佛・歌祭文・小室節・伊勢音頭(ひこまきり)・小六節・上方唄・潮來節・めりやす・大盡舞・四竹節・門説經・讀賣・木遣等。

歌詞の一例

戀慕流 君はさみだれおもはせぶりや、いとゞこが

る、身は浮舟の波にゆられて鳥磯千鳥、れんれれれつれ々々に身は淺草の、露をふみわけあの吉原にしどろもどろさ君故たどる、れんれれれつれ、滑り ちりりちりりと花珍らしき、雪の振袖ちらと見えそめしより今は思の種となる。

こうだうくわん 弘道館

天保九年(二四九八)水戸藩主徳川齊昭が設けた藩學で専ら光圀の精神を體して本邦特異の精華を高揚し、之に儒學を加味して文武の兩道に達せしめることに努めた。徳川時代の藩學中成績顯著なるものの一つである(弘道館記述義)

こうたひ 小謠

宴席などで時宜に合ふやうの語句を含む謠の一節を素謠にすることを云ひ、その語句も昔からそれ〜定まつて居て、大抵上歌の處を採る。淨瑠璃の方でいふ「サワリ」と云つたやうなものだ。

例 高砂

所は高砂の、四海波靜かにて、誠なり松の葉の(觀世清康氏明治改世小謠大成・正田章次郎氏能樂大辭典一〇五五―一〇七二)

こうだてんわう 後宇多天皇 一九三七―一

九八四、建治三—元亨四、五十八歳
龜山天皇の皇子で第九十一代の天皇、御在位は十三年、和歌に秀でさせられ、御製は新後撰（一八）續千載（五〇首）などに出てゐる。

こうちうしよわら 後中書王

ともひらしんわう「具平親王」を見よ。

こうぶんでんわら 弘文天皇 一三〇八一—

三二二、廿五歳

天智天皇の御子で大伴皇子と申す。壬申の亂の爲め御在位僅かに八ヶ月で御自害、明治三年七月「弘文」と御謚號の沙汰があつた。非常に文才に秀でさせられ、懷風藻中次の二首は名作でもあり、我邦最古の漢詩でもありして旁々名高い。

五言、侍宴、一絶

皇明光^{ナリ}日月 帝徳載^ニ天地

三才並泰昌 萬國表^ニ臣儀

五言、述懐、一絶

道徳承^ニ天訓 鸞梅寄^ニ眞宰

産無^ニ監撫術 安能臨^ニ四海

こうぶんあん 弘文院

王朝私學の一つで、和氣廣世が父清曆の遺志を繼いで

私第内に建て、内外の典籍數千卷を備へ、懇田四十町を附して和氣氏子弟の教育所に宛てた。私學中設立最も早く、年代は不明だが、清曆の死、即ち延暦十八年（一四五九）を去ること遠からん中に設けられたものであらう（古類文部部二、一二九四—一二九五）

こうぼふだいし 弘法大師

くうかい「空海」を見よ。

こうらん 紅蘭 二四六四—二五三九、文化元

—明治一二、七十六歳

詩人にして尊王家たりし梁川星巖の妻。畫を能くし、文を能くし、最も詩才に長に、裁縫刺繡の女藝に至るまでも堪能であつた。夫妻伉儷うるはしく相携へて各地を遊歴した。星巖の國事に奔走するや彼女の内助に俟つ所少なからず、世呼んで近世の女傑と云ふ。その詩集を紅蘭集といふ。

こうりぶ 江東部

ただひら「大江匡衡」を見よ。

こうろく 佐藤紅緑 明治七、七、六一

弘前市親方町の人、名は哈六、弘前中學を四年で退學し、法學院に學んだが性來文學の趣味あり、子規門下の俳人としても聞え、通俗小説作家としても有名なり。脚

本も書けば準樂劇も書く、目下六甲苦樂園で映畫劇の經營に従事して居る。小説に影法師・地藏子・俠艶録・脚本に、不如歸（小説の雛案）・うらおもて（喜劇）・春の歌・日の出・俳句に、俳句小使紅緑子・三聖句選等の著がある。

こからしやうくわら 後江相公

ともつな「大江朝綱」を見よ。

こがく 古學

ふくこがく「復古學」を見よ。

こがくせんせい 古學先生

じんさい「伊藤仁齋」を見よ。

こかしはらてんわら 後柏原天皇 二二二

四—二一八六、寛正五、一〇、二〇—大永六、四、七、

六十三歳

後土御門天皇第一皇子、御諱は勝仁、御母は贈皇太后源朝子、第百四代に當らせられ、和歌に御堪能であつた。御製集を柏玉集と云ふ。徳川時代堂上派歌人の模範としたものである。又毎年正月御歌會始を行はせられることは早く鎌倉時代の中頃の記録にも見えてゐるが、この御代より定例の行事と定めさせられ毎年正月十九日と御定めになつた。この行事は後世長く行はれ

以て明治・大正の今日に及んだ。當時公卿にも三條實隆や冷泉政爲などがあつて歌壇が際だつて榮えた。

御製の一二をあげると

日影にぞ又そめ出すうづもれし木の葉つゆけき霜のむら消え

思ふにもいく海山を凌ぎ來し心やたぐふ雁の一聲

こかずあなう 五家髓腦

王朝に於ける五種の歌學書をいひ、後世永く作歌や歌論の参考に資せられた。藤原公任、新撰髓腦・能因法師、能因歌枕・藤原仲實、綺語抄・藤原清輔、奥儀抄・源俊賴、無名抄。

こかた 子方

能を演ずる時少年に扮するものをいふ。

ときやうとくせつしやうさきのだいじやうだいじん 後京極攝政前太政大臣

よしつれ「藤原良經」を見よ。

こきんでんじゆ 古今傳授

古今集中特別の歌語を定めて秘傳とし、妄に他に教へないことになつてゐる。歌道執心によつて高弟の一人が之を授かる。これ所謂古今傳授である。その特別の歌語は三鳥・百千鳥・呼子鳥・稻負鳥・三木・をかたま

の木・めど・けづりばな・一草・かはなぐさ・古としの巻・初はなの巻・七首の祕事・七ヶ條の大事・三たりの翁・二聖の傳・六歌仙の傳などで、その意味は今から見ると餘計なもつたいをつけ牽強附會に過ぎないが、下剋上の世相に種々無秩序亂脈な事象が續出した當時にあつては、斯うした人工的な傳統精神も亦歌道を重からしむる一方便として、時勢の要求に應じて出現したのかも知れない。

古今傳授のこと文に見えたる始めは東常縁に始まる。後土御門天皇の文明年間東野州常縁古今の祕訣知れるよしを聞き召し遙々都へ上せて御聽きになつた。常縁は淹留三年多くの弟子を教へたが遂に古今傳授の沙汰に及ぶものはなかつた。中に彼の宗祇は特に際立つた熱心家であつた。三年の月日もいつしか流れて常縁は任地へ歸東することになり宗祇は名残を惜んで遙々見送つた。行き行いて美濃の國山田の庄宮瀬川のとりに至る。常縁その篤學と篤志に感じとう／＼こゝで古今傳授をした。是れが抑々古今傳授の嚆矢であつたと云ふ(俳諧七部集の註による)では常縁以前の傳統はと云ふに古今典系圖によると左記の通りになつてゐる。

系圖表書傳授次第



古今傳授を得たものの證としては左記の目録を渡したものだといふ(これも古今典所載のまゝ)

目録

一、奉授	一通	一、三鳥の大事	一通
一、三ヶ之大事	一通	一、口傳の事	一通
一、作傳之事	一通	一、風體の事	一通
一、重之重	一通	一、短歌の事	一通
一、稽古方	一通	一、三人翁之事	一通
一、傳授帖(裏書に傳授人) の次第あり	一、系圖		一通

已上十四通モトノマ、

年號月日
切紙の寸法

切紙の寸法 横十一寸 横九寸七分 横九寸三分
 豎十一寸五分 又豎九寸八分 又豎九寸六分 口傳
 東家のものはすこし短せばき也

紀氏女説口傳

左衛門佐基俊
 古今傳授之儀
 自此人始一五條三品俊成
 任弟子也云々
 源俊頼

京極黃門極通而上冷泉通
 下ル二條通故名
 中院 爲家

二條 爲世、御
 氏、貞應 本 御子左子左は所頼阿
 冷泉 阿佛子 爲相後撰
 嘉祿本

經賢 堯壽 堯孝 常縁

この文面によると四條大納言公任が一番の翹祖のやうである(けれどもこの古今典は何處まで信用してよいものか疑はしい。三位と三品とを混用する位の著者といふ點から推しても、傳統の爲めの傳統でないかとも思はれる)宗祇以後の傳授は大體次の通りである(藤岡博士日本評論史による)



此切紙、明應三年八月二日に相傳云々
 思ふに斯うした傳授は發生當時には歌壇の地歩を重からしむる助けにもなつたらうが、之が爲めに短歌の清新澗たる情趣を涸渇させた弊は遙かに大きいものがあつた。後年戸田茂睡が梨本集で革新の叫びをあげるまでこの迷夢がさめなかつたといふのは夢にしては餘りに長い——而かも悪夢であつた(尙國學者傳記集成三八—四一参照)

こきんわかしふ 古今和歌集 二十卷

醍醐天皇の延喜五年(一五六五)四月十八日紀貫之・凡河内躬恒・紀友則・壬生忠岑の四人勅を受けて萬葉に入らぬ古今の歌又自らのをも選んだ我國第一番の勅撰和歌集である。

四月十八日といふに異説がある。
 一、四月十八日に撰成つたと見るのが普通の説で、藤原仲實の古今目録にも「延喜五年四月十八日卷軸始めて就る。其後云ふ延喜七年、十三年等の歌あるは優美なるに堪へずして後人の加へたるなり。」

(延喜七年九月大堰河行幸の歌二首と同十三年三月亭子院の歌合のうたが三首入つてゐる。
 二、四月十八日は始めて勅を受けた日だ、今註一本(併

し序文の文調からどうもさうはとれない)

三、十五日に撰成りしなり。國俊抄・日本紀略・扶柔略記・本朝世紀・拾芥抄・本朝帝記。

四、六日の日撰びはじめたるなり、貫之集(これは續萬葉とまぢがつたものだらう)

五、二日 大鏡

歌麿を分けて、春・夏・秋・冬・賀・離別・羈旅・物名・戀・雜・哀傷・雜體(長歌・旋頭歌・俳諧歌)大歌所歌とし、採つた歌は千九十九首、墨けしの歌十一首を加へて一千一百十首。大まかに云はゞ「よみ人しらす」の歌は萬葉直後の古い歌で、ついで大同弘仁承和の頃の歌、それについて六歌仙の時代最も新しいのは四撰者並に同時代の人々の歌である。

歌の大部分は秀味で花實兼備し歌麿といふものは至て少い。巻頭の貫之の序文も歌論として傾聴に値すべく巻尾の紀淑望の漢文譯もよく出来てゐる。國文序の解釋上對照すればよくわかる。

原本に貫之自筆本があつたことは榮花物語禎子内親王御裳着の處にあるが、袋草子によると貫之自筆本は焼失したとあるから、後世貫之筆とあるは誤つてゐる。(尾上柴舟博士「歌と草假名」高野切・龜山院切・本阿彌

切・筋切・鶉切(傳顯輔筆)中山切(藤原兼實筆)今城切(藤原雅經筆)などあつても眞偽も判定しかねるし一部断片的のものである。家隆筆と稱する完本があるさうだがこれも恐らくは偽物であらう(家隆の眞筆は嘗て必要があつてしらすべたことがあるけれども、どうもさうした本物はなかつた)今日通常の流布本定家の定めた定本により假名遣などを多少直したものである。之に二種ある。貞應本といふのは貞應元年十一月廿日に訂正したもの、嘉祿本は嘉祿二年四月九日に定められたもの、この二種を對校して尾上柴舟博士が出されたものがある筈だがまだ見ない。最近同博士の校古今和歌集が出た。これは元永三年七月廿日の奥書のあるものによられたので、延喜五年を去る二百十七年(貞應元年は三百二十九年後)だから、今日得られる限りに於ての最古のものである。

註釋の書は非常に澤山あるが金子元臣氏古今和歌集評釋が優れて居る。併せ見るべきは契沖古今集餘材抄・香川景樹古今集正義・本居宣長古今集遠鏡(片野支店發行)・尾上柴舟歌と草假名。

(明治の版本には、一野村書店・二須原屋・三尙榮堂・四崇山堂・五椀屋・六博文館等がある。)

こぎんわからくてふ 古今和歌六帖 六帖

古今の和歌を、歳時・天・田・野等二十餘の題に分けて類集し、古來歌人に重寶がられたものだが撰者も時代もよくはわからない。一説には紀貫之の女が撰んだといふ(續國九二四一—一〇三〇)

こくが 梅暮里谷峨 二四一〇—二四八一、寛延三—文政四、九、三、七十二歳

徳川時代の戯作者、元舊久留米藩に仕へ、江戸本所なる埋堀邸に詰めて大目付役を勤めてゐた。通稱は反町三郎助、(後に與左衛門)別號舜亭、彼の出世作にして且つ唯一の傑作は寛政十年の「傾城買二筋道」二編(帝文二五)で「男女の情は容貌にあらず誠心なり」との落想をうまく書きこなして從來の洒落滑稽一偏なる傾城買物に一進境を示したが、元來素養淺くして單に才を以て筆を遣るといつた風なので、その續編の「廓の癖」や「宵の程」は何れも行はれなかつた。その他に十五六種の作があるが佳作はない。

こくがく 國學

大寶令によりて、官吏登用の目的を以て設けられた各地方の學問所をいひ、生徒定員は大國五〇・中國四〇・上國三〇・下國二〇・太宰府だけは、六國分を併せて二

百人、修業年は九ヶ年を最長限とし、卒業生を貢人と稱し、都に上せて大學に入學せしめる(教育大辭書「國學」並に「平安朝の教育」の項)

こくがく 國學

漢學に對立する日本學の意で多少漠たる嫌はあるが、大體、一、國文學・二、國語學・三、國史學・四、音韻學・五、系譜學・六、有職故實・七、神道・八、古醫方學の諸項を含んだ學問をいふ(徳川時代に「國學の四大人」とは荷田東廬・賀茂眞淵・本居宣長・平田篤胤をいつた。(尙このことについては物集高見氏廣文庫第一册卷頭五—九を見られたい)

こくかはちろん 國歌八論

荷田在滿の和歌に關する考へを纏めたもので、一、歌源論・二、歌論・三、擇詞論・四、避詞論・五、正過論・六、官家論・七、古學論・八、準則論と分説してある。之に對する批評は田安宗武の國歌八論餘言・眞淵の國歌八論餘言拾遺を始めとして本居宣長・伴蒿蹊・荒木田久老・藤原維濟・平安逸人・糟粕子・松平康定・小田清雄・平傳・石戸谷昌等澤山に出た(續歌學全書一二・國刊六期正三十輯一・福井久藏氏、日本歌學史二五八—二七三) こくすゐほそんしゆぎ 國粹保存主義

我國の歴史を尊重し、我國特有の美風良俗長所の發揮に努むべしとする主義で、明治十七年頃歐化主義の反動として擡頭し、二十年臺に入りて益々盛んに、遂に三十年臺の新日本主義にその尾を接して居る。獨逸文化・獨逸精神の取り容れられかけたのもこの期の始めのことで獨逸の國家至上主義的精神が、彼とその國情に類似點多い我國に甚大の感化を及ぼし、遂に我が國の歴史と國民性との眼さめる導火となつたのである。二十一年三宅雪嶺を中心とする政教社は雑誌「日本人」を發刊し、二十二年には「日本新聞」をも發行して盛に歐化主義一派を攻撃した。これと相前後して鳥尾小彌太は保守中政黨を組織し、「保守新論」「王法論」などを著し、川合清丸は日本國教大道社を設立し「大道叢誌」を創刊し、その他勝海舟・副島種臣・山岡鐵舟なども此主義の主張者であつた。

フエノロサの日本美術推獎、狩野芳崖・橋本雅邦の擡頭から、美術取調委員の任命・國文學の勃興・佛敎史の研究・基督教の國體化の傾向など皆この期の主なる事象で、廿三年十月卅日御下賜の教育勅語は又この精神を取り容れて新日本國民の進むべき中正穩健な目標をたてられたものに外ならない。

こくせんやかつせん 國姓爺合戦

近松が正徳五年(二三七五)竹本座の爲めに書き下した時代物で「明末の遺臣鄭之龍その子鄭成功(和藤内)鄭成功の妹錦祥女、忠臣吳三桂、その妻柳河君などの臥薪嘗膽によつて首尾よく敵國の韃靼王や、裏切の大將李蹈天を誅伐し、大明の國運を恢復する」といふ筋で構想の大きいことと、モデルのあつたことと背景が和漢二國に跨つてゐることと國民性の誇りを高揚してゐる事と、義理人情の葛藤を可なり自然的に發展させたことなど幾多の長所があつて三年越十九ヶ月大入滿員といふ未曾有の大當りなとつて、その少し前頃からとかく竹本座が經濟難で豊竹座に壓倒されて居つたのまでも恢復し得たといふ事も一種の奇縁だと謂はれた。

こくどうさきのないだいじん 後九條前

内大臣
もといへ「藤原基家」を見よ。

こくふう 國風

- 一、その國特殊の風俗。
- 二、我國の歌即ち和歌のこと。
- 三、その地方に於ける歌謡(支那の詩經に於ける「風」といふはこれに當る)

こくぶんがく 國文學

「我國の文學」の意である。この語は外、世界文學、各國文學と相對し、内國文で記されたものの中の非文學的作品と相對してゐる。今日普通國文學史の取扱つてゐる諸作品を云ふと思へば大差はない。國文學の凡ては嚴密な意味に於て純文學ばかりかといふに必らずしもさうとは限られない。従來國文學といふ語には我國の純文學的作品は勿論入つてゐるが又慣習上幾分の第二次的文學作品もあると思ふ。

こくぶんがくし 國文學史

我國の文學史をいふ。即ちその起源・發生・沿革・文化的交渉を體系づける研究をいふ。我邦にこの種の研究の始まつたのは日新しいこと、てまだその研究に對する方法學的研究も緒についてゐないが、近來追々新しい意圖の下に攻究された國文學史の編著が出かけたのは悦ぶべき現象である(已出國文學史の論述については拙著綜合日本文學全史の緒論と、卷末附録を見られたし)。

こくわんしれん 虎關師鍊 一九三八—二〇

〇六、弘安元、四—貞和二、七、二四、六十九歳
名は虎關、師鍊はその號、俗姓藤原氏、性來多病十歳

にして出家し、二十餘歳にして三藏の聖教諸家の語・九流百家の典籍・本朝の神書に至るまで涉獵せざるなく、正安元年宋に渡らんとし、母に止められて止むなく中止、洛西嵯峨・白河濟北庵・伊勢の本覺庵・伊勢西明寺・東福寺・南禪寺・東福海藏院・城北柏野の楞伽寺等各處に轉住して到る處民衆を徳化した。臨終豫め不起を自覺し、剃落臥坐して衆と永訣した。衆遺偈を乞ふ。曰はく

勿啓予手 勿啓予足 脱體現成 其人如玉

と、やがて靜かに瞑目した。蓋し彼は久しく臂を病んでゐたからである。その著に元享釋書三十卷廣く世に行はれ雜著文集二十卷濟北集と云ふ。その他佛語心論・十禪支論・禪餘或問・禪戒論・聚分韻略等の著もある。

(上村觀光氏五山文學小史五一—五三)

こけのころも 苔の衣 寫本五册

鎌倉期、源氏物語の模倣作品の一つ。

「關白の一子右大將、その從妹を戀し迎へて妻とし男女二人の兒まで設けてゐるのに心なの冷泉院の御勅としてその姫宮を右大將に妻あはせようとあるので夫人はそれが病のもととなつてやがて逝去右大將も失望して横川に隱遁した」といふ。建長頃の作か?(古物語

類字抄)

こころしふる 古語拾遺 一卷

大同二年(一四六七)二月十三日忌部廣成、自家に傳はれる神代—孝謙の古事を漢文に綴つた古記録で歴史と上表と故實との混合したやうなものである。忌部氏の祖先太玉命は中臣氏の祖先天兒屋根命と相並んで天孫に奉仕した神々で、その關係によつて兩家は代々神祇祭祀に奉仕してゐたが、兎角中臣氏が専横にして時めき、忌部氏がけ厭され勝ちで僅に五位六位の地位を贏ち得たるに過ぎないことを憤慨し、家傳を具陳して我家の面目を發揮したものである。さうした個人的感情問題を離れて見ると、上代文學や國史の研究上色々益するところがあらう。原文は群四四六、一六、一一—一九日本國粹全書七等に入り。

こころせづく 五言絶句

漢詩の一體で五言の句四つから成立つ詩をいふ。

例(・は仄。は平)

秋浦歌(仄起)李白

起句 白髮三千丈
承句 緣愁似個長
轉句 不知明鏡裏
結句 何處得秋霜

班婕妤(平起)王維

怪來妝閣閉
朝下不相迎
總向春園裏
花間笑語聲

こころちよもんじふ 古今著聞集 二十卷

橋成季、建長六年(一九一四)の編(漢書鼂錯傳に「此大夫之所著聞也」とあるのなどは「著聞」の早い用例であらう)主として日本靈異記・今昔物語・古事談・十訓抄・物語・日記等を參酌して奇聞異事を輯めた雜纂で、序文には著者の嗜好と閱歷に即して管絃歌舞と畫圖とを旨と記述するやうに云つてあるが、事實は神祇釋教忠臣公事から魚蟲・禽獸に至るまで三十部類も集めてある。この著を通じて當時の内面生活即ち一般の思想や趣味の傾向を見る爲めに前述諸項目の記事の多少の順位をあげると

- 宗教、釋教・神祇
- 藝能、和歌・管絃歌舞・文學・畫圖・蹴鞠・能書・術道
- 武藝、相撲・強弓・馬藝・弓箭
- 社交、哀傷・祝言
- 自然、魚蟲禽獸・草木

こさいばり 小前張

さいばり「前張」を見よ。

こさがてんわう 後嵯峨天皇 一八八〇—

一九三二、承久二、二、二六—文永九、二、一七、五十三歳

個人の生活、飲食
道徳、公けには、公事・政道・忠臣
私には、孝行恩愛
惡徳には、偷盜・宿執・偷盜・博奕鬪争
滑稽、興言利口
となる。
探抄の博きにわたり、話材の系統的に編まれ、文致の達意な和漢混淆文體なると色々長所もあるが創意の乏しいこと、材料をたゞ集めただけで著者の主觀の飾にかけたあとが少いことが缺點であらう(日文二一・校國一〇、國大、一五、一五五—六一九)

こころりつし 五言律詩

漢詩の一體で五言八句より成るものをいふ。中間の四句を相排對せしめること(第三と第四と、第五と第六と)第五句には押韻しないこととをのければ、あとは五言絶句を二つ併せた詩形と思へばよい。

例 送張子尉南海(仄起) 岑參

不擇南州尉 高堂有老親
樓臺重蜃氣 邑里雜鯨人
海暗三山雨 花明五嶺春
此鄉多寶玉 慎勿厭清貧

こさん 菊地五山 二四三二—二五一五、安永

元—安政二、八十四歳
名は桐孫、字は無絃、通稱左太夫、號は五山の外、娯庵・小釣舎等あり。讃岐高松の人で江戸に出て市河寛齋

の門に入り後、詩を以て諸生を教授し、令名有り、ついで高松侯に聘せられて儒官となつた。五山堂詩話・五山堂詩存はその名著である。

ごさん 御傘
おからかさ「御傘」を見よ。

ござん 五山

室町時代左記京の五大寺をいふ。文學暗黒の時代一縷の生命はこれ等諸山によつて繋ぎとめられた。靈龜山・天龍寺・萬年山相國寺・東四山建仁寺・惠日山東福寺・京城山萬壽寺

（南禪寺は五山の上とせられた。之に準じて鎌倉にも五山の目があつて壽福寺・淨智寺・淨明寺・圓覺寺・建長寺をいふ）（上村觀光氏、五山文學史、同五山文學小史）

こし 古詩

「漢」以前の詩の總稱で、平仄押韻も嚴格でなく音律も五言七言時には四言二言をも交へ用ひられた。後世の詩體に似せたものも亦古詩と謂はれ、その命題の結尾には大抵「歌・行・引・吟・詠・曲・怨・篇」等の文字をつけるといふ。又それ以外のもある。例「毒威の飯午歌・荆軻の易水訣別・作者未詳の木蘭ノ辭等。

こじき 古事記 三卷

元明天皇の和銅五年（一三七二）正月廿八日、太安曆が勅を受けて撰んだ我國の古記録である。

之より前、近江朝廷の時已に修史の御意圖はあつたものなの、天武天皇の淨見原朝廷ではその御意圖の繼承以外更に新朝廷の威容を整へる爲めの必要と、諸家の傳説區々たるに統一を與ふる必要とに迫られて、さてこそ天皇自ら稗田阿禮を召して御口授になつたものであらう。阿禮は一介の舍人だが時に年二十八歳「聰明にして目に度れば口に誦し耳に拂へば心に勒した（阿禮は女であつたらうとの説もある）天皇が阿禮に誦習せしめられたといふのは彼の理解力と記憶力の異常なのを利用して、御親ら削偽定實して整形せられた史傳を御口授になつたものであらう。即ち之を古記録に徴するに本邦修史の事業たるやその由つて來る所遠きものあり。

一、履中天皇第四年に「始めて諸國に國史を置き言事を記し四方の志を達せしむ」

二、推古天皇第廿八年に「是歳皇太子島大臣共議、錄天皇記、及國記臣連伴造國造百八十部並ニ公民等本記」とあり

三、天武天皇十年三月に「天皇御于大極殿以詔ヲ川島ノ皇子廣瀨王、竹田ノ王、桑田ノ王、三野王、上毛野君三千忌部ノ首子首、阿曇連稻敷、中臣ノ連、大島平群子首。令記ニ定帝紀及上古ノ諸事」大島子首親執筆以錄焉

とあるは殊に重々しく修史のことをお扱ひになつた例であるにも拘らず中途で天皇崩御、勅を拜した人々の中にも死亡する向もありてその結果を見ることが出来なかつたのは遺憾とせられてゐる。

四、元明天皇和銅四年九月十八日太安曆に勅して阿禮が記誦の舊辭を撰録して獻らしめられた。それから四ヶ月と十日かゝつて成功して上奏したのがこの古事記である。

已にこれまで三回までも修史事業に手をつけられたこととの明記がある點から推しても安曆の仕事が單に已整史實の文章化といふ事のみにあつて削偽定實といつた風の記事の内容そのもの、考證批評・取捨選擇にまで立入つては居ないことを想はせるし、もしそんな事を併せ修めるにしてはあの三卷を僅か五ヶ月足らずで仕上げたことは非常な能率なる譯だし、安曆自身の上奏文にも「日下、帶などの用例は本のまゝにした」と

ある。さすればその所謂「本のまゝ」と云ふ「本の」或る原本が無くてはならぬ筈であるから、色々の點から推して太安曆撰と云ふその撰述といふことの主内容は天武天皇が削偽定實せられて、稗田阿禮に誦習せられた事實を文章化する點にあつたと謂ひたい。尙もこのことを證據立つることは安曆自身「撰述上の苦心として上表したことも旨と形式上のごとで内容上のごとにわたつて居ないことである。抑々漢字日本化のごとたる専ら訓をとれば「天地」を「あめつち」と詠むやうなのはやさしいが「因崩騰之物而成神名」（もえあがれるものによりて成りませる神の御名は）と様なのはどうしても漢文の句法の素養なくては訓めない。もつと長くならんとつと「隔靴搔痒の憾があるであらう。さり」とて専ら「音」ばかりを採るとなると「久羅下那洲多陀用弊流」（くらげなすたよへる）の様に多くの文字を費して冗長に陥る。「如海月漂」と四字ですむものを十字にも延ばして苦しむのも賢い仕方とは云へない。安曆の苦心も主として此邊にあつたらしい。上表文に上古ノ時言意並ニ朴ニシテ文ヲ數キ句ヲ構フルコト字ニ於テ則チ難シ 已ニ訓ニヨリテ述ブレバ詞心ニ連バズ 全ク音ヲ以テ連ヌレバ事趣更ニ長シ 是ヲ

以テ今或ハ一句ノ中音訓ヲ交ヘ用キ 或ハ一事ノ内全ク訓ヲ以テ録ス 即チ辭理見エ難キ六註ヲ以テ明ラカニシ 意況解シ易キハ更ニ註セズ
古事記假名とも謂ふべき特殊の漢字驅使の次第は本居宣長の古事記傳卷一に委しくあがつてゐる。

- 一、之は一個の傳説集であるとも見ても當つてゐる。夢野の鹿・倉崎山のことなどが出てゐるから。
- 二、神話の一種と見ても當つてゐる。須佐之男命・大國主命等の英雄神話や、稻羽の白兔のやうな動物神話もあるから。
- 三、之は一個の歴史である。もとく支那の修史から暗示を得て思ひつかれたとすら想はれる。
- 四、之は神道の書物である。神ながらの道を説いたものであるとも看做されて神道家必讀の古典となつてゐる。
- 五、之を以て我が古典文學の一つと看做したい。古代祖先が原始的なる生活に多分の夢と空想とおつ被せて謳つた生々發育主義的な「生の歡喜の記録」であり「我邦文化の搖籃」の具體化であつて上述四要素はけれども吾人は特に、

古事記研究の關係資料としては

日本書紀・先代舊事紀・古語拾遺・高橋氏氏文・古風土記・祝詞・宣命・萬葉・考古學・史學・金石學・比較神話學・言語學・文字學

などがある。又古事記解讀はなせむづかしいか、といふに少くとも一、古事記假名二、漢文の句法三、漢語に相當する現代國語四、現代國語に相當する古典語句の諸素養が入るからである。試に

自ニ其豫末ニ垂落之鹽 異積成ノ島 是渺能基呂嶋

といふ句につきて考察すればわかる。

古事記の原本の一番古いものは眞福寺本で曩に古典保存會が玻璃版にして頒布した。諸異本註釋本につきては井上頼因博士の古事記考がある。註釋としては本居宣長の古事記傳が委しい。その他故三矢重松博士の「古事記に於ける特殊なる訓法の研究」は得られ、ば是非一讀すべきものだ。最近には倉野憲司氏の「古事記の新研究」も出た。

こしきでん 古事記傳 四十四卷 四十九冊
本居宣長が三十五歳の明和元年(二四二四)から、六十九歳の寛政十年(二四五八)まで前後三十五年の心血を

その結果相混融するものと見たい。
尙古事記は之を日本書紀と對照することによつて益々その性質を明らかにすることが出来る。

- 古事記
 - 一、年代、元明天皇の和銅五年正月廿八日
 - 二、著者、一人
 - 三、時代範圍、三卷上神代、中神武—應神下仁德—推古
 - 四、形式日本的の漢文を國文的に訓讀する様の文
 - 五、内容、純眞なる祖先の生活記録
 - 六、記事、定説一種のみを採る
 - 七、私撰(勅は受けなければども紀とは異なり)
 - 八、後代の研究、あまりせられず
- 日本書紀
元正天皇養老五年五月廿一日
舍人親王を總裁として紀清人、太安磨等多くの人々
- 廿卷 神代—持統
純漢文的
唐情に囚はれ優麗潤飾に失し詞の爲めに意を害せるところあり
「一書云」をあげて衆説を併列す
官撰
朝廷係りの官を設けて訓點を命ぜらる日本紀
竟宴歌はその慰勞會の席上での歌である

傾注した力作で、首卷一冊・上卷十七冊・中卷十七冊・下卷十冊・目錄三冊と別に十七卷の附録として服部中庸著の三大考一冊とあり、その功程は宣長の日誌に詳かである。

古事記の本文を校訂し、各語の意義を闡明し、建國の精神を尋ね上代生活を探るに博引宏證實に古事記註釋の唯一良書であり他一般上代文學研究上の無二の寶典でもあり又學者的精進の一好例である(本居宣長全集一、二、三・倉野憲司氏古事記の新研究一三—二三)

こしきぶないし 小式部内侍?

橘道貞の女で母は和泉式部、彼女も亦母の素質を受けて歌に堪能、上東門院に奉仕して才名夙に聞えてゐたが、惜しいことには夭折したので多くの秀味を遺すことが出来なかつた。彼女の歌として有名なのは中納言定頼が「丹後へつかはしける使はかへりたりや」との戯に對して

大江山いくの、道の遠ければまだふみもみず天の橋立
と云つたのと、病あつしくなつたとき
いかにせむ行くべきかたもおもほえず親に先だつ道を知られば

と云ふのであるが、尙後拾遺・金葉・詞花・續後撰・玉葉・新千載・新後拾遺等に散見する。

又宇治拾遺物語五ノ一八には大二條殿(敦通)が彼女を愛せられた記事があるし、後拾遺集十には彼女の母和泉式部の

小式部内侍なくなりて後、孫どもの侍りけるを見てよみ侍りける
とよめ置きて誰をあはれと思ふらむ子は勝るらむ子は勝りけり

とあるのを見ると天折と云ひ條全くの少女でなく相當の年頃で亡くなつたものと推せられる。

こしせいぶん 古史成分 元十五卷 今三卷

平田篤胤が古事記の文體に倣つて神代から推古天皇の御代までを詳述した史書で、その資料には記・紀・古語拾遺・風土記等を探つた。今日在るものの中古いのは文政元年(二四七八)板行の神代の部のみの三卷である。

こしちよう 古史徴 四卷

平田篤胤が自著の古史成文の史的確實を論證する爲めに、諸異説を評論したもので古史成文と併せ見れば上代史研究の好資料であらう。第一卷開題記を春・夏・秋・冬の四冊に二卷以下を各上下に都合十冊に記して

ある。文政元年(二四七八)十二月山崎篤利の序同二年新庄道雄の序がある。

こしつう 古史通 四卷

新井白石、正徳六年(二三七六)三月の作、神代より神武天皇までの一般史で記紀や舊事記を資料にしてある。これの餘意を補つたものに古史通或問二卷といふがある。矢張白石が同時に書いたもの(國刊一期新井白石全集三)

こしでん 古史傳 八帙三十六卷 已刊廿九卷

平田篤胤が自著古史成文は古事記に准へて作り、この書は宣長の古事記傳に准へて、右の古史成文を細釋詳註したもので我國の古道一切の眞意この著に説き盡されてある。已刊本は神代の卷三卷が缺けて居る(別に古史傳目錄三卷、豊前中津の人渡邊重春氏によつて明治九年九月廿五日刊行されて居る)

こしちてう 五七調

我國韻文の音律に於て五言七言を連れて一個の纏まつた想を表現するものを云ひ、萬葉の長歌は大部分之により、後次第に七五調に變つたが、明治三十年後新體詩家によつて又この調を用ひられるやうになつた。感じからいふと頭小尾大でどつしりとした莊重味はある

が輕快流麗な調子はない。

例「五あめつちの七別れし時ゆ。五神さびて七たかくたふとき。五するがなる七ふじのたかれけ云々

こじふ 湖十 一世、二三三六―二三九八、延寶

四―元文三、七、二七、六十三歳
初、曾氏、後、深川氏、老鼠・永機・木者庵・謙堂・老鼠・鼠肝・露入道等の別號がある。江戸生れて其角の門(江戸座)に入り、遂にこの座の正系を繼ぎ、その後代々「湖十」を稱した。彼の著には二十歌仙・角文字・若帖・誹太郎・このむれ・肩斧日録などがある。

(二世以下の著書と歿年は、二世延享三、正、二四、俳諧古籙。三世安永九、七、一五、寶曆句集。四世寛政元、五、二七。五世文化三、七、二七。六世天保四、一〇、二〇)

こじふおんづ 五十音圖

我國語に發音せらるゝ清音(従前所謂清音のこと)を悉曇(梵語)の音圖に習つて構成したもので、創始者については吉備眞備(同文通考三その他多くの書)だと謂はれ又百濟の尼法明が對馬人に教へたのが始めだ(和字大觀抄)などいふ。又、神代から有つたといふ(日本紀神代紀合解一)もあり要するに未詳である。その排列も今日のやうにアカサタナハマヤラワとなつたの

は徳川時代のことで、その中「イ」と「キ」の區別は契沖により「オ」と「ヲ」の區別は宣長によつて立てられた。以前の排列は

- 一、アワヤナタラハマカサ 倭片假字反切義解
- 二、ラマアカサタナハワヤ 略本和名抄
- 三、アカラサヤハマラタナ 管絃音義
- 四、アカサタナハマヤラ 同、訂正の圖として掲げたもの
- 五、アヤワカサタナハマラ 加奈布具志上

など種々あつて繁瑣な理由づけがしてある(廣文庫第七冊 一〇三六―一〇四七・古類、文學部一、八四―九八)

こしふるわかしふ 後拾遺和歌集 二十卷

藤原通俊が白河院の勅を奉じて承保二年九月から十一年掛つて應徳三年(一七四六)九月十六日に撰進した勅撰集で、古今後撰に入つた詠はにおいて梨壺の五人あたりから以後の秀味一千二百八首を採り、拾遺の神祇の部立に倣つて釋教の部をも設けた。當時經信・匡房・澄源法師など多くの斯道の大家あるを措て通俊が撰者になつた事についてはとかくの非難があつたといふが實は通俊が自ら進んで申受けたものなのである(袋草子。

八雲御抄)又或人は此集を「小鱈集」と嘲つた。それは住吉の津守國基が撰者に鱈といふ小魚を賄して多く入撰した事を罵つたものであるといふ(けれども事實國基の味は三首しか入つてない)又その頃にこの集を非難して匿名で「難後拾遺集」といふを出した人があつて、世間では多分經信であらうなど取沙汰したといふが經信の人格はそんなさもないことをしさうには思はれない。要するに集の撰者は歌人一世の名譽とする所之を中心として色々の感情問題が續出したらしい(歌學全書四、国歌大觀八二—一三)(尙「通俊」をも見よ)

こじふゐん 五十韻

連歌や連句(俳諧)に於て句數の五十あるものをいふ。歌仙について多く用ひられた。

こじまたかのり 兒島高德

資料、太平記四ノ一九・參考太平記四ノ四四史籍集覽史鑑後編五ノ一八・廣文庫第七冊一〇四九—一〇五四・宮田秋堂氏、薩摩琵琶歌・兒島高德、朝野書店。

こじまほふし 小島法師?

太平記の著者だといはれて居るが、傳記は未詳である(洞院公定の日記に一寸出てゐたのを故重野安釋博士が始めて見出された人である)

こじやうるり 古淨瑠璃

近松の新淨瑠璃以前の淨瑠璃を總稱して、古淨瑠璃といふ。淨瑠璃十二段草紙・金平本その他新群書類從に多く收められてある。古淨瑠璃は作意が荒唐稚拙で、用語が蕪雜で談話の劇化が不十分な點が新淨瑠璃に比して著しく目に立つ。

こしゆん 北村湖春 二三〇八—二三五七、慶安元—元祿一〇、正、一五、五十歳

季吟の長男で、和歌に堪能で幕府の歌學所に召され花果院法眼と號した。その著「源氏物語忍草」五卷は今も行はれてゐる。

こしよさくらほりかはようち 御所櫻堀

河夜討

元文二年(二三九七)正月竹本座の爲めに文耕堂と三好松洛が合作した時代物で、寶曆十二年正月大坂三樹大五郎座で歌舞伎に上場、安永二年三月には江戸の市村座にも上せられた。

「義經が比翼の契り淺からで早や着帯の」經の君をば平家方(時忠の女)なればとあつて武藏坊辨慶頼朝よりの上使となつて首受取りに來たが、卿の君の様子といひ義經の意衷といひ聞々と殺すに忍びない、折柄腰元

昔=俳諧

「しのぶ」といふは卿の君と瓜二つの美貌な上に、母おわさの述懐によれば十八年の昔辨慶がまだ鬼若と名のつて美しい稚子姿、月待ちの夜のみとした契りに生み落したのがあの「しのぶ」と知れて「すれば我が娘よしよし身替りに……」と覺悟を極めてしのぶを討ち臨終に因果を含めて親子を名のる。と卿の君預りの侍従太郎も切腹して似せ首を誂しやかに装ふ犠牲となつた。救はれた卿の君は「しのぶ」と假名して靜の腰元になつてゐると、靜の兄藤彌太が頼朝方の廻しもので堀河の館に入り込んで來る。母磯の禪司がそれと察し突然藤彌太の脾腹を刺して「あんまりぢや」と口説くので藤彌太も改心、頼朝方夜討の計畫をすつかり打ちあけるので、それに基いて防備の手筈を極めると、折柄夜討が門前に押しよせる。それを引き受けて藤彌太は美事に討死をする。

といふ筋で、末段「花扇邯鄲枕」は夢の場で靜が舞ふところ、彼女が理想を夢で實現して頼朝義經兄弟和陸の瑞相を示すといふ面白い着想である(帝文二七、四三三—五一)

こせいばいしきでう 御成敗式條

ぢやうえいしきもく「貞永式目」を見よ。

こせいばいしきもく 御成敗式目

ぢやうえいしきもく「貞永式目」を見よ。

こせんわかしふ 後撰和歌集 二十卷

村上天皇の天曆五年(一一六一)和歌所別當藤原伊弉(謙徳公)を總裁に梨壺の五人(即ち大中臣能宣・清原元輔・源順・紀時文・坂上望城に仰せて萬葉を訓みとかしむる片手間に撰ばしめられたもので、歌の總數千四百二十首、序も跋もなく類題にかなはぬ歌同じ歌もあり古今集と比べてすつと見劣りがせられ、物名・長歌・俳諧・大歌所などの部立もなく、古今集は撰者の歌多くこれは撰者のものは一首もなく前人の所詠ばかりを集めてゐる(同時の人の詠も古今のやうに多くは採られてない)

八雲御抄の評「能宣元輔は重代のうへ、尤然るべきの歌人なり、順又稽古のものなり、望城、時文は父が子といふばかり也」

は至言といはれ、眞淵が「この後撰ははじめ勅のことは後撰奉公文もありて定かなれど、歌はたゞもりあつめしまゝにて再び吟味をだにせざるまゝにつたわれるなるべしよりにあやまれることおほかり、しかれば序かくに及ばでその事やみしにや」との推測も大體當つ

て居らうと謂はれる。

集の名義は古今の後に撰んだ歌集の意だといふ(袋草子) 一帯が古今調を標準視した撰集振だと云ふことは左の數首によつても察せられる。

元日に、二條のきさいの宮にて、白き大桂を給はりて
藤原としゆき朝臣

ふるゆきのみものしるころもうちきつゝ春きにけり
りと驚かれぬる

延喜の御時に秋の歌めしありければ奉りける
紀貫之

秋ぎりのたちぬるときはくらぶ山おぼつかなく
ぞ見えわたりける

からうしておひしりて侍りける人につゝむ事
ありて又あひかたく侍りければ
源宗于朝臣

東路のきやの中山なか／＼にあひみて後ぞ佗し
かりける

仁和の帝嵯峨の御時の例にて、芹川に行幸し
たまひける
藤原行平朝臣

さかの山みゆきたえにし芹川の千よの古道あは
はありける

敦敏が身まかりにけるをまだきかであづまより馬をおくりて侍りければ 左大臣
まだしらぬ人もありけり東路にわれもゆきてぞすむべかりける

註釋の善本も少く左の四書位か? 北村季吟八代集抄の中二卷・契沖著岸本由豆流補後撰集標註四卷・中山美石後撰集新抄別記十五卷(片野支店發行)・本居宣長後撰集詞のつがれ緒一卷(片野支店發行)

ごそうまんびつ 梧窓漫筆 六卷

太田錦城の隨筆で道徳學藝政治處世の諸事數百項を漢文書き下し體に綴る。文政五年(二四八二)出井元凱の序同六年堤公愷の序がある。同後編同三編二卷もある。

こそん 片山孤村 明治一二、八、一

山口縣の人、名は正雄、東大獨逸文學科を優等で卒業して二ヶ年間獨逸に遊學し、三高・九大などに奉職して傍ら現代の獨逸文化や、獨逸文學の紹介に努めて居る。

「最近獨逸文學の研究」現代の獨逸文化と文藝等何れも有益な好著と謂はれて居る。

ごたいぐんきものがたり 五大軍記物語
保元物語・平治物語・平家物語・源平盛衰記・太平記をいふ。各項参照。

ごたいごてんあう 後醍醐天皇 一九四八

一九九九、正應元、一一、二一延元四、八、一六、五十二歳

後宇多天皇第二皇子、御諱は尊治、御母は談天門院藤原忠子(參議忠繼女) 第九十六代に當らせられ天資英明、政治と學問に御熱心、建武中興、南北朝分立等は一般國史に詳記する通である。御著には建武年中行事日中行事などがある。殊に和歌に秀でさせられ兵馬倥傯の間に慷慨惻怛の御懐ひを寄せさせられたのは殊に感味多く巧を求めずして巧至る趣がある。御製は續千載(一九首)・續後拾遺(一七)・新千載(二〇餘)等の諸集を始め新葉集や太平記や増鏡に散見する。

さして行く笠置の山を出でしよりあめが下には
かくれがもなし

かげやどす月さへ今は馴れにけり都にかはる袖
の上の露

まだなれぬ板屋の軒の板扉音をきくにもぬる、
袖かな

聞擣衣といへる心を

いそぐなる秋の砧のおとにこそ夜寒の民のこゝろ
をもしれ

百首の歌奉りし時雜
世治まり民安かれと祈るこそ我が身につきぬ思
なりけれ

(國華二三七號二〇五、三〇七號一八五後醍醐天皇御影)

ごたいほふ 誇大法

感情を高潮主義を強調する爲めにわざと大袈裟に表現する修辭法をいふ。「血が澤山流れて屍骸が多かくなつた」といふのを「血汐は流れて川をなし屍は積んで山をなす」と云ふの類である。元來詩的眞實は常識的虚偽と相容れないものではないので、「白髮三千丈」は常識的にはうそだが、詩人の感じとして眞實ならば即ち詩としての眞なのだから誇大法を用ひて斯う形容してよるしいので、それを強ひて常識的眞實に一致させようとして「白髮一尺五寸二分」としては詩味は失せてしまう。

ごたいへいきしらいしばなし 恭太平記

白石噺

紀上太郎・容楊黛・烏亭焉馬が安永九年(二四四〇)春、江戸薩摩屋小平太座の淨瑠璃に上演の爲めに合作したもの。享保八年四月奥州白石足立村の百姓四郎左衛門の娘すみ、たかの姉妹が父の仇田邊志摩を討つた事實

を脚色したもの。

「南朝の遺臣宇治常悦諸國武者修行して奥州に至り金井谷五郎と肝膽相照らす、谷五郎の許婚宮城野は父與茂作が志賀臺七に殺された(臺七が妖術の天眼鏡を楠原普傳から盗み取つて水田の中に隠す所を見知つたといふので)の知らず君傾城として吉原大黒屋に榮えてゐる。妹信夫は遙々姉を尋ねて江戸表に上る(こゝに全盛の傾城と奥州訛りの妹とを對照させたのが好評であつた)父の横死ときいて主人惣六も男氣を出して姉妹を當時道場を開いてゐた宇治常悦の許に劍道の修業に通はせた。その頃宮城野の許へ繁々通つてゐる鶴羽黒右衛門が目ざす仇臺七と知れ姉妹は常悦の助太刀で首尾よく仇を討ち宮城野は金井と目出たく結婚した。」といふ筋で慶安太平記中の一挿話として脚色されたものなのが後にはこの部のみがもてはやされるやうになつた。このこと以外の脚色は寶曆九年九月竹本座上演の「太平記菊水の巻」による所が多い。

ごたいりき 五大力

元、上方唄の「めりやす」の一種であつたのを並木五瓶が「五大力戀絨」に冒頭の一句を書き替へて用ひた。それをば又その後長唄にしたのが今日流行の五大力で文

句は五瓶が作つたまゝである。

「いつまで草のいつまでも、生中まみえ物思ふ、たとへせかれて程經るとても、縁と時節の末を待つ、はて何としよ、互ひの心うちとけて、うはべは解けぬ五大力、さはさりながら變る色なき御風情、やがて逢ほぞえ語るぞえ、惜しき筆とめ候かしく」

ごたいりきこひのふうじめ 五大力戀絨

並木五瓶が寛政七年(二四五五)正月部座に書き下した歌舞伎の脚本で、元來五瓶は上方生れでその作品は何れも江戸の水には合はぬとて餘り歡迎されなかつたがこの一作ばかりは非常の好評で幾多模倣の作をも見るに至つた。

「西國千鳥家の若殿千太郎は傳家の寶刀紛失して、その行方詮鑿のために江戸に上る。従ふ武士は勝間源五兵衛、笹の三五兵衛といふ兩名で源五兵衛も手がりの方便にとて辰巳の色街へも出入する。と、意氣と張と美貌とに謳はれた「小萬」と云ふ名妓、この節三五兵衛からうるさく言ひ寄るのを避ける方便にどうかあなた私の戀人とやうにたばかりのことを許して下さいと頼まれて快諾——この嘘から誠が出てとうとう二人は切つても切れぬ深間となる。その中件の寶刀も實は

ごちゆうのたふ 五重塔

幸田露伴、廿五年二月作の小説で、藝術至上の見解に徹した一克の氣質を題材とした側の氏の代表作と謂はれて居る。梗概は

「東京谷中の感應寺久しく荒廢してゐたのを高僧朗圓上人住持して信徒雲集、暫くにして喜捨の山をなしたので棟梁川越源太に命じて美々しく改築、日ならずして驚くばかりの巨利が物の美事に建つたが豫算はまだ費用が餘つて居たので、役僧の圓道が上人の御意を伺ふと唯一言「塔を建てよ」と仰せになつたので又々五重の塔建築のことを川越源太に命じた。然るにこの源太の部下に「のつそり」と渾名せらるゝ十兵衛といふ大工があつた。腕にかけては源太も及ばぬゆえを持ちながら、鈍重でうっかりでぐうたらでいつも朋輩におとしめられ、自分よりも手の劣つた源太の手先に甘じて居たのであつたが、つくづく思ひめぐらすに一生の中に唯一度自分の生命を打ち込んで永久に謳はれるやうな名建築を造りたい。それにはこんどの五重の塔は又とない好機會であると想到しては矢も楯もたまらず、直々上人にお目通りして聲涙共に下る有様で懇願した。上人も十兵衛のこの思ひ入つた熱誠を見て、なら

三五兵衛の手にあることが知れ、女は夫に手柄を立てさせたさに表面三五兵衛に身を許すことを諾ひその面前で源五兵衛に散々愛想づかしをいふ。男はこれを眞に受けて逆上の餘り女を斬りつける、いまはのきはにその本心がわかつて(決心の折柄隣座敷で五大力を唄つてゐたので三絃の裏皮へ女の念力を象徴させるつもりで「五大力」と書いた)今更のやうに後悔、忠僕八右衛門が主人源五兵衛の身替りに囚はれ、寶刀は手に入り歸參も許される」といふ筋。これは

- 一、元祿九年八月 源五兵衛 おまん 薩摩歌 近松
- 二、寶曆七年九月 曾根崎五人斬 吉田冠子・竹田小

出雲・近松・半二・近松景鯉 三好松洛の後を受けて左の諸作の源流となつた。

- 一、文化三年正月 「略三五大切」中の淨瑠璃「仇枕夢玉梓」並木五瓶
- 二、文政八年九月 盟三五大切 鶴屋南北

- 三、明治廿五年七月 仕立卸薩摩上布 三代目河竹新七
- 四、大正五年十二月 薩摩 訛情調 延若

(世話狂言傑作集四)

ごちゆうしよわら 後中書王

ともひらしんわう「具平親王」を見よ。

うことならさせてやりたいといふので試みに設計圖を召された。彼はよしきたといふもんで日頃丹誠をこらして書いてゐた五十分一の雛型圖をお目にかけた。それはいかにも名工の名手でなくては出来ない立派さを持つて居つた。大隅流・後藤流・立川流をも呑込んで、而かも自家獨特の意匠をこらしたものであつた。上人之を熱視して「アノ不機用なのつそりがどうしてかうまで精緻な圖案を仕出來したらう」と少なからず驚嘆せられた。けれども塔は已に源太に命じてあるから直ぐに十兵衛に命ずる譯には行かぬ。上人はこの兩人を呼び出して始めは經義を説かれ、それとなく讓歩の心を勧誘し塔のことは兩人の間で決せよと仰せられた。源太はその後十兵衛を訪れて「誰が建てたいも同じことだから我は主、汝は副となつて二人協同でやらうではないか」と折れた。十兵衛の女房は嬉し涙をこぼして感謝したが期する所ある十兵衛はどうしても自分一人で請合ひたいと言ひ張る。談じあぐんで又上人の許へあがると、上人はそれとなく十兵衛に讓つてやれと仰つしやる。讓つてやれば其美しい心は最早塔を建てたも同様ぢやとも云はれる。源太も男氣のさるもの「よるしい、きれいさつぱりと十兵衛に譲りませう」と引き

退る。いよく五重塔建築の命が十兵衛に下つた。彼は「五體を浪と動かして十兵衛めが命は、さ、さし出します」と感極まつて續く言葉もない。源太は一夜十兵衛をさる料亭に招き快く一献を傾けながら、材木の引合ひ、鳶人足への渡り萬端自分の名を以て計つてよろしい。又弟子も入るなら貸してやらうと言つた。十兵衛も泣いて感謝した。源太は先祖傳來の秘密の圖まで見せてやつてこれを参考にせよといふ。十兵衛はその好意は感謝しながらも「私も男一びき、自分がかう引き受けたからには他人の智慧はかりませぬ」といふ。源太はこらえにこらえた癩癩が破裂して、とど物別れとなり「のつそりも恥辱は知つて居ります」「その一言忘れまいぞ」と云つて別れた。源太の女房お吉は十兵衛の仕打が悔しくてたまらず面白からぬ月日を送つて居ると、弟子の清吉が忠義だとして或日普請場へ躍り込んで斧を以て十兵衛を打殺さうとしたが、危くそれ左の耳をそいだけだだけで一命にはさしはりなかつた。十兵衛も驚いたが源太も驚いて早速見舞ひ、又上人にも詫びた。耳の傷の癒える頃、五重の塔も完成した。その出来ばえが意想外に立派なので曩に十兵衛を嘲つたものは皆恥ぢた。今は吉辰を選んで盛大な落成式を

あげる處までこぎつけた。處が一夜天候俄かに荒れ暴風天柱を折り地軸を旋らし、恐ろしなると言ふばかりない有様となつた。風に倒るゝ小木大木、家、庫、納屋は敷しれず、感應寺からは再三使が来て「塔が危いから十兵衛に出て来い」と矢の催促、十兵衛いつかな動じない「これしきの風に倒れるやうな五重の塔は、この十兵衛建ててはせぬわ」とそらうそぶいてゐたが最後に朗圓上人汝を召すとのことに濫々やつて来た……とやがて夜はしらんと明けわたつた。風もいつとはなしに静まつた。塔下に集まる人々の眼に逸早く映つたのは第五層の高屋根ふまへて手に一挺の六分鑿を持つて泰然自若とつ立つた、のつそり十兵衛その人であつた。彼は夜と共にこの上に立つて「板一枚でも、釘一本でもこの十兵衛が命かけた築材が一寸でも風に吹き抜かれた時にはこの鑿を加へて飛び落ちて絶命せんず決心の胸を固めて居たのであつた。之を見た群衆は割れんばかりに喝采した。而かも十兵衛と前後してこの塔下を夜もすがらとつおいつ見守つてゐた別の一人の男があつた。それは川越源太である。彼は「この塔にもしものことがあつては十兵衛の爲めにも名折れなり行きがかつた我とても寝ざめが悪い」とて藝術の愛好と

義と俠氣に凝つたる氣象から人知れず守つて居たのであつた。落成式の日上人はこの兩人をつれて塔に上り、硯を取り寄せて、
「江都の住人十兵衛之を造り川越源太郎之を成す」と書かれると兩人ハツと平伏し、一種法悦に近いやうな歡喜の中に心からの和睦をする。
それより寶塔長へに天に登えて西より瞻れば或時は飛檐素月を吐き、東より望めば勾欄夕に紅白を呑むで百有餘年の今に至るまで話は活きて遣りける。
今更らしく解題する要のない程有名なもので、暴風雨の名文句は殊に多くの雜誌ではめられ教科書などにも出てゐる、のつそりもよく描かれてゐるが源太も上人も亦他の追隨を許さぬ描寫である（文藝百科全書解題一九・廿五年一月雜誌「國會」に出てその後單行本として「青木嵩山堂」より發行）
こつつけいげき 滑稽劇
滑稽の情を主想にした脚本又はその實演する劇をいひ喜劇・笑劇などいふも同じ、此頃は更に、コミックオペラに相當する「喜歌劇」といふもある（「喜劇」を見よ）
こつつけいぶんがく 滑稽文學

滑稽の感情を主想とした文學作品をいふ。例へば十返舎一九の東海道中膝栗毛の如きもの(滑稽文學の沿革については拙著綜合國文學概説その部を見られたし)源氏物語中末摘花の鼻や近江の君は滑稽だけれども此作品の主想でないから、源氏物語を滑稽文學と謂ふことは出来ない)

こつけいぼん 滑稽本

享和二年(二四六二)一九が東海道中膝栗毛以來中本の體裁で出た滑稽小説をいひ、(その以前は、小本の洒落本)後に合巻物が盛行するやうになつてから衰へたが一二の作者は明治初期までも代々出た。之が先驅的作品は教訓物と諷刺物と青本とである。當世下手談議・心學道話・江戸伊藤單朴の作品などは教訓にをかしみをこめ、平賀鳩溪の根無草・志道軒傳・放屁論の如きは諷刺にをかしみをこめ、金々先生榮華の夢(安永四年作)以來の青本もをかしみたつぶりの物である。天明七年森羅萬象の田舎芝居もその一先蹤と見られよう。滑稽本の代表作は十返舎一九の東海道中膝栗毛、式亭三馬の浮世風呂・浮世床などである(藤岡作太郎氏、近世小説史六三五―六七〇 帝文九・道中膝栗毛・同一三、三馬傑作集 同二五、二六・滑稽名作集。尙滑稽本

に關する卑見は已に拙著國文學概説八八〇―九一三に述べておいた)

こつけいわがふじん 滑稽和合人 六卷

瀧亭鯉丈、天保十二年(二五〇一)の作。茶氣滿々の主人公がこの世までも茶にして太平樂の限りを盡すといふ筋のもの(帝文二五)

こつぬすみ 骨ぬすみ

廣津柳浪、明治卅二年一月作の小説、ロミオ・エンド・ジュリエットと同じ様な點があつて、相思の男女が中をさかれてどちらかと思はぬ女男に配せられた處から起きた悲劇を描いたもの。梗概は、

「東京芝久保町に乾物商の老舗山城屋と云ふは先代の與四郎の代に可なり繁昌して、下總上目黒の百姓の子の「鶴吉」と云のを子飼ひにして行くは一人娘「お蝶」と娶はせよと云つて死んだ。鶴吉自身は餘り氣が進まなかつたが親が借金で義理合で頼むやうに云ふもんだから是非なく溢々承知してゐた。小説はお蝶が十六歳から始まる。内娘の上に我儘なお蝶は手代上りの鶴吉を夫とかしづくことはどうしても嫌なもんだからいつもそつけなくしてゐる。鶴吉は又國に「お町」と云つてお蝶よりもすつと美しい優しい一旦は親も許した

約婚の女があつて、それが自分の身上がきまるとやがて近在の大崎村の百姓五作の處へ嫁づいたのが不満で、此がいつも其心持を陰氣にしてお蝶との結婚はあまり望んで居ない。養母のお爲一人が氣を揉んで早く二人を一緒にしようとおせつてゐる。五作とお町との仲は至つて圓滿で大吉と云ふ一愛兒を擧げて五作のよろこびはその頂點に達してゐる。

總州上目黒在で門に古柳のある處、此がお町の實家で今は老父の源兵衛が平和な餘生を送つてゐる。早く親に死にわかれた鶴吉もお町との關係上、こゝを親里として時折の歸省に源兵衛を慰め、お町のたよりを聞いては心筋に慰めてゐた。今日も久々で尋れて來た處、丁度五作が來合はして居て無理矢理大崎へ引張つて行つた。久し振に逢うたお町―それは昔の處女では無かつた。而もはしやきまつた五作にスキートホームを見せつけられて鶴吉の心は彌が上にも暗くなる。五作が自ら立つて近隣へ酒を取りに行つた留守に、始めて鶴吉とお町とは二人きりの祕密の懷舊談をする。それを立聞きした五作の態度はコロツと急變して翌朝鶴吉を見送る時は苦蟲を嚼んだやうな顔をしてゐる。それ以來五作の家庭は毎日怒罵叱聲が絶え間なく響いた。お町

は「鶴吉とは何等猥らな關係はなく、五作に對しては充分貞女を立てるが、せめて心の中に鶴吉のことを思ふこと、死んでから後夫婦になることだけの自由は與へてほしい」と思つてゐる。それを五作は鶴吉と醜關係でもあるかのやうに誤解して「この大吉だつて誰の子だか知れたことでない」と云ふに至つてはお町は心外の餘り悶絶した。

お町は煩悶の極遂に裏の井戸へ身を投げた。引上げられた時はもう息も絶えぬ、駈けつけた鶴吉の手をとつて無言の熱涙が終焉の床を濕らす。五作は途方に暮れながらもお町に詫がる。悲哀の裡に死魔が刻々に切迫する……と遂にパツタリ息はとまつた。

「お町の死體は桐ヶ谷の火葬場に空しく一片の煙となり、僅かに白骨のみを遺留した。白骨は葬式の済んだ後葬るまで一七日の間安樂寺の本堂に預けて置いたが、其連夜に壺ぐるみ失せた。それと共に鶴吉の行方も知れなくなつた(一三九)」「柳浪叢書前編五五―一三九)

こていぶんかく 固定文學(整形文學)

文字を有するやうになつて、文書によつて定形を得た文學をいふ。通常文學史の研究對象の主なるものはこの種の文學である。「The Fixed Literature」又は

「The Written Literature」の譯、又「整形文學」と謂つてもよい語である。

こてふ 胡蝶（裸美人）

山田美妙が二十二年一月雜誌「國民之友」に寄せた小説で、平家遺臣の胤なる美女「胡蝶」を女主人公とし、源氏方のまはしものにして胡蝶の夫たる二郎春風を配して、義理と戀との二又路に泣く胡蝶を描いたところ最も當時の讀者の血を湧かした。

「夫はいふ」安徳天皇の御行くへを源氏に内通して恩賞に與らう……吾は源氏恩顧の者ぞ」と「倍は」と心に驚く胡蝶「おのれにつくき源氏の間者」とは思へども、三年の恩愛流石に懐かしく、その夜はまんぢりともせず、考へに考へた揚句、遂に夫の寝首を掻いて慟哭した」

事件の主なもの以上には盡きる。そして地の文を「デス」調の口語文とし、對話を文語體とし、挿むに裸美人胡蝶の繪を以てし（この繪が當時問題になつた）今から見れば唐突な形容だが、當時にしては目新しい背景文を以て色彩つけたので非常に好評を得た。一言すればこの作は美妙が出世作であり、明治の言文一致の先蹤でもあり、歴史小説の前驅でもある（拙著 綜合日本

文學全史六四一—六四二・菊判明治三十年二月廿八日井上一書堂發行「裸美人」一—二九

こてふ 馬場孤蝶 明治三、一、九——

土佐の人、政治家馬場辰猪の弟。二十四年明治學院卒業、二十六年から透谷一派の「文學界」同人として文學運動に参加し、以後は翻譯文學殊に大陸文學の紹介につとめ傍各種の述作をして居る。その主なるものは

翻譯、泰西名著集・國事探偵・戰爭と平和・イリア
小説、屈辱・蠅殼町・やどり木・連翹
隨筆、孤蝶隨筆

こてん 古典

古代の言語・風俗・宗教・文學・歴史・制度等を記したものの總稱で、その研究は王朝に盛んで鎌倉室町期に衰へ、徳川期に入つて又々荷田東滿・賀茂眞淵・本居宣長以下の諸學者によつて盛に考究せられた。

ことうた 琴歌

徳川期箏曲の盛行につれて發達し、始めは上方歌（三絃歌）を轉用したが後には箏曲専用の歌詞が出来た。飛燕曲（安村檢校作）・宮鶯（三橋檢校作）・四季の友（久村檢校作）

などは組歌で、後には古歌を統合した六玉川、漢詩を和譯した。清平調などもあつたが山田檢校斗養（こののち）一に至り、謠曲戯曲に想詞を採つて婉麗都雅なものにし上げた。小督・那須野・江島・長恨歌・櫻狩などは殊に人口に膾炙してゐる。

ことくだいぢさだいじん 後徳大寺左大臣

されさだ「藤原實定」を見よ。

ことじり 琴後

村田春海の號「春海」を見よ。

ことじりしふ 琴後集

はるみ「村田春海」を見よ。

ことすが 谷川士清 二三六七—二四三六、寶

永四—安永五、一〇、一〇、七十歳
昇淡齋と號し、士清と字し、家は代々醫を業としたが彼は家職をその門弟に繼がせ、自身は玉木葦齋について山崎派の神道を學び後、有栖川職仁親王に事へ、和歌を修め國史語釋の研究に努め遂に家を爲し、大に世に稱揚せられた。日本書紀通證・和訓栞はその力作で、前者は日本紀の行文措辭等を儒書に取り或は佛書に取れる類一々その本づく所をあげ、廣く先哲の説を彙集し參互検討して註釋せるもの今に斯學の寶典となつて居

る。後者は五十音順辭書の大部なもの、の喘矢として此亦今も行はれて居る。彼晩年その稿を石櫃に入れ埋めて之を反古塚と名づけたので、その著の現存するもの甚少く右二大著の外は左の數種に止まる。勾玉考・勾玉抄・鋸屑譚・反古塚記。

ことばてんわら 後鳥羽天皇 一八四〇—

一八九九、治承四、七、一四—延應元、二、二二、六十歳
高倉天皇第四皇子、御諱尊成、御母は七條院藤原殖子（贈左大臣信隆の女）第八十二代の天皇。政治・文學共に御熱心で、承久の亂によつて隱岐の小島に崩御あらせられた。天曆以後久しくさだえてゐた和歌所を再興して（建仁元年）撰歌や歌會のことを掌らしめ、寄人その他の役をも定めさせられた。又定家以下の五人に勅して新古今和歌集を撰ばせられ、當代三十名家として各自百首宛の歌を持ち寄らせて、千五百番歌合をお催しになつた、これは歌合としては古今第一の大規模なものである。又各自をしてふとく大に（春夏）唐び細く（秋冬）艶に優しく（戀・旅）の三體に咏じわけた。三體和歌を奉らしめ、自らよしと思ふ味をも奉らしめて所謂「自讃歌」を御照覽になつた。又當時の大家の歌風を批評して自から後鳥羽院御口傳

をお書きになつた。隠岐御還幸の後にはまして御心を遣
るものとは和歌より外のものはなく、遙々在京諸臣
の味をとりよせ御一人で御歌合を催された。之を遠島
御歌合と云ふ。和歌以外琵琶を藤原定輔に、蹴鞠を藤
原雅經に學んで皆熟練せられた。増鏡には賭物の祿に
は錢を使ふと云ふ故事さへ御存じてあつたことが出て
ゐる。一體華麗なことが御好きで、水無瀬殿・白河院・
鳥羽院などそれ／＼立派に御修理になつて世をひゞか
すばかりの御幸あらせられた(群九一、後鳥羽院御踐
祚次第同二二〇) 後鳥羽院御自歌合同二九二後鳥羽院
御口傳、同三二九後鳥羽院熊野御幸記、三五三後鳥羽
院御記、續類二七三後鳥羽院御即位記、同三八六後鳥
羽院御首首四二三後鳥羽院御集(十五輯五六九―六二
七)同九六四後鳥羽院御靈託記)

奥山のおどろが下もふみわけて道ある世ぞと人
に知らせん
見わたせば山もとかすむ水無瀬河夕は秋と何思
ひけん
我こそは新島守よ隠岐の海のあらし波風心して
吹け
此比は花も紅葉も枝になししげしな消えそ松の

しら雪
ちはやふる神や知るらんもるかつら一方ならず
かくるたのみを
たらちれの消えやらでまつ露の身を風よりさき
にいかでとはまし
同じ世に又すみの江の月や見むけふこそよそに
隠岐つ鳥守

(國華三三五號三一七、後鳥羽天皇御影)

ことばのたまのを 詞の玉緒 七卷
本居宣長安永八年(二四三九)の著。その前に出した紐
鏡に説明と例證とを加へたもので「てには」を解する
こと稍廣義に失する嫌はあるが、八代集や古今集の序
や中古文上代文と散文までも博く實例を蒐集して、整
然たる體系の下に説いた點は前人未到の境を開いたも
のである(此より前寶曆十年雀部信頼が、氏爾波義慣抄
を書いたが、引例は單に古今集のみに止まる)(本居宣
長全集第五)

ことばのやちまた 詞の八衢 二卷

本居春庭文化三年(二四六六)の著で、動詞の活用につ
き今日の文法の基礎を立てた名著である。

一、四段・中二段・下二段・一段・變格の名稱を定め

たこと

- 二、四種の活用圖を掲げ、これが受辭を各變化の下に
載せたこと
- 三、五十音順に排列したこと
- 四、難解の語には一々出典をあげたこと
- 五、本形を連體段で示したこと
- 六、命令段(下知の詞)には「よ」を添へるものと否らざ
るものとを區別したこと
- 七、四段第五音から、ら行に轉ずる活用を説いたこと
- 八、中二段下二段には俗語にいふ格をも併せ説いた事
など幾多の創意が見える。

一、カサナの三變格を立て、ら變が普通のラ行四段と
違ふことを認めながら、別にその目を立てなかつ
たこと

二、下一段を設けなかつたこと
三、形容詞を動詞から嚴別しなかつたこと
など不十分な點もあるが當時としては最善を盡した語
學書で、同じ著者の文政十一年の筆にかゝる「詞の通
路」三卷(活語の自他・詞の兼用・詞の延約・詞天爾波の
かゝるところを明らかにしたもの)と共に國語學の二
大收穫である。この書の足らざるを補ふ學者次々に輩

出して世に之を八衢學者といふ。

- 一、八衢刊行後五年、東條義門、言葉の八衢疑問
- 二、文政元年 同 詞のしるべ
- 三、嘉永六年長子廣行の序、中島廣足、八衢補遺
- 四、安政四年(佐々木弘綱の奥書) 八衢大略
- 五、 同 八衢補翼
- 六、 同 八衢偽正考
- 七、慶應四年二月再訂、岡本保孝、詞の八衢補正
(本居宣長全集六本居春庭全集・福井久藏氏日本文法史
八八一―一三)

ことみち 大隈言道 二四五八―二五二八、寛
政一〇―明治元、七、二九、七十一歳

姓は清原、通稱は米屋清助、號は萍堂、筑前國福岡の
藥院抱へ安學橋の家に生れた。父を茂助言朝と云ひ文
雅の趣味を解し、歌や書を好くした。母は信國又左衛門
光昌の女で彼は四男であつた。八歳父に訣れ、九歳兄
(茂輔言愛)に訣れ、以後は母と師との薫陶を受けた。師
と云ふのは藩の學者二川相近で歌と書畫とに長じて居
つた。尙彼が四十二歳天保十年四月十日からは別に豊
後日田の碩學廣瀬淡窓に就いて儒學詩文を學んだ。
三十五歳(天保三年)頃より自家一流の歌の創作に志し

三十九歳 天保七年の八月六日には家を弟清右衛門言則に譲つて今泉の池萍堂に引退し三十九歳江戸にも上り四十六歳(天保十四年)妻に訣れ、安政四年六十歳の八月大阪に上り自己の歌風宣傳と、歌集版行とを實現しようとした。爾來在阪十二年始め中之島榎木橋附近に寓し、觀水居鳧居室などと家室を號し、次で六十三歳の萬延元年二月四日に今橋一丁目堺筋に轉宅し、更に六十五歳の文久二年に天満若松町に住み、七十歳の慶應三年頃に歸國して間なくその翌年病歿した。そして一、中の島時代、安政五年に 戊午集二卷

今橋時代、萬延元年に 今橋集
若松町時代、文久二年に 前二集を精撰した草徑集三卷を撰んだ。

(明治卅二年の夏の一、夜、佐々木信綱博士が神田末廣町のとある古本屋で草徑集三卷の版本を買はれて一讀その味の非凡なるに驚き、それを翌年刊行續歌學全書の一部に加へられてからこの歌人の名聲が頗に高まつた)今彼に關する書としては

故大口鯛二博士所藏、大隈言道自筆歌集全部(新潟縣萩原此吉氏より譲り受けられたもの)
續歌八、近世名家家集下の卷末草徑集

歌文珍書保存會刊行、言道翁全集、大正三年
佐々木信綱梅野滿雄二氏共編、大隈言道、大正七年
日本古典全集中、大隈言道全集
などである。

今彼が歌を通覽して主なる特徴を擧げると
一、歌材範圍の廣いこと
二、複雑なる思想を適確に表現してゐること
三、觀察の緻密なこと
四、理想の味に富めること
五、想調ともに清新奇抜なこと
などで例歌とし左にあげるものと對照すればよくわかる。

親なげば子さへなくなり世の中のせんすべなき
も何も知らず

鶯のなく一聲に忘れけりいづこにか行く我身なりけむ

山 花

櫻咲く山の裾野のあさぼらけまこと繪に似て繪にまさりけり

雨中待花

あけぬるかまだかと思へば朝戸さへ開きかれて

も見つる花かな

三日月

初秋の梢をわたるかぜの上にはちるかげ見ゆる三日月のかげ

牛

しぶく／＼にまが引くを田のことひ牛うたれぬ先に歩めと思へど

寝 覺

海山の遠き眺めの夢さめてひるばかりなる床の上かな

大方はあるじはなくて山里はとなりだのみの引たて戸かな

閑居夕庭

これのみやけふはありつることならむ松の實一つおちし夕暮

こひうた 戀歌

戀をうたつた短歌をいふ。萬葉集「相聞」の内男女戀愛の情を表現した短歌を「戀歌」として古今集に部立せられて以來戀歌は勅撰・私撰・家集を通じて歌集の大部分を占めるやうになつた。

こふう 古風

徳川初期松永貞徳一派の俳諧・俳句を云ふ「詞の附け」と云つて専ら用語にすがつて句を連れて行くのがその特徴で、俳句の方は秀句を繁用してなかしみを表すことに力點をおいた。之を古風と云ふのはつまり室町時代さながらの傳統的俳風といふ意味であらう。季吟・友光・立圃・貞室・重頼等は、この派で有名な人々である。

こふうさんたいから 古風三體考 一卷
近藤芳樹天保六年(二四九五)の著、天保八年六月十七日附の緒平の序文がついて居る。長歌・短歌・旋頭歌について論述したもの。

こふくわらぬん 後普光院
よしもと「二條良基」を見よ。

こぶんじがく 古文辭學
徳川時代萩生徂徠が中晩年に首唱した儒學の一派古學派のその又一派で、宋儒性理の說を卻け、古文辭を研究して直接に孔孟の眞髓を體得し又禮樂を重んずべしとなす。その門人服部南廓・太宰春臺・山縣周南・安藤東野・平野金華等によつて世に行はれた。

當期に於ける古學派主唱者中山中素行は武士道を以て優れ、伊藤仁齋は德行を以て慕はれ、徂徠は文章を以て稱せられた(古類文學部二、七九二―八〇三・井上哲

次郎、蟹江義丸二氏共編、日本倫理彙編六古學派の部、
下)

並木五瓶 二四二一—二四八二、寶曆

一一—文政五、六十二歳

通稱吾八、大阪の人、初め辰岡萬作につき後並木正三
につき狂言作者の素地を得、寛政六年江戸大川通り高
砂町に移つた頃は已に名が顯れてゐた。後又浪花に上
り暫くして復江戸に下り遂に彼の地で終つた。嶋巡戯
聞書は彼が一代の傑作で、之を改作した「五大力戀織」
(帝國文庫一六)は七十餘日大入を續けた。金門五三桐
も名高い。その他左の諸作品がある。袖薄播州巡・日
本花赤穂鹽竈・傀儡淺妻船・傾城忍術池・隅田春妓女客
性・天満宮菜種御供・鍋祀貞婦鏡・掉歌木津川八景・入間
詞大名賞儀・平井權八吉原衢・歸命曲輪文章・傾城倭莊
子・傾城落鳥・源平柱礎曆・契情黄金繡・契情誰伏木・富
岡戀山開。

こべん 小辨?

王朝、後冷泉天皇の御代の女流歌人、父は越前守懷尹。
彼女は後朱雀天皇の皇女祐子内親王の女房として仕へ
「宮の小辨」ともよばれた。その他は傳記不明だが歌は
後拾遺以後諸勅撰集・祇子内親王家歌合・長元五年上

東門院菊合・永承五年祐子内親王家歌合等に出てゐる。

こほん 小本

洒落本に同じ、その項を見よ。

こまち 小野小町?

王朝初期の女流歌人として又美人として有名だが、傳
記は未詳である(大體嵯峨天皇の弘仁八、九、十年の間
に出生と認められる)。六歌仙の一人でその家集に小町
集(群二七二、一〇、一四五—一四八、續國五三八—
五四一)があつて百十三首載つてゐる。それについて
見ると彼女の歌は平易な言葉を以て女性らしい高い感
激を歌つて居る。

いとせめて戀しき時はうば玉の夜の衣をかへし
てぞぬる

うた、れに戀しき人を見てしより夢てふものは
たのみそめてき

思ひつゝ寢ればや人の見えつらん夢と知りせば
さめざらましな

色見えてうつろふものは世の中の人心の花に
ぞありける

花の色はうつりにけりな徒にわが身よにふるな
がめせしきに

尙彼女の味は古今集に十六首、後撰集に四首、新古今集
に六首とられその他の集にも散見する。

後に謡曲戯曲などによつて彼女は益々傳奇的に脚色せ
られ史實よりも寧ろ傳説の古美人たるの趣がある(國
華七〇號四三〇—四三一、光琳筆小野小町圖・七一號
四四四—四四五無款小野小町圖)

こまちものぐるひ 小町物狂

そとばこまち「卒塔婆小町」を見よ。

こまのきてんわら 後水尾天皇 二二五六

—二三四〇、文祿五、正、四—延寶八、八、一九、八十
五歳

後陽成天皇第三皇子、御諱政仁、法諱圓淨、御母は中和
門院藤原前子、第百八代に當らせられ文武共に御獎勵
になつて、御代は極めて平安であつた。生花の風流を好
ませられては南庭に數間の假屋を設け、貴賤を論ぜず
召し集ひてその技を闘はしめられた。當時之を「禁中の
大立花」と申して居つた。又御志を典故にも止めさせ
られ、當時の年中行事を咏んで親書あらせられた。が、
天皇の國文學史上に於ける御功績は主として短歌にあ
る。性來和歌を御愛好なので堂上の歌壇は急に盛にな
つた。御叔父君智仁親王から古今傳授を受けさせられ

てからは傳授そのものに重みが出来て以後は勅允を蒙
らなければ諸公卿等は歌道の宗匠たることが出来ない
やうになつた。又藤原清輔の一字抄に倣つて、種々の
漢字を一字づゝあげ、之を詠んだ歌題と作例と列舉し
て題詠に便せられた。之を一字御抄と云ふ。次に室町
時代の中頃から當期にかけての三十六名家の作一首づ
つを撰んで集外三十六歌仙と云ふ書をも著はされた。
(國刊一期續々群一四)古來の名家を選まれた後水尾院
千首と題する御著もある。

天皇から御傳授を受けた方々には、後西院天皇・良恕法
親王・參議飛鳥井雅庸・權大納言鳥丸資慶・内大臣中院
通茂等である。御製の一二をあげると

常は見ぬ山の縁に瀧落ちて名残すゞしき夕立の
雨

折しもあれ夜寒の衣かりがれに機織る蟲も聲急
ぐらん

(大日本史料第十二の八より廿六まではずつとこの天
皇の時の事象が細大もらさずあがつて居る。尙國刊一
期續々群一三には後水尾天皇詩集一卷同一四には後水
尾院御集一卷が入つて居る)

こめい 吉川五明 二三九一—二四六三、享保

一六一享和三、二〇、二六、七十三歳

初め那波氏、名は了阿、號は小夜庵・虫二坊・樟岡・半居士・一方庵・披襟舎・鶏頭翁等、夙に俳諧を好み始め談林次ぎ美濃風終に正風に歸した(或は云ふ平文梅隣に學ぶと、梅隣は其雫の門)當時南部の素郷と並び稱せられた俳傑で、その著に三等文・ひとり歩行等がある。

こものがたり 兒物語

室町時代に發生した小説の一種で、重に男色の戀物語になつてゐる。蓋し當時叡山南都の僧侶が稚兒に對する同性愛の生活を反照するものであらう。松帆浦物語・幻夢物語・鳥部山物語・嵯峨物語等は其の代表的なものである(續史籍集覽中「兒物語部類」)

こや 戸澤姑射

淺野馮虛とシエクスピヤーのドラマを合譯したものが世に行はれ、二十八年頃から三十五年頃にかけて、小説しのぶの露(これは讀賣に)源義朝・鹿笛の音など等十篇ばかりを作つて帝國文學に寄せた。

これたかのみこ 惟喬親王

一五〇四―一五五七、承和二―寛平九、二、二〇、五十四歳
又小野宮とも水無瀬宮とも木原親王とも申す。文徳天皇第一皇子、御母は靜子(紀名虎の女)天皇深くこの親

王を愛し惟仁親王(清和天皇)の御幼冲を幸に立て、皇太子とせられたが、藤原良房(その女入内して惟仁親王を産まれた)が始終壓迫を加へるので親王も御不快勝で遂に皇太子を辭された。天安元年四品に叙し、同二年太宰帥に任じ、貞觀五年彈正尹に任じ、同六年常陸太守に轉じ、同十四年上野太守に轉す。この年病によつて御出家、法名算延と申し比叡山の麓小野の庵室に幽棲せられた。

貞觀十六年封戸六百を増された(固辭せられたにも拘らず)親王の御歌は古今・後撰・新古今などの諸集に散見して居る。又伊勢物語には業平がこのみこにお仕へした二三の清談佳話が出てゐる。

これただ 藤原伊尹(謙徳公)

一六三二、延長二―天祿三、四十九歳
九條師輔の子、世に一條攝政といふ。名家の出で、官は太政大臣に至り、又和歌所別當にも補せられた。歌集に「豊蔭」といふがあり、又後撰(二首)・拾遺(六首)・新古今十首その他の諸勅撰集にも採歌せられて居る。

これとき 大江以言(江以言)

一六七〇、天曆九―寛弘七、五十六歳
仲宣の子で、音人からは玄孫に當る。一條の朝に仕へ

ふりけるを見てよめる
朝ぼらけ在明の月と見るまでによし野の里にふれるしら雪

これのりしふ 是則集

これのり「坂上是則」を見よ。

これよし 菅原是善

仁元―元慶四、

從三位清公の子で道眞の父に當る。仁明・文徳・清和・陽成の四朝に歴任し、從三位參議兼勘解由長官近江守に任ぜられた。博學にして詩文を能くし、文徳實錄の撰に與り、その著に類聚名義抄十一卷あり。尙左の諸書は今日傳はつては居ないが矢張彼の著といはれて居る。集韻律詩十卷・銀勝輪律十卷・會分類聚七十卷。

こんさい 安積良齋

二四四五―二五二〇、天明五―萬延元、二、二一、七十六歳

徳川時代の儒家にして文章家、奥州安積郡二本松の人、名は重信、通稱は祐助、江戸に出て佐藏一齋、林述齋等について刻苦精勵、二十四歳始めて神田駿河臺土屋侯邸の近所に門戸を張り、見山樓と號して諸生を教授、召されて二本松侯の藩儒となり、六十歳にして昌平黌の教授に榮轉し、師、一齋と共に諸生に教授した。文章

て文章博士・式部大輔となる。一世の學者詩人として有名であつた。その詩文は本朝文粹・本朝麗藻・類聚句題抄・朝野群載三・三十五文集などに出てゐる。

これのり 坂上是則

?一五八九、?延長八、傳記未詳、父を定成と云ひ、彼の地位は五位で加賀介大内記・清水寺別當などを居つた。歌は古今(七)後撰(六)の外拾遺・新古今・新勅撰・續後撰・續古今・續千載・續後拾遺・新千載・新拾遺・新後拾遺・新續古今・六々撰等に散見し、家集に坂上是則集一卷(群二四八、九、五九一―五九三)歌仙歌集、第五卷續國四四―四四三)がある。

山里の花を見て

折取らば惜げにもあるか櫻花いざ宿かりて散る

迄は見む

秋の歌として詠める

佐保山の柞の色は薄けれど秋は深くもなりにける哉

祝、苔、巖

君が代は天の羽衣稀にきてなづとも盡ぬ巖ならなむ

やまとの國にまかれりける時に雪の

は殊に艶麗富贍の趣致を以て稱せられた。その風貌出額で眇目でお負けに少しも邊幅を飾らず、天真爛漫の入であつた。而かも謙遜で終生他人の短をいはなかつた。その著に長山文集・見山樓詩集・朱學管窺等がある

こんじきやしや 金色夜叉
紅葉晩年の力作で劇に歌謠に繪葉書に最も一般化された作品である。

前編

松の内の賑ひは千里同風何方も同じ事ながら、此處箕輪亮輔の邸内では奥の十疊八疊を打通し三十餘人の若き男女の手ぐすね引いてのカルタ會は世にきら／＼しき者の極みであつた。一座の中の女王として人も羨む美貌の持主は鳴澤の令嬢「宮」と云ひ、男子の中での花形として娘子軍の同情を双肩に荷つてゐるのは富豪宮山子爵家の若主人「唯繼」である。

宮の装は纔に曙の星の光を保つに過ぎざれども彼の色の白きは如何なる美しき染色をも奪ひて彼の整へる面は如何なる麗はしき織物よりも文章ありて、醜き人たちは如何に着飾らんと其醜きを蔽ふ能はざるが如く彼は如何に飾らざるも其の美しきを害せざるなり(六) 宮山はカルタが主ではない。今宵を機會に妻定めをし

ようと云ふのである。此迄廿幾人の候補者何れも彼の氣に入らず今宵お宮を見初めて彼は始めて心動いた。歡樂の羣は十二時に散つて宮は連なる學生と共に親しく語りながら我家へ歸つた。

兎る戯を作して憚らず、女も爲すがまゝに任せて咎めざる彼等の關係は抑も如何。事情ありて十年來鳴澤に寄寓せる此の「間貫一」は今年の夏大學に入るを待ちて宮が妻せらるべき人なり(二三)

學友同士の新年宴會が向島の八百松樓に催された。學友は皆貫一の艶福を羨んだりひやかしたり祝つたりした。それが嬉しさに歸つて宮に告げた「斯うなつちやあ是非とも夫婦にならなきや僕の男がすたると云ふんだ。宮さんお前の心は？」「妾の心は疾うから極まつてらわ」併し此頃から形勢が急轉した。

一日箕輪の細君が來て富山の結婚申込を傳へた。宮の両親は直に心搖いだ、彼女は其日から少しく食して多く眠らぬ身となつた。それとは知らぬ貫一は宮の様子を氣遣つて醫者へ引張つて行つて見せると唯胃が少し弱つてあるとて水薬をくれたきり貫一も多分そんな事だらうと安心したト突然母子は熱海へ行つた。その様子がちと變だと思つたら留守に父なる「隆三」が「色々

お前の行末を案じて居る。で此際いつそあれ(宮)は他家へやつてしまつてお前は大學を卒業後四五年洋行してはどうかと思つてるんだ(五二)と宣告された。貫一の父は隆三の恩人だが、貫一は「小買の米を風呂敷に提げて痺犬と共に月夜を走つてゐた少年(五一)」の時から隆三に救はれた身のまともに斯う云はれて嫌とはどうしても云へない義理だ。此上は宮の決心如何にある「まさか」とは思ふが、あの素振では「もしや」とも氣づかはれるので學校を休んで熱海へ行つて見た。行つて見ると富山が來合はせて居て貴族の華やかな生活振や我家の富を吹聴して、宮の心を大分捕虜にした所であつた。

月ほの白き一月の十七夜、二人は別々の思ひで海岸を逍遙した。貫一は心の限りを傾け盡し熱辯を以て人生終極の目的は物質に非ずして愛にあることを力説したが、無自覺なる宮は確にどうと決心し兼ねてゐる。萬事皆非なり矣。もう貫一の男は廢つたと失望と悲憤と怨嗟とをこきまぜて遂に女の骸を一蹴して行方不明になつた。

呼宮さん凭うして二人が一處に居るのも今夜限だ。お前が僕の介抱をしてくれるのも今夜限、僕がお前に物

を言ふのも今夜限だよ。一月の十七日、宮さんよく覺えて置き來年の今月今夜は貫一は何處で此月を見るのか——。再來年の今月今夜……十年後の今月今夜……一生を通して僕は今月今夜を忘れんよ——可いか、宮さん。一月の十七日だ、來年の今月今夜になつたら僕の前で必ず月は曇らして見せるから、月が……月が……月が……曇つたらば宮さん貫一は何處かでお前を恨んで今夜のやうに泣いて居ると思つくれ(八一)

中編

新橋停車場の大時計は今四時二分と云ふに、夥しき羣衆の中に中等室の待合に居合せる五人一隊の若紳士甘糟・佐分利・風早・蒲田と今一人は貫一が兄の如く入魂した荒尾讓介とである。荒尾が一番早く頭をあげて今回愛知縣參事官として赴任すると云ふので四人は見送りに立つてゐるのである。此等の連中の多くは借金の痴手を負はぬは無く、佐分利は六百四十圓、甘糟は四百圓、蒲田は三百五十圓無傷は風早と荒尾とだけ(一〇四)で、談はいつしか高利貸のことに及び、間が此頃アイヌになつてゐると云ふ噂のあること、美人クリーム(美人で高利貸の妻)赤極満枝の小説的閱歴や連中が此赤極に散々絞られた事など「間と云へば最前僕等に

向つて帽子を振つてたが」と荒尾が言ふ「彼奴が面は何處かアルフレッド大王の面影があつたがなあ」と蒲田が言ふ「僕の親友を古英雄に比してくれたのは有難い」と荒尾が言ふ。果ては五人口々に間の才を惜しんだ。噂の主になつた貫一は實に荒尾の言の如く、今日態々舊友の榮轉を知つて餘所ながら見送りに立つたのである(一〇五)發車の後暫らく立ちつくしてきて蓬萊橋口から出かけると「間さん」と呼ぶ女、それは滿枝であつた「伺ひたいことも御坐いますのでどこかへ入りませう」と彼女の方が積極的で三十間堀のとあるかしわ屋に上つた。商用かと思つたらそれは第二段にして彼女の身の上が身が入つた。元は士族の娘、家が貧乏で赤樫権三郎の高利を借り、借金の形に赤樫に引きとられて年齢不相應の人妻、行末を思ふと味氣ない。此と思ふ年相應の主人を見立て、眞の夫婦の情愛さ云ふものを味はひたい。不羨だけれどもあなた妻とも思召して……と云ふ筋を世馴れた伶俐な言ひまはしと素振とで語つた。けれども貫一は應ずべくも無い。

金錢ゆゑに賣られもすれば、辱められもした。金錢のないのも謂はゞ無念の一つです。其の金錢があつたら何とでも恨が舞らされやうか其を樂に義理も入

情も捨て、掛つて、今では名譽も色戀も無く、金錢より外には何の望も持たんのです。又考へて見ると懸ひ人などを信じるよりは金錢を信じた方が隻に頼になりますよ。頼にならんのは人の心です(一二三)は彼が現在の境遇に移つた心理過程の告白であり、同時に滿枝に對する拒絶でもある。けれども滿枝はそんなことには懲りず此後も機會ある毎に彼に接近した。戀は生憎、貫一を慕ふ滿枝は疾に貫一の主人なる鰥淵道行(五十一歳)に戀はれてゐる。それを早く鰥淵の妻お峯(四十六歳)が感づいて今日も氷川の畔柳へ行くと云つて出たのがどうも怪しいから一つ實地をしらべて来てくれと貫一に内々の依頼「よろしい」と早速出向。女房に振られて學士に成損つて後が高利貸の手代でお上さんの秘密探偵か(一四八)

と自嘲しつゝ、畔柳元衛は藩主子爵田鶴見良春の家扶で鰥淵はもと田鶴見侯の藩士で足輕を勤めてゐた關係から、畔柳を通じて此子爵を銀主と頼んで居るので都下アイヌの四天王の隨一として羽振がよい。田鶴見子爵(三十四歳)は彼地に留學中陸軍中將の令嬢と戀に落ち、國元に謀つて母堂の反對に已むなく一人で歸國其後令嬢は焦れ死に——それより子爵又娶らず貨殖の傍

には専ら寫眞道樂に耽つてゐるので、赤坂氷川の寫眞の御前で通つてゐる。同じ日本寫眞會々員に富山も加はつてゐる。その關係で親しくなり今日は夫婦とも招かれて宮は畔柳の娘靜緒(侍女)の案内で、庭園を見物中の折柄貫一が主人を尋ねて来たのとバツタリ邂逅、宮の顔色はサツと變つた。それとなしに靜緒から貫一の住所を聞いた「一つカメラに入れさせて戴きませう」さて燈籠の前に立たせられたが、得堪へずして倒れた。遊佐良橋は卒業後日本周航會社に入つたが、謹直なるにもにす三百圓の高利の爲に惱まされてゐる。遊佐に多過ぎるものが二つ細君が美し過ぎる。借金があり過ぎと云はれる。而も債權者として嚴談に來たのは彼の貫一である。そこに舊友の蒲田や風早も來合せてゐたので「舊友のよしみに證書を巻いてしまへ」と忠告してもいつかな應じない。短氣でそして柔道の名手たる蒲田は矢庭に貫一を捻ぢ伏せすばしくも三百圓の證書を取つてしまつた。貫一の心は又動搖しかけた「世間の義理まで捨て、金をためて其が何になる、今日の友人の忠告は一々尤なことばかりだ」とそれさへあるに其後鰥淵を訪ねて夜遅くなり歸るとすれば、滿枝も一寸出かける序だから御一緒にと云つて途々三十間堀の

續きを口説かれウンザリして坂町舊砲兵營の片側町まで來た時は十一時近くであつたが、突然松の樹立から二人の若者が踊り出て弓の杖と檳榔子のステッキまで散々に彼を打つて「憎さも憎く奴」と云つて何處かへ行つた。貫一は暫時其場に昏倒した。

後編

股肱の臣貫一の負傷とて、鰥淵では夫婦とも心配して費へを惜しまず第二大學病院へ入れて治療を受けさせた。經過は良好とのこと、新聞は人を誤つて鰥淵自身の遭難のやうに傳へたのもあつたので、一人息子の直行(二十六七歳)は態々見舞に來て「まあよろしかつたさは云ふもの、阿父様だつていつかはこんな目に遭はれませう、どうぞ今の中にこんな商賣はやめて下さい」と切諫して歸る。

一方お宮は熱海の別離以來彼の「一月十七日云々」の語がいつも胸底に響いて富山家へ嫁ぐのはあまり進まない。其中に期日の三月三日が來た。

此日よ、此夕よ、更けて床盃の其期に迫りても怪むべし宮は決して富山唯繼を夫と定たる心は起らざるにぞありける。止此人を夫と定ざるべからざる我身なるを忘ざりしかど彼は自ら謂へり、此心は始より貫

一に許したるを縁ありて身は唯繼に委すなり。故に身は唯繼に委すとも心は長く貫一を忘す(二六九)無論斯うした身の罪を知らぬでは無いが此が我身の因縁と信じて今も變らない。嫁いだ翌年の春男兒を儲けたが肺炎で天死、其後は斷じて唯繼の子は産むまいと誓つた。誓つた通り彼女は四年たつた今日尙子供が無い。

今にして彼は始めて悟りぬ。おのれの此の身の上を願ひしは其の戀人と俱に同じき樂を享けんと願ひしに、外ならざるを若し身の樂と心の樂とを併享くべき幸無くて必ず其一つを擇ぶべきものならば孰れを取るべきかを知ることの晩かりしを遣る方も無く悔ゆるなりけり(二七三)

愛の目ざめの宮の懊惱は實に此一筋に盡きてゐる。若い娘の若い氣で、榮耀榮華に眼がくれて嫁いでは見たもの、富みも裕かも地位名門も得ては左程の價値は無く眞に得まほしきは、人の心と云ふこゝろをつくく悟つた。彼女の目下の樂しみは唯昔の戀を戀するだけのことであつた。十七日の別れの語は免うして彼女に悲しくも又甘い追憶の種となつた。或日鴨澤の實母が訪うて來た時宮は人無き暇に貫一の近況を聞いて見た。

此間田鶴見の邸内であつたことも告げて「何とかしてあげて下さい、あの人が逆境である間は妾も可い氣持はしませんから」と泣きの涙で頼んだ。

第二大學病院なる間の許へは美人滿枝がしげく見舞に來る「もとくゝ妾が原因で御負傷なすつたんですから」と言つて實に懇切極まる看護をする。それを又鰥淵が何とか彼さか言つて我方へ引き附けやうとする。或日滿枝が例によつて看護してゐると鴨澤隆三が見舞に來て懇々と五年間音信不通のいきさつや、當方には今も昔と同じやうに貫一に對して好意を持つてゐることなどを話したが貫一は無言で押通した。

鰥淵の債務者の一人に飽浦雅之と云ふのがあつた「連判でなくては貸さぬ」と云ふもんだから友人の父の名を連れて若干の金を借りたが期日が來ても返せない。生憎友人は外國に滯留中なので先方さ話もつき兼ねて彼は刑法第二百十條の間ふ處となり私書偽造罪で罰金拾圓重禁錮一箇年に處せられた。家には老母があつて近々其息子の嫁として柏井家の「鈴」と云ふのを迎へる筈であつたのに此不幸に遭つたのであはれにも老母は發狂した。此も誰故あいつ故で鰥淵を指す仇として夜な夜な其家を訪づれ「首をくれ」と誓ること八晩

に及んだ。九日目の夜は風が殊に寒かつた。珍らしくも今日は例の狂女が來ないと云つてみんな悦んで早く

床に就いた其夜狂女は放火した。荒れ狂ふ烈風は魔女の呪ひを助けて瞬く内に全邸を烏有に歸せしめ鰥淵夫婦は無慚にも一片の灰燼となつて見出された。其時貫一は病院からかけつけた(彼はもう三日で退院を許されるまでに全治してゐた)間なく別居の直行も驅けつけた。二人は此迄しみく物を言つたことも無かつたが荒涼たる夜を立ち盡して直行は「間さんどうか眞人間になつて下さい」「エイ私だつて高利貸が善いとは決して思つちやあませんけれど斯うなりますには色々経路がありまして」と云つて輪廓だけの身の上をなした。忽ち一閃の光——それは夜まはりの巡查のであつた。彼も此も各々慘として蒼き面には露ならぬ露がした、つて時は今年前二時半——

續編

荒尾讓介は其後靜岡縣參事官に轉任したが折柄彼に學資を支給してくれた恩人大館朗郎(岐阜縣の民主黨員)の選舉運動に充つべく、向坂と云ふ赤極の手先から三千圓を連借したが其迷惑が崇つて免職となり、今は江湖に落魄して居る。而も彼悠々として迫らず西筋の横

町に春の日影を浴びながら

我四方に遊びて意を得ず

陽狂して藥を施す成都の市(三六五)

と放吟してゐる。折から風を切つて通る腕車に腰を打たれて大地に仆れ顔をすりむいて「待てこら」と大喝、よく見れば車上の主は富山夫人宮「オヤ珍らしい」と懐しげに寄り添ひ自身の手で傷を庇ひ車を返してとある料亭へ請じて、しみく此頃の悔悟の氣分を男に訴へ「どうしたら可いか誨へて下さい」と纏る「そりやあなたの一存にあることだ」と云つてあらはには誨へぬ。併し機會があつたら貫一の心が柔らぐやうにはしようと思つた。此邂逅は宮にとつては尠からぬ慰藉であつた。

それとも知らぬ富山は此節藝妓愛子に現をぬかしていつも歸りは遅い。家に居る時でも「たま〜あひはあひながらツンテン」など唸つてゐる。

荒尾は久し振りに貫一を尋ねた。鰥淵の財産を貰つて前の邸跡へ小じんまりと舊館に似せた家を立て、お豊婆さん一人をおいて相變らず質素にそして高利貸に精を出してゐる。荒尾は情理を盡して今の職業を止めるやうにと云ふ事と、宮が悔悟してゐるから許してやれ

と云ふ事を反復した。貫一は荒尾に「君こそ成業した眞人間だどこへ出しても引けばとらぬ人間だから是非活動して貰ひたい。金故とあらば金は幾らなりと都合するから盛んに押出してくれよ」と云ふ。其最中へ滿枝が来て荒尾に催促をする。それで始めて貫一は親友の現況がわかつた。滿枝は「あなたのお指圖で救へとならば高が三千圓位快く棄てませう」と言ふ。

午前五時の本所發に乗り後れて貫一は二時間餘千葉行を延ばして停車場前の休憩所に茶を啜つてゐると、やがて入つて来たのは若い男女即彼の雅之と鈴さんとである。二人の戀の濃熱なこと女の實家の不承知な事は二人の密話でよくわかる。貫一は「此二人の愛でもダイヤモンドの誘惑で動かすことが出来るだらうか」など思ひ宮を想ひして見た。

今彼娘の宮ならば如何ならん吾彼の雅之ならば如何ならん。吾は今日の吾たるを擇ぶ可きか、將彼の雅之たるを希はんや、貫一は空う凭く想へり。

宮も嘗て己に對して彼娘に遜るまじき誠を抱かざるにしもあらざりき。彼にして若し金剛石の光を見ざりしならば亦吾をも刑餘に慕ひて其の誠を全うしたらんや唯繼の金力を以て彼娘を脅したらんには亦彼

の雅之を牢獄の先に棄てたりけんや。耀ける金剛石と汚れたる罪名とは孰か愛を割くの功多かる(四三六) M. Chikawa とした手紙が此節一週は一度は舞ひ込んで最早十通にもなつた。紙の良きを擇び、筆の良きを擇び、墨の良きを擇び、彼は意して其字の良きを殊に擇びて(三九七)書いたものであるが其都度貫一は投棄てた。とうとう宮は荒尾の名を告げて貫一の居室に通つた。實に六年振の對面である。

貫一さん堪忍して下さい。六年前の一月十七日のお言葉をわたしは決して忘れはしません。堪忍がならずばどうぞあなたのお手で殺して下さいまし。と決心色にあらはれてビクとも動かぬ。

宮、宮、何しに來た。イヤ何の顔で此處へ來た。今更そんなことが云へると思ふか。云ひたい事は熱海で聞かせておいた。もう此上に用は無い歸れ〜 お、お豊お客様のお歸りだよ。

といきりたつてゐる最中「四谷のお客様が」と云つて滿枝が來た。貫一は「困つた」と云ふ顔つきでアタフタと出てそれつきり何處かへ雲隠れしてしまつた。通りかかりの其會所で晩まで居て歸つて來るとまだ滿枝が

居る。滿枝はお宮の訪問を見て戀人の一大事延いては我身の一大事と、いつらよりも執念深く身の上の相談をした「お謙でせうがお豊婆さんと一緒にお世話をさせて下さい」とまで極言したが、人妻たる人に「諾」とも云へず、お宮の思はく否我心の思はくの手前承諾は出來た譯でもない。

「コリヤ變だ——」と思つて耳を澄ますと、女の泣き聲、やがて二人の格闘宮と滿枝、宮は悲しみの極わたしは死にます、此手を放して〜ともがく。貫一は驚いて刃物を奪はうとする「貫一さん此程に悔いても許しては下さいませんか?.....」あ、赦したぞ——もう赦した、もう堪.....堪忍した——(四九九)「間さん妾をどうして下さいませ。可愛さうぢやありませんか、こんなに思はせておいて」と滿枝も繩る。宮は赦されて「嬉し」と叶びよる〜と彼方に行く「宮待てどこへ行く?.....待て」と云つてもスル〜と脱けて行方知らず、後を慕つて行つて見ると「縁樹陰愁ひ潺湲聲咽びて淺瀬に繋れる宮が驅よ——(五〇四)「あ、可愛さうな事をした。我もやがては死ぬるぞと宮がむくろを背に負うと其輕きこと一片の紙片に等し。此は變だと見返ると芳芬鼻をついて白百合一朶滿開の

花の貌を肩にかけてゐる。オヤツと云ふ間に目がさめた實は曉の夢であつた」

續々編

心の疲れは轉地に限ると貫一は突然鹽原へ入湯に出かけた。泊つた宿は清琴樓、二間隔て、男女の情死今毒薬をあふらうとして念佛を唱へてゐる。こりや大變と飛び込んで仔細を聞けば男は南傳馬町の幸菱と云ふ紙問屋の支配人狭山元輔(廿八歳)女は柏屋の藝妓愛子(廿二歳)實名靜で男は主人の金を三千圓程使ひ込んでゐる上に主人の姪をつきつけられさうで困つてゐるし女は此程富山銀行の取締役(即唯繼)に身請けの話が成立ちさうで金と戀との失敗に死んで此戀を遂げようと云ふ。身請の金はと問へば約八百圓「ぢやあ三千八百圓あれば御二人は救へる譯ですれ。よろしい私が出してあげませう」と綺麗に二人を助けた。彼思へらく「世には良家の令嬢にして愛を棄て、金に即く宮のやうなのがあるのに、藝妓風情でありながら死んでも悔いぬと云ふ眞心は涙ぐましい程嬉しい」

新續編

嗚呼麗しきミレエジ——(八五四)

救はれた狭山夫婦は貫一と同居して、お静は此恩入を二なく大切に夫と主人と二人に侍いて盆と正月とを一時に迎へるやうの忙しさを厭はず、かひなくしく世話をす。其姿は世に美しい様の一つであつた。お蔭で貫一も此頃漸く人生のくつろぎを感じ出した。女が男に惚れるには十五六の見惚れ、十七八から廿の氣惚れ、二十三四からの底惚れと三通あるんでいますとさ、(六四三)など云ふ彼女の戀話も流石に手に入つて、貫一には面白く聞かれた。宮からの手紙はだん／＼長いのが二通も来た。おろかなる女より戀しき／＼生別の御方様もあるしなど、して(紅葉全集第四卷一―六一九、始めこの作は左の如く五つ切りに出た。前編卅年一月讀賣新聞・後編卅年九月讀賣新聞・續編卅一年一月讀賣新聞・續々編卅二年一月讀賣新聞・新續編卅五年四月卅六年一月讀賣新聞。

そしてこの未完結の後をついだものは小栗風葉の後編金色夜叉(四十年十一月活動の友)と風葉の名で靈華が執筆した荒尾護介(大阪日報)とである。尙又金色夜叉叢書黒法師氏「間貫一と間宮子」岡村書店本もある。
こんじやくものがたり 今昔物語 (宇治大納言物語) 六十卷

和漢梵に互つて古今の雜話を平明な國文に綴つた雜文で、作者未詳。年代は王朝末期のものとはかりで詳細はわからぬ。毎段「今は昔」の冒頭で始まつてゐるから「今昔物語」と名づけたものであらう。日本部三十卷・天竺部十五卷・震旦部十五卷から成り、それ自身趣味ある讀物であるばかりでなく、時に考證の材となることもある。

- 一、享保五年版二十册
- 二、改訂史籍集覽本
- 三、藤岡作太郎今昔物語選(名著文庫第五)
- 四、校註國文叢書十六、十七の内
- 五、川添嘉一郎ローマ字今昔物語
- 六、小山田與清今昔物語出典攷(國文註釋全書十五ノ内)
- 七、國刊本
- 八、國大本一六卷これは卅一卷あつて天竺震旦の部は押小路家本を本とし所々柳原家本によつて増訂を加へ、本朝の部は丹鶴叢書本を底本として傍前書を参考としたといふ。國書刊行會本の底本も丹鶴叢書本である。
- 九、芳賀矢一纂訂攷今昔物語集 三册

サ の 部

さいおんじにふだうさきのだいじやうだいじん 西園寺入道前太政大臣

さいかく 井原西鶴 二二〇一―二三五三、寶

きんつれ「藤原公經」を見よ。
永一八―元祿六、八、一〇、五十二歳
近世、元祿の時代、俳諧によつて體得した雅俗折衷の一新文體を以て、よく現實生活を描寫し、浮世草子の鼻祖となり「わけの聖」と謂はれ「粹法師」と呼ばれたのは井原西鶴である。
彼は初め鶴水と號し後に西鶴と改めた。又松壽軒・二萬翁・二萬堂等の別號もある。大阪鎗屋町に住まひ、西山宗因の門に入つて檀林風の俳諧で一時鳴らした。殊に住吉の社頭に一日二萬三千五百句を吐いて満座をアツと謂はせたのは有名な話柄で(藤村作博士の説による)、これは強ち無稽の傳説ではなく、彼が天才的な記憶と聯想とを驅つて事實これだけを句したものと推せられる。大矢數には筆記役の補助もあつて彼は單に誦するだけであつたらしい。

は類書關係書の凡てを収めて整理し、補遺として異本今昔物語(京都吉田鈴鹿氏藏)今昔物語卷二十別本。三津輕家卷子本をも取容れ、更に改證の補遺・難訓・註解・索引をも加へられたもので、この方面では必讀の書となつてゐる。之を助けた一人の阪井衡平氏にも一〇今昔物語の新研究の著がある。

こんちうなごんあつただきやうしふ 權

中納言敦忠郷集

あつただしふ「敦忠集」を見よ。

こんにやくほん 蒟蒻本

洒落本に同じその項を見よ。

こんぼんうた 混本歌

一、せだうか「旋頭歌」に同じ、その項を見よ。

二、三十一文字中一句を省略した歌態

朝がほの夕かけまたすちりやすき花のよぞかし

(末の七文字を省く)

岩の上のれざす松が枝とのみ思ふ心は有る物を

(二句を字あまりとし末句を省く)

この二首が八雲御抄や悦目抄や俊賴口傳集の何れにも出てゐるが、唯一の歌の型といふだけで餘り行れなかつたものであらう(古類文學部一・五四四―五四五)

辻駕籠や雲に乘行く花の山

長持に春かくれゆく衣がへ

鯛は花は見ぬ里もありけふの月

などはその名句である。斯て彼は俳壇の巨匠として、世に立つべかりしを、師翁宗因の死歿を機として浮世草子の執筆に一轉した。思ふにこの派が行き詰りの状態にあつたからであらう。又當時の俳壇は多少議論仆れの氣味があつて、師翁歿後彼が後繼者として殘壘に依り、後輩を守り立てて行くことは随分うるさい事でもあつたらう。更に又彼の勃々たる藝術的衝動は永くこの小天地に跼蹐するを屑しとしなかつた故もあらう。轉じた動機については色々推測の餘地もあるが、結果から見ればこれは思ひもよらぬ文壇の儲けものであつた。貴むべき轉回であつた。

これより以後彼の述作には色と慾と武士の世界とを展開した幾多の草子がある。色の世界は好色本で遊里情調を如實に寫し、性慾描寫と男女相接する間に醸さるる人間味の美の陶酔境の披瀝とに輕妙な筆が這つてゐる。一代男・二代男・三代男・一代女・五人女、(何れも「好色」を冠した)等がそれである。慾の世界は商人物に表れ。金錢萬能主義を具象化したもので世間胸算用・永

代藏・永代記などがそれで、武士の世界を書いたものは官憲の眼を逃れる安全辯と云ふ氣味もあつて純武士道とよりは町人的武士の描寫であるが、流石に禮儀廉恥剛健尙武の魂を具體化して又別種の趣がある。武道傳來記・義理物語・武家織留等がそれだ。その他文反古・男色大鑑・諸國ばなし・懷硯・二十四不孝・櫻蔭比事・小夜嵐・西鶴獨語・つれづれ・織留・松濤遺言・好色盛衰記・五徳・よみ・凱陣八島・昔の京灘波大鑑・はかたゆり・永代記・炭やき・跡追・宗祇諸國物語などの作があり、俳諧に關して、大矢數・後大數・五百韻・兩吟千句・六日飛脚・胴骨・杉やき・石車等をも書いた。

彼の門人には、椎本才磨・山本西友・水田西吟・下山鶴平・北條園水などがあつて、皆衷心彼を師として尊敬して居つた。
(西鶴に關しては作品・評論・評傳共近來益々盛に續出するやうである。今手近に在る新しいものを參考迄にあげておく)
双木園主人、戯曲小説通志二四二―二四五・藤村作、上方文學と江戸文學二―四八・藤岡作太郎、近代小説史一一五―一六三・帝文二三、二四、西鶴全集・坪内逍遙水谷不倒共著、列傳體小説史上卷五六―八七・早稻田

文學大正十一年十月西鶴記念號・古典全集中、西鶴全集・幸田露伴校訂文藝叢書第三卷(博文館)

さいかくおきみやげ 西鶴置土産 五卷

井原西鶴が商人物の一つで、彼が死後一年刊行、卷首にその肖像と俳句をあげ、次に彼の作品浮世草紙一篇「戀無常、大盡達が豪華な遊びも珊瑚珠の緒へ下げながら遊蕩をやめるはなく、大抵は文無し素寒貧になつて始めて眼がさめるもの」との意を寓してゐる。

さいぎやう 西行 一七七―一八五〇、元永

元―建久元、二、一六、七十三歳
藤原秀郷九世の孫で、俗名を佐藤義清と云ひ、鳥羽上皇の北面の武士として仕へ、弓術に堪能を以てめでられ、左兵衛尉に任ぜられてゐたが、一日従弟憲康の頓死(保延六年歿、廿三歳)に遭ひ、兼ねて彼が意識裡に潜在して居た出家遁世の心、勃々止み難く「棄恩入無爲、眞實報恩者」と觀念し、縋る幼兒は始めの試煉と一蹴し、嵯峨に行つて薙髮「圓位」と改名し、それから一笠一杖の漂浪を続け、中國四國(殊に弘法大師の靈場)の旅をつゞけ、一旦都に立ちかへり、更に又吉野(三年淹留)・熊野・伊勢・東海道(佐夜の中山、富士)・鎌倉(銀猫の逸話)・みちのく・と東海東北の旅をつゞけ

歸來洛東の春花春月に適樂し

願くは花のもとにて春死なほそのささらぎの望月の頃

と詠じたが、天はこの雅道の奥に入つた死亡申込書を快く容れて幽契違はず如月の十六日に寂滅爲樂した。彼が著としては家集の山家集がある。この集は近頃益々顧らるゝ傾向がある。

寛政七年版、増補山家集抄九卷五册・明治卅九年藤岡作太郎校、異本山家集の外、名著文庫、有朋堂文庫、日本歌學全書(八)・續國歌大觀(一八四―二二八)等に入り尾山篤二郎氏の西行法師全集も出た。
次には「御裳濯川歌合」これは彼の伊勢内宮に奉納する爲めの自歌合で右を山家客人、左を野徑亭主として三十六番、俊成の判である。次に「宮川歌合」同じく外宮奉納の自歌合で右三輪山老翁、左玉津島人として三十六番、定家の判を乞うて居る。この外に彼の歌學説を述べた西公談抄(群類三〇〇)あり、彼の隨筆と稱するものに「撰集抄」があるが、この二種は後人の擬作らしい。
彼が詠は想に於て
一、自然美憧憬の表現に富むこと

- 二、厭離穢土の傾向つよいこと
- 三、その閱歴にも似ず人間味豊かなること
- 四、實感の味が最多數で机上題味の嫌なきこと
- 五、即興に佳什多いこと
- 形式に於て
- 六、譬喩の適切
- 七、反復法の妙用
- などが眼に立つ。
- 一、よしの山こそぞの栗の道かへてまだ見ぬ方の花を眺めん
佛には櫻の花をたてまつれ我後の世を人とむらば
- 二、山里に誰を又こは呼子鳥獨のみこそすまむと思ふに
いつの世にながきれぶりの夢さめて驚くことのあらんとすらん
- 三、とめこかし梅さかりなる我宿をうときも人は折にこそよれ
柴の庵のしばし都にかへらじと思はんだにも哀なるべし
- 四、よしの山やがて出でじと思ふ身を花ちりなば

- と人やまつらむ
かしこまるしでに涙のかゝるかな又いつかはと思ふ心に
- 四、年たけてまたこゆべしと思ひきや命なりけり
さやの中山
心なき身にもあはれは知られけり鳴たつ澤の秋の夕暮
- 五、道のべに清水流る、柳かげしばしとてこそたちとまりつれ
何事のおはしますをば知られどもかたじけなさに涙こぼる、
- 六、玉章の端書かとも見ゆるかな飛後れつ、歸る雁がれ
おしなべて花の盛りになりにけり山の端毎にかゝる白雲
- 七、世の中をすて、すて得ぬこゝろして都はなれぬ我が身なりけり
あはれとて頼まれぬ哉明日は又昨日と今日は云はるべければ
小山田の庵近くなく鹿の音に驚かされて驚かす哉

の諸歌を対照すれば一層よくわかる。

さいこくりつしへん 西国立志編

中村正直が英のサミュエル・スマイルス一八六七年の著「自助論」"Self Help"を譯したもので、全冊十二篇三百二十四章、凡て實踐倫理の剴切なものばかりである。巻頭譯者の漢文の序は國家富強の基本は道德にありとの論旨で、一面儒教的でもあり一面今日國際聯盟の首唱する戦争防止論にも通つて居る。この書一冊の感化は實に深く博く常時苟くも文字あるものでこれを讀まないものはない位であつた(國木田獨歩の「非凡なる凡人」の主人公桂正作のやうな熱心な愛讀者は事實澤山あつたものと見える)(四六判七六四頁、明治九年十月廿四日、小石川區江戸川町二十七番地木平讓)

さいこちうじやう 在五中將

なりひら「在原業平」を見よ。

さいこのぶんけん 最古の文献

記紀萬葉の外、これ等以前の文献としてその存在を推測し得べきものは上宮記(聖德太子薨後間なく出たといふ。今「釋日本紀」にあり) 現存せるものには上宮聖德法王帝説・十七個條憲法・伊豫道後温泉の碑文・大和法隆寺の觀音釋迦諸佛像の背銘文(金堂藥師光背銘・同

釋迦佛光背銘・同三尊佛光背銘)・元興寺露盤銘・同丈六

光背銘・天壽曼荼羅繡帳銘及び經文注疏の類である。蘇我氏の滅亡と共に烏有に歸したといふ史書もあれば有力な文献となつたであらうに、之を惜しむものは獨り惠尺だけではなからう(文部省國語調査委員會編、大矢透氏主査假名源流考、同寫眞、尙「漢文」を見よ)

さいしう 尾上柴舟 明治九、八、一

岡山縣津山の人、名は八郎、東大國文科出身、夙に詠歌の才を認められ、又熱心に稽古もした。氏の斯學に於ける功績は、作品の方では短歌、古典的學究的方面では「歌と草假名」「梨壺の五歌仙」「古今集と新古今集」「日本文學新史」等の著。外に國文學教授者として斯界の耆宿であり貫之・行成・俊賴の書風から一家を成した美しい筆蹟も有名である。歌集には銀鈴・靜夜・永日・遠樹などがあり、雑誌「水鏡」は氏を中心とする機關雜誌である。近頃校註國文學大系や新釋國文叢書に執筆せられて居る解題も精緻周匝到底かいなでの學徒では書けないものである。

さいしゆ 祭主

「大學頭」を支那風に呼ぶ名稱。

さいばら 催馬樂

奈良朝末期より王朝始にかけて坊間に傳誦した俗謡を云ふ。それが王朝に入つてから純器樂の唐樂と入れまぜて宮廷音樂のプログラムに用ひられるやうになつてから雅樂としての地歩を占めたものである。郢曲秘抄のうちの「風俗裏書」のところにある左の文は簡潔にその起源を述べて居る。

催馬樂本路頭之謠歌也 然而後好事之士女 取以爲彈琴之歌曲 故其歌因來 甚有古代 有中世 厥后更奉諸國 謂之風俗 又後代謠諷 謂之今樣 催馬樂風俗固一也 遂甄於宮中 已久矣。唐樂と混奏せられたことは

天曆五年正月廿三日御遊(村上天皇)

安名尊 春鸞囀 席田 葛城

以下度々見える。

催馬樂といふ名稱の起りは

- 一、諸國から馬に荷負はせて大藏省へ貢物を納める人民が道中するのに歌つた歌だから(梁塵愚按抄)
- 二、神樂に前張あり、それが拍子にうたふ故に是もさいばりの名を負ひしもの(眞淵の催馬樂考)
- 三、催馬樂の一番始めの歌に「いでわが駒早くゆきこせまつち山」と馬を催す意味の歌詞があるから

(長瀬眞幸、本居宣長)
四、折衷説(橋守部催馬樂入綾)
等の諸説がある。

催馬樂譜の撰定は

- 一、奈良朝末 淡海三船
- 二、醍醐天皇 延喜二十年(又は廿一年?)藤原忠房 増補
- 三、圓融花山の朝 一條左大臣雅信 大補正
- 四、後水尾天皇の寛永三年九月 四辻季繼
- 五、光格天皇の朝(今日行はる、もの) 數次に手を加へられた。

現存歌詞は皆で六十種ある。

律(陽の聲)我駒・澤田川・高砂・夏引・貫河・東屋・走井・飛鳥井・青柳・伊勢海・庭生・我門・我門乎・大路・大芹・淺水・刺柳・鷹子・逢路・道口・更衣・何爲・鷄鳴・老鼠・隱名

呂(陰の聲)安名尊・新年・梅枝・櫻人・葦垣・山城・眞金吹・紀伊國・葛城・竹河・河口・此殿者・此殿奥・鷹山・美作・藤生野・妹與我・淺綠・青馬・妹之門・席田・大宮・總角・本滋・叢山・眉止之女・酒飯・田中井戸・無力蝦・難波海・鈴之川・石川・奥山・奥々山・我家

(現今雅樂として奏せられるのは律に伊勢海・更衣、呂に安名尊・山城・席田・叢山の六種だけである)之を内容によつて分けて見ると

一、戀歌 二十七種

例 伊勢海 一段

いせのうみの いせのうみの 清きなぎさのしほがひに なのりそやつまん貝やひろはん 玉やひろはん

二、諷刺 十五種

例 澤田川 三段

さばだ川 袖つくばかり 淺けれど ハレ

二段

あさけれど くにの宮人 高橋わたす

三段

アハレ ソコヨシヤ たかはしわたす

三、祝賀・儀式八種

例 呂 安名尊 三段

あなたふと あなたふと けふの尊さや いにしへもハレ

二段 古しへも かくや有りけん けふのたふとさ

三段

アハレソコヨシヤ けふのたふとさ

四、叙景 五種

例 梅枝 三段

一段

むめが枝に 來居るうぐひすや 春かけて ハレ

二段

はるかけて なけどもいまだや 雪はふりつ、

三段

アハレ ソコヨシヤ 雪はふりつ、

五、人事 三種(大芹・道口・酒飲)

例 道口 一段

みちのくち たけふのこふにわれはありと 親には申したべ こころ合ひのかぜや さきんだちや

催馬樂は我國に始めて出現した民謡俗謡として、古代人民の素朴な内生活の響を傳ふるのみならず、今様・宴曲・謠曲・小歌を次第に開展する歌謡の淵源として、その曲もその歌詞も後世に影響する所少くない。尤そ

の歌詞は古今集や當時有名な歌詞をそのまま採つて、之に雌しを加へて、曲附けしたものもあるが、数ある歌の中どんな歌を採つたかを見ることも一つの興味ある観察であらう（今井彦三郎氏催馬樂通解・千秋季隆氏謠物評釋）

さいばり 前張

神樂歌のうたひ方の名稱「さいばりに衣はすらん」の詞から出たもので、之に大前張・小前張の二種ある。それは拍子のとり方や琴の弾き方などによつて區別したもの（「神樂歌」「催馬樂」をも見よ）

さいほくしふ 濟北集 二十卷

五山の詩僧、虎關師録の詩文集（題名は同人の著元享釋書の卷末に「大日本國平安城濟北大沙門虎關禪師撰」とあるのから察して、その居處東福寺から来たものであらう（上村觀光氏 五山文學全集詩文部第一輯三九一—三六六）

さいまる 椎本才曆 二三一六—二三九七、明曆二—元文二、正二、八十二歳

（一説二三三六—二三九八、延寶四—元文三、正六、六十三歳）元、大和宇陀の織田三州の家臣で、本姓は谷、名は則武、

字は少文、號は舊徳翁・松笠庵・甘泉庵・狂六堂・春理齋・槃特小僧などあり、始め俳諧を西鶴に學び、西丸と云つたが、師の紹介によつて宗因につきても學び、享保十一年江戸に出て石町に居つたが間もなく大阪に歸り、天満の邊に家居し斯の派の奇才と稱せられた。その著に椎の葉・ふくぼ・坂東太郎・椎本語類・松笠竹枝・千葉集などがある。

さいみんぶきやうけうたあはせ 在民部

卿家哥合

在原行平の家で催した十二番の歌合で作者の名は出てないが、現存する歌合ではこれが最古のものとして名高い。勝負は次の通り

左勝のもの 一、四、六、七、九、一〇、一二、持のもの 五、八、

右勝のもの 二、三、一一（群類一八〇、八、一一—一二）

さいむ 山本西武 二二六六—二三三八、慶長

一一—延寶六、二、一八、七十三歳（大系圖云ふ、この致年疑あり）

京の人、家は元壬生の神職、彼は京に出て綿屋を營んで居た。通稱九郎右衛門、無外軒・風外軒等の號がある。幼より俳諧を嗜み、七歳にして貞徳の門に入った。又

寛永六年十一月には彼が主唱して妙満寺に俳席を開いたが、是れ我俳諧史上俳席のはじめだといふ。和歌・俳諧の傳書多く、この人に傳はり、その門弟も亦大層多かつた。著作には鷹筑波集・久留流・萩花・砂金袋・同後集・河上草・ついで子・あは、千句・いつまで草等がある。

さいもん(さえもん) 祭文

新淨瑠璃發生以前の語り物で、説經と共に徳川期元祿頃まで盛んに行はれ、その語るところ多くは戀愛物殊に心中物であつた。當時八祭文とてはやつた語り物は八百やお七・油やお染久松・大經師おさん茂兵衛・頭小三金五郎・お初徳兵衛・おちよ半兵衛・お夏清十郎・お俊傳兵衛であつた（余の幼時祭文と稱してレレレンと門附けをして歩いたのを聞いたが節は今の浪花節の前身と謂つても可いものだったと記憶する。又幼時盆踊りに祭文音頭といふのを聞いたがこれ等も往時の祭文から脈を曳いて居ようと後に想つたことであつた）水谷不倒氏世話淨瑠璃大全下巻）

さいやう 堀越菜陽 ?—二四三二、?—明和九、?歳

江戸の戯曲家。市村・森田・中村の諸座附となり一時京

の嵐三右衛門座からも聘せられて西上した。その特長は一幕切の淨瑠璃に趣向を盡すことに妙を得てゐたことと尙又大道具の「藪疊」は彼の創意だといふ。初雪伶人袖・本領鉢木染・蟾蜍漆・愛護會我など名作と稱せられて居る。彼れ曾て「其名も月ノ色入」を書いて世評衰へたが、明和八年吉原大火、その普請のほど完成した頃「又葺替月吉原」を書いて人氣を取りかへしたといふ。

さいりうせう 細流抄 二十卷

三條西公條の源氏物語の註釋で同期の類書中出色の書といはれてゐる。其註釋系統は

弄花抄 明星抄
河海抄 細流抄 孟津抄
花鳥餘情 紹巴抄

さうあんわかしふ 草庵和歌集 六卷

頼阿の家集で、始め四巻が本集あとの二巻が續集である。四季・戀・雜と歌態をわけて二千二首を選集したもの、承應二年（二三一三）閏六月の刊行にかゝる。この書が如何に當代に重きをおかれたかは澄月・烏丸光廣・職仁親王・當時の將軍家・石川僧正・似雲法師等の口を極めて推稱してゐるによつても察することが

出来る。

註解・批評の書

櫻井元茂 草庵集難註 二卷

香川宣阿 草庵集蒙求諺解 二十卷

本居宣長 草庵集玉帯 九卷

蜂谷又玄 草庵和歌集類題 六卷

? 草庵集類句 四卷

? 草庵集類題拾遺 一卷

さうか 早歌

神樂歌の用語で、うたひ方の急調なことをいふ。かぐらうた「神樂歌」を見よ。

さうきう 成田蒼虬 二四二—二五〇二 寶曆一—天保一三、三、一三、八十三歳

加賀金澤の藩士、後職を辭して京に出て南無庵高桑蘭更の門に入つて俳諧を學び、遂にその名を襲いで南無庵二世と云ふ。梅室と相弟子で相携へて所謂天保俳人の尤なるもので、俳諧史上に於ては月並調の始めをなすもので斯道墮落の先唱であるが、その趣味を世に布いたこと、その句の優柔纖弱にして遅吟第一と謂はれたほご作句に精力を費したことなどは特筆すべき點であらう。

自著の蒼虬句集といふのがある。

山里は梅の咲く日があればこそ

鶯や隣まで来て隙の入る

夕暮は蚊に浮世めく住居かな

ものかげは常より暗しけふの月

よき流れ持て暮るゝや雪の里

さうけいしふ 草徑集 三卷

大隈言道の家集。文久三年(二五二三)の自序茂村恒久の跋があつて同四年版行された(校和歌叢書六、四六九—五八六・續歌八)尙「言道」を見よ。

さうこんわかしふ 草根和歌集 十五卷

室町時代の歌人正徹の歌集で、卷一と卷十五をのけると卷二元享元年(二〇八九)から卷十四長祿三年(二一九)まで略々年序を追うた歌日記の體裁で、作者正徹の歌風をも歌歴をも否な問歴迄も知ることが出来る今丹叢五六—七〇に入る。又之を抜書したり類集したりした二三の書もある。

一條兼良 草根集拔書 一卷 (一名正徹千首)

? 草根集寄書 十卷

源躬弦 草根集類題 二册

さうし 草子

すゐひつ「隨筆」に同じ、その項を見よ。

さうしげき 壯士劇(壯士芝居)

明治廿二年頃に始まつた新派劇の原始的なもの、俳優の多くは民権論勃興時代の政治ゴロ即ち壯士であつた處から之を壯士芝居といふ。角藤定憲・川上晋二郎などがその主なるもので大阪上演が起りである。何等の劇的素養もない劇興で、その所演も筋なく樂なく衣裳なく演説とにわかと柔道撃劍の片端をつぎはぎして政黨問題・探險實話・裁判事件などを見せたが時代に觸れてゐるといふ一點が唯一の強味で、やがて他日の新派劇にまで發展した。

さうししほゐ 壯士芝居

さうしげき「壯士劇」を見よ。

さうしぢ 草子地

物語中の「地の文」を云ふ。即ち作中の人物や對話以外作者があらはに事件を述べ感想や批評をすること。

例「君すこしかたみみてさること、はおぼすべかめ

り源氏「いづかたにつけても人わろくはしたなかりける御物語かな」とてうち笑ひおはさうす(括

弧内の語以外は凡べて草子地)

さうせき 夏目漱石 慶應三—大正五、一二、九、

五十歳

東京の人、名は金之助、二十六年東大英文科を出、ついで大学院に入り、松山中學・熊本高校に奉職し、英に三年留學、その以前から親しかつた正岡子規の勧めによつて彼地から「倫敦塔」をホトトギスに寄せて、その文名漸く著れ、歸來東大講師兼一高教授となり、三十八年ホトトギスに「吾輩ハ猫デアル」を連載して非常の喝采を得、之によつて創作に興味を持つやうになり、四十年教職を退いて東朝の客員となつてからは専ら創作に精進し、虞美人草・三四郎・坑夫・彼岸過まで・行人と一篇出る毎に洛陽の紙價を高からしめた。その作風は餘裕派小説とか低徊趣味の小説とかいふものだが仔細に見ると、色々の推移があつて純低徊趣味のものや、ロマンチズムのものや、自然主義に近いものや、探偵小説と同じやうな好奇心で讀者を引張つて行くものなどがある。當時自然主義派に屬せざるものは文士に非ずとても謂はれさうな斯壇の渦巻にあつて、卓然孤高、鷗外や逍遙と共に第一人者としての名聲をつとげた。氏は實に文壇の一偉觀であつた(漱石全集・同別集・森田草平氏・文章道と夏目漱石先生・新小説増刊號、文豪夏目漱石)

さうてう 建部巢兆 ？—二四七四、？—

文化一一、一一、一七、？—二四七三、？—文化一〇

武藏千住の人、名は英親、字は族父、榮翁・秋香庵・黄雀園などいふ。書家山本龍齋の男で、畫を谷文晁に學び、蕪村の畫風を慕ひ、遂に俳畫を以て一家を成し、當時成美・道彦と共に三大家と稱せられた。けれども彼の専門は寧ろ俳諧の方にあつて早く春秋庵白雄の門に入り八弟子の稱を博した。晩年關屋の里に幽栖した。王の春・仙都紀行・おぼろ豆腐・徳萬歳などの著がある。

さうはい 雜俳

嚴密な定義的な詞でなく、前句附・冠句・五文字や川柳等の音律敷をふんだ輕文學を總稱していふ。

さうばうきげん 草茅危言 五卷

中井積善が寛政元年(二四四九)松平定信に獻じた經濟治國の論議で、平明な和漢混淆文體で凡て六十五編ある。之を逐條駁議したものに神讓輔の草茅危言摘議五卷がある(讓輔は丹波篠山の藩儒である)

さうぶん 相聞(あひぎこえ)

あひぎこえ「相聞」を見よ。

さうへい 森田草平(二十五絃白楊) 明治

一四、三—

美濃の人、名は米松、東大英文科出身で、夏目漱石門下として木曜會に出た。初め詩を作つたが、「煤煙」が出世作になつて以來、主として小説に筆を執り、草雲雀・扉・初戀・自叙傳・十字街・女の一生・踊等の長短篇を出した。他に若干の翻譯と評論がある。

さうほんらうた 雙本歌

旋頭歌の別名。その項を見よ。

さうやしふるみだい 草野集類題

「草野和歌集」を見よ。

さうやわかしふ 草野和歌集(草野集類

題・類題草野集) 十二卷

木村定良が文化十三年(二四七六)の春から文政元年(二四七八)の冬までか、つて中古以來古歌人の詠歌を類集して四季六卷・戀雜六卷としたもので、歌數一萬數千「やんごとなき雲の上人のをば憚りて載せぬ」といふので草野集と名づけた。

さうりんし 巢林子

もんざゑもん「近松門左衛門」を見よ。

さかいべのいはづみ 境部石積

天武天皇の勅を受けて新字四十四卷を撰んだ人だがその傳もその書も未詳である。けれども我邦の倭字の創始者として記憶すべき人である。

さがてんわう 嵯峨天皇 一四四五—一五〇一

延暦五、九、七—承和九、七、一五、五十七歳

桓武天皇第二皇子、御母は贈太皇太后藤原乙牟漏、第五十二代に當らせられ、御幼時より聰明好んで書を讀ませられ、經史に精しく、詩文に巧みに、書は三筆の御一人であらせられ、又狩がおすきであつた。賀茂齋宮を始めて置かれ、白馬節會・御齋會内論議・内宴等を始めて行はせられた。この御代の漢詩集中文華秀麗集・經國集は勅撰で私撰には凌雲集と云ふのも出たがこの三集に天皇の御製が出てゐる。

さかのうへいらつめ 坂上郎女?

額田王と相並んで萬葉女流歌人の雙璧と云はれた。彼女は大納言大伴安麻呂の次女で母の石川命婦兄の大伴旅人・妹の稻公・長女の田村大嬢・その舞の大伴家持、二女の坂上ノ大嬢・その婿の大伴駿河麻呂何れも萬葉歌人として有名な人ばかりである。彼女は姿色人に絶しその花の如き艷容は蜜の如き情藻と相俟つて當年の貴公子を惱殺したのらしく、性格はよくはわからない

が、一見王朝の和泉式部を聯想する型の人である。幼より安倍蟲麻呂に慕はれ長じて穗積皇子(天武天皇の御子)の寵を得、親王薨後藤原麻呂に嫁ぎ、又もや夫に死なれ更に大伴宿奈麻呂に嫁ぎ田村大嬢・坂上大嬢の二女を産んで琴瑟とかく和合を缺き遂に破鏡の歎を見るに至つた。而かも彼女が容姿尙艷色衰へず。駿河麻呂とのうき名も流れ百代との贈答もあつた。彼女が味はこれ等波瀾多き戀愛生活結婚生活に對する歡喜と怨恨の表れであつた。

蟲麻呂に和へては

相見ぬにいくばくいさもあらずにこゝばくわれは戀ひつゝもあるか

戀ひつゝあひたるものを月しあらば夜はこも

らんしましはありまで

宿奈麻呂に愛を求めては有名な「祭神」の長歌となり

木綿だゝみ手に取持ちてかくだにもわれは戀ひ

なん君に逢はじかも

の反歌となり、夫の相變らず冷やかな態度を怨んで

押照る難波の、菅の、れもごろに、君が聞こして

の長歌

初めより長く云ひつゝ、頼めずげかゝる思ひにあ

はましものを

の反歌を以て柳眉の逆立を示し、二人娘をそれごとく片づけて若い姑となつての獨居を述懐しては

玉ゆしに玉はさづけぬかつくもまくらとわれ
はいざ二人寝む

その妍の一人駿河麻呂には、かつては

心にも忘るゝ日なく思へども人のことこそしげ
き君にあれ

夏くすのたえぬつかひのよどめればことしもあ
ること思ひつるかも

など贈つたものなのだ。

彼々が宿奈麻呂と離縁の後、兄の旅人に伴はれて筑紫下りをした時太宰大監大伴百代その容姿に熱烈な戀歌を寄せたのに對して

黒髪に白髪まじり老ゆるまでかゝる戀にはいま
だあはなくに

其他彼女の咏は萬葉集三、四、六、八、十七、十八、十九の各卷・拾遺・續古今・玉葉・續後拾遺・新千載・新續古今等の各集に散見する。

さがのや 矢崎嗟峨の舎(北邨散士) 文久

三一

江戸日本橋箱崎新堀久世大和守本郎に生れ、明治十六年外國語學校卒業後、永らく陸軍教授を勤めた。評論家として小説作家として聞えた。小説は十九年に「守銭奴」を二十年に「ひとよ切」「あぢきなき」單行本を作つたが、有名になつたのは二十一年三月都の花誌上の「初戀」からであつた。其他薄命の鈴子・くされ玉子・妍えらび等約七十餘篇ある。

さかひでんじゆ 堺傳授

室町時代宗祇から宵柏に傳へた歌道傳授をいふ。當時宵柏は堺に住んでゐた(堺は貿易の中心地文化の一淵叢地として和歌や連歌が盛であつた)ので世に之を堺傳授といふ。その歌系は

宗祇——宵柏——宗伯

——宗長

となる(或説には宵柏が傳へられたのはその全部ではなかつたともいふ。尙古今傳授を見よ)

さがみ 相模?

本名乙侍從源頼光の女だと云ふ。母は慶滋保章の女、入道一品宮女房で相模守大江公資に嫁いだ。歌は拾遺(三〇餘)新古今(一〇)・新勅撰(一〇餘)その他代々の勅撰集・後六々撰・長元八年賀陽院水開歌合等に散見す

る。家集を玉藻草(一卷)と云ふが、今は別名の相模集で通つてゐる。扶葉拾葉卷六、群二七六、一〇、二五

七一二七七 日歌四等に收められてゐる。

さきのちゆうしよわう 前中書王

「兼明親王」を見よ。

さきまろ(さちまろ) 田邊福麿?

萬葉歌人、傳未詳。

契沖云ふ「續紀云天平十一年四月 正六位上田邊史難

波授^三外從五位下^三 此ノ難波が子などにもや有けむ天

平廿年橋左大臣の使として家持越中守たるが許へつか

はされければ左大臣の家禮なるべし」と、その味萬葉

の十八卷に出、その家集もあつたことは同九卷にある。

さくらしぐれ 櫻時雨 三幕

高安月郊卅八年十二月作、京都南座初演の脚本「寛永

の頃、富豪灰屋の息子三郎兵衛、父紹由の出入の主君此

江應山公と太夫よしのを争ひ三郎兵衛が父の勘當を受

くるに到つてよしのはその意氣に感じ、受け出されて

山奥住まひ、名まで「おとくと」と改めて貞淑にかしづく

が、窓下に燻る伽羅の香が昔ゆかしい住居に往き來

の人もふりかへり昔を知つた誰彼も絶えず訪づれる。處が三郎兵衛は值千圓の利休の茶器の手入を頼まれ、

さころもものがたり 狭衣物語^{四卷}八卷?

六十一二〇四)

嗚ひ古い手本があつては工夫の妨げとて態とこれをこな微塵にして新たに自分で樂燒の原器に劣らぬ逸品を焼いたのが緒口となつて、應山公とも和陸をし本阿彌

光悦の取りなしで父の勘當をも許りる」といふ筋で、

作者はこの三郎兵衛の茶器割に力點を置いて「舊い殼」

を破つて新に生きようとする意氣を描いたといふが、

手法は近松の難與平や梅忠からの想ひつきもあり、矢

張り寛永の京の空氣がよく出て居る(現代戯曲全集一

六一一二〇四)

さころもものがたり 狭衣物語^{四卷}八卷?

嵯峨院の皇弟堀河の大臣、先帝の妹を娶り(他に二人北の方あり)その間に出來たる一子狭衣大將と、先帝の末の姫君源氏宮とを男女の兩主人公としての戀物語で源氏から暗示を得た跡が著く、あらはに源氏を引いた所も三ヶ處まである。著者は大貳三位とも辨局とも禊子内親王宣旨(源頼國女)とも謂ふ。要するに未詳。年代は源氏物語の後院臨政治の前、永承天喜前後と推定せられてゐる。構想・詩趣・行文凡て源氏に模して源氏に及ばざるものだが、併し餘他源氏模倣の作品に比べれば一等優れてゐる。原文は國文大觀物語部六・校國の四・譯王朝文學叢書第二、三卷・校國大の四・五・有朋堂